
神さまとゲーム脳と過守護な殺戮竜の物語

セロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神さまとゲーム脳と過守護な殺戮竜の物語

【Zコード】

Z2195U

【作者名】

セロ

【あらすじ】

女の子だけがゲーム好きでオタクな主人公。

ある日、パソコンにオンラインゲームの広告が届いた。興味を持つて事前登録すると、デウス・エクス・マキナ（マキナ）と名乗る少女が現れ、妙な質問を出し始める。戸惑いつつもそれに回答する主人公。しかし、出せるはずのない質問を出されたことによりそのゲームの異常性に気付く。だがすでに遅かった。

主人公はマキナにより、ゲーム参加者としてゲームの世界に連れ込

まれてしまう。

目を覚ますとそこは牢屋の中だった。そこが異世界であることを悟りはしゃいでしまう主人公。しかしその牢屋は奴隸として売られる少女が囚われた牢屋だった。

【女性主人公とかダブルヒーローとか、やってみたかったことまとめてやつちゃいましたな作品です。お見苦しい点もあるかもしれません、頑張って面白い作品にしたいと思います】

追記 ノクターンにてR-18セルフパロディ『神さまとゲーム脳とエロゲ主人公の物語』始めました。

プロローグ（前書き）

はじめましてかお久しぶりですセロと申します。 m (—) m

友達に「女の子作るのは妙に上手い」って言われて「じゃあ女の子を主人公に書いてみよう」と書いてしまったこの小説。一人称とか女性視点とか不安だらけですけど頑張ります。

プロローグ

「どう？ 鑄び臭い旧世代ガン ムも悪く無いけどさ、やっぱリス
タイリック シュコな新世代でしょ？」

「男つてのがわかつてないよなも」姉は、鑄び臭いからこそいいんだろ。やっぱ初代から逆シャ だな」

床に敷かれたレッドタイガーの毛皮で作つたふかふかのじゅうたん、天井には光を灯した光魔石をたくさん吊り下げるシャンデリア。とあるお城の一室。西洋ファンタジーとかでよく見るような石造りの大きな部屋で、あたしとあいつはハイビジョンプラズマテレビの前に座っていた。

「け、けどさ、こいつ……GM粒子をバーッて拡散させるシーンとか燃えない？」

「……『俺がガン ムだ！』っていう痛すぎる台詞で一気に萎えた

「い、痛いってあんたねえ！ 刹那君のガン ムに対する想いがわからぬのー？」

「わからん」

「即答するなーっ！」

昨日から徹夜でお気に入りの作品を見せてるけど、ここはいつにににガンムの良さをわかるうとしない。

なんでわからないかなあ、こんなにかっこいいのに。絶対気に入ってくれると思ってたのに……

気に入ってくれたら一緒に劇場版も見ようと思つてたのに……

いや、諦めるもんか！ 絶対ここもいつの世界に連れ込んでやる！

「うー、これは世界観から入った方がいいか……資料集でも召喚してもらおう」

「……こまいらだけどこんなことであんまり使つなよ。曲がりなりにもあいつ神様だぞ？」

「いいじゃない。仕事はちゃんとこなしてるんだし、正当な報酬よ」
あたしがそいつとあいは苦笑いしながらポケットから飴玉を取り出して口に放り込んだ。

「それよりそろそろ行こうぜ。今日の仕事は西の大陸での魔王退治だろ？ 早く行かな」と口暮れまでに帰れなくなるが

「はーい」

我ながらとんでもない会話してるとこ。ほんの何ヶ月か前までは普通に女子高生やってたのに。

半年だけ？ なんだかもう何年も経つてゐるような気がする。

あたしが殺されたあの日から……

† 半年前

『新作無料オンラインゲーム „デウス・エクス・マキナ“ 近日
公開』

学校から帰つて、なんとなく机のパソコンを見たらそんなメール
が開かれていた。

……なにこれ？

パソコンの電源はちゃんと切つてたはずだし、以前ウイルス入り
のメールをもらつてパソコンに入れてたゲームのデータやお気に入
りのイラストが全滅してからは心当たりの無いメールは開けないよ
うにしている。

でも、今日学校から帰つてみればパソコンは起動していて、当た
り前のようにメールが開かれていた。
はて、と首を傾げて考えてみる。

親はあたしが小学生の頃死んじゃつたし、引き取つてくれたおば
あちゃんも去年死んで今は一人暮らし。親の幽霊が心配して現れて
パソコン開きっぱなしとかも聞いたことない。

あたしにストーカーとかは……無いね、うん。

……ま、いつか

気にはなるけどそれだけ。
もしかしたらゲームの神様があたしに『このゲームをやりなさい』
と言つてるのかもしれない。

モン ンもH.R.999にしたし、最近の武器性能のインフレに飽
きてきたし、こっちに乗り換えるのも悪くない。

無料だし試しにやつてみてもいいか……。あ、事前登録やつてる。

椅子に座り楽な体勢をとつてマウスを操作。事前登録をクリック。
画面が切り替わりお城の中のような背景に変わる。そしてドロン
！ という効果音と同時に煙の中から女の子が現れた。

年は10歳ぐらい。髪はふわふわ揺れながら虹色に輝いてる。眼
はくりくりしていてなんとなくいたずらっ子みたいな感じがあった。

|画面の中の女の子はカメラ田線になつてニコッと笑いかけてきた。

『はじめまして！ 今日は事前登録だね？ ありがとう』

『おおっ！ ボイス付きだ。すっこかわいい声だけど声優誰だろ？
それによく動く。これは期待以上の力作かも。

『私はデウス・エクス・マキナ。この世界の、気まぐれでいたずら
好きでご都合主義な神様です。あ、けど呼ぶときはマキナって呼ん
でね？長いしかわいくないから』

『マキナはやつぱりヒロさんと啖扱いした。そんな何気ない動作まで、じくマルだ。

『それじゃ、名前教えてくれるかな？
あ、ハンドルネームとかじゃなくて本名ね』

『ん、名前ね……。

言われた通りに『浅倉 もじこ』自分の名前を打ち込む。

『浅倉 もじこなんだね？ ありがとう』

『え？』

思わず声に出してしまった。普通、こうキャラの声をやるのは声優さんだ。どんな名前を打たれるかわからないのに声を用意しておくなんて普通しない。
ましてそれを完璧に発音するなんてありえない。

『次は質問だよ。これから出す質問にYESかNOで答えてね？』

『何でも無いようにマキナは続ける。

……まあ、まあ、それだけゲームが進化したことだよね。3D
のゲームまで出でるんだし驚くことない。

『それじゃ質問いくよ。一つ目、ゲームが好きか
そりゃもひひん。

YES

『男である』

NO

『自分はオタクだと思つ』
『すいふんピンポイントね。』

YES

『剣か魔法なら剣だ』

どちらかといつと後衛が好きか。

NO

『異世界とか行っちゃいたい』

もち、是非とも。

YES

『凌辱系エロゲとかに興味がある』

いや、これセクハラじゃ……まあ……

YES

『会いたい人がいる』

そりやね。小学生の頃の友達どうしててるかな。

YES

『人生やり直せたらなとか思つ』
えらく重いわね。

YES

『お姫さまと勇者をまみたいなのに憧れる』
そりや女の子だし。

YES

質問に答えていく。

けどなんだろ? なんか質問に違和感を感じる。気のせいかな?

そのまま質問に答えていく。

YES · YES · NO · YES · NO · NO · YES · NO ·

YES

NO · YES · YES · NO · YES · YES · YES · YES · YES ·

ES · YES ·

多い。果てしなく質問が多い。

だんだんだれてきた。

というか「スプレがどうとか好きな食べ物がどうとか関係あんの?
?」これで騙しだつたら怒るよホント。

『猫と犬なら猫がいい』

NO · つか関係あるの? これ。

『現実はつまらない』

どんな質問してんのよ。

... YES

『今までに親しい人を失ったことがある』
なにこの質問。

... YES

『その人はとても大切な人だった』

... YES

おかしい。何か変だ。質問が

『親が死んでから現実がどうでもよくなつた』
つ？！

「なに……これ……？」

あたしは質問を見て息を呑んだ。

あり得ない。こんな質問、普通じゃない。

画面の中のマキナがクスクスと笑つた。動きがリアル過ぎる。
まるで本物の女の子が笑つてるみたいに。

『あれ？ どうしたのかな？
そんな驚いた顔して』

『？！ 今、間違いなく画面の中のマキナはあたしに言つた。息
が詰まる。なに……これ……。

『あはは、鳩が豆鉄砲喰らつたみたいな顔してる～
最初に言つたじやない。私は神様だつて。神様ならこれぐらいでき
て当然と思わない？ これで登録は完了だよ。よつこそ、私の世界
へ』

「ひつ？！」

怖くなつてパソコンの電源を連打した。
けど画面の中のマキナは消えない。

二口一「笑いながらビームからか取り出した銀色の拳銃をあたしに
向ける。

ズドン、と重い銃声が響いた。

あ……れ……なん……？ 身体が……動かない……。

赤い液体で汚れた画面の中で、マキナはガンマンさながらに拳銃から立ち昇る硝煙にフツと息を吹いた。

『浅倉 もこさん。享年17歳。参加NO.777……つと。あ、スリーセブンだね。なんかサービスしつくよ。えへと、それじゃ質問の回答をいくつか反映するね。

『ゲームが好きか』

YES

『男である』

NO

『自分はオタクだと思ひ』

YES

『運がいい方だと思ひ』

NO

『コスプレに興味がある』

YES

『自分はH口い方だと思ひ』

YES

『凌辱系Hロゲとかに興味がある』

YES

『会いたい人がいる』

YES

『人生やり直せたらなとか思つ』

YES

『お姫さまと勇者をまみたいなのに憧れる』

YES

『猫と犬なら猫がいい』

NO

うんうん、いろんなところかな？ それじゃ、『さげんよ』。またあ
いましょー』

ブツン、と画面が消え黒く変わる。

黒い画面には胸を血まみれにした、あたしの姿が映っていた。

I 田畠（前書き）

- ・作者のセロは変態です！
- ・作者のセロは変態です！

大事なことなので一回言いました
書いてたら自然とこうなったんですね……

気が付いたらあたしはかたいベッドの上で石の天井を見上げていた。

「…………は？」

思わず声が出た。辺りに自分の声が反響してあわてて口を閉じる。

身体を起こして周りを見ると石造りの部屋に鉄格子が付けられた、ファンタジーでよく見るような牢屋みたいなところだった。

薄暗くてよくは見えないけど、あたし以外にも何人か女の子がいて、だいたいはぼろぼろの服着てだらんと木のベッドに寝転んでいる。

少し肌寒くて身体が震えた。

意味がわからない。え、えーと……なにこれ？ 夢？

う、うん、こいつは古典的にぼつぺたをつけってみよう。
いたたたた！

じんじん痛む頬つぺたを指で擦りながら、一応もつ一度つねつてみる。痛い。
夢じゃない……よね？ えっと、よし、何でこうなったか考えてみよう。

まずオンラインゲームの広告が来てて

クリックしたら幼女ができて質問されて

で、撃たれて

そしてここにいる。

見事に繋がらない。

息をするのも、ポカンと開けた口を閉じるのも忘れていた。バクバクと心臓が鳴つてゐる。

……けど、パニックにはならなかつた。といつか頭は意外と冷静だつた。

なぜなら昔からよく、気付いたら見知らぬ世界にいたつていつのを妄想してたから。

これ……もしかして……

「あの……大丈夫ですか？」

「ひやーいつ?！」

「ああ……、声裏返つた。

見上げてみると茶色の髪をした女の子が、茶色い器を持つてあたしを見ていた。

……あれ？なんか女の子の頭でぴょーぴょー動いてるのが……？

犬耳つ？！

女の子の頭に付いていた物。それは正真正銘の犬耳だった。しかも視線を落としたらお尻の辺りからしつぽまで生えている。コ、コスプレじゃないよね？ 動いてるし……。

「あの、水ですけど、飲めますか？」

「あ……う、うん、ありがと……」

ほとんど無意識のまま水の入った器をもらって一口飲んだ。
鎌びた鉄の味がする。まずい。

けど、確信を持てたことが一つ。

これは……異世界召喚だ。

よく漫画やゲームで起きる展開。何かのきっかけでまったく違う世界に飛ばされるというやつだ。

かなり突拍子の無いと言えれば無いけど不思議とそんな考えを受け入れられた。

……ところよし、犬耳女の子が普通にいる時点ではほぼ間違いないでしょ。

ゼロとか D G DAYSとか、異世界召喚っていうのはあたしあちオタクにとっては一度は妄想する展開だし……ん？
あたしは水に映った自分の顔を見た。

お……おおっ？！

そこには見たことも無いような美少女の顔があつた。長い艶やかな黒髪にぱっちりした眼。長い睫毛。雪のような白くてきめ細かい肌。小さくて形がいい、けれどふくらした唇。

思わず自分の顔に手をやる。……間違いなく自分の顔だ。

やっぱぱつこれ異世界召喚だ！ で、あたしはヒロイン級な美少女

に転生！ よし！

「あ、あの……どうしたんですか？ そんな嬉しそう」

思わずガツツポーズしたらさつきの犬耳の女の子にドン引きされた。

あわてて言い訳して深呼吸して氣を落ち着かせる。

「ふう……ふふふ」

自然と笑いがこみ上げてくる。昔から憧れてたんだこりこり展開。退屈でどうでもいい日常から抜け出して非日常の住人になること。おまけにこんな美少女に転生とか美味しすぎ。

冴えないオタク女子高生として日常を過ぐすか絶世の美少女になつて異世界で冒険なら断然 異世界でしょ！ あとは素敵な勇者様でもいれば完璧だけどいたりしないかなあ……。

『プルルルル プルルルル』

「ひやつ？！」

いきなり携帯の着信音が聞こえた。牢屋の中に音が反響する。あわてて音の出所を探すとベッドの枕元にあたしの携帯が置いてあつた。

すぐに手に取つて音を切り、周りを見回す。

けど、あれだけうるさかつたのに犬耳の子以外はこっちにたいして興味を示してる子はいなかつた。

「えっと……それ、何かの魔法ですか?」

犬耳の子はちょっと困ったような顔をしてあたしを見る。しまつた、ほつたらかしだった。

「え……あ、うん。魔法。そんな感じ……」

愛想笑いしながら携帯を開く。新着メールが一件。だけど電波は圏外になつてる。

とりあえずメールを開いてみる。差出人は……ゲームマスター?

『おめでとうござります。あなたは神の作りしゲーム“デウス・エクス・マキナ”の参加者となりました』

ゲームの世界……か。

これもけつこうよく聞くパターンね。現実は小説よりつてやつかしら?

『あなたはゲームの参加者です。そして参加者であるからにはこのゲームのルールに従つていただきます。あなた方の目的はこの世界の神 デウス・エクス・マキナの元にたどり着き、神の座を譲り受けることです。

ひとまずは一ヶ月間、無事に生き延びることだけをお考えください。デウス・エクス・マキナは強者を求めます。生き延びた者に道は開けるでしょう。

ささやかながらそのための力をあなた方に差し上げました。どうぞご確認ください』

……一ヶ月間生き延びる?

不吉な予感がした。

そこまで読むと下に“浅倉 もこ のステータス”と書かれたり
ンクがあつたので押してみた。

浅倉 もこ Lv.1

1stジョブ オタクゲーマー

2ndジョブ なし

3rdジョブ なし

スキル

???????

ジョブ酷くない！？

スキルの??????つていうのは緑色に点滅していた。
ゲーム的に考えるなら条件を満たしたら発動するようなスキルつ
てことかしら

ん~……と、魔法とか期待してたのに無さそう。Lv.1ってこ
とはレベル上げれば覚えられるとかかな？

とりあえずこのゲームはラスボスのデウス・エクス・マキナ……
つてののところまで行つて神になるのが目的つてことかしら？

とはいえそれに乗るかはまだ未定。せつかくの異世界召喚だしこ
の世界をたっぷり楽しみたい。

とにかく今の状況確認ね。あたしは今どういう状況なんだろ？

さつきの犬耳女の子なら何か知つてゐるかな。

「あの、あたしたち今どひつこり……」

その時、牢屋の外で鉄の扉が閉まる大きな音が聞こえてきた。

「ひいつ！？」

犬耳女の子はびくりと身体を震わせた。布団を掴んだかと思うとそれをあたし共々頭から被つて、あたしの腕にしがみついてガタガタ震え出す。

さつきまで無氣力にベッドの上で丸くなつていた女の子たちも一斉に布団を被り、何かに怯えたみたいに震え出した。

え？ なに？

少少すると牢屋の外から足音が近づいてきた。

剣を腰に下げて革の鎧を着た兵士一人と、宝石をじゅらじゅらつけたいかにも金持ちそうな太ったおじさん。

あたしは布団の中から様子を伺う。

おじさんは顎に手を当てながら牢屋の中にはいる女の子達を順番に見ていく。

何してゐるんだろう？ と思つて見ていたらあたしと田が合つた。

「ひ……！」

鳥肌が立つた。

舐めるような、ねつとつとした視線。あたしを性欲の対象としか見てなこよつた目。

そいつは「一ヤ一ヤしながら牢屋の中のあたしたちを見回すと、兵士と何か話ながら一人の女の子を指差した。

「う、ああ……っ……！」

指差された女の子が短く悲鳴をあげた。一人の兵士が牢屋に入つてきて女の子の両腕を掴んだ。

「いや……いや……誰か……誰か！　いやああああああつ……」

悲鳴を上げて、泣きながら女の子は抵抗する。エルフ耳でぞんざらした金髪の、12歳ぐらいの小さな女の子だった。

女の子は引きずりられていく。

牢屋から出されるとその女の子は後ろから兵士に羽交い締めにされた。必死に暴れてるけどびくともしない。

それにおじさんが近付いていく。

足をばたつかせて遠ざけようとしたけどその足も他の兵士に掴まれ、無理やり両足を広げさせられた。

「どれ」「ひぐつー！」

おじさんはおもむろに女の子の服の下から手を入れた。

え？ うん… うん

あたしからは見えないけど、たぶん女の子の大事な場所に触つて
る。

「ん――う――」
「んぐ、
んん」
「――」

身体が反り、天井を仰いだ目からぼろぼろと涙がこぼれる。おじさんはニタニタと気持ち悪い笑みを浮かべながらそれを眺めていた。

「ふふ、これまでのところを聞くんだ。」

おじさんはそう言って手を抜くと、女の子は糸が切れたみたいにその場に崩れ落ちた。兵士が鎖付きの鉄の首輪をはめて、そのままどこかに引きずっていく。

しばらくの間女の子が悲鳴を上げるのが聞こえたけど、また鉄扉が閉まる大きな音がするとそれも聞こえなくなつた。

「なに……今の……」

あたしは震えていた。胸の中がぐりゅぐりゅにかき回されたみたいに気が悪い。

「ね、ねえ……あの子……どうなるの……」「

聞かずにはいられなかつた。あたしにしがみついていた犬耳の女の子は震えながら泣いている。

「……凌辱されて……性奴隸にされる思います……。
ライトエルフ族は清純で虚弱だし……あの子はまだ幼いから……死んでしまつかも」

吐き気がした。頭がぐらぐらする。

犬耳の女の子はあたしにしがみついて泣いている。

「……いい子だったのに……リーンちゃん……」

さつきの光景や悲鳴が頭の中でリフレインする。胸がズキズキ痛い。

なんなのよ!!……。

5分前の自分をぶん殴つてやりたい気分だった。

「寝ちゃったか……」

あのあとしばらく、犬耳の女の子を慰めてたけど泣き疲れて寝ちゃつたみたい。

今はあたしの膝を枕にしてすやすや寝息を立ててる。

ちょっとため息をついて壁に空いた小さな窓に目をやつた。
窓から見える小さな四角い空は、夜明け前みたいで少し白んでいた。

「なんか……ハードな始まり方だつたなあ……」

状況から考えて、あたしは今奴隸として売られてるらしい。
しかも、Hなことさせる目的で

そしてここにはどうやら皆かなんか。奴隸商が牢屋として使っている
みたい。

捕らわれのお姫さまとかならありだけど、捕らわれの性奴隸候補
つてどうよ？ ハードモード？
はしゃいでたのがバカラしくなつてくれる。

「ん……んん……」

犬耳の子があたしの膝枕の上でもぞもぞ動いた。

あらためてその子を観察してみる。

歳はあたしより下かな？ 明るい茶髪からピヨコンと飛び出た犬耳。首回りにはふかふかした綿毛みたいな白い毛が生えている。お尻のちょっとと上辺りは服に穴が空いていて、モフモフのしっぽが出ていた。頭を撫でてあげるとちょっとと気持ちよさそうに表情がとろけた。 カわいい。

やだなこここの子めちゃくちゃかわいいよ萌えの塊だよ！？ 犬耳しつぽ付きとかなんてあたし得！ 耳フニフニしたいしつぽでモフモフしたいギュッて抱きしめたい！

耳ぐらいならいいよね？ フニフニしていいよね？ 誰かが止めてもあたしは行くよ？

…………うあああ～～！、柔らかいよフニフニだよ幸せだよ～～！

「う……うん」「

あ、田覚ました！？ 田をぱちぱちさせてあたしを見上げてくる。ハツと我に返つてあわてて耳から手を離す。いけない、暴走した。あたしの悪い癖がでた。

「わ、わわ！ すいません！」

その子はあわてて起き上がるときつい頭を下げてきた。
なんでそっちが謝る？

「す、すいません！ 私いつの間にか寝ちゃって……」

「こ、こよ。気にしなくて」

その子はまだペニペーこと何度も謝つてくれる。話が進まないからあたしから話すこととした。

「あたしは朝倉 もこってこの、あなたの名前は？」

「フ、フイロです」

「そつか、じゃあフイロちゃんに聞きたいことがあるんだけど……いいかな？」

奴隸とか砦とか、あたしの予測はだいたい当たつていた。全然嬉しくないけど。

あたしの境遇は話さないでおいた。信じてもらえるか不安だつたし、せつかくの出会いなんだし『変なやつ』なんて思われたくない。

ちなみにあたしは気絶した状態でここに運ばれてきたことになつてるみたい。その辺はどうなつてるんだが？

よし、とつあえずゲーム的に言つならヒロインっぽいのも出できだし、次はここからどうやって脱出するかね。

このまま売られて『異世界に来て変態おやじの性奴隸になり一生を終えました』なんて嫌すぎる。それに……、あたしだつて女の子だ。ゲームの中ではさんざんいろいろやつたけど、現実のファーストキスや初めては好きな人에게たい。

もつと言つなら、今はこれだけ美少女になれたんだし、どうせな

ら超美形なエルフとかに、ロマンチックな部屋で頭なでなでされたり優しくキスされたりしながら『いいの？ もこちゃん』『うん… 優しく…してね？』つてかんじで…

妄想してたらフィロちゃんが不思議そうにあたしを見てた。おまけにあたしよだれ垂らしてた。ヤバい…、本気で痛い。

と、とにかく脱出狙いつてのは絶対！

……ここが本当にゲームの世界なら助けに来てくれる勇者様でもいそうなもんだけど…期待しない方がいいか。そうなると必要なのは…レベルアップね。できるだけ戦闘力上げて強力なスキルも使えるようになれば楽になるはず。

そういうえばフィロちゃんが魔法がどうって言つてた。後で詳しく聞いてみよう。

そんなことを考えていたら頭の中でポーンという効果音がした。

『新しいスキルを獲得しました』

そんなアナウンスみたいなのが聞こえた。新しいスキル？ 携帯を開いてブックマークしたあたしのステータスを見てみる。

2ndジョブ なし
3rdジョブ なし

スキル
???????

ゲーム脳 (NEW)

これバカにされてんのかなあ……えーと、スキル ゲーム脳
効果は“様々な動作をゲーム仕様にする”らしい。
どういふことだろ？

それとなぜかレベルアップしてる。けどモンスターとか倒した覚えは無い。敵を倒した経験値でレベルアップとかじゃないのかな？

「あの……もーかと？ 何してるんですか？」

「あ、うつと、何でもないよ」

あたしは携帯を閉じるとフィロちゃんの頭を撫でた。髪がさらさらしてなんか癒される。フィロちゃんも気持ちよさそうに目を細くしてしつぽをパタパタさせていた。

……ヤバい。かわいい。また暴走しそう。落ち着けー、落ち着けあたし。きっと仲良くなればいいからでもモフモフさせてくれるから。

フィロちゃんなら大丈夫かな？ いい子そりだしちょっと脱出について情報集めときますか。

……で、脱出話を持ちかけたら本気で反対された。聞くところによると、皆の至るところに警備や魔法罠、感知魔法が張られていて奴隸が逃げたことは無いらしい。

『今まで脱走できた人はいないですし、捕まれば酷い目に合わされます！ それよりは売られた後、ご主人様の命令をよく聞いて信頼をもらい、ある程度の自由をいただくという方が望みがあります』とのことだ。

かなり脱出は厳しいみたい。いきなりこんな難易度つてどんだけ鬼畜ゲームなのよ……。

うんうん唸つてたらフィロちゃんがじっとあたしのことを見ていた。

「…………もしかしてこんなところにいるのに……強いですね……」

「ん？ 強い？ あたしが？」

「はい。本当にすごいです。私なんて脱出つて考えただけで怖いですしちゃ……よく不安になつて泣いちゃいますしちゃ……それに引き換えもこさんは……強いんですね」

「…………あたしは弱いよ。弱すぎるから強く見えるの。フィロちゃんのが全然強い」

きょとんとしたフイロちゃんの頭を抱き寄せて、本当の犬みたいに頭とか頸の下とか首筋とかをわしゃわしゃしてみる。……と、なんかよっぽど気持ちよかつたみたいでふにゅつと表情がとろけてた。

かわいい。超かわいい。うあー！ 押し倒しからいたいぐらいかわいいよー！ ……自重しないと、うん。

そうやつてたら兵士の人が食事を持ってきた。

なんかあたしたちのこと見てニヤニヤしながら口笛を吹いた。
…昨日の一件も有つてかすゞく嫌悪感が湧く。
ま、いいや。『じ飯』じ飯。何かを考えるならまず腹『じりべ』。頭を使つゲームする時も食後が一番調子良くなるし。

「フイロちゃん、一緒に食べよ」

「あ、は、はい！」

ベッドにフイロちゃんと並んで腰掛ける。

メニューは果物と野菜のサラダとパンに何かのスープ。あとは野菜ジースらしい色をした飲み物だ。

正直、ここに来るまであたしがいつも食べてたやつより美味しいぞう。

「うわあ……けつこうこの出すんだ

「体調悪くしたり、肌艶が悪くなつたら奴隸としての価値が下がり

ますからね

少し上がったテンションが急降下した。……フィロちゃん、その情報はあまり欲しくなかつたよ。

でも、なんにせよ美味しいご飯はありがたい。

元の世界ではインスタントぱっかりだつたからなあ……。

こつちの世界での楽しみの一つになりそう。

「いただきます」

さつそくパンにバターを付け、顔を近付ける。焼きたての香りによだれが出る。かぶり付こうと大きく口を開けた。『スキル。“ゲーム脳”発動』

頭の中でそんなアナウンスが聞こえた気がした。

あ～ん、ガチン！　あたしの歯はきれいに空振りした。

ご飯が消えた。全部、まるごと。サラダのトマトっぽい果物のヘタから、付け合わせのバターまできれいにわっぱり。そしてお腹だけはなぜかいっぱいになつてた。

は？

訳もわからず空になつた食器を見つめる。

……あ～、わかつたかも。レトロゲームの食事シーンって、だいたいは机の上の食べ物がパツと消えるって感じになつてたつけ。

なるほど、スキル“ゲーム脳”的効果はそういうのを文字通りゲーム仕様にする能力つてことね。

やつたねあたし！ やつそくスキルの効果がわかつたよー。

泣いた。

「ふあ！？ ちょ もじれんこつの間に食べて……ってなんで泣いてるんですか？…」

「なんでも……ひっく……うああああん…」

フィロちゃんの胸で泣いた。フィロちゃんは戸惑いながらだつたけど優しく慰めてくれた。
触つてみると意外に胸、大きくて柔らかい。……ちょっと舐めに泣いとー。

ひとしきり泣いた（胸の感触を味わった）あとでフィロちゃんに魔法のことを探いてみた。

「魔法を見たことないんですね？」

「あ～、あるけど無いというかなんといつか……」

「珍しいですね……もじれんって名前からして東方の国出身ですか？ 向こうでは無いんですね？」

フィロちゃんは少しうつと手を出し、そこにはポンと火を灯して見せてくれた。
「おおつー！」

「そんなに驚かれると恥ずかしいですよ……」

「 フィロちゃんは照れたよつい田を伏せて顔を赤くした。

「 ね、ね、これあたしでも使えるのかな？」

「 う～ん、どうでしようか……」

原理とか教えてもらつたけど、こら辺は精靈だの術式だのたいにテングプレだつたから簡単に覚えた。要するに、魔法を使える魔族とか妖精の血を引いてれば儀式をして使えるようになるらしい。フィロちゃんに覚えがいって誓めてもらえた。

ちょっと気分いい。その後はいくつか魔法のことを教えてもらつたり、他愛ない話をしたり。明日できそつなら儀式について教えてくれるといつとこりで話は終わった。

「 で、現在に至る……と」

あたしはベッドに仰向けて寝転びながら、携帯の日記に今日の出来事を一通り書いておいた。習慣つてやつね。

時間は23時57分。あと少しで日付が変わる。

フィロちゃんはあたしのとなりですやすや眠つている。起きしゃないよつに軽く頭を撫でながらぼんやり天井を見上げた。

うーん、全然眠れない。明日はフィロちゃんにいよいよ魔法習つんだし、早く寝たいんだけどなあ。

さつき打つた日記を読み直してみる。

『……あたしは弱いよ。弱すから強く見えるの。フイロナちゃんのが全然強い』

ちょっと恥ずかしくなつてにやけてしまつ。あはは、我ながら中二みたいな台詞言つたなあ……

けじわつ、あたしは弱い。弱すから弱い。

だつて我慢できないうらこ嫌なことあつたら、死んで逃げちゃえぱいいなんて思つてもん。

あたしはフイロナみたいに辛い目にあつても生きよつなんて思えない。

そりや死ぬの怖いけど、どんなに辛い目にあつても死んじゃえばそれで終わり。もうそれで痛いことも怖いことも苦しいこともない。よくドラマとかで“　のためなら命だつて惜しくない”とか言つけど、それつてようするに駄目だつた時に生きてるのが辛いから、命が惜しくないんぢやないのかな？

それならあたしだつてたいして変わらない。

そんな風に考へてるから大胆なことができる。周りから強く見える。

いつからかなあ……こんなネガティブに前向きになつたの。

小学生の頃、お父さんとお母さんが死んで、おばあちゃんの家に引き取られて、おばあちゃんも死んだ頃か……

やめよ。なんか鬱になつてくる。

ため息一つ。携帯を枕元に置いて……『プルルルル　プルルルル』

思わずビクッ！ てしてしまった。この着信音は心臓に悪い。
あわてて音を止めて携帯を開く。時刻は深夜0時0分。かけてきたのは

『デウス・エクス・マキナ 黒』

ディスプレイにはそう表示されていた。

I | 日記（後書き）

作業BGMには東方ヴォーカルメドレーがお気に入りなセロです。今回のお話ではもじちゃんが日記に書いた内容をサラサラ～っと。なんか妙なスキルを手に入れましたけど、このゲームの世界じゅみんなこんな感じです。面白いスキル募集中！自分で考えろ

『テウス・エクス・マキナ

この世界の神様で、そしてあたしをこの世界に連れてきた張本人
…………らしい。たしかマキナって呼べって言つてたつけ。

けど 黒 つてのはどういってんだら?

何か嫌な予感がする。どうしようかなこれ。無視しちゃ駄目かし
り。

電話に出でつかずか悩んでたら勝手に通話モードに切り替わっ
た。

『参加NO. 777 朝倉 もじわん聞こえますか~』

携帯からあの声が聞こえてきた。

立ち上がりつ飛口ちやんから離れ、携帯を耳に当てる。

「……もしもし?」

『こんばんは。朝倉 もじわん。このゲームは楽しんでるかな?』

相変わらずのかわいらしい声。けどその声を聞いてるとなぜか
不安になつてくる。心臓がしみつけられる、そんな感じだ。

電話の向こうでマキナはくすぐすと笑つた。

『さて、さつそくだけ本題。今から貴女に試練を行えます』

「……試練？」

『そ、試練。メールで来たでしょ？ 数々の試練を乗り越え一ヶ月生き残れって。

貴女がこの世界に来てから一ヶ月間、つまりあと29日間でランダムに六回、私たちは貴女に試練を与える。死んじゃつたらゲームオーバー、一ヶ月生き残れば次のステップへ、簡単でしょ？』

あたしが漠然と感じていた不安が形になつた。
嫌な予感しかしない。

『それじゃ、まずは場所を移動するから』

「え？」

一瞬で周囲にあつた牢屋の中の風景が消えた。

黒。あたしは真っ黒な空間の中に立っていた。暗いわけじゃなく、自分の姿ははつきり見える。ただそれ以外は何もかもが黒い世界。

「お、おいー なんだよこーー。」

「きやつ？！」

後ろで声がして驚いて振り返った。

そこには四人いた。

軽くパニックを起こしてゐる不良っぽいキャラキャラしたお兄さんと眼鏡の学者っぽい人。あと、何が起きたのか理解できないって感じでポカンとしてるお姉さんと中学生ぐらいの女の子。

「なんなんだよ！ わけわからんねえ世界に連れて来られて！ 次はこんな……やけんなよー。」

パニック気味なお兄さんが叫んでる。「ひるせー。

学者風の人も黙つてるけどかなりおろおろしてるな。

そうやって分析できる程度にあたしは落ち着いていた。

こういう時は普段からゲームとかラノベ読んでたあたしみたいなの方が適応しやすいのかしら。

……マキナはどうくるだろ？

なるべく隙を作らないようにして周りを見回す。

『お待たせ』

『きなり“ぐこやり”と風景が歪んだかと思つたらマキナが出てきた。

ただ、パソコンの画面に出でてきたのは虹色の髪をしていたけど、今目の前にいるマキナは艶のある黒い髪に黒いドレスという姿だった。

『ふう、2000人近くいるから移動させるの疲れちゃった』

マキナは袖で額の汗を拭いた。まるで仕事終わりみたいに爽やかな笑顔を振りまく。

今2000人って言つた。あたしに参加NO.777って言つてたからかなりの人数をこの世界に連れて来たんだろうと思つて

たけど予想以上だ。

なんにせよ何か重要なことを言つかも知れない。集中して聞いと
こひ。

『おまけにいいスキル持つてる人は攻撃していくるし……いちいち相手するの面倒なんだからやめてほしいよ。こんなかわいい女の子に斬りかかるなんて酷いと思わない?』

パニック男も毒氣を抜かれたみたいに叫ぶのをやめて、ぶつぶつ文句言うだけになつた。

マキナはくすくす笑うとパチンと指を鳴らす。

するとマキナを囲むように五つのパイプ椅子が現れた。

『あ、座つて座つて。今から試練のルール説明するから』

あたしを含めた五人は顔を見合させた。

あたしの考えだと今は従うべきだと思つ。田線でそれとなく伝えてみると他の三人も同意件みたいだ。パニックお兄さんもあたし達が座るのを見てぶつぶつ言いながら座つた。

マキナはあたし達を見回すと満足したみたいに笑顔を浮かべる。こんな時じやなきや抱きしめたくなるぐらい無邪氣でかわいい笑顔なのに……。

ふわりとマキナの身体が浮かんだ。3mぐらいの高さ、あたしたちを見下ろせる位置で止まる。

『さてPCの監査さま、ようこそお集まりいただきました。お楽しみの第一の試練です。……とはいっても、まだみんなレベル低いね。このままなんかと戦わせてもグダグタするだけだしさつあと終わらせよ』

マキナはそのままついでに、と唸りながら「めかみに人差し指を当てる考へ始めた。

『よし、いひしよ』

ポンと手を叩く。

『みんなは“こいつ死んでよし”って思ひやつ指差して。一番多く指差された人が死亡ね』

「な？！」

一瞬何を言つたのか意味が理解できなかつた。子供が鬼ごっこの鬼を決めるみたいな軽さで、マキナは死ぬ人間の決め方を言つたのだ。

しかもこいつはたぶん本氣で言つてゐる。言葉に誰が死ぬのか楽しみにしてるような感じがあつた。

あり得ない。言葉を失つてしまつた。

「それじゃせーのでいくよ、せー…」「やけんなよー…」

せつきまでパニック起こしかけていたお兄さんが叫んだ。
うざいとか思つてて「めん、お兄さん。あたしも今はお兄さん

の味方だ。
お兄さんが叫ばなかつたらあたしが叫んでた。いくらなんでもむちやくちやすざる。

「なんなんだよそのルール！　お前何がしたいんだよー！」

お兄さんはマキナに詰め寄る。マキナは困った顔をしてお兄さんを見た。

「あやや、お兄さんはこのルール気に入らない?」

「つたりまえだ!」

「そつかー、残念だな~」

マキナは手を銃の形にしてお兄さんの額に向けた。

次の瞬間、お兄さんの頭が弾けてなくなつた。

「……え?」

辺りに赤い塊が飛び散る。少し遅れて髪の毛がついたままの肉の欠片が落ちてきて、べちゃつべちゃつと音がなる。

頭のなくなつたお兄さんの身体は糸が切れた人形みたいに床に崩れ落ちた。

マキナがパチンと指を鳴らすと、その身体も辺りに散らばつた肉の欠片も全部消えて無くなつた。

「ルールが気に入らないなら参加を強制したりしないよ。やっぱりみんなには納得した上でやつて欲しいしね。他の方々にはお見苦しいものをお見せしました~」

あたしの思考は完全に停止していた。すぐには理解できなかつた。お兄さんがいたっていう証拠はもう、空いた椅子だけしかな

い。

それもマキナがもう一度指を鳴らすと消えてしまった。

誰も声を上げなかつた。声が出せなかつた。

息ができない。……怖い。

怖いよ……。なにこれ……なんなのよ!これ……。怖いよ……怖い

怖い。助けて……誰か……

「さ、それじゃ“死ねばいいのに”って思う人を指差してください
ね~、はい、せ~の!」

「ひっ?!

マキナの言葉にあたしはほとんど反射的に手を動かしていた。

あたしが指差したのは正面にいた女の子だった。そして……

一本の指があたしに向けられていた。

四人の内、あたしに向けられた一本の指。あとはあたしが女の子に向ける分と、学者風の人が女人に向ける一本。

一番多く指差されていたのはあたしだ。

「はい、けつて~い。死んじゃつのは朝倉 もじさん。残念でした」

嘘だ。こんなのがり得ない。だつて……だつてあたし何もしてないんだよ? まだ……まだ何もやってない。ゲームなんでしょう? 大丈夫だよね? 大丈夫なんだよね?

せつきのお兄さんの最期が頭をよぎった。

嫌だ。怖い……嫌だ、嫌だ! なんであたしが……なんであたしだけ!

「あはは、怖がっちゃって、かわいそ~」

マキナはあたしの前まで降りて来るとあたしの顎に手を当てた。指先で顔を上げさせられる。

「いや……やめて……いや……」

「なんなら助けてあげようつか?」

「……え」

「貴女の代わりに他の人を殺すわ。それで貴女は助けてあげる」

優しい声だった。

助けてくれる？ 本当に？ 怖いのも終わるの？

マキナはニコッとした。虫をいたぶる子供みたいな無邪気な顔だった。

次の瞬間、感じたことが無いぐらいの痛みがあたしの肩を襲つた。マキナがレイピアみたいな細い剣をあたしの肩に突き刺していた。

悲鳴を上げようとしたけど先にマキナに口を塞がれて上げられなさい。

痛い、痛い痛い！ なんで……助けてくれるって言つたのに……

「じめんね。さつきの無し。ルールはルールだもん」

「そ……んな……ひど……い……」

痛みで声もまともに出せなかつた。

涙でぐしゃぐしゃになつた視界の中でマキナだけが笑つてゐる。

「ひどい？ 他の人は死んでもいひつて思つたのこよくそんなこと言えるね？」

マキナはそつとあたしの膝の上で膝立ちになつた。

寒氣がする。カエルの標本でも見るような眼であたしを見下ろしてゐる。

「一つ教えとくとね。この試練は“全員、誰も指差さなければ”誰

も死ななかつたんだよ。あたしは誰かを差さないと殺すなんて言ってなかつたんだから。

「……だけど！ 貴女は指差した！ 他の人は死んでもいいから生き延びたいって指差した！ これはもう殺されても文句言えないとね？ どうかな？ どうかな！？」

どんどん声がヒステリックになつていぐ。

この子は 狂つてゐる。

「ど……う……して……」んなこと……」「

「……それを答えられるようになりたいからかな？ 私達はね、空っぽなの。空っぽだから何かで満たしたいの。たとえそれが絶望でも」

マキナはまた指をパチンと鳴らす。いつの間にか周囲にいた他の人は消えていた。

そしてマキナの手にはあたしの肩を刺したのと同じようなレイピアが握られていた。

「貴女つて苦しくなれば死んじゃえばいいって思つてるらしいね？ だつたらあとで教えてよ。死ぬのと生きるのどっちがいいか。曰を反らさず反らせらず、最期の最後まで死ぬ程の死を味わつて！」

胸にレイピアを突き立てられた。引き抜いて、突き刺して、笑い声を上げながら何度も何度も。

消える。

消えてく……あたしが……消えて無くなつてく。

嫌だ……死にたくない……消えたくない……嫌だ、こんな
の…………

生き……た……い……

『朝倉 もじ 死亡』

『特殊スキル、コンティニューの発動条件を満たしました』

『コンティニューしますか?』

『コンティニューし、ゲームを続きから始めます。残機0 ゲ
ーム再開』

「こやああああああつ……」

「つ？……サリヤス？……」

「いやー、いやー……！ もうやめ……お願いだから……もうやめ
ええええっ……！」

「 カレハニ……！」

………… フィロ…………ちやん？

フィロちやんの声であたしは我に返った。元の牢屋。フィロちや
んがあたしの手を固く握っている。

生きてる？

身体中汗でびしょびしょだった。息が苦しい。

マキナに刺された場所に手を当ててみる。傷も何もない。

「こきなりじうじたんですか？ 怖い夢でもみました？」

夢？

「うん。違う。あれはそんなものじゃない。

あたしは握りしめていた携帯を開いた。ボタンを操作する手は情

けないぐらに震えていた。

浅倉 もこ Lv.2

- | | | |
|---|-------|---------|
| 1 | stジョブ | オタクゲーマー |
| 2 | ndジョブ | なし |
| 3 | rdジョブ | なし |

スキル
コンティニュー(○／×)
ゲーム脳

スキル コンティニュー……効果は“死亡した時、一度だけ復活してゲームを続けられる”最初見た時、????????ってなつてたスキル……。

…………つまりあれは現実だった。あたしは殺されて、このスキルで生き返った。

「…………う…………くう…………」

涙が溢れた。吐き気がした。あの時死んだお兄さんのこと、あたしのしたこと、身体を串刺しされる痛みと怖さが頭の中でもぐもぐになつた。

「もひ……やだ……こんなのは、やだよ……」

帰りたいよ……。つまらなくていいから……どうでもよくていいから……。元の生活に戻りたいよ……。嫌だよ……もうこんな……。けど、死にたくない。もう死ねない。あたしは知らなかつた。知らなかつたから『辛くなつたら死んで逃げちゃえばいい』なんて思えたんだ。そんなやさしいものじゃなかつた。死ぬのは死ぬほど痛くて怖くて苦しいんだ。あたしは……何も知らなかつた。

あはは、どうしよう。最後の逃げ道無くなっちゃつた。

もう逃げ道無いんだ。この地獄をずっと味わつていかないと駄目なんだ。

なら、壊れちゃえばいいのにあたしの心。

壊れて人形みたいになっちゃえばいい。そうすればもう何も感じない。痛いのも怖いのも苦しいのも。

だから壊れてよあたしの心……

このまま売られて性奴隸にでも何でもしていいから、誰があたしを壊して。誰か、誰か、誰か……

「もこさんっ！」

気がついたらフィロちゃんがあたしを抱き締めていた。

「……フィロ、ちゃん？」

「大丈夫、大丈夫ですよ……私がついてますから……」

「ハイロウヒヤ んせわりて強てあたしを抱きしめる。暖かい。すいへん
……暖かい。」

とくん、とくん、つて心臓の音が伝わってく。

「う……あ、うあ……」

「泣いてぐだぐだ。泣けば嫌なことも涙と一緒に流れていきますか
？」

優しい声。心から心配してくれる言葉。それだけでと違つ涙が溢
れてきた。

「う……あ、うあああ……うああああああ……」

泣いた。泣けた。心の底から。

子供みたいに。あたしより年下のハイロウヒヤンにしがみついて。

あたしは夜明けまでずっと泣いていた。

“ひっせキャラをこじめるなり”これがいいよね？ ね？

とりあえず僕がやりたかったことの一つはこんな感じ、最強主人公
マンセーより最弱主人公がつまずいたり落ち込んだりしながら成長
していく小説が書きたかったんです（笑）

さて、いじめるのが楽しくなったんで（おこ）序盤はゆっくつ～
ひどくいじめます。うなづかんお楽しみに～

あつたかい。

まるでお母さん抱かれているみたい。ちいぐ安心する……。

あいつも、お父さんとお母さんが死んだ時は一晩中あたしを抱いて泣かせてくれたっけ……今頃なにしてるかなあ……

「お田覚めですか？」

「ふえ？」

寝てたみたい。なんかまぬけな声が出了ひやつた。フイロちゃんの胸に顔を埋めたまま顔を見上げる。

「あ、あの～、むいかわん？ 起きたのならもうそろ離れて……」

「やだ。もうひとりしてたい」

「……意外と甘えん坊なんですね」

「そだよ、あたし本物は甘えん坊だよ～。だからもうひとり甘くねりさせてね」

フイロちゃんはちよつと困った顔をしたけど、そのままあたしの頭に手を回して抱きしめてくれた。

本当に気持ち悪い。心中にあつた悲しい気持ちがどんどんぼぐれて消えていく。

「うひだぶん一時間ぐらい経った。

ちよつと名残惜しいけど顔を離す。両手を上げてうへん、と伸びをするあたしを見て、フイロちゃんは嬉しそうに笑ってくれた。

「落ち着いたみたいですね？」

「うふ……ありがと」

窓を見ると太陽はほとんど真上まで昇っていた。

昨日の鬱な気分は泣くだけ泣いてだいぶすつきりした。元々、今までいろいろ経験したせいか立ち直り早いのもあつたしね。

……けどフイロちゃんがいてくれて本当によかったです。あの時フイロちゃんが抱きしめてくれなかつたら、あたしは本当に壊れてたかもしれない。

『性奴隸にでも何でもしていいから壊して』ってどんな病んでたのよあたし。

「朝ごはん、モロさんの分といつもおこむらこましたけど、食べれます？」

「うふ……、ありがと」

あたじが答えるとフイロちゃんがパンと美味しいそうなフルーツの

サラダを持ってくれた。

食べよつとしたら『スキル。ゲーム脳 発動』ってなつて食べ物が消えたけど。なにこの糞スキル。

フイロちゃんが皿をまん丸にして驚いてたから『あたしの家系に代々伝わる早食いの魔法』ってことにして無理やり言いくるめておく。これは上手く説明しようがない。

というかフイロちゃん本当にいい子だ。あれこれ詮索してこないのがすげありがたい。ただそれとなく気遣つて、話したいことだけ聞いてくれる。

……大丈夫。あたしはもう大丈夫。あたしは生きてる。生きてるんだから大丈夫。あの時のこととは仕方なかつたんだ。あれでパニック起こさない人間なんてそうそういない。悪いのはマキナだ。

それと、死ぬのが怖いのも当たり前。今までが異常だつただけ。むしろこれで普通になつたんだ。

うん、ポジティブにポジティブに……考えるのやめよ。思い出しだら気持ち沈んできた。

気分を変えよう。というか今日は魔法の練習つていうお楽しみイベントがあるんだ。そつちに集中しよう。うん、そうしよう。

とこ'うわけで魔法に関する準備を初めてもらつた。

「フィロちゃんは兵士の見回りが来ない時間を狙つて石で床に魔法陣みたいなものを書いていく。『つまつと悪いけどビリリィズガのたうつたみたいな変な文字がいっぱいだ。』

「じゃあ、この陣の真ん中に立つてください」

「これでいい?」

「あたしが陣の真ん中に立つとフィロちゃんが呪文みたいなのを唱えた。すると陣の文字が光だしてあたしを光が包んだ。なんだか頭がポーッとしてくる。」

「魔法の素養は大丈夫みたいですね」

「……そなの? 何かよくわからないけど」

「はい、この光が出るのは魔力を持っている証拠なんです。それじゃいよいよ、本格的に魔法を覚えましょうか」

「フィロちゃんがそう言つて呪文を唱えると魔法陣の光が消えた。本当にファンタジーだなあ。」

「さて、それでは始めましょうか。魔法を覚えるのに重要なのは三つ。まず魔力……これは大丈夫ですね。次に呪文を暗記する記憶力。そして呪文を理解する読解力です」

「うわー? めんどくさい気配満点だよ?」

「ぐ、具体的にまじめなの?」

「 まずこれから最も初歩的な火の魔法【ファイア】の呪文を教えますね。それを暗記して、詰まらず言えるようになつたら呪文の意味を正しく理解していきます。魔法っていうのは、呪文を正確に詠唱し、それに意味を乗せることで初めて使えるんです。……慣れないと内は詠唱短縮もできないですから大変ですよ?」

ヤバいよ! ? 早くも不安でいっぱいだよ! ? めんどくさいけどこのレベルじゃないよ! ?

「ち、ちなみに呪文ってどんな?」

「えへ、一度聞いただけじゃ絶対に覚えられないと思いますけどいきますね。

『母なる大地よ。我が声を届けよ。まつろわぬ火精よ。我が声を聞け。我が名はフィロ、汝らが主、サラマンダーと契約せし者なり』(中略)……ゆえに我是第三の契約に基づき汝らを使役する権利を得た。望むは炎、我に『えよ【ファイア】』

無理です。

フィロちゃん早口でぶつ通しで唱えて30秒以上かかつてたよ。なにこの鬼畜難易度。この世界の人ってみんな天才かなんかなの?

うへ、厳しいなこれ。ゲームなら魔法の名前唱えるだけなのに……

“ゲーム”なら?

「……【ファイア】」

『スキル。ゲーム脳 発動』

ボウツ！と手の平の上に火が灯った。

「おおつ？！マジで使えたよ？！」

「い、いきなり詠唱破棄？！もこさん天才ですか？！」

フィロちゃんが唖然としてあたしを見る。気分いい。

「……にしてもちょっと小さいなあ」

「ここの端には魔力抑制の結界が張られてるからですよ、外に出れば
もっと強くなります。

……というかもこさん本当に初めてですか？ 私なんて詠唱破棄で
できるようになるまで一年かかったのに……ちょっとジェラシーです
……」

そのあとは魔力に関する知識を教えてもらったけど、そっちもだ
いたいテンプレですぐに覚えれた。

要するに魔力もゲームでいうMPみたいに制限が有って、魔法を
使う度に魔力は減る。魔力切れの時は魔法が使えない。しばらく休

むと魔力は回復する……と、こんな感じ。

そうやって勉強していたらせつさまでベッドに横になっていた、腕に鱗の有るお姉さんが近付いて来た。

「あんた……本気でここから逃げる気?」

「ん? ああ、うん」

「どうして? ここにいれば外よりはまだ安全よ? 食べ物は有るしモンスターに襲われることもない。それにあんたは自分が美人だつて気付いた方がいい。

あんたみたいなのが外でふらふらしてたら、男共に捕まつて慰み物にされるのがオチさ」

……たしかにそうだ。外が安全かとか考えてなかつた。
もしかしたらここに残つて、どつかのお金持ちに売られて、ひたすら言うこと聞いてた方が安全なのかも知れない。

けど。それでもあたしは行きたい。

「あたしは行くよ。確かに外は怖いかもしないけど……死ぬのは死ぬほど怖いけど……あたしはあたしでいたいから。辛いのずっと我慢して誰かの言つこと聞くなんてあたしは絶対嫌だ」

そう言つたらお姉さんはため息をついた。

しゃがんでフィロちゃんが文字を書くのに使つていた石を取る。

「……うちの種族が使つてる魔法、教えてあげる。あんたはなかなか才能が有るようだから覚えられるだろ?」

「え？」

お姉さんはちよつと照れたように笑った。

「つづらにまもつ必要無いけど、外に出る気のあんたならいろいろ必要だう? 遠慮なんて許さないよ」

「……ありがとう」

そうしてあたしはお姉さんに別の魔法を教えてもらつた。
お姉さんと話してたら他の人も来たりして、魔法教えてくれたり生きるための知識を教えてくれたり……とにかく得たものはかなり多かつた。

具体的に言うと

まず【ファイア】

フィロちゃんに教えてもらつた火の魔法。手から火を出して投げたり燃やしたりする。魔力の消費が少ないらしくて使いやすい。

二つ目が【サイクス】

お姉さんに教えてもらった、物を浮かべる魔法。食事に出されたお盆程度の重さの物なら自由に浮かべて動かすことができる。ただ、ちょっと魔力食うみたい。

三つ目が【ヒール】

エルフ耳の子から教えてもらった説明不要の回復魔法。ただ、これはかなり魔力使う。二回連続では使えなかつた。

あとは調合とか食べれる植物とかいろいろ。携帯にメモしていく

のが大変だった。

そんなこんなで二日目の後半分は有意義に過ぎていった。

四日目（一）（前書き）

誰かー、この小説読んでる人でアーマード・コアLV買う人いませんかー？ リア友で買う人いなくて寂しいんですよー

野良でオペ子やつても絶対指示に従ってくれない気がする今日この頃（笑）

さてさて、“神さまとゲーム脳と過守護な殺戮竜” 略して“神ゲー” そろそろもう一人の主人公が出てきます。そこからは、もこちゃんとそいつの視点をちょくちょく入れ替えながら話を進めようと思いますので一応ご報告をば。

四四三(一)

ハリヒヨウ。

深夜。時間は〇時を過ぎたといひだ。昨日の〇時も有つたし、〇時を過ぎぬで起きておることにしてた。

アサガヒに座つて携帯を操作するあたしの隣でフィロちゃんがちよつと身体を丸くして寝てる。

樂して夢見てるのかな？ 時々じつまがパタパタ揺れてる。

本當にハリヒヨウ。

アサガヒはまだ起きても引かれぬ。

それなことを考ふながり、あらためてフィロちゃんの顔を見た。

……ドキドキする。

最初会った時の「犬耳かわいいー！」って感じじゃなくて、その……ときめいてる。

あたしフィロちゃんのこと始めこへる。

いやいや、冷静になれあたし。相手フイロちゃんだよ？ 女の子だよ？ もりやフイロちゃんかわいいししっかりしてるし気が利くし頭いいし空氣読むし甘えさせてくれるしいい子だし犬耳だしそば付きだけど……女の子だよ？

たしかにあたしは女の子キャラに萌えたりするよ？ ギュッてしたりされたりしたいって思つてたけど、恋愛となるとひょっと……いや全然違う。

寝ているフイロちゃんの頭をそっと撫でてみると。「ふにゅう……」つて言つて気持ち良さそうに笑う。
胸がキュンとしてしまつた。

ダメダメダメダメ！ やっぱ無理！ といつかこんな気持ち知られて嫌われたらそれこそ立ち直れないよー？
心臓がドキドキしそぎいやばい。フイロちゃんに聞こえたりしないか心配になつてくるぐらーこ。

落ち着けー、深呼吸ー。もひひょと冷静にー。

とにかく今はまづい。さすがに引かれる。なんかするならもつと友好度上げてフラグも立て……いや、いつそのことどうにかして既成事実を作つて……あれ？ なんか変？

『最初は純愛チックだったのになんだか変な方向に話が行つてるよー？』

「ひつ　？！」

いきなり笑いながら宙に現れた白いマキナにあたしは硬直した。

『ああ、怖がらなくていいよ。私はマキナだけ試練を与えるマキナじゃないからね。違う意味での試練を与えるのは大好きだけど』

突然現れたマキナは膝を抱えた格好のまま、クスクス笑つてあたしを見下ろす。

あれ……？ マキナだよね？ 顔立ちとかは昨日現れたあの黒いマキナそのものだ。

だけど今日の前にいるのは髪もドレスも真っ白で瞳だけが赤い。

見た目もそうだけど何より違うのが……雰囲気。黒いマキナはなんというか……狂気みたいなを感じたけど、この白いマキナからはそんな感じがない。いたずらっ子みたいな印象しかなくてなんか……警戒心がわかない。

『さて、おめでとう浅倉 もこさん。あなたはLV・5になりますた。だからボーナスあげるね。ああ、それと私の姿も声も他の人に見えてないし聞こえてないし、そもそも周りのNPCは私がいなくなるまで絶対に起きないから、そこは安心していいよ』

「……LV・5？ ボーナス？」

『そ、携帯でステータス確認してみてよ』

あたしは白いマキナに気を付けながら携帯を操作した。

1stジョブ オタクゲーマー

2ndジョブ かけだし魔法使い

3rdジョブ なし

スキル

コンティニュー（0／1）

ゲーム脳

魔法LV1 NEW

またレベルが上がっていた。それにジョブも追加されてる。

『確認したね？ 私は一定レベル』といろいろなボーナスを届けるのが役割なの。何か欲しいボーナスある？』

「……不死身になる薬かこの世界から脱出するアイテムが欲しい」「はい却下。というよりボーナスはもともと私が勝手に決める」とだし聞いただけなんだけどね

……やっぱり性格は悪い。

白いマキナは探偵よろしく「へん」と顎に手を当てて考へている。

少しして何が思い付いたのかパチンと手を叩くとあたしの携帯を指差した。

『あなたの携帯にマップ機能をつけてあげましょ』

「マップ機能?」

『そ、マップ機能。周辺の地図や他のPCの位置を表示する機能です。有効活用してね』

もう言つとフジとマキナは消えてしまつた。
牢屋の中に静けさが戻る。

来る時と一緒に帰るのも突然『ああ、それと』

……また出てきた。

マキナは一ヤ一ヤ笑いながらフイロちゃんを指差す。

『フイロちゃんと同じ周りの子たち、朝まで絶対田を覚まさなきつて
しどいたから何かするなら今のひみだよ?』

「……は?」

『だから、しつぽもふもふしたり耳フーフーしたり、しゃーって
したり、しゃーしたり、あんなことやこんなことしたり』

ちょ? ! な、何? ! 意味わかつて言つてんの? ! 顔

が一気に熱くなつた感じがした。

あんなことやこんなこといつつまつ……その……あんなことやこ
んなこと?

「…………そー そんなことするわけないでしょー」

『あはは 今聞は何かな? ああ、戻ってきたついでに一

神様からのお告げ言葉とくね

マキナはそう言ってあたしを指差した。

『最強の盾は最高の盾とは限らない。けど、最高の盾は最強の盾になれる。最高の盾となるために最強を捨てるることを望んだ彼は何を護れる？……護られる者が支えてこそ、盾は護りたい者を護れる』

まるで歌うように、マキナはそう言った。不思議と耳に、頭に染み透るような声だった。

「…………」

『それはその時のお楽しみ、それじゃ今度こそ、またね～！』

マキナはまた姿を消した。今度は戻つてくる気配もない。

なんだつたんだろいったい。

一呼吸して携帯を操作してみる。マップ機能って言つてたけど…あつた。

アプリの欄にそれらしいのが有った。さつそく起動させてみると今こる皆の見取り図らしき物が出てきた。

階段の位置。牢屋、扉、農の位置。切り替えると各階のマップが出てくる。かなり詳しい。これは脱出に使えるん？

マップを切り替えて階周辺のマップを出した時、階の近くに人の形したマークが二つ有った。

マキナの言葉を信じるならあたし以外の召喚された人かしら？

しばらく見てるとその一つのマークは皆の周りを移動し始める。何してるのかな？

……ん。まあ、今のあたしには関係ないだろ？、とりあえずもう寝よう。いろいろあって疲れた。

明日……いや、もう今口ね。このマップをよく見て頭に叩き込んでこう。

それと意外な効果があった“ゲーム脳”あれはもう少し効果を検証すべき。あたしの勘が当たってるなら、あれは予想外にいいスキルかもしね。

あたしは静かに目を閉じた。

…………おやーってするぐらいにならっこよね？

夜が明けた。

「アイテム、しまつ

目の前にあつた小石がフツと消えた。
朝、わりと早く目が覚めたあたしはさっそくスキル“ゲーム脳”

の検証に入っていた。

昨日の魔法の一件で確信したけど、このスキルはただご飯が味わえないだけの糞スキルじゃないみたい。
いや……もしあたしの勘が全部当たってるならとんでもないス killだ。

「アイテム、まとめて取り出す」

あたしがそう言つと十個程の石が宙に現れてバラバラと床に散らばつた。

床に散らばつた石を見て、全部にチェックマークを入れる。……“チェックマークを入れる”ってなんだつて言われてもうまく説明できないけど、とにかく頭の中で石にチェックマークを入れていく。

「アイテム、まとめてしまつ」

床に散らばつていた石がまとめて消えた。

とりあえず試したけど予想が当たつていた。

ゲームでよくある仕様として、ドラ もんの四次元ポケットみたいにあり得ないぐらいに大量のアイテムを持ち歩くつてのがある。

どうもこれができるみたい。あたしがしまつて言うと物が消え、取り出しつて言うと頭の中でしまった物の一覧が出てきて物を取り出せる。

そういうえば薬草とかの回復アイテムとかはどうなるかな？ 一瞬で回復できたりするなら敵に会つても薬草使いまくりのごり押し

で乗りきれるかも。……痛いのは変わらないだらうなɑ。

さりに実験を続ける。

まずはベッドをしまおうとしたけど……これは無理だった。あまり大きな物はしまえないみたい。

次に寝てる子の握りしめてた毛布をしまおうとしてみる。……無理と。けど毛布だけなら普通にしまえた。誰かが持ってるやつも無理つてことかな。

え～と、他には……

ベッドに腰かけ、石を取り出してチェックを入れる。で、転がしてみた。

石は口口口口転がって……だいたい1mちょっとでチェックが外れた。

この辺りが物をしまえる範囲ってことね。うん、だいぶわかつてきた。

だんだん脱出の準備が整つてきた。

あとはタイミングね。ベストなのはやっぱりあたしが誰かに買わ
れて、皆の外に出たあたりから。

いや、駄目だ。あたしがここに来た初日、エルフ耳の女の子

が連れて行かれる時に首輪を付けられていた。

後でフィロちゃんに聞いたことだけど、あれは魔法や身体能力を封じるための物らしい。

あたしの頼みの綱は魔法だ。それが封じられると逃げれるかわからぬし、あのお姉さんが言つには外は危険だそうだ。できれば万全な状態で逃げたい。

……といふかそれ以前に、そういう田で見られたりあそこを触られたりする時点で絶対やだ！ 論外！

女の子をなんだと思ってるの！？ あのエルフ耳の子を連れていったやつのこと、思い出しだけで殴りたくなつてくる！

となると兵士から鍵を盗むつてのがいいわね。

スキルのゲーム脳で鍵をしまっちゃえばあたし以外には取り出せないし証拠も残らない。

たぶん鍵を盗むのは難しくない。兵士がよく腰のベルトに鍵の束をぶら下げるの見るし、あたしの能力なら手を近付けただけで鍵を“しまえる”。ちょっと隙さえ見つければ大丈夫。

あとは深夜にタイミングを見計らって牢屋を出て、マップを見ながらこいつそり脱出つてどこかな？ 段ボールとかの脱出用アイテム無いかしら？

「もしやん？ どつしたんですか？」

「ひやつー。」

後ろからフイロちゃんに覗きこまれて悲鳴をあげてしまった。
フイロちゃんはクスクスと笑う。

「じ、じうじょ！ 心臓の音ヤバい。

「大丈夫ですか？ 顔赤いですし、心臓の音もずいぶん早くなっていますけど」

「し、心臓の音聞こえるの？！」

「ええ、まあ近くなら」

フイロちゃんの犬耳がぴくぴく動く。犬耳は伊達じゃないのね…
…といふかどりするよこれ！？ 鎮まれ！ 止まれ！ あたしの心臓ーっ…！

「風邪ですかね？ 寒気とかしません？ 昨晩も私に抱きついてましたし」

へ？

「お、起きてたの？」

「まあ、少しだけ」

「いつ？」

「もーさんがあのケータイつていつのを閉じて私に抱きついてきた
辺りです」

……あんの邪神！ 絶対に目を覚まさないって言つてたのにどんだけ性格悪いのよ馬鹿ーっ…！

うああああっ！ 終わったあああ！ 完璧終わつたーーっ！！
首周りのもふもふをクンカクンカしたり胸に顔埋めてヘヴン状態に
なつてたのバレたああっ！ 殺せーっ！ いつそ殺せーーっ！！
うわああああああん！！

「あの、もし寒気がしたりするならもう少し休つてましょ
うか？」

「今なんと?」

「ですから。もう少し抱き合ってましょうか?」

「いいの？」

「あれ？ 知つててやつたんぢゃないんですか？ 私たち狼人族は
寒い時は家族みんなでくつついて暖をとりますから、親しい同性同
士が抱き合つて眠つたりするのはわりと普通なんですよ？」

「……抱きしめてよかとですか？」

「なんか言葉變に…… もやつー？」

返事を聞く前にあたしはフイロちゃんに抱きついていた。
う~。あたし今幸せかも~。

……やつらのまま脱臼したひざを口に咥えていたこの
かな……

「ねえ、フイロちゃん……」

「はい？」

「ちゅうと話が……」

だけどあたしが話そつとしたその時、牢屋の外で重い鉄の扉が閉まる音が聞こえた。

「今の音……！」

あたしが来た初日にエルフ耳の子が連れて行かれたのを思い出した。

大勢の足音が近付いてくる。

すかすかと牢屋の前まで来たのは立派なマントを着けた大柄な、中年の男だった。

少し遅れていつもの見張りの兵士と、たぶん男のボディーガードらしい全身鎧姿の兵士が四人続く。

「ほう、また上玉を仕入れたな」

男は牢屋の前で足を止めるといやいやしながらあたしとフィロちゃんを見た。

上から下まで、舐めるように見られる。

気持ち悪い。

しばらくの間、あたしとフィロちゃんを見比べるみたいに視線が行ったり来たりした。

「よし、それでは“あれ”をもう一つ」

男が指差していたのはあたしだった。

四四三（2）

“あれ”ところのが自分を差してゐる」といふ付くに少しかかつた。

頭が真っ白になる。

すぐに鉄格子の扉が開かれて兵士が入つてくる。

心臓が縮みあがつた。

初日のこと。エルフ耳の子がされたことを思い出しても背筋が凍る。

前と同じなりのあと……、あたしは……

「いやあつ……」

状況を把握した時には兵士に手首を掴まれていた。抵抗しようとしちけどびくともしない。

「やめてっ！　いや！　助けて！　誰か……！　ぐう……【ファイ……】」「もこさん！！」

魔法を撃とうとした瞬間フィロちゃんが突然大きな声を出した。びっくりしてあたしも兵士も動きを止める。

フィロちゃんは立ち上がって鉄格子に近付くと男に向かつて丁寧に頭を下げる。

「あの子の代わりに……、私を買つていただけませんか」

「フィロちゃん？！」

なんで！？ そんな……

男の方は不機嫌そうにフイロちゃんを見る。

「奴隸が生意氣な」とだな。自分を買ふと誰つか」

「…………はい」

フイロちゃんは男の手を取る。そして口とおもむりにその手で自分の胸をわしづかみにさせた。

頭に一気に血が昇った。

「あんた！ なにや… むぐつ…」

怒鳴り声したら腕に鱗があるお姉さんに口を塞がれた。
離してよー フイロちゃんを止めないと！

「馬鹿…… あの子の氣持ち無駄にする気？」

お姉さんに耳元で言られた。
気持ち？ もうこれひとつ？

「！」で騒ぎ起したらあんたもう絶対逃げなくなる……。だからあの子は……

え？

頭から血が降つる音が聞こえた気がした。

男の方を見ると一タ一タしながらフイロちゃんの胸を揉みしだいていた。

怖いからか、恥ずかしいからか、フイロちゃんの身体がプルプル震えている。

「私の胸……気持ちいいですか……？」

震える声でフイロちゃんは言った。

「……ふふ、悪くないな」

「……どんな」ともします。だからどうか……」

「なら靴を舐めてみる」

男が鉄格子の隙間から足を入れてきた。
フイロちゃんは少しためらいながら四つん這いになつてそれを舐める。

やだ……やめて、やめてよ……。

あたしは血が出そうなほど強く唇を噛んだ。

もういいよ……。そんなフイロちゃん見たくないよ……。だから、
だめ、お願ひ……。

「ははは！ なかなか淫乱な牝犬だ！ 気に入った。おい！ こいつを部屋へ連れていけ！ 商談が済んだりさせなく楽しませもらおう

「 フィロちゃんが連れていかれる。」

「 フィロ……ちゃん……」

一瞬あたしと田代が合ったフィロちゃんは「 ハ」と笑った。
やめて……どうしてそんな顔するの……

フィロちゃんが牢屋から出され、首輪を付けられる。そしてそのまま首輪に付いた鎖を引かれて連れていかれた。
遠くで重い鉄の扉が閉まる音がした。

「 フィロちゃん……」

あたしはふらふら鉄格子に近付いていた。
やるせなくて思い切り鉄格子を殴りつけた。痛い。
すきすきと痛む手を押さえながらその場に膝をつく。

悔しくて、痛む手で今度は石の床を殴り付ける。

どうしてこんな辛いことばかりなのよ！？ フィロちゃんが…フィロちゃんがこの世界で見つけられた幸せだったのに… フィロちゃんがいてくれるなら辛いことも頑張れるとIMPLIEDしたのに…

こいつのこと、あたしも一緒に買ってくれればよかった…
脱出とかもうどうでもいいから… フィロちゃんといの方が多い
…。いつも、フィロちゃんと一緒に辛くてもきっと頑張れる。
嫌なことがあってもきっと立ち直れる。

……あの男、もう一度戻つて来ないかな？

そしたら色仕掛けでもなんでもやつてやる……好きでもない男にHなことされるのは嫌だけど。すこく嫌だけど。独りぼっちになるのはもつと嫌だ……。もつ独りになりたくないよ……。

その時、また鉄の扉が閉まる音がした。
戻ってきた！？

あたしは顔を上げる。突然のことにあわてた。え、えっと、色仕掛けって具体的にはどうすればいいんだろう？　ふ、太ももとか見せればいいんだよね？

……けど足音が全然違った。というか妙だった。

たぶん足音は一人分、その内の一人の足音が　カラーン　コロンって、まるで下駄をはいてるみたいな小気味いい音を立てている。

けど下駄？　ないでしょ。この世界つて西洋ファンタジーでしょ？

そうしてゐ間に　カラーン　コロンといつ足音が近付いてくる。

「ふむ……」のあたりのはずなのじゃがの「」

「ふえ？」

現れたのは……その……ロリツ娘だった。

腰まで届く長い黒髪で、きれいな赤い着物着てて。腰に刀を下げた12歳ぐらいの美少女が、たどたどしい手付きで携帯いじりながら　カラーン　コロンと歩いてくる。

悲しむのも忘れて思わずポカーンとしてしまつた。ついに幻まで見え始めたのかと疑つてしまつ。

女の子は携帯から目を上げるとあたしの方を見た。

「のうおぬし、少しよいか」

「は、はあ」

「ここの辺りに“浅倉 もい”といつ子はおらんか？ 探してあるのじゃが見つからんでのう」

は？ ますます混乱してきた。なんでこのしゃべり方が独特な子はあたしの名前知ってるの？ こんな子と知り合いになつた覚えないよ？

「浅倉 もいはあたしだけど……」

「おお！ もいしか！ 神崎！ 神崎こいつちじや！」

あたしの位置からは見えないけど、その子はもう一人に手を振つてるようだつた。

神崎？ なんか聞き覚えがある気がする。

近付いて来たもう一人は男だつた。年はたぶんあたしとあまり変わらない。

くわえ煙草でこれまた世界観無視の学ラン姿。
腕と足には銀色のガントレットとレガースを付けている。

その人はあたしの前まで来ると腰を落としてあたしと目線を合わ

せた。スポーツマンっぽい日焼けした顔。ひょっとほのかんだみつに頭を搔く。

「あ～…。もこ姉か?」
「……え?」

「俺のこと覚えてるかな……“神崎 竜斗”ほり、昔めぐへ一緒に遊んでたろ?」

その言葉を聞いて一瞬ぽかんとしてしまった。どこかで聞いた名前……頭の中にその言葉がゆっくり染みてくる。

神崎 竜斗……りゅう君?! なんで?! ビックリ?!

思い出した! “神崎 竜斗”それはあたしの幼なじみの名前だ。

あたしよつ一つ年下。小れい頃からいつも一緒に、まるで弟みたいなやつだった。

……けど、小六の時にあたしのお父さんとお母さんが死んで、おばあちゃんの家に引き取られてからは一度も会えなかつたけど、まさかこんなところ……

……普通に考えて信じられない。

りゅう君がたまたまこの世界に来てて、たまたまこの階にきて来て、たまたまた人に出会つたとか明らかに偶然つてレベルじゃない。性格の悪いあのマキナのことだし、偽物か何かの可能性も

……んむぐつ？！

いきなり口の中に何か突っ込まれた。なに？！　毒？！　……ん
？　甘い？

「なに難しい顔してんだ？　というかその顔、もしかして泣いてた
のかよ？　飴食べろ、元氣でるぞ」

口に突っ込まれたのは飴だった。ついでによくみたらりゅう君が
くわえてたのも煙草じゃなくて棒付きの飴だった。

口の中に広がる素朴な味。……そういえばりゅう君、飴大好きで
いつも舐めてたつけ。その記憶の中の顔と今、目の前にいるやつの
顔が重なる。

「……本当にりゅう君？」

「だから言つてるだろ？　俺は神崎　竜斗。もこ姉の幼なじみで弟
分みたいなもんだった神崎　竜斗だ」
そう言つてりゅう君はニカツと笑う。

同じだ。あたしが覚えてるりゅう君と同じ笑顔だ。

……やっぱ、また泣きそう。
胸がなんか暖かくなってきた。

「どうか怪我とかしてないか？」

りゅう君は優しい手付きで、確認するよつこあたしの身体を触つ
てくる。

頭を触つて、肩を掴んで腕を握つて。

ちょっと恥ずかしいけどなすがままにされておく。心配されるのも今は悪い気がしない。

ミニコツ

……こいつ今どこ掴んだ？

いやいや、さすがにね。こんな事故ぐらいはあたしが大人になって大目に……

ミニコツ

……両乳……だと……？

その時点ですでに明らかに事故じゃない。そのまま手があたしのお腹の辺りを通り、下半身に伸びていく。あたしの中で何かがぶち

切れる音がした。

「じつは 敵だ。」

「じつの……！」

「ん？」

「変つ態！！」

「うぶつ？！」

きょとんとした顔に、あたしは思い切りグーパンチを叩き込んだ。

「な、なにすんだよ?」

「うわせこー！ 本氣で感激してたのにこの変態…… 最っ底……」

「いやなんだよ？！俺が何したつてんだよ？！」

「自分の胸に手を当てて考えてみなさいよ。」

本当になんなのよ」の変態！？ しかもあんな「いやつ」とは「
るとか死ねばいいのに！」

「まあまあ、一人共落ち着かんか。今はそんなことやつとる場合でもなかろう」

着物の子が間に入つてきた。

あこひは「せに錦匠」つて書つておとなしげでござる。

師匠?
なにあいつ

着物の子はあたしに目を向けると柔らかく笑いかけてきた。かわいい。

「赤川 恋次？」

「はじめましてじゃの。わしは神埼の武術の先生をやつとる“赤川恋次”といふ者じゃ。おぬしと同じくこの世界に連れて来られた

なんか男みたいな名前……ていうかもうに男の名前。正直まつたく似合わない。せっかくこんなにかわいいんだから親ももつといい名前付けてあげればよかつたのに……

そんなことを思つてたら、それに気付いたのかそのままは泣い顔をして腕を組む。

「わっ……やはつ違和感が有るか……では恋ちゃんれんとでも呼んでくれい。ママにはいつ呼ばれてもおったしのう」

恋ちゃん……ね。まあそれならいいか。

けどりの子、和風な感じなのにお母さんとのママなんて呼ぶんだ。

「ん……まあ血口紹介せともかく、恋ちゃんともう少しお変態せいたいにしていんなといひでこるの？」

「経緯を話すと奥へなるので後に回すが、おぬしを助けに来た」

「……助けに?」

「いむ、弟子の頼みとこのと回じ境遇とこのうどめの」

恋ちゃんは腕を組み、堂々と小さな胸を張る。いや……助けにたつて……ねえ?

「……えーと、気持ちほ嬉しいんだけど見付からなくて早く逃げた方が……」

「なんでじゃ?」

「なんでつて……ほら、危ないし」の牢屋の鍵も無いし……」

恋ちゃんは「ふむ」と床屋の鉄格子を見た。小さな手で「ンンン」と呟いて、何かを考えるみたいにあいに手を当てる。

「まあせ」ちからじやな。ちょっと離れておれ

そう言って恋ちゃんは腰に差した刀を抜いた。刃。あたしが一步下がると刃を鉄格子に向ける。

「むん！」

恋ちゃんは“Z”の形に刀を振つた。

鉄格子がバラバラになつて崩れた。

手首ぐらいの太さの鉄格子がバラバラになつたよ？！

「それで問題解決じゃの、さあ行くぞ。そろそろ気付かれる頃じゃ」

恋ちゃんは呆気に取られるあたしの手を取る。

駄目だ。

そのまま行つたらフイロちゃんと離ればなれになる。たぶんもつ

「うむ……」

あたしは恋ちゃんの手をほどいた。

「友達が連れていかれたの、もしかしたら戻つてくるかも知れないから待つてないと……」

「友達が連れていかれた?」

恋ちゃんの後ろに下がつてたあいつが突然反応した。

なにこいつ。こきなり反応して。まさかフィロちゃんが女の子だから興味示したとか? だつたらリアルにぶつ殺すよ?

あいつはあたしに近付くと携帯をチラリと見て、またあたしの方を見た。

「その友達つていうの、もじ姉にとつてどれぐらい大切な人なんだ?
? そいつはもじ姉にとつてどいつも存在だ?」

本当ににこいつ。どれぐらじ大切? どいつも存在? いきなりそんなこと言われても……さ、さすがに片想い中なんて言えないし……

「し、親友?」

「やういう漠然としたのじや駄目なんだよ……」

いや駄目つて何よ!?
といつかさつきから何言つてんのこいつ!
!?

「それじゃあ……。もしさの子を俺が助け出したら、もじ姉は俺の言つことなんでも聞くつて約束できるか？ それぐらい大切か？」

「……は？」

「だから俺がもじ姉の親友を助ける。そしたらもじ姉は俺の言つことをじんなことでも聞く。どんな面倒なことでもどんな恥ずかしいことでもな。これ、約束できるか？ それぐらいの覚悟を決めれる相手か？」

心臓がバクバクし始めた。

「い、いや、な、なんでもつて……か、確実にやらしことある気満々だよ！？」

「というか久しぶりの再開で胸わしづかみにしてくるやつだし絶対あんなことやこんなことして……」

「あまつは薬使われて調教されて輪されて……最終的には抜けることができない快楽地獄に墮とされ性奴隸に……」

「い、いや、さすがにこれは同人誌読みすぎにしても間違いないやらしいことはされる。つか恋ちゃんの前でなんて話してんのよここには！」

「けど、それでフイロちゃんにまた会える……？」

「……約束したらフイロちゃん……あたしの友達助けてくれるの？」

「それは約束する」

「絶対に？」

「ああ」

「絶対の絶対の絶対に？」

「絶対の絶対の絶対にだ」

「…………わかった」

「後で取り消したり逃げたりはさせないぞ?」

「…………うん。いいよ……それでフイロちゃんを助けてくれるなら……」

身体から力が抜けた。何か大切な物を無くした気がした。顔を上げてみたらあいっはニカツと明るく笑っていた。本気で殺したい。

「おい邪神。これで“過守護”の発動条件満たせるな?」

いきなり何も無い方向に喋り始めた。

なに? 変態でゲスで鬼畜な上に厨二で電波なの? 宇宙から電波受信してるの? ほんと手の施しよつがないわね。

「よし、それじゃ大丈夫だ。師匠、もう姉頼みます」 あいっはそう言って立ち上がる。恋ちゃんは小さく頷いた。

「よいか? わしに任せてしまつて。本音は自分で護りたいんじやろ?」

「俺が10人いて護るより師匠が一人いる方が安心ですからね」

「ふふ、それでは弟子の期待に応えられるように気張るとしようかのう」

二人は拳を「ジンピング」で合った。

恋ちやんがあたしの手を引く。今度はあたしも素直に外に出た。

「わしらは先に脱出しておく。神崎、おぬしもフイロヒヤウを助けて早く追いついて来るのじやぞ」

「はいー」

あいつは力強く返事すると氣合を入れるより強く息を吐く。

「もー姉、そのフイロって子のわかりやすい特徴とかないか？　あと最近まで使つてた物とか」

……[写真なら一応あるけど]……

あたしは何も言わず携帯に保存してたフイロヒヤウの寝顔を見せた。

「……なんで寝顔なんて撮つてるんだ？」

「へ、ついでー。」

あいつはしびりへ携帯に写つたフイロヒヤウを見ると少しへき顔いで顔を離す。

「よし。あと最近まで使つてたやつ。毛布とかそういうのは？」

……あるけど、何に使つこいつ……。とつあえず言われた通りにフイロヒヤウが使つてた毛布を渡した。……で、あいつはそれに

顔を埋めた。クンクンと匂いを嗅いでいる。

うわあ……うわあ……行動が変態過ぎて言葉を失つてしまつた。

あいつはしばらくないを嗅ぐと毛布をあたしに返して立ち上がる。

「よし、それじゃ言つてみる」

「……あんた、フイロちゃんの居場所とかわからないのじどうすんの？」

「大丈夫」

柔らかく、そしてなんか嬉しそうに笑う。

「心配せずに待つてくれよ。“今度こそ”約束は守る」

そう言い残してあいつは走り去つて行つた。

四四三（4）（前書き）

牢屋長つー？ とか言わない。お兄さんとの約束だ。

だいたいの舞台が整つて四四三までは超ゆづくらやります。
そつからはメインイベント以外は一日一～二話のキングクリムゾン！ を使う予定。

とつあえずこれまでには気長にお付き合ってくださいな～。

四四三（4）

side 神埼 龍斗

もう姉の見た目もだいぶ変わつてたな。いや、まあ見た目はいいんだ。可愛かつたし。けど、きなりグーで殴つてくるような性格だったか？

……また俺何かやらかしたのかな？

石の階段を一段飛ばしでかけ降りる。
もこ姉が言つてたフイロつて子の匂いは下の階層に続いていた。
階段の踊り場から一気に飛び降りて着地。そのまま廊下を駆け抜ける。

皆の中は少し騒がしくなつてゐるようだつた。

たぶん師匠が暴れ始めたんだろう。もこ姉のことはある人に任せとおけば間違いない、おかげで俺はこいつに集中できる。

誰か来る。走りながら聴覚に意識を集中した。鎧や剣が擦れる音、緊急事態で緊張した感じの呼吸音、歩幅の広い足音。……敵の兵士だ。

固く拳を握る。タイミングを合わせ、曲がり角から飛び出して来た兵士を出会い頭に殴り倒した。

「な、なんだお前は！？」

もう一人が剣を抜く前に顎を蹴り上げた。兵士は短い悲鳴を上げて床を滑る。

『お～、じゅう君かっこいい』

「引っ越し邪神」

白いマキナがいきなり俺の隣に現れた。それに構わず再び走り出すがマキナは空中に寝そべった体勢のままついてくる。

『おーい、スルーしないでよー』

「お前に構つてる暇なんか無い」

『ひどい！？ 神様なんだから敬つてよー』

「敬つて欲しいなら何かいいことしろー」

デウス・エクス・マキナ

俺たちをこの世界に召喚した神で俺たちにとって最悪の敵……のはずなんだが、こいつはことあるごとに俺の前に現れる。

俺が特殊な立ち位置のPCだから気になるらしい。

ただ、もこ姉がこの世界に来ているとわかったのも、完璧に姿が変わってしまった師匠と早い段階で合流できたのも一応はこいつが教えてくれたおかげだ。

信用するかは微妙だが白いマキナは『“面白い限り”人間に手は出さない』と言っていた。

実際にいい情報もたまにくれるし、今のところは利用させてもらつている。

「……おい邪神。一つ答えや」

『だから私は神様だよー。邪神じやなーよー。で、何?』

「……あー、俺……もこ姉に何かしたか? なんかやたら怒らせたみたいなんだが……」

俺が言うと思い出し笑いしたみたいにマキナは笑い始めた。
俺がもこ姉に殴られた時も笑い転げてたなこいつ。訳もわからず笑われるのは腹たつな……。

「……おーーー」

『あはは あれは傑作だつたねー! 答えを書くとりゅう君のスキルの効果の影響だよ。』

前にも言った通り、りゅう君の固有スキル “過守護” がりゅう君の“衝動”を封じてるんだけど、それに巻き添えみたいな感じで幾つかの欲求や知識なんかも一緒に封じられちゃってるのよ。
だから意識しないでもこちやんを怒らせるとしちゃったの

いまいちわからん。

「……何とかならないのか?」

『スキル制限系の薬でも使えばいいけると思つけど、その場合 今まで抑圧された欲求が暴走しちゃうと思つよー。もこちやんの」と
レイプしちゃうかもよ?』

「レイプってなんだ?」

『「あ～。そういうのも忘れちゃってるか。めんどくさいなー。えーっと、レイプってのはー』

セヒまで言ひてマキナはいたずらっぽく笑った。

『「とか変態ー。それ私みたいな女の子に説明させる気かな? かな?』

……とつあえずまぢー葉らしげ。もし姉に聞くのはやめとこう。後で師匠にでも聞くか。

『「ま、それだけで済んだら万々歳なんだけどね実際。“衝動”が暴走したら私達以外、誰にも止められないもん。だから気を付けてね?』

「……お前に心配されるなんてな

『「まあね。私が興味を持ったのは“暴走しなかつた”りゅう君だもん』

そう言ひてマキナはフツと消えてしまった。……と、フィロつて子の匂いがだいぶ近付いてきた。廊下の突き当たり。西開きのでかい扉。速度を緩めず肩から思い切り突っ込んだ。

扉を突き破るとセヒはやたら派手な寝室だった。すぐに左右に視線を走らせる。

いた。でつかいベッドの上で下着姿で女の子に覆い被さっているおっさん。そしてそのおっさんに両腕を掴まれベッドに抑え

込まれた、裸で犬耳の女の子。この子だ。この子がフィロだ。

「え……？」

「な、なんだ貴様は！」

問答無用で踏み込み、振り向いたおっさんの顔面に蹴りを叩き込んだ。グチャアという気味悪い音に背筋がゾワゾワする。おっさんはそのままベッドから転げ落ちた。俺はベッドの前に着地してフィロを見る。

「ひつ……！」

ビクツッてされた。まずい、恐がらせたか？

「あ、あの！ わ、私はただの奴隸で……」

「違う違う！ 俺はもこ姉に頼まれてあんたを助けに来たんだ。
…と、えへ、あんたがフィロで間違いないな？」

「は、はあ。……あ」

フィロは何かに気付いたみたいにあわてて布団を被った。

なんだ？ ああ、素っ裸だとさすがに寒いか。

布団からぴょこんと顔を出したフィロは視線を右往左往します。顔が妙に赤いし風邪でも引いたのかもしれない。

俺の服でも貸してやるか。

そう思つて服を脱ぐのに邪魔になる腕のガントレットを外した。ビクリとフィロの身体が震えた。目を見開いて俺の腕についている数枚の“黒竜鱗”を見ていた。

黒色の尖った形をした鱗で、俺がマキナに目を付けられたきつか

けだ。

「竜……人族？ うれ……？ あれは昔話じや……」

驚愕したという感じの目。……この子なら犬耳とかしつぼ付いてるし大丈夫かと思ったが……やっぱり見慣れないか。

俺はそのまま学ランを脱ぐ。フイロが一気に怯えた表情になつたけど、俺が「これ着る」って言つて学ランを渡すとホツとしたような、拍子抜けしたような顔をして受け取る。

「あ、ありがとうございます……あの……えっと……」

「神崎 竜斗。まあ話は後だ。とにかくここを出るが。もし姉が待つてる」

狼狽しているフイロの手を掴 「待てっ……」

さつき蹴り飛ばしたおっさんが起き上がつた。鼻が変な方向に曲がり、鼻や口の周りが血でべたべただ。寝てりやいいのに。

「貴つ様あ！ よくも貴族である私にこのよつな……おい！ 近衛兵！！ 早く来んか！！！」

おっさんが叫ぶと隣の部屋から四人、全身鎧を着た男が部屋に入つて来た。訓練されてると一目でわかる動きで俺とおっさんの間にに入る。

俺もフイロの前に立ち兵士の前に立つた。だが今は脱出優先だ。やつ合の意味も無いしきれは戦闘はしたくない。

「……おっせん。頼むから」のまま逃がしてくれないか？　お互に
痛い思いはしたくないだろ？」

「今やら命<いのち>にしても遅いわ！　お前ら！　その男を殺せー！」

その言葉で兵士達が一斉に剣を抜いた。俺はフィロの手を引き自分
の背に隠しながら拳を握る。

身体の中でも血が熱くなる感覚。深呼吸してそれを静める。

四人……ガントレット外したのはまずかつたな……

「リ……リコウトさん！」

フィロが俺の腕にしがみついてきた。

「もういいです！　十分です！　だからお願ひです！　逃げてください
セー！　このままじや……」

泣き声になつてゐるフィロ。女の子に泣かれるのは苦手だ。頬
にそつと触れる。

「気にはんなよ。かわいい女の子を護るのは男の権利って言つだろ
？」

「……え！？　あ……あの？」

フィロはおもむりとしまじめ。見てるとなんか子犬みたいで
可愛らしい。

「はは、本当にかわいいな」

安心をせよ。ヒロの頭をくしゃくしゃ撫でた。……おお？
「の犬耳ふにふにして気持ちいいな。

「~~~~~つ？！」

フイロの身体がビクンと震えた。頬が一気に赤くなる。耳が熱い。
やつぱり風邪なのかもしれない。

「はああああつー！」

兵士の一人が斬りかかってきた。
けど気負いがある。後ろ蹴りでその手から剣を弾き飛ばし怯んだ
ところに突きを放つ。

俺の拳は兵士の鎧をへこませ正確に急所に衝撃を通した。

攻式 鎧通し。

師匠から習つた鎧を着た相手を倒すための技だ。まさか異世界で
役に立つとは思わなかつた。

さらに斬りかかってきた兵士が胴に振るつた剣を足のレガースで
弾き、そのまま兜の上から上段蹴りで首を刈り取つた。

一人目、この程度ならまだ樂しょ 俺の腕を剣閃が切り裂いた。

「 つ！？」 腕の傷口から鮮血が溢れた。
三人目が斬りかかてくる。他と動きが違う。

こいつは 強い！

左右に振るわれる剣の速度が段違いだ！ ガントレットを外した

俺は本気で馬鹿か！？ まともにやりあつのはまずい！

一文字に振られた剣を伏せて避ける。

続けざま、流れるゆうな動作から兵士が上段から振り下ろした剣をほとんど身体を横倒しにして脛のレガースで無理やり受け止めた。

床に視線を走らせる。さつき倒した兵士の剣と俺のガントレットの落ちている位置を確認。

体勢が崩れる前に側転して距離を取りつつ、剣とガントレットを拾い上げた。

手の中で剣を逆手に持ち変え投げつける。

敵の兵士がそれを弾く間に駆ける。一人目に倒した兵士が持っていた剣を拾い上げつつ、振り下ろされた剣をガントレットを盾に防いだ。

こんなのと戦つてられるか！ なら狙うは一つ。人体も組織も頭が急所だ。

兵士一人の脇をすり抜け、剣の切っ先を貴族のおっさんの喉元に突き付けた。

「退け。じゃなきゃ殺す」

ドスの聞いた声で脅す。他の兵士の動きが止まった。

おっさんは目を剥いて俺を見る。

「う……貴様……何なんだ……」

「聞いてるのは俺だ」

男の首に剣の切つ先を沈ませる。血が流れ、男の顔がみるみる蒼白になつた。

「ぐう……ひ、退くぞ!」

男はそつ町ぶと兵士を連れ足早に部屋を出でていつた。

……とりあえずこの場はしのげたか。ホッと息を吐く。……いや、安心するのは早い。早く脱出しないと。

「リ、リュウトさん！ 大丈夫ですか！？」

フィロが駆け寄ってきた。俺の手を見て口を覆う。

「ああ！？ ち、血がこんなに……！」

「大したことねえよ。それよりそつちは大丈夫か？」

「は、はい。けど……」

フィロは心配そうに俺を見ている。いい子だな、と素直に思う。高校にいたギャル軍団とはえらい違いだ。じつこうところも、もう姉が気に入ってる理由だろうな。

「そんな顔せず笑ってくれよ。そのために俺も頑張ったんだから」

「え？ ジ……じつですか？」

言葉通りに受け取つて、フィロはぎこちなく笑顔を作つた。思わず笑つてしまつた。その表情を見てるとこんな時なのについ和んで

しまつ。

「わ、笑わないでくださいよ……！」

「はは、悪い悪い。……ほんと、やつぱりかわいいなお前」

「つ？…」

「俺、お前のことなんか好きだな」

「つ？…？」

火が付いたようにフィロの顔が真っ赤になつた。
「あつ！？ なんかまた顔赤くなつたぞ？！ おいおい、やつか
いな病気じやないだろうな？ とりあえず早く連れ出してやらない
と。」

「行くぞ」

「きやつ？！」

フィロの足と肩を持つて抱き抱える。俗に言つてお姫様抱っことい
うやつだ。流石に病人に走らせる訳にはいかない。

「あー あの！ んと……！」

「ん？ 悪い。どこか痛かつたか？」

「い、いえ……ただその……素敵な男性にお姫様抱っこしてもらひ
の……小さい頃からの夢だつたので……」

「……あー、なんかよくわからんがまづいことしたか？」

「…………いえ」

フィロは目を伏せてボソボソと呟く。

「夢が叶いました……」

「お、おお、そうか。良かつたな。…………じゃあ、落ちないよつにしがみついてくれよ?」

「…………はい」

フィロは俺の首に手を回す。
密着した胸から感じる心臓の音がかなり早い。
本当に大丈夫か? なんともなればいいんだが…………。

四田三（5）（前書き）

一応りゅう君の簡易データです。読み飛ばしOK

名前 神崎 竜斗
年齢 16
種族 黒竜の竜人（詳しくは作中で）

もこの幼なじみで元弟分。もこの両親が死んだことをきっかけに離ればなれになってしまったがとても仲が良かつた。

子供の頃はやんちゃな子だったがとある理由から年齢に合わない程大人びた考え方をするようになつている。

また、もことの再開時等にとんでもないことをやらかしたが、これにもやむにやまれない事情があった。

四四三（5）

side 浅倉 もこ

フイロちゃん大丈夫かな……。

地面に腰を下ろして空を見上げながら、あたしはそんなことばか
り考えていた。

一緒に行けなかつたのが悔しい。本当なら自分で助けてあげたい
のにりゅう君に頼るしかないなんて……。

もつとあたしが強かつたらよかつたのに。というか大丈夫だつた
のかなあ、あいつに任せて。変態だしあいつ……もしかしたらあい
つがフイロちゃんに……

「どうしたの、じゅ浅倉？ そのような怖い顔をして」

恋ちゃんがちょっと心配そうにあたしを見てくる。

「なんでもないよ」とまかしながら、草場の向こうに見える皆の方を見た。

あたしたちは皆を脱出して近くの森に隠れていた。少し肌寒くて、
針葉樹みたいな葉の尖った植物が多い。

待つてこるだけだと心配にな。無理やつでも一緒にに行けばよかつたかも……。

「大丈夫かな……」

「心配するでない。女の一人も助けられんよつなやわな鍛え方はしてりゃん」

「……恋ちゃんはあいつのこと信頼してるんだ?」

「 もうひさじ。わしの血縁の弟トジヤからの一・」

えつへんじばかりに胸を張る恋ちゃん。かわいいんだけどなんか変わってるのよね。しゃべり方おじこちゃんみたいだし。

「 おお! 来たぞ!」

「 ホントに! ?」

恋ちゃんが指差した方向を見ると、りゅう君が学ランを着たフイロちゃんをお姫さま抱っこして走ってきて、そのままあたし達が隠れてる草影に飛び込んできた。

「 お待たせしました。師匠。もう姉」

息を弾ませてやつ言いながら、りゅう君が学ランを着たフイロちゃんをお姫さま抱っこして走ってきて、そのままあたし達が隠れてる草影に飛び込んできた。

「 フィロちゃん! !

「 も、もう姉! ?」

あたしはフイロちゃんの胸に飛び込んだ。

よかつた……よかつたあ……！ またフイロちゃんに会えた！

潰れちゃうやうなぐらー、力いっぱい抱きしめる。伝わってくる体温さえ本当に嬉しい。フイロちゃんもくすりと笑うと「やっぱり甘えん坊なんですね」なんて言つて抱きしめ返してくれた。

本当に……一時はどうなるかと……

ナウだ。つゅう想にもお礼しな げつ？！

ビクッとしてしまった。

りゅう君の腕からじくじくとたくさんの血が出てて、着ているフイシャツを真っ赤にしてくる。

「ちよ、ちよっとあんた大丈夫！？」

「ん？ ……ああ、舐めと舐めや泣るだろ」

い、いやー？ あり得ないでしょー？ てかなんでそんな平氣な顔してんのあんた？！ そ、ナウだ！ 牢屋で回復魔法習つてたんだ！

「ヒ……【ヒール】……」

あたしの手から白い光が溢れる。

それがりゅう君の腕に触れるとみるみる内に傷口が塞がっていく。

「お、おーーー！」

一人で思わずそんな声が出た。

光が消えるとそこには元通りの手があった。

「い、今の回復魔法ですか？！　け、けどあんな傷を治せる回復魔法なんて……」

フイロちゃんが驚いてる。

反応から見るにビックリ普通の回復魔法ではあの怪我を治すの厳しいみたい。

たぶんこれもゲーム脳の効果かな？　ゲームじゃHPさえ回復すれば回復だし、折れてようがえぐれてようが関係ないもんね。……やっぱなにげに凄いわねゲーム脳。

「と……で、あんたは大丈夫？　痛くない？」

りゅう君は手の具合を確かめるように手をグーパーさせてる。

「大丈夫だな。サンキュー、もこ姉」

「お礼を言うのはあたしの方だよ」

あたしは姿勢を正して、できるだけ丁寧に頭を下げた。

「ありがとう。あんたのおかげで……その……なんとかなったわ。本当にありがとうございます」

心からの感謝の言葉だった。もしあの時こいつと恋ちゃんが来てくれなかつたらと思うと……ゾッとする。フイロちゃんとまた一緒に過ごせるようにしてくれただけでいくらお礼しても足りないくらいだ。

「なに、返すあるなよ」

「うーん、君は一カツと気持ちいい笑顔を返してくわ。
おー、ちょっとかっここにしゃん。そういうばりゅう君小学生の
頃からけつこうモテてたつけ? 懐かしいなあ

「ああ、ナビ俺とした“面つら”と聞く、って約束は忘れるなよ?
あいつに守つてもうからな?」

忘れてたあああああっ?! しまった! ここいつ変態だった!
なに見直したとかかっこいいかもとか思つてんのあたし?! どう
うしうづじつじよつじよつじよつ…?

落ち着け……落ち着けあたし。落ち着いて素数を数えるんだ。
どうする?

- 1 ·逃げる……逃げてどこ行く? この世界危ないからこゝ、フイ
口ちやんの安全も考えるど……
- 2 ·『まかす……実力行使されたら無理。
- 3 ·殺す……よっぽどじやない限りあたしが無理。

うへ……、ギリギリ。

諦めるしかないのかなあ。実際ここが助けてくれなきゃもつと悲惨なことになつてたかもしだれなこし……。

それに、ここのことだから下手したりフイロウカヤニ手を出しかねないし……

それならもう……あたしが身代わりになつてでもフイロウカヤニを譲るしか……

それに身体は許してもあたしの心はフイロウカヤニに捧げ「あの、リュウトさん!」

フイロウカヤンガリゅう君に近付いていく。

……あ、あれ? 何か顔が赤い気がするけどなんで?

「この度は……その、本当にあつがとうございました! ま、まだちやんとお詫びを言つてなかつたので!」

「ああ、お前も気にするなよ。俺はもう姉に頼まれただけだからな」
りゅう君がやつぱり、ヒシリヒシリした顔では少し不安そうな顔であたしを見た。な、なに?

「もし」やんとリュウトさんひどいこいつた関係ですか? もしかして……恋人……ですか?」

「う、違ついー【冗談じゃないわよそんなやつーー】」

あたしが叫ぶとフイロウカヤニはホッと息を吐いた。

え？ いや、なんでそこで安心するの！？ なんでしつぽパタパタ揺れてんの！？

「あ、そ、そういうえばちゃんと血口紹介してませんでしたね！ わ、私は狼人族のフィロッヒで言います！ 15歳です！ し、シリシリ… … 恋人はいません！…」

だ、だからなんでわざわざ恋人はいないなんて言うの？！ おかしいよフィロッヒやん！？

「おひ。これからよろしくな

「は、はいー、え、えっと、し、今回のお礼もありますし私にできる」となら何でも言つてくださいね？ そ、その……何でもしますからー！」

フ、フィロッヒああああああん？！

「ほう、これはこれは

恋ちゃんがニヤニヤしてこた。りゅう君の隣に行くと「のう」と脇腹を小突く。

「ひつ！？ な、何してんですか師匠！？」

「いやいや、弟子の成長が嬉しいの。僕念にじやと思つておつたが……まったく、こんなかわいい娘さん相手に……」

「い、いやなんの」とつか?

きょとんとするつゅう君。その前でフイロちゃんは顔を真っ赤にしてあわあわしてる。

もしかしてつゅう君……気付いてない?

「よいか? わしかりにとは一つ。手を出すのなら責任は持て、じやぞ」

「は、はあ。よくわからなけどわかりました」

「い、いやー、わ、わわ私はべべ別にそんなつもりじゃ……一
け、けど……その、どうしてもつていうな、……その……」

「おいフイロ? 大丈夫か? 顔真っ赤だぞ?」

「は……まつり……」

なんなの、このコント……

あたしは大きくため息を吐いた。

そして日も暮れた頃

砦からさりに離れ、あたしたちは綺麗な水の流れる大きな川の河原でたき火を囲んでいた。薄暗くなつた中で火の粉を散らしながら燃えるたき火はすゞく綺麗だ。

りゅう君と恋ちゃんはここに荷物を置いていたみたいで、布団や食べ物、着替えなんかが置いてあつた。

あたしとフイロちゃんは水浴びして汗を落とした後に少し仮眠して起きたところ。

りゅう君は食材の幾つかを鍋に入れて料理をしていて、恋ちゃんは刀の手入れをしていた。

「それにしても本当に信じられないです。まさかこいつやって外に出れるなんて……特にこさん、恋さんと一緒によく脱出できましたね？」

「あはは……」

実はあたしの方は思いの外簡単に脱出できた。といつも恋ちゃんがチート過ぎた。

兵士相手にリアル 国無双するは刀で壁を切り刻んで道を作るは、あたしを背負つて砦を囲つてる塹を飛び越えるはやりたい放題。

確かにさ。ゲームとかに出てくるロリツ娘がチート性能だつたりすることはあるけどさ。あたしとの性能差ひどくない？ 泣くよ？

「んで、これからどうする？ 行きたい場所とかあるか？」

りゅう君が鍋をかき混ぜながら言った。
なんかいい匂いがしてくる。

「……………」それからどうすんのかな？ 脱出ばかり考えてたけどその後はノープランなのよね。この世界のことは自体ほとんど知らないから当たり前だけど。

「……………あのマキナの試練もあるから、レベルアップはしどうかないといけないし。

「あんた達は？ 行きたい場所とかないの？」

「りゅう君と恋ちゃんに聞いてみたけど答えはあたしと同じだった。

「それじゃフィロちゃんは？ 行きたい場所ある？」

「私ですか？」

フィロちゃんはちょっと目を伏せる。

「できれば故郷に……帰りたいです」

「故郷？」

「はい。私は行商人のお父さんと一緒に旅してる時に拐われて奴隸にされたのですが……。できれば故郷に帰つて家族と再会したいです……」

「よいのではないか？ わしは賛成するぞ」

恋ちゃんが刀の具合を確かめながら言った。目付きがまるで職人みたいだ。

「けど、オオイグに乗って行つても一～三週間かかるんです。たゞがにお願いするのは……」

「一～三週間か。なら急がないとね」

「もーさん?」

「オオイグ……馬みたいな乗り物かしら? 何にせよマキナが言ったゲームの期間にけつこうギリだ。明日からでも急いでいかないと。」

「二人も良いよね? 目的地会つた方が張り合はあるし、フイロちゃんを故郷に連れてつてあげよ?」

「つむ、わしは構わん」

「俺も。……おし、そろそろできたかな」

「りゅう君が作つてた料理ができたみたいだ。野菜スープみたい。

「あのニンジンみたいな野菜は抜いてくれ」という恋ちゃん。

その言葉を無視してニンジンみたいな野菜を山盛りに器に入れ、「『好き嫌いはするな』ですよね?」と渡すりゅう君。

涙目になる恋ちゃん。

兄妹みたいで和んでしまつた。そういえばこの一人本当はどういう関係かな? 武術の師匠と弟子つて聞いたけど正直納得できないし。

……いかがわしい関係だつたらと黙つて怖くて深く聞けない。

「ほひ、もひ姉とフイロも。ロシ合ハばこにけび」

そう言つてひづ君はあたし達にも器を渡してきた。

一人でお礼を言つて受け取つた。

野菜のスープ。いい匂い。

フウフウと冷ましてひとく『スキル。ゲーム脳発動』

……忘れてた。器の中身が一瞬で消える。

ヤバイなこれ……食べ物を味わえないって意外と精神的にくる。

あれ？ けど皆でひづ君がくれた飴は普通に食べれたよね？
あれ？

「おお！？ もひ姉早いな？ どうだった？ 面かつたか？」

「あ、う、うん。美味しかったよ」

あまりに無邪気に聞いてくるからつにしつ答えてしまつた。すぐ嬉しそうな笑顔を返してくる。

実際どつなんだろ？ もひちゃんの方を見てみると 「おい…
…しこ…」

フイロちゃんがすゞく驚いた顔をしていた。

「す、すじ」です。素材が完璧に調和してるとこか、フコキビの

実の甘味とナシマトの実の辛味がいいアクセントになつて……」「んな美味しいもの初めて食べました！」

「んな大げさな……。ま、ありがとな。そう言わると作ったかいがある」

そんなに美味しかったんだ……。

やっぱ、また泣きやう……なんか泣き虫になつたやつたなあたし。これくらい我慢しないと。こんなので泣いてどうする。我慢我慢。

「お料理がうまい男性……いえ、お料理がうまいコウトさん、素敵です……」

泣いた。

おまけ フィロの遠話魔法“声便り”

前略

この空の続くビニカにいるお父さんへ。

私は元気です。心配かけて「めんなさい」。このメッセージが届いていることを祈つて毎日あちこちに遠話魔法“声便り”を飛ばします。

あの日、行商先の街で誘拐されて、奴隸として売られそうになってしましましたが、奴隸商の牢屋で知り合つたもことさんと、そのお友達のリュウトさんとレンさんという方々に助けていただき、今は自由の身です。

しかももこさん達は私を故郷の村まで送つてくれると誓つんです。こんな素晴らしい方々に出会えたことには感謝しないといけませんね。

えつと、せっかくなのでもこさん達のことを紹介しておきますね。どんな人か知つてもらつた方がお父さんも安心できると思いますし。

まずはもこさんのことから。

人間なのに狼人である私とともに仲良くしてくれる心の広い方です。

少し変わつてたり常識知らずなところが多いですけど……すこく

いい人です。それと私より年上なんですけど、たまに甘えん坊で妹みたいでかわいいです。

ああ、あと一瞬でご飯を食べる『早食いの魔法』とか、何もないところから物を取り出す『アイテムボックスの魔法』つていう一風変わった秘伝の魔法を使えるんですよ。将来、行商の旅に役立ちそうだから教えてくれるよう頼んでるんですけどなかなか首を縊に振ってくれません。けど頑張ります。

次にレンさん。

東方の国の『和服』っていう珍しい服を着た女の子です。まだ幼いんですけどすごくしっかりしていて頭も良いんですよ。なんだか話してると私の方がずっと年下みたいに思えてします。

……こいつ言うと怒られそうですが少し爺臭い感じも……ほ、本人には秘密ですよ？

ただ、意外と恥ずかしがりみたいで、水浴びに誘つたら「お、おなごがそのようなこと言うでないわ！」って逃げちゃったんですよ。まだ馴染めてないんでしょう？……今度また誘つてみようと思います。

……や、最後にリュウトさんについての方の紹介ですね……。

え、えっと……とっても強くて優しくてかつごくよくて誠実な素晴らしい方です！

そ、その……わ、私のこと助けてくれたのはこの方で……えつ……、あの、あ、お料理がすばくお上手です！一緒に行商に出れば毎日美味しいもの食べれますよ！そ、それに家事全般が得意らし

いですから一緒に来てくれた私も助かるなー、なんて……あ、あれ？ 私何を……

そ、それと……あの……も、もうすぐ私たち狼人族の発情期の時期ですね？ い、今までは魔法薬で抑えてましたけど、今はその魔法薬がありません。ですから……その……も、もし我慢できなくて……あ、い、いや……べ、別に普通だつたら魔法薬無しでも我慢できる自信は有るんですけど。も、もしも……もしもですか？ もし素敵な男性が現れたりしたら我慢できずに……そ、そういうことしちゃうかもって……

け、けどその時はちゃんと責任取つてもらいますから！ そうなつたら三人で一緒に行商の旅しましちゃうね？

そ、それではこれで！

PS・料理道具、新しいの揃えといてください。

おまけ フィロの遠話魔法“声便り”（後書き）

おまけです（笑）
シリアルス手続きっぽなしだからひょっとべりこ息抜きしたかったんで
す

あ～、早くほのぼのシーン書きたいです……

一応 説明

遠話魔法“声便り”

自分の声を魔力で包み、遠く離れた相手に飛ばす魔法。よつある
に手紙の声版みたいなもんです。

外に出されたのでどこかにいるはずのお父さん宛てであつたら
に飛ばしてくるんですね　ｗｗ

これが届いた時お父さん……どんな顔するでしょう（笑）

「……きれい」

夜空を見上げると満天の星空。たき火にあたりながらそれを堪能する。

手を伸ばせば届きそう。それぐらい近くに感じる。

プラネタリウムでは見たことがあるけど、本物は圧倒的だった。

文明万歳な生活してたあたしだけど、この星空を見ただけで心が震える。自然も悪くないな、なんて思つてしまつ。

時刻は深夜。もつすぐ口付が……変わつた。

少し様子を見てみるけど今日も試練は無いみたい。ホツとして白い息を吐く。

「とはいえ問題が先送りされただけじゃがのう

恋ちゃんがボソッと呟いた。

なんか恋ちゃんはこうこう妙に大人びてる。

クーデレ？ こういう子が思い切りテレてくれたらかわいいだろうなあ……『お姉ちゃん』とか言って甘えてきて欲しいなあ……あ！？ いや！ あたしはフイロちゃん一筋だよ！？

……フイロちゃんは椅子がわりの丸太に座つたまま、りゅう君にもたれ掛かつて眠つていた。

もたれ掛かるならあたしにすればいいのよ、どうしてわざわざつ
ゅう君の隣に行つて寝るかな……。寝てゐるのになんか顔が嬉しそう
だししつぽパタパタ振つてゐるし。

「……もし姉？ なんか俺を見る目やたら鋭くないか？」

「氣のせいでしょ。それよりフイロちゃん起ひやねないみひくな

にしても、ここつは本当にりゅう君でいいのかな？ 確かに笑つ
た顔とか昔の思い出とかはりゅう君だったけど、少なくともりゅう
君は変態ではなかつた。

それにあたしの覚えてる限りではちょっとカッコつけて、背伸び
したがるタイプ。元氣な弟つて感じのかわいいやつだつた。

こへら五年経つてゐつてもこんな落ち着いた感じになるか
しら？ 一応もう少し警戒しといた方がいいかも……。つてこへらー！
あたしのハイロちゃんの頭撫でるなー といふか代われ！

ZPC……「元から」の世界にいた人は深夜0時に必ず寝ちゃ
うようだ。

それまで普通に話してたのにいきなり「寝たくなつてきた」つて
言つて眠つてしまつた。

りゅう君や恋ちゃんに聞いたけど、一人が見て來た限りでも深夜
0時までにはZPCはいきなり寝たくなつて寝ちゃつてたらしい。
つまりはマキナの試練にはZPCは気付かなかつてゐること。
てこと。

なんとも「都合主義」というかなんといふか。神様には何でもあり

みたい。

「あー、フィロを故郷に帰すのはこことして、これからどうするの
じゃ？」

「ちよっと北に行つたところに町があるらしいから、そこでフィロ
ちゃんが言つてたオオイグつて乗り物を探しましょ」

恋ひやんに携帯に表示したマップを見せる。

「ほつ、地図か。便利なものを持つてあるの？」

「レベルアップのボーナスでもらつたの」

「ふむふむ、……いい機会じゃしそれぞれ持つておるスキルや道具、
それにつきの世界に来てからの経緯を話し合わんか？ これから一緒に
行動するなら知つておいた方がよからう」

確かにやうね。一人がどんなステータスかも気になるし。
りゅう君を見ると棒付きの飴を舐めながら頷く。飴 何個田だあ
いつ。

とつあえず一番ショボそつなあたしから話した。

奴隸のことにフィロちやんとの出合い。後はあたしのへんてこな
スキルとか。

「ゲーム脳……また変なスキルだなも」姉も

りゅう君は苦笑いを浮かべる。実際変なスキルだから言ひ返せない。

「けど変じやないか？ 罷じや普通に俺があげた餌舐めてたひ？」

「なのよね。さつさ試しにりゅう君の餌食べてみたけど消えちゃったし、なんでだひ？」

「ふむ」

恋ちゃんはじっと手に取った餌を見つめている。

「浅倉、口を開けてみよ」

「へ？」

「ほれ、アーンじや、アーン」

そう言いながら餌をあたしに近付けてくる。

ヤバい！？ かわいいよー？ アーンってしてくる恋ちゃん
かわいいよー？

本当は『お姉ちゃん、アーン』とか希望だつたけどこの『浅倉、
アーンじやアーン』ってのも普通にあり！ むしろクーテレっぽく
て正義！ ああ、もう恋ちゃんの方を美味しくいただきたい！

「あ、あ～ん」

パクッと口の中に飴が入った。あれ？ 消えてない。口の中に素朴な甘さが広がる。

恋ちゃんは満足したように笑つた。

「ふむ、どうやらおぬしのスキル。能動的に何かする場合には発動するが受動的に何かされる場合は発動せんらしいの」

あ、なるほど。だから皆でも普通に食べれたんだ。
というか恋ちゃん頭いいなあ。難しい言葉も知ってるし子供とは思えないわね。

口の中で飴を口口口口転がす。

そうなると誰かに食べさせてもらひえまいいわけね。フイロ恋ちゃんに『アーン』って……うふふふふ。

「さて、次は俺が話すか」

りゅう君がくわえていた飴の棒をたき火に向けて吹き捨てながら言った。

携帯を操作してステータスの画面を出すと携帯をあたしに渡してきた。

神崎 竜斗 L.V. · 14

1stジョブ	過守護者
2ndジョブ	武道家
3rdジョブ	なし

スキル

過守護（守護対象を護るのに特化する）

拳闘術LV.5（中級拳術使用可能。格闘の威力に補正）

料理上手LV.MAX

クスッと笑ってしまった。

料理はステータスのお墨付きなんだ。あとけっこうレベル高い。「この過守護つていうのはどんなスキル？」

「あ～、悪い。それは言えないんだ。スキルの目的に反する結果になる危険があるから言えないらしい」

らしい？ スキルの目的に反する？ なんかよくわからないけどまあいいや、そこまで興味無いし。

ステータス画面を消してりゅう君に渡す。お、待受画面初代ガングムだ。好きなのかな？

「さてと、じゃあ話すぞ。

俺の方は旅の商人のテントで行き倒れとして扱われてた。あ～、俺の方はちょっと特殊でな、異世界つてのはすぐにわかつて、もこ姉

や歸匠がこの世界にいるのもすぐ教えてもらつた

「教えてもらつた？ 誰に？」

「悪い。それも口止めされてるんだ。言つたら“面白くない”らしい

「だから私の“らしい”って何よ？」

「すまん。本当に言えないとんだ。口止めしたやつが性格悪くて……」

「きなりりゅう君が、まるで誰かに後頭部を殴られたみたいに顔面から地面に突っ込んだ。

けど見回したけど誰もいない。一人芝居？ なにしてんの？

といふか口止めか、こいつ話さないことが多かったわね。

その後のりゅう君の話でもたびたび“教えてもらつた”ってのが出てきた。

話終わつてもかなり納得できない部分が残つた。要約するとその誰かに教えてもらつて恋ちゃんと合流して、あたしを助けにきたつてことらしいけど。

「次はわしじやな」

恋ちゃんが見るからに不馴れた動きで携帯を操作してあたしに渡してきた。さてさて、恋ちゃんはどんなステータスかしら？

赤川 恋次 L V . 6 3

はい？

赤川 恋次 L V . 6 3

1 s t ジョブ 武帝
2 n d ジョブ 英雄
3 r d ジョブ なし

スキル

武帝（剣術、拳闘術、練氣術のL V . M A X）

英雄（魔王討伐ボーナス。全ステータス一倍 + 名声効果）

一騎当千（対多数でステータス上昇。戦闘による疲労無し）

装備品スキル

神龍の太刀（魔王討伐ボーナス。防御無視攻撃）

天狗の下駄（魔力消費により身軽さを上昇）

なんぞ？！

いやいやいや、63！？ 魔王討伐！？ なにこれ！？ 何が起きたんの！？

「わしの方じやが、まず田を覚ました場所が魔王とやらの城でのつ」

恋ちゃんが話始める。……つて魔王の城？！ 難易度ルナティックモード？！

「少し様子を見てたんじやが魔王というのが人々を奴隸として使っておつての。あまりにもその扱いが酷かつたので決闘を挑んだんじや」

挑む普通！？

「で、倒したのじや」

倒すなああああっ！？

「魔王のやつめ、わしを甘くみてまるで本氣を出しておらるでの。不用意に近付いてきたところを咄嗟で仕留めた。
まったく、慢心は身を滅ぼすと言ひ」

「いやいや魔王様は悪くないよ？！ 本気だったら普通は大人げな
いつて言われるよー？」

「そして魔王を倒したらその配下の連中が『やつを倒せば俺が次の魔王だ！ ヒヤッハー！』とか言いながら襲ってきた。で、そいつらを返り討ちにしてじやの」

わっしぃ「ミ疲れた……。

「気付いたら」のレベルじゃった。ふふ、ボーナスを渡しにきたマキナとやらが口をあんぐりさせておると、じゅはなかなか痛快だったわい」

そりゃあんぐりするでしょ……。初日で魔王討伐で……ん?

なんか一瞬、焚き火から離れた暗闇の中で何か光った気がした。目を凝らしてみる。けど何も見えない。「氣のせい?」「危ないつ!」

いきなりりゅう君に突き飛ばされた。直後にさっきまであたしの頭があつた場所を何かが通つて地面に刺さる。

矢? え? なに?

りゅう君にもたれ掛かっていたフイロちゃんが地面に頭を打つて悲鳴を上げた。恋ちゃんが自分に飛んできた矢を刀で弾いた。

何?! 何が起きてんの?!

「敵だ! も! 姉! フィロ! しつかりしろ!」

「大勢いるよ! ジヤ! 気をつけよ!」

りゅう君と恋ちゃんが声を張り上げる。フイロちゃんが跳ね起きてたき火を背にして身構えた。

敵?! 敵ってなに?! 何が襲ってきてんの?!

たき火から少し離れると完全な暗闇。敵の姿は見えない。音も無くなり、焚き火だけがパチパチと枝が弾ける音を鳴らしている。

怖い。敵はどこ……！？ どうなんの！？

呑み込まれそうな暗闇が怖くて、あたしはりゅう君の背中に隠れていた。我ながら情けない。けど身体が動かない。怖くて、勝手にガタガタ震える。

「まつろわぬ光精よ」

しんと静まり返った中でフィロちゃんの澄んだ声が響く。

「求むは光。照らせ！ 太陽の如く！【トーチ】」

フィロちゃんが呪文を唱えて手を上げると閃光弾みたいな光の玉が空にうち上がった。それが破裂して太陽みたいに辺りを明るく照らす。

「ひつー？」

ずらりと、周りを覆い尽くすぐらいの数がいた。あたしたちを襲つて来てたのは武器を持った半魚人みたいなやつだった。

全身がヌメヌメした鱗に覆われた、人の形をした怪物。飛び出た丸い目がギョロギョロ動いてあたしたちを見る。

「水妖……！ モンスターです！ 気をつけてください！」

「フィロちゃんが叫ぶのと同時にそいつらは向かってきた。

「こっち来る？！」

「あああああっ！？」

「もこ姉下がれ！」

りゅう君があたしの前に立ちそいつの顔面を拳で叩き潰した。青みがかた血が飛び散る。

「蹂躪せよ炎！【フレイム】」

フィロちゃんの手から大きな炎が出て半魚人を燃やす。

恋ちゃんが半魚人の塊の中に飛び込んで縦横無尽に太刀を振り、次々と敵の首を切り裂いていく。

辺りに半魚人の悲鳴が響いて、血が、肉が、飛び散る。

「う……あ……」

りゅう君が蹴りで半魚人の頭を割つた。

恋ちゃんが何匹かを連続で胴切りにして真つ一つにする。

フィロちゃんが呪文を唱えて何体かまとめて吹き飛ばした。

周りに飛び散る血、内臓、身体のパーツ、生臭い臭い。

「あ……あ……」「や……」

「もこさん！ 水妖は炎に弱いです！ もこさんもー！」

「フィロちゃんが炎でできた剣を振り回しながら叫んだ。

そ、そ、うだ。みんな戦つてゐるんだ。あたしも……あたしもや、やらないと

「フ……ファ…う　あ……」

声が震えて発音できない。一匹の半魚人があたしに気付いて向かってきた。

「ひ……！　ファ…ア…【ファイア】」

手から炎が飛び出す。炎は半魚人をそれであさつての方向に飛んでいった。

「う……く……！　【ファイア】【ファイア】【ファイア】」

無茶苦茶に撃ちまくつた。けど炎は全部それで当たらない。なんで！？　なんで当たらないのよ！

半魚人が手に持つた剣を振り上げた。

「ひいつ？！」

「もこ姉！」

りゅう君があたしと半魚人の間に飛び込んできた。
肉が切られる音。りゅう君の肩から飛び散る赤色。回し蹴りで半魚人を吹き飛ばす。

「大丈夫か！？　怪我は無いか！？」

りゅう君はあたしの方を見て、怪我が無いのを確認するとホッと息をついた。

肩からボタボタ血を流しながら.....

五日目（2）（前書き）

間違えて一度消しちゃって、書き直したら妙に文字数が少なくなつた件

早くほのぼのパートに入りたいのにいついづに入れない。orz

+

「はあ……」

ため息が漏れた。

半魚人がいなくなつた後、りゅう君の手当をして朝まで睡眠を取つたあたしたちは近くの町へ向けて川沿いに歩いていた。朝の空気は冷たくて、ため息も白い息になつて消えていく。

先頭を恋ちゃんと並んで歩くりゅう君を見る。

肩には布が分厚く巻いてあって赤く血が滲んでいる。平気そうにしてたけど傷はすぐ痛そうだった。

気持ちが重くなる。本当は回復魔法で治したかったけど、魔力が足きてて使えなかつた。あたしがバカみたいにファイア連発したせいだ。

ホント……なにやつて人のよあたし。役立たずで、護られてばかりで、怪我をせじ、治すこともできなくて。

溢ってきた涙を袖で拭つて無理やり止める。泣くな。これ以上迷惑かけたくない。

「もしも、まだ魔力は回復しませんか？」

「フイロちゃんがそう聞いてきた。あたしは首を振る。

魔力の量はなんとなく自分でわかる。なんか魔力が減つてるとお腹の辺りがキューってなるんだ。

「ううですか……ちょっと遅いですね。いきなり詠唱破棄までできたらもこさんなら、もう回復したかと思つたんですけど」

「フイロちゃんはもう大丈夫なの？」

「はい、もう全回復します。私は元々魔力の量が多い方ですので

フイロちゃんの口振りからするとあたし魔力少ないのでかなあ……詠唱破棄とかできたのもゲーム脳のおかげだし。今も全然回復した気がしない。

「ちなみにさ。魔力を増やすにはどうすればいいの？ やっぱり修行？」

「そんなことできませんよ？」

え？

「魔力の量はほぼ生まれつき決まつてますから。いくら頑張つても魔力の量自体は変わりません。……ああ、一応、魔族の心臓を食べて魔族になつたり、悪魔の奴隸になる契約で魔力を増やせるという話を聞いたことがありますけど……そんなこと考えちゃ駄目ですかね？」

「う、うん」

魔力を増やす方法が無い。……もしあたしの魔力が少ないんだつたらあたしは弱いまま？

さりに気分が沈んできた。

りゅう君は強くて料理上手で。

恋ちゃんは反則的に強くて頭が良くて冷静で。

フィロちゃんも意外に強くて、この世界のこととかいろいろ教えてくれて。

このメンバーの中であたし……足手まといにしかならないんじゃ……

「浅食、少し水をくれぬか？ のどが乾いた」

「あ、うん」

ゲーム脳の効果を発動。見えないアイテムボックス（そう呼ぶことにした）から水筒を取り出して恋ちゃんに渡す。フィロちゃんがかなり驚いてたけど説明する気力が無くて適当に「まかした。恋ちゃんが飲んだ水筒を受け取ってまたします。

あたしの役目、アイテムボックス……かなあ。

「お、町が見えたぞ」

りゅう君がそう言って遠くを指差した。ああ、本当だ。なんか煙突っぽいのが見える。

町ならりゅう君の傷の薬とか買えるかな？ それか魔力を回復で

きる薬。

……それに替える服とか下着なんかも欲しい。……この世界つて生理用品とかあるのかなあ……？ 無いとかなり困るんだけど。ああ、町なのにテンション上がらない。

町が近付いてくる。周りが3mぐらいの分厚い石の壁で囲まれて、入り口らしい大きな鉄の門の前には鎧を着た門番が四人いた。けつこう警備が厳重。夜に襲ってきたモンスターみたいのがいるし当然か。

あたしたちが門の前まで来ると目の前で門番一人が長い槍を交差させてあたしたちの道を塞いだ。

「止まれ」

無愛想な言い方で兵士の一人が言った。あたしたちを見て、そのあとフイロちゃんを見て、眉をひそめる。

「狼人族を連れている……何者だ貴様ら」

「何者だつて……何者つて言えばいいんだろ。どうかなんぞフイロちゃん？」

「ま、待てお前たち！」

壁にもたれ掛かっていた門番が慌てて一人を止めた。どうもこの中ではランクが高いらしい、鎧に勲章みたいなのが付いてる。

そいつは恋ちゃんの前まで来て腰を90度に曲げてお辞儀した。

「失礼いたしました英雄 恋次様！ なにとぞ……なにとぞお許しください！」

「わしを知つておるのか？」

恋ちゃんが門番を不思議そつに見る。

「は！ 当然であります！ 魔王討伐の英雄“ 恋次” この名は大陸中に知れ渡つておりますよ！」

これが恋ちゃんのスキル “英雄” の名声効果つてやつかしら？ すごいわね。

「で、そつちの狼人族の女は……」

「む、この子は……」

恋ちゃんは一瞬フイロちゃんを見た。何かアイコンタクトみたいのが有った気がした。

「……近くの奴隸市で貰つたわしの奴隸じや」「恋ちゃん？！」

思わず叫んでしまつた。だけどフイロちゃんがあたしの隣に来て何か訴えるようにあたしの目を見てくる。

話を合わせねつて」と？

「頭も良くて魔法も使える。なかなか優秀なやつでの。丁寧に扱つてもうえるかの？」

「……わかりました。英雄様が言ひのあれば。わたくし、必ずお中へ。

旅で疲れたでしょ。私の白腹で最高の宿を用意させていただきま
す。もちろんお連れの方々も「

兵士の人が合図を出すと重い門がゆっくりと開いていく。 恋ちゃんが歩き出すとフイロちゃんもそれに付き従つように後を追つてい
つた。

「もこ姉はまだ知らないのか?」

「え?」

「この世界では純粋な人間以外の“人”は差別や迫害の対象らしい。
場合によつちや町に入れないとこともある」

「そんな……」

「まあ師匠がいる限りは手出しできなこわ、あまり心配するなよ」

用意された宿屋の部屋。最高って言つだけあつてかなりいい部屋だ。広くて、清潔で、元の世界でも十分通用するレベル。

あたしは窓からぼんやりと町を見下ろしていた。

中世ファンタジーっぽいれんが道。石造りの建物。綺麗な水が湧き出る噴水。

ホントはあちこち観光したかったんだけどフイロちゃんに『買いたぶんフイロちゃんの方には懸念は無い。だってフイロちゃんにはこの世界が普通なんだから。……それとも、もしかしてフイロちゃんに恨まれてるのかな……』りゅう君怪我させたから。

ダメだ。今、かなり鬱だ。なんでフイロちゃん嘘つてるのよ。そんなこと、フイロちゃんがするわけないのに。
あたし最低だ。

なんで最初こっちに来た時はみんなはしゃげたんだ？……。
帰りたい。元の世界ではあたしどうなったことになつてんのかな。
学校の友達はどうしてるだろ？……。
ラーメンとかパフェとか食べたいな……今のところまともに『一飯

味わえてないし……。

ホームシックまで出でてきた。ダメだなあたし。役に立てない上に暗くなつてどうすんの。せめて明るくしなきゃダメでしょ。

と、その時部屋の扉が「ン」「ン」とノックされた。

「もし」姉へ、開けてくれ~」

「あ……、う、うん」

慌てて皿に浮かんできただ涙を拭いた。化粧台の鏡を見る。ちよつと皿の周りが赤いけど大丈夫。せめてみんなの前では笑つてよ!ハ。笑顔を作つて扉を開けた。

そこにはふたを被せた丸いお皿を持つたりゅう君が立つていた。「お、サンキュー……つてどうしたも!姉? もしかして泣いてたのか?」

「ふえ?」

一皿で氣付かれた。そんな酷い顔してるのかなあたし。

「……なんでもないよ。それより何の用?」

「お……ああ、これ持つてきたんだ」

りゅう君はそう言つと持つてたお皿のふたを取つた。

カレーライス？

それは間違い無くカレーライスだった。

白いご飯にかかつた茶色いルー。食欲をそそるいい匂い。

「あ～、その、あれだ。なんかしょげてたから気晴らしになるかなつと。好きだつたらたしか」

「どひして……」

意識せず、自然とそんな言葉が漏れていた。

「どひしてそんなことしてくれるの……？　あたし、足手まといだし……、りゅう君、腕けがしてるのに……」

「それでしょげてたのか？　なら気にするなよ、あんなの」

「けど……」

「これは命令だ。俺のどひ」と聞く約束だろ？」

りゅう君はそう言つてあたしのおでこを小突いた。
スプーンを手に取り、カレーライスをすくつてあたしに向ける。

「ほり、ちょっと味見てくれよ。それなりのできばえだと思つから」

「い、いいよ。自分で食べるから」

「自分で食べたら消えるんだろ？」

「け、けど……」

「じゃあこれも命令だ」

卑怯だ。

仕方なく口を開けて食べさせられ。

口に入れた瞬間絶妙な辛さと口クが口の中に広がる。　おいしい。

おいしいなあ、ホントに。家庭的なカレーライス。なんかすうぐ懐かしい味。

こんなこともできるんだ。

「う……ふ、あ……」

涙がボロボロ溢れてきた。

「お?　ちゅ?!.　もこ姉?!.」

惨めだ。あたしなんにもできなくて、心配されて。わざわざいじ飯食べさせてもらつて。ここつは強くて優しくて、フイロちゃんにも好かれて……

「なんで……なんであたしなんかに優しくすんの?!.　それでいい人ぶつてんの!?.　優しくされる方が辛いのよあたしは!..」

気がついたらそんな言葉を吐いていた。

「い、いや俺はもう姉が心配で」

「もうやつてあたしのこと哀れんでるの！？ それともあたしの身体でも欲しいの！？ だったらもう言こなさいよ！」

「お、おこもー姉？」

「あたしは弱くて！ 何もできなくて迷惑ばかりで！ それに……」

違う。ホントに言いたいのはこんなことじゃない。ホントは……“ありがとう”って言いたいのに……

なのに……悔しくて、悔しくて……涙が止まらない。

『あなた、うざい』

突然だつた。

かわいらしい“あの声”がしたかと思つといつの間にかあたしとりゅう君の間に白いマキナが立つっていた。

息を飲む。マキナは不機嫌そうにあたしを睨んだ 瞬間。マキナの髪が生き物みたいに動いてあたしに襲いかかってきた。

「ひつー！」

瞬く間にマキナの髪はあたしの両手両足を絡め取つた。動けない！？ 碓にされたように大の字にされ、宙に浮かれる。髪の毛の先端は刃物みたいに鋭い。あたしの肌に押し付けられて、少し動いただけで肌に刺さり、皮を切つた。

『あなた、面白くないのよ

「え……？」

面白く……ない？ 何それ……どういう意味……？ マキナは髪であたしの身体を持ち上げながら、あたしの胸元、ちょうど心臓のある辺りに指を当てて円を描く。背筋がゾクゾクした。

『りゅう君はこのゲームでの私の気に入りキャラなのよ。それを困らせるあなたぞ』。

あなたみたいなの私 大嫌い。弱い？ 何もできない？ 何もしてないだけじゃない。うじうじぐじぐじ、見ててイライラする。だからさつきと死んで、消えて、リタイアして』

「マキナ！」

りゅう君がマキナの頭に拳を振り下ろした。けどそれはマキナに触れる直前、見えない壁のようなものに阻まれて止まる。

『りゅう君への重力を五倍に変更』

マキナは振り向きもせず指を鳴らした。

次の瞬間、りゅう君の身体がまるでとんでもなく重い物を乗せられたかのように床に突つ伏した。

「ぐう……ぐそ……」

『やつぱり十倍に変更』

マキナが手を下げるような動作をするといつも悲鳴を上げた。

地面に貼り付いたようになり、まったく動かなくなる。バキバキと木の床にヒビが入った。

いいこと思い付いた

マキナはにたあ、と口を歪ませて笑うと、手招きをするような動作をする。するといきなり天井が割れた。割れ目の先にあるのは何も無い真っ暗な空間。そこからいくつもの赤い目がじつとあたしを見ていた。

『「Jの向こうの魔界なんだけどさー。魔界って面白い怪物がいっぱいいるんだよ? 女の子をめちゃくちゃにしちゃう触手とか

まるで悪戯をする子供のようだ。マキナは笑みを浮かべる。

寒氣かした 天井の壊れ目からシニ川 シニ川と水 ほい音
がして、ゆっくりと白い三本の触手が垂れてくる。

卷之二

触手の一本が頬に触れる。ぬるぬるして、熱く脈打つてゐる。

触手はあるていたふるよにぬぐりと 精液を引きながら首筋をたどっていき、襟から服の中に入ってきた。

「ひい、あさ

胴体につねつねと触手が巻き付いてくる。気持ち悪い。
寒気がする……。やだ……やだ……やだ……。

そのまま触手はあたしの下腹部を通り下りていぐ。内股を擦られて思わず身体を反らせた。

『ふふ、君のあまりゅう君の前でめちやくちやにしてあげよつか？ 幼なじみの前でつてシチュエーション萌えない？ 良かつたね？ 凌辱ゲーに興味有つたんでしょ？』

「せ……、せめて……せめてえ……お願い……お願いだから……」

必死で声を絞り出した。マギナは「ヤー」とあたしを見ている。

『やーだよー。私はもつと大嫌いなもこちゃんが泣いて、叫んで、壊れしていくのが見たいんだもん。というわけで触手ちゃん達、犯つちゃつて

卷之三

「アーチー、アーチー……」アーチーの二つ名。「アーチー、アーチー……」

『なんぢやつて』

瞬間、触手が全部消えた。……え？

見る。

『残念ながらあたしが直接プレイヤーに手を下すってのはこのゲームのルールに違反することになるんだよね。私たちはルールは守るの。……だから私はこうするんだ』

セーラー服を脱ぎ、パンツとマキナカを脱ぎます。

瞬間、部屋の中が暗くなつた。……夜？！窓から差し込むのは柔らかい月の光だ。さっきまであつた街の喧騒もなくなつてゐる。

机に置いてあつた携帯電話が鳴り始めた。

それが勝手に通話モードに切り替わる。

『もー、いきなり時間変更なんて何するのよ白マキナー！ まだ準備中だつたのにー！ ……まあ、いいや、それじゃ始めよつか』

「つ？！」 「マキナ！？」

携帯からもあの声がした。

白いマキナはにたりと笑う。

『『第一の試練、開始します』』

一つの声が重なった。

五四三（3）（後書き）

この話ノクターんに持つていつたひ醜陋あるでしょつか（ボソッ
最近面白い作品に飢えてます）。このサイトの小説で面白い作品と
かあつたらおすすめして貰えると嬉しいです（二次創作もOK）

（――）三

六四三（一）

周りの風景が変わつていく。

いつの間にかあたしを拘束していた髪は解けていて、りゅう君も自由になつてあたしの隣まで走つてきた。

「もし」姉！ 無事か！？」 「大丈夫よー。」

またこいつは……あたしよりヤバい田に合つてたのはあんたでしょ。気遣われるのがやつぱり悔しい。

周りを見回す。最初の試練の時と違つて、空間がぐにゃぐにゃとモザイクをかけられたようになりながら変わつていく。やがてそれが収ま 「うつ？…」「見るな！」

りゅう君があたしを抱き寄せて片手で田を塞ぐ。

けど一瞬見ただけでそれはあたしの田に焼き付いていた 死体

が山積みにされていた。

あたしはりゅう君の手をどかした。りゅう君は一度それを拒否したけど無理やり引き剥がす。

見ないでいる方が……よっぽど怖い時もある。

あたしたちがいたのはどこかの町の、大きな広場のような場所だつた。“夕日”が石畳に覆われた道路や建物を真っ赤に染めている。まるで戦争でもあつたみたい。見える範囲の建物はほとんど崩れて瓦礫の山になつていて、道路にもあちこち大きな穴が空き、剣や

盾、鎧の破片なんかが散らばっている。

そして、広場の角に積み重ねられた死体の山がいくつも。子供も女人も関係なしに、身体中生々しい傷が付いてて、池を作るぐらいの血が流れ出していた。

生暖かい風と一緒に漂つてくる死臭。酸っぱいものが胃から口へ昇つてくる。

ただでさえさつきので気持ちが折れかけてるのに、追い討ちをかけるようなその光景に意識が遠くなつてくる。『気付いたらりゅう君の方に一步寄つて腕を固く握つていた。恥ずかしい、情けない。』

これ以上迷惑かけるな。心配させるな。必死に自分に言い聞かせてアイテムボックスからナイフを取り出して握りしめた。

魔力は……まだ【ヒール】は無理だけど物を浮かせる【サイキクス】ぐらいは何回か使える程度に回復してる……と思つ。

できるだけ死体を見ないようにしながら周りに注意を払つた。その時、目の前の空間が二ヶ所、ぐにやりと歪んだ。そこからさつきの白いマキナと、炎みたいに赤く光る髪に、赤いドレスを着たマキナが出てきた。

赤いマキナは優雅にスカートの端をつまんでお辞儀する。白いマキナは楽しそうに爛々と光る目であたしを見ていた。

『『『よつこや、第一の試練の場へ』』』

二人の声が重なつた。

『「めんなさいね。白マキナがいきなり試練を前倒しにしちゃつた

わ『からまだ片付けが終わっていないの。とりあえず臭う物は先に燃やす

赤いマキナがそう言つて指を鳴らすと広場にあつた死体の山が一斉に火柱に包まれた。

炎は空に届くようなものすこい勢いで燃え上がり、死体はあと
いう間に消し炭に変わる。

……大丈夫。あたしはまだ冷静だ。前みたいなパニックになつてない。なるもんか。

つゆう君の学ランの袖をぎゅっと握った。

悔しいけど、誰かが一緒にいてくれるってだけです。」く安心でき

そんなあたしを見て白いマキナはフンと鼻を鳴らすとい一「シ」と一度笑みを浮かべてどこかに消えてしまった。

『ああもう！ 掃除ぐらし手伝いなさいよ白マキナーツ！ ……あ
う！ もういいや。それじゃ第一の試練のルール説明するね。と
はいってもとっても簡単で、一時間後まで生きてたらクリア。わか
りやすいでしょ？』

うん、とってもわかりやすい。この試験が相当危険だつてことも。

『ま、ルールはそれだけだから好きなようにやって生き残つてよ。生き残れば何でもあり。ああ、それと、あなたたち二人以外にもあと三人、他のＰＣがこの町にいるから』

「他のPC?」

『そ、あなたたちと同じでこの世界に召喚された人たち。もちろん携帯にマップ機能付いてるでしょう？ あれで探せるからね。じや、頑張って』

そう言つと赤いマキナは消えてしまった。

「……どうする？」

あたしはりゅう瓶を見上げる。

「この広場に居座るのが無難だろ？ 視界が開けてるし、何か来ても逃げ道がある」

「け、けどあたしたち以外にも二人いるんだよね？ その人達探し方がよくない？」

「ならそうするか

「……あつさり意見変えるのね」

「どっちにしろ初手の判断材料が少ないんだ。俺が言ったのもあくまで“無難”ってだけ。

もしかしたら他のプレイヤーと協力しないとクリアできないかもしがないし、俺達が居座るのを見越してこの広場に仕掛けをしてあるつてのも無いとは言いきれない。

重要なのは何か起きた時にどう対処するかだ

りゅう君はさうとそう言つてのけた。なんかすこべ頼もしい。

「それよりもこ姉、マップに他のプレイヤーは？」

そう言われてあわてて携帯を取り出し、マップを開いた。ん……と、マップの表示範囲にはいないみたい。

りゅう君も横から覗き込んでそれを確認すると静かに頷く。

「じゃあどうあえず通りを真っ直ぐ行こう。俺から三歩以上離れないようについてきてくれ」

言葉少なく言つてりゅう君が歩き出した。それにぴたりついていく。

道の瓦礫や穴に気を付けながら周りを見回した。

人の気配がしない。動く物も無い。風に乗つてくる血の臭いが気持ち悪い。

夕日に照らされる誰もいない町をただ進んでいく。
ところどころで食べ物が少し入った鍋や、野球のボールみたいなのが転がっていた。

ほんの少し前まではここにも人が普通に生活してたんだ。
そう思うとやるせなくなつてくる。

もしかしたらマキナは、試練に使つただけにこの町をこんなにしたんだろうか？ そうだとしたら……

「もし姉。近くに人ないか？」

「え？！ あ、……いや、いないみたい」

「……余計なことは考えない方がいい。今は俺たちが生きるか死ぬかなんだからな」

……なんでこいつはこんなに冷静なんだろう。なんでこんな状況であたしに気使えるんだ？。

まるで生き残る」としか頭に無いような……いや、違う。その……まるであたしを護ることしか考えてないような……。

だけじ、もうだとしてどうしていいのかあります？ わけありますような理由が無い。

確かにあたしたちは幼なじみで、すこしく仲が良かつた。
けど、小学校高学年になつた頃からはしようちゅう喧嘩してたし。
おまけに5年近く会つてなかつた仲だよ？ いくらなんでも……。

「わやつ？」

りゅう吾の背中にぶつかってしまった。りゅう吾はじっと立ち直りして立てる。

とこりかこんな時に何を考えてんのよあたしは！？
こんなんだからりゅう吾たちに迷惑かけてんでしょ！？

ぶつけた鼻を抑えながら、りゅう吾が見ていいるものを見た。

人だ。

身体のあちこちに付いた生々しい傷から、いっぱい血を流した男の人人がノロノロした動きであたしたちの前を横切っていくところだった。

生きてる人がいた？！ 酷い怪我してる！ 早く手当でしないと

.....「待て！」

その男の人に近寄り、としたら、じゅう君に腕を掴まれた。

「どうして止めるの！？ もう少しで魔力も回復するし【ヒール】で治してあげれるはずなのに！」

「う……あ……ひとお……？」

男の人ぐりんと首をひねって、こちらを向く　顔が半分無かつた。

「ひつ……？！」

その人の顔は何かに抉られたみたいに顔の右半分、口から上が無くなっていた。傷口からぼたぼたと血肉が落ちる。

「ひと……おんな……にくう……」

そいつはあたしを見てにたりと笑った。

背筋がゾクリとする。つゅう君に腕を引っ張られ後ろに回された。

「にくう……にく……おんな……にく、おんな、にく、にくう……」

男はへらへら笑いながらあたしたちに近づいてくる。

「…………にくかあ……？」

建物の瓦礫の中から掠れた声が聞こえた。

「おんな　おんなあ……」

「はり……くつたあ、くいたい……くいたい……」

「くわ……、くふひひやひや」

周りにあつた瓦礫の中から次々に別の男が立ち上がりてくる。まるでどこかのゾンビ映画のような光景。瓦礫の中から現れた男たちはみんなぼろぼろで、全員身体に致命傷があつた。血を滴らせながら、あたしたちの方を見る。

「くい、たい……くいたい……」

「おんなだあ……おかす……おか……ひはひやはは」

気付けばあたしたちは数十人の男達に囲まれていた。
「うわ」とみたいな言葉を言いながら、ノロノロとあたしたちへの包囲網を狭めていく。

「……もこ姉。俺の学ランの裾掴んで絶対離すな」

「へ、うん」

あたしは学ランを固く握った。じゅう君が足元に転がっていた剣を蹴り上げて掴む。

「くわ……おかす……くわ……くわ……」

男達が一斉に走り出し、襲いかかってきた。

「ひつー?」「絶対に離すなよも!」姉ーーー！」

りゅう君の声が響く。同時に正面から来た一一体のゾンビの首を剣で跳ねた。

飛び散る血肉。その一欠片があたしの頬に当たってべちゃりと広がる。

身体中、鳥肌が立つた。

怖……い……。

「くう……くわ、せろお」

「おんな　おんなあ……」

「くひ、ひやひひ……おんなあ……おかす……」

「に、くう……」

まるで欲しい物を見つけたようにへらへらと笑いながら、次々に襲いかかってくるゾンビ。足がガタガタ震えて膝から崩れ落ちそうになる。気付いたらりゅう君の学ランにしがみついたまま、またぼろぼろ泣いていた。

その間にりゅう君は次々に敵を倒していた。

相手の手が届く前に縦横無尽に剣を振るつて腕を断ち切り頭を潰す。

身体をひねつてあたしに向かつて來ていたやつの胸を貫く。

その動きに必死でついていく。カタカタと歯が鳴った。

りゅう君が剣を振る度に血肉が飛び散つてあたしにかかる。気持ち、悪い。

もつ、やだ。お願い、お願い、だから。終わつて、早く、早く！

固く皿を開じて、すがるみついたり君の学ランにしがみついた。

何分か、何十分かもわからない時間が過ぎた。

りゅう君はまだ戦ってる。剣を振る風切り音がする度に肉を切る音が聞こえる。それに混じって呼吸が弾む音も。

りゅう君の動きはあたしから見ても遅くなっていた。疲れてきてる……？　ひぐつ？！

いきなり髪の毛を引っ張られた。

「つか、まえたあ……」

ゾンビがあたしの髪を掴んでいた。さらに向かってゾンビがあたしの髪を掴み、引っ張る。

「いやあああ！？　やめ、やめて！　離して！　りゅう君！　りゅう君！　助けて！　！」

「もう姉！？」

りゅう君が一いちらを振り向く。ナビその瞬間にりゅう君の肩にゾンビが噛み付いた。学ラン」と肩の肉を食いつがられる。そのまま何体かのゾンビに抱き付かれた。

「おんなあ……！」

思い切り髪を引っ張られて学ランを離してしまった。瞬く間にゾンビの集団の真ん中に引き摺り込まれる。怖くて、視界が涙で歪んだ。

「いやつー、いやあつー、つゅう君ー、つゅう君ー！」

ゾンビに囲まれて、つゅう君の姿が見えない。あたしは石畳の地面に引き倒された。

ゾンビが我先にとあたしに覆い被さつてくる。

「やー、やだやだやだあつー！ やめて、やめてよう……」

引きはがそうとしたけど両腕を他のゾンビに押され込まれた。あたしに覆い被さつたゾンビはあたしを見下ろしてにへらと笑う。頭が欠けていて、あたしの顔に血が滴つた。涙と混ざつたそれをベロリと舐められる。鳥肌が立つた。

荒々しい息が顔に当たる。

悲鳴も上げれなかつた。怖くて、怖すぎて、舌が回らない。声が出ない。

だつて

だつてこいつら

あたしを犯すつて……

「や……やあ……た、けで……たす、けで、誰か……おね、がい……」

「……」

服の胸元が引き千切られた。露になつた白い肌、柔らかな膨らみ。ゾンビはそれにしゃぶりついてくる。心の中で致命的な何かが崩れる音がした気がした。

や……やだ……たすけて……たすけて……いやあ……

頭がぐらぐらして、痛くて、視界が暗転していく。

ジンビの肩越しに見えた夕焼けの空高くで、白いマキナがあたしを見下ろしてくるような気がした。

side 神崎 竜斗

次々に湧いてくるゾンビをかき分けて進む。身体中に噛み付かれ、ブチブチと服ごと肉を食いかけられた。

「ぐ……ぐ……」

歯を食い縛つて耐え、両腕を振り回して無理やり振り払う。足にしがみついてきたやつの頭を拳で叩き潰し蹴散らした。

「もー姉ー返事しろーもー姉ー！」

返事は返つてこない。ゾンビに視界を埋められてもこ姉の姿が見えない。けど死臭に混じつてもこ姉の匂いと声にもならない悲鳴は聞こえた。その方向に向かつてひたすら進む。

喉笛に噛み付こうとしてきたやつの顔面を掴んでそのまま振り回し、何体かまとめて吹き飛ばして道を作る。

掴んだやつが奇声を上げて暴れ始めたのを、顔面を握り潰して黙らせる。絶叫、ぐちゅぐちゅと生暖かい肉の感触。……気持ち悪い。

……けど、ほんの少し、ほんの少しだけ“楽しい”と感じている自分がいて、思わず身震いした。

嘘だろ？ こんなに簡単に？ マキナには俺の“衝動”は誰かに殺意を抱いたりすると制御が効かなくなると聞いていた。けど……まさかこんな……。

頭は冷静さを保とうとしてるのに、身体が勝手に熱くなる。俺の意識を無視して、身体が戦いを求めている。

それでも、戦うのをやめる訳にはいかない。護りたい、今度こそ、もこ姉のことを護つて側にいたい。
道に転がっていた槍を拾い上げて周りのやつの足をまとめて払う。視界が開けた。

進行方向にいたやつの胸を突き刺し、その身体を乗り越える。

「もこ姉！ もこ姉どこだ！？」

見付けた。何体ものゾンビがもこ姉を地面に押さえ付けていた。

もこ姉は泣いていて……一体がもこ姉に馬乗りになつてへらへら笑い声を上げながら服を引きちぎついて……。

頭に一気に血が昇るのを感じた。

ぶつ殺す……！ プツン、と何かが切れてしまった。

身体の血の回転が速くなるような感覚。酔ったような軽い多幸感

で頭が痺れる。

気が付けば俺は笑みを浮かべていた。

もこ姉の胸にしゃぶりついていたやつの顔面を足のレガースで思い切り蹴りあげた。トマトのように弾け、吹き飛んでいく。

壊した瞬間の感覚、降り注ぐ血の匂いが心地いい。沸き出してくる悦びが收まらない。

「はは、ははははは……」

口から笑い声が出ていた。もっと、もっと。もっとだ！ 全員叩き潰す！

感情に任せて次のやつに向かつ。腕を軽く振つただけでみんな壊れていく。顔面を叩き潰し、胸をえぐり、四肢を引きちぎる。辺りに飛び散る血と臓腑。

……気持ちいい。身体の血が沸騰するような感覚。熱い、だけどとても気分がいい。

心地いい。ぼうとした頭のまま拳を振るつた。ベキリ、グシャリと敵を潰す小気味いい音が響く。気付けばもこ姉にまとわりついていたやつはみんな潰れていた。……けど、足りない。

もつト……もッヒ壊しタイ。もつと血一まみレタイ……モッヒ……モッヒ……

女に視線ヲ落としタ。怯エタよつ表情デ俺を見上げテる。ああ、マダ壊せるやつガいた……。

にいつと笑つて拳を振り上げた。

「や、やめて！　りゅう君！」

「？！」

拳をそらした。もこ姉の顔を掠めた拳が道を舗装するれんがを粉々に叩き翻る。サアッと、熱くなつていた身体が冷めていった。

今、何をしようとした？ 背筋が凍る。俺を見上げるもこ姉の怯えた目。ち、ちが……俺は……。なんとか言ひ切ってしまった。

だがその時、ゾンビに足を掴まれた。

「しまつ　？」

思に切り引つ張られ前のめりに倒れた、口の中に血の味が広がる。そのままゾンビの群れの中まで引きずられた。

振り払つても振り払つても次から次に湧いてくる。立ち上がる隙が無い。自分の不用意さに歯ぎしりした。

「つ、りゅう君！」

もこ姉の悲鳴が聞こえた。もこ姉も他のゾンビに襲われてまた見えなくなる。

くそがあ……！ もこ姉が……。やけんなよ！ 俺が護らないといけないのに……護れない？ また何もできないのか？ くそ、くそ！ くそ！ くそおつ！

まとわりついてくるゾンビ達を引きずりながら進もうとした。ほんの数歩分、それが果てしなく遠い。
くそ……。

「その状況で他人のことを見ますか、やはりなかなか面白い人です
ねえ……。神埼 竜斗君」

っ？！　声がした。瞬間に俺にまとわりついていたゾンビ達の頭に次々とナイフが突き刺さった。

なんだ？！　何が起きた？！

俺を拘束していた手から力が抜ける。まとめて払いのけ、そばに立っていた男を見た。

ひょろりとした、背の高い細身の外人。短い金髪に赤いレンズの色眼鏡。

古びたスーツを着こなす紳士然とした男は俺を見るとにこりと笑いかけてきた。……誰だ？　今　俺の名前を呼んだ？　いや、今はそれじゃない！

跳ね起きてもこ姉の方に向かう。

もこ姉にまとわいつこてこるやつの首根っこを掴んで無理やり引き剥がした。

「もー姉！ 大丈夫か！？」 「つ！！」

俺と目が合った瞬間、もじ姉は息を飲んだ。俺の差し出した手を取ろうとしない。恐がられた？ ズキンと胸が痛む。

……違う。今はそんなこと気にするな。気持ちを切り換える。もじ姉の前に立ち、護ることに重点を置いた戦い方に戻した。

さっきの男の方を見る。両手にナイフを握り、長い腕をまるで鞭のようにしならせながら向かってくるゾンビを切り裂いていく。とんでもなく強い。まるで赤ん坊の手を捻るように簡単に敵を切り刻んでいく。さらに離れた場所にいる相手にはナイフを投げつけ、正確に眉間に射抜いていた。

どういう訳か、いくら投げてもナイフは無くならないらしく、その手には常にナイフが握られていた。

数分後にはもう動くゾンビはいなくなっていた。もじ姉の脇に膝まずく。

「もじ姉……、その、大丈夫か？」

「…………うん」

たぶんほとんど無意識に、もじ姉は腰を浮かして少し俺と距離を取つた。……正直そうとうキツい。

けど俺からは何も言えない。もしあの時、もじ姉が声を上げなかつたら俺はもじ姉を殺さなかつた自信がない。

「ひとまず落ち着きそつですね」

さつきの外人の男が言った。パンパンと手を叩いて手招きすると、物陰から白衣を羽織った女人とアロハシャツを着たおっさんがこちらに走ってきた。思わず体を強張らせる。

「その子大丈夫？ かなりショックを受けてるみたいだけど」

「おいおい、勘弁してえな……」

白衣の女人とアロハシャツのおっさんだ。白衣の女人はもこの姉の脇に座ると心配そうにもこの姉を見つめる。……危険は無さそうか。

「これは……そうね……」

白衣の女人はそう言つと手を前に出す。その手が淡い光に包まれたかと思つと液体の入つた茶色い小瓶が現れた。

「これを飲みなさい。気持ちが落ち着くわよ」

もこの姉は手渡されたその小瓶を受け取るとその人の顔と小瓶を順に見る。今の……スキルか？

「あの……どうも……あなたは？」

「もこの姉は小さな声で聞いた。

「おひ、ワイは大阪出身の馬場つかめつ」「あんたじゃない

でしゃばってきたアロハなおっさん 馬場の方は俺がばっさり切り捨てる。白衣の女の人は柔らかくにこりと笑った。

「永森よ。あなたと同じこの世界に連れて来られたプレイヤーで元は町医者をやっていたわ。そこのゲイツさんに助けてもらつたの」

そう言つて永森さん……いや、永森先生はさつきの外人の男を指差した。……観察するよつな田でじつちを見ている。なんか、あの田は苦手だ。

「ゲイツ……さん、ですか？」

「ええ、よひじくお願ひしますよ神崎 竜斗君」

「どうして俺の名前を？」

俺がやつとゲイツさんはにやりと笑つた。

「それはもちろん、貴方は有名人ですからね。このゲームに参加してる一部、情報に通じている者ならみな知っていますよ。貴方ご自身もよく」存知でしょ？「自身の特異性について」

なんだこの人は まあいいか、同じプレイヤー同士なら危険は無いだろ。今はも」姉だ。

……馬場がも」姉の破れた胸元をガン見していた。よくわからな

いがなんかこいつはいろんな意味で危険な気がする。気をつけよう。永森先生はそんな馬場を害虫でも見るような目で睨み、もと姉に自分が着ていた白衣をかけてくれた。この人はいい人そうだ。医者だつて言つてたし頼りになりそうだな。

そして最初の外人、ゲイツさん……か。
さつきからずっと黙つて俺達のことを見ている。得体が知れない
しなんか……嫌な感じだ。

けど、敵意は感じない。こちらの世界に来てから殺意や敵意には
敏感になつたようで、これにはかなり自信がある。少し気にしそぎ
か？

「さて、皆さん」

ゲイツさんが近付いて来た。さつきまで手に持つっていたナイフは
いつの間にかどこかに消えている。

「ここで話すのも危険でしょう。どこか安全を確保できるような場
所でも探すとしませんか？」

まあ妥当な意見だ。もと姉を休ませたいっていうのもある。

永森先生と馬場もそれに同意した。……とりあえず考えるのは
後に回すか……。

立ち上がりつてもこ姉を引っ張り上げてやるつとする。けどもこ姉
は明らかに俺の手から逃げて永森先生に助け起こしてもらつた。チ
ラリと俺を見る怯えた目。心が、痛い。

俺、こんなナイーブだつたかな？

自嘲気味に笑つてゲイツさんの後についていった。

六四三（3）

俺達は辛うじて壊れず残っていた建物を見つけ、そこに籠城することにした。

元は食堂だつたらしく、一つの広い部屋にいくつもテーブルと椅子が並んでいた。

そのテーブルや椅子を運んで扉や窓を塞ぎ、とりあえずの籠城の形が整う。床に適当に見繕つた布を敷いてその上に座つた。

「さて、まずはこうしてプレイヤー五人、欠けることなく揃えたことを喜びましょうか」

ゲイツさんはそう言つて俺達を見回す。気のせいかな？ まるでこの状況を楽しんでるように見える。ゲイツさんは周りを見回しもこ姉に目を止めた。

「もう少く……でしたね。どうです？ 落ち着けましたか？」

「あ……はい。その、ありがとございました……」

「いえいえ、それよりそちらの彼氏にね、きりこの言葉でもかけてあげればどうですか？ 貴女を助けようとする姿は大変美しかったですよ」

「…………」

もし姉はチラリと俺の方を見た。……怯える子供みたいな目だ。

またズキンと胸が痛む。 わからない。 なんでこんなに辛いのか
がわからないんだ。

この世界に来て……、そしてこの体になつて、あのスキルを得て、
俺はいろんなことを忘れたみたいだ。特に……なんでこんな風にも
こ姉を護りたいと思つてるかがわからない。思い出せない。

ただ、もこ姉のことを思うと何が何でも護りたいと思つてしまつ
た。幼なじみだから、親友だつたから……、違う。もっと何か……
強烈な……。

「大丈夫？ 顔色が悪いわ」

永森先生が俺の様子を見ながら近づいて来た。

「さて、あなたの怪我、今のうちに応急処置しておきましようか。
奥の部屋に行きましょう。こんな不潔な環境だし、怪我を放置す
るのは場合によつては命に関わるわよ」

「う……」

思わず苦い顔をしてしまつた。この人もプレイヤー……俺の今
身体について知つてるかはわからないが、確實に変な顔はされる。
いや、変な顔をされるぐらいならまだいいんだ。別に死ぬ訳でもな
いし、もこ姉以外とはこの試練つてのが終わつたら縁がない限りも
う会つこともないだろう。けど、もし俺のことについて知つていれ
ば……最悪ここから追い出される。

そんなことを考えていると永森先生は子供を叱るような目で俺を

見た。

「見くびらないで。私はあなたが患者でいる限りは決して差別はないしさせない。できるだけの最高の治療を施すことを約束する。それが医者としての私の信念よ」

この人、俺のこと知ってる？

永森先生は俺の目を見る。瞳が僅かに光っているように見えた。

「私のスキルはね、扱つたことのある薬品や簡単な医療器具を自在に生み出す能力と、患者の状態やステータスを一目で見極めることができる田なの。安心なさい。これでも腕にはそれなりに自信有るから」

「……わかりました」

「」の口振りからして俺の秘密にしてることにも気付いているだろう。観念して先生と一緒に奥の部屋に行つた。

元は生活スペースだつたらしい小さな部屋。倒れていた椅子を拾つて座り、学ランのボタンを外して服を脱ぐ。皮膚にぽつぽつとまばらに付いた黒い竜鱗と、噛まれた傷痕が外気にさらされた。永森先生はもこ姉にやつた時みたいに薬の入った小瓶、脱脂綿やピンセットを出すと、脱脂綿を薬に浸して俺の傷に当てた。痛つづ？！

「少し染みるだらうけど我慢なさい。男でしょ」

少しつつレベルじゃない！ 噙まれた時の痛みの方がまだましだつたぞ！？ 必死に歯を食い縛る。

「……あなた、自分の種族……黒竜の竜人について彼女に話してないの……？」

永森先生が静かに言った。普通の人間じゃまともに聞き取れないほど小さな声だ。思わず息を飲む。

「反応しない。他の人には聞かれたくないんでしょ？」

「」（）までやるかと内心 感動しながら首を横に振る。

「私の目の力であなたのスキルの効果……あなたが何故、彼女や私たちを“殺さず”にいられるかは理解したわ。でもかなり危険なのに変わりない。これ、持つておきなさい。精神安定剤よ、毎食後に飲めば気休めにはなると思つわ」

そつとカプセルが入った瓶を握られた。それをポケットにつっこむ。

「どうも……」

その時だった。

「おひ、邪魔するで」

突然 馬場が入ってきた。先生が勢いよく立ち上がる。

「ちよっとあなた！ 今は治療中……」「まあまあ、用が済んだらすぐに戻るさかい」

馬場は俺に近付いて来る。おもむろに手を伸ばして俺の竜鱗に触

れると、こきなり一枚むしりとった。

「痛つ……」「何してゐの!?

永森先生が怒鳴る。だが馬場は素知らぬ顔で俺の竜鱗を見つめる。

「ええやないか。なんか銭の匂いがふんふんしてなー。鱗人間の鱗なんて珍しいし綺麗やから高く売れるかも知れんやろ?」

「なつ?!

売る?!! 「冗談じやない! …… 実際俺の竜鱗はかなりの高値で売れるらしいのだ。聞いた話だと宝石並みの値段で。

もし、その竜鱗の持ち主が俺だとわかつたらどうなる? この世界にはそういうやつを狩るハンターまでいるらしい。おそらくはもこの姉と一緒にいるビックリではなくなる。

学ランを羽織つて元の部屋に戻つて行つた馬場を追つた。扉をくぐるとそこには

「なあなあ、もひけやんやつけ?」

「は、はい……」

馬場はもこの姉に声をかけていた。先生にかけてもらつた白衣の隙間から見える破れた服を見てニタニタ笑いながら舌舐めずつする。もこの姉の表情に怯えが走つた。

「あんな鱗の兄ちゃんよつや、ワイと仲良くなへん? ワイこれ

でも錢はあるんや。もこちゅやんかわいにし、あの兄ちゅやんよつはワ
イと一緒にいた方がいい思いできると思つで」

「け、けつじゅですー。」

「つれなー」と嘆ひなや。仲良つじよひゅつて

馬場がもこ姉の腕を掴んだ。そのまま強引に自分の方に引き寄せ
て肩に腕を回す。

胸の中で抑えていた黒い感情がふつふつと沸いてくる。訳のわから
ない怒り。さつき竜鱗をむしり取られた事より遙かに上。ただも
こ姉にちよつかいを出してただけなのにぶち壊したい程馬場が憎ら
しかつた。永森先生があわてて後ろから抑えてくれなかつたら馬場
に殴りかかっていたかもしれない。

「そこまでにしどきましょうか

その時、ゲイジさんが馬場の肩を掴んだ。

「醜いですねえ。金、色、欲望に走る人間というのは。……やめま
せんか、これ以上は黙つて見ていく訳にもいきません」

「なんやあんたの言ひことはよつわからんわ。固ここと言わんとい
てえな」

「亡者に困まれ、私に必死に助けを求めて來たのは誰でしたかねえ」

馬場は小さく舌打ちするとともに姉から手を離した。そのまま近く

にあつた椅子を蹴飛ばして建物の奥へと歩いていく。

「おや？ ビニヶへ。」

「小便や小便！」

わう吐き捨てるよつて言ひて馬場は建物の奥へ消えて行つた。

「もこ姉、大丈夫か？」

「う、うん。ちょっと怖かつたけど……あ……ゲイツさん、ありがとうございます」

「いえいえ、お気になさりや……どれ、私も少し用を足してきますかね」

ゲイツさんもわう言つて建物の奥へと消えていった。
俺はもこ姉のそばで膝をつく。

「……本当に大丈夫か？ 頬、真つ青だぞ？」

「う、うん。……大丈夫、だよ」

そう言つたもこ姉の体は小さく震えていた。俺がそれに気が付いたことに、もこ姉も気が付いたようで、抱き締めるように自分の肩を抱く。

「はは……なんか、ゾンビに襲われたの、トライアになつちやつたかも……。男の……そういう田が、すこく怖い……」

「わい姉の声はひどく小さくて、震えていた。乱暴に触れれば壊れてしまいそうで、できるだけ優しくその頬に触れた。

「その……俺も怖いか？」

もこ姉は少し驚いたような顔で俺を見て、頬に当たった俺の手に自分の手を重ねながら、静かに目を閉じた。

「怖く、ないよ……今は」

俺はそっともこ姉の背中に手を回して抱きしめた。ひつぱたかれのも覚悟していたけど、もこ姉は抵抗もせずに俺を受け入れてくれた。

なんでだろ？ それがすく嬉しく。嬉しそうで胸が温かくなつてくる。

「ねえ……、なんで……ゾンビに襲われた時、あんなこと、したの

……？」

「…………」

「なんで、あたしを……殺そうとしたの？ 変、だよ……今はこんな優しい、のに……」

腕の中で、もこ姉は俺を見上げる。本当に小さな子供みたいな、親に怒られるかもと怯えながら親にしがみつく子供に似てる。護りたい。もこ姉を……絶対に。

なら、話さないと……けど話してどうする？ 本当に話していくのか？ 話したらきっと、いつもやつて抱きしめることなんてできない

い。こんな目で俺を見てくれたりしない。もしそうなつた時、俺はもこ姉を護りたいと思えるか？俺はもこ姉を……殺さずにいられるか？

カタン、と。もこ姉のポケットから携帯が落ちた。けどもこ姉はそれを気にする素振りは見せない。代わりに俺が拾つた。

携帯の画面にはマップが表示されたままになつていた。俺、もこ姉、永森先生が青白いマークで表示されていて、少し離れたトイレの場所にゲイツさんと馬場の一人のマークーが……ん？

「これは……？」

「……え？」

ゲイツさんと馬場、マークーはたしかに二つ有る。ただ、二つのマークーの内一つが赤く点滅していた。

その点滅がやがて收まり、マークーが黒く変わっていく。

『馬場 正昭 死亡』

画面の右上にそんなメッセージが表示された。

六四三(4)(前書き)

読んでください。皆様お待たせしました。

夏風邪にじりじりして寝込んでました。普段風邪ひかない分辛かつたです……。

皆さんも夏風邪にはお気をつけ

六四三（4）

「死、亡……？」

思考が停止しかけた。黒く変わった馬場のマーカーの前でじっと動かないゲイツさんのマーカー。ゲイツさんが殺した？ けど何故？ 確かに馬場は嫌なやつではあつたけど今はこの試練を乗り越えるために協力し合う仲間だ。仲間であるべきだ。それを殺したとならば圧倒的にデメリットが大きすぎる。聰明そうなあの人ならそんなことわかっているはずだ。殺す理由が見当たらぬ。

頭の中を色々な考えが巡る。けど答えが出る前に携帯に表示されたマーカーは動いていた。

「ただいま戻りましたよ」

携帯に表示されたマーカーと同じタイミングでゲイツさんが戻ってくる。さつきまでと同じ声色、同じ口調、同じ笑顔、けど俺の嗅覚は一つだけさつきと違つものを感じ取つた。この臭いは……

真新しい……血の臭い……。

「……馬場は一緒じゃないんですか？」

「ああ、彼はもう少しかかりそでしたね。それが何か？」

紳士的な笑顔を浮かべてそう返してくる。その穏やかな目がもこの方に向けられる。びっくりともこの姉の身体が震えた。まづい。とつさにもこの姉の腕を引いて背中に隠す。

それを見てゲイツは眉をしかめた。

「おやおや、感づかれましたか」

そう呟くと、俺とモコ姉に向けられていた視線が永森先生の方に移った。心臓が跳ねる。

「先生！ そいつから離れ」

瞬間、ゲイツの持った銀のナイフが先生の喉を斬り裂いた。

「あ？」

本当に一瞬だった。真紅の血が吹き出し、ゲイツを紅く染める。先生は何が起きたのかも理解できないように、大きく見開いた目で自分の血を浴びるゲイツを見上げていた。

「貴女の医者としての姿勢は美しかった。できれば貴女は最後にしたかったのですがね」

ゲイツはナイフを逆手に持ち替え、無慈悲に先生の眉間に突き立てた。ガスッと骨が碎ける音。先生の身体が力無く後ろに倒れた。目は見開かれ、天井を向いたまま光を失っていく。

ゲイツは先生の脇まで行くと膝を付き、そつと開いたままの目を閉じさせる。

なんだ……なんでそんなことができる？ どうして自分が殺した相手をそんな恍惚とした表情で見ることができる…？

背中にもモコ姉の体温を感じる。ひどく震えていた。

ゲイツは黙祷を捧げるよう永森先生の前で目を閉じる。そして十字を切り、静かに目を開けると俺たちの方を見た。

「彼女は美しく、誇り高い人物でした」

まるで自分の言葉に酔いつぶて、ゲイツは言った。

「このよつな世界に放り込まれながらも医者としての信念を失わず、行動した彼女は敬意を表するに値します」

なん、なんだこいつは……？ なんで？ どうして……。こんな…
…。

出会いで一時間も経つてはいなかつたけど、俺のことを知りつつ患者として受け入れてくれた先生。それをこいつは……！

「なんで殺した！？ 馬場はまだわかる……いや、わからないけどまだ理解できる。けど先生が何をした！？ 何のために殺した！？」

「その質問への答えは二つといったところですかねえ」

銀の閃光が走つた。ゲイツが俺たちに向けてナイフを振るつていたのだ。知覚するよりも早く身体が反応してガントレットで受け止めていた。ゲイツがニヤリと口元を弛める。

「あれを止めますか、さすがと言つておきましょう」

「くつ？！」

もう姉を脇に抱え、扉を塞いでいたテーブルを蹴り飛ばして外の通りに飛び出した。左右に視線を走らせる。幸い見える範囲にゾンビはない。

瞬間、建物の中から無数のナイフが飛んできた。狙いは……
「姉か！ ナイフの軌道とも「姉の間に腕を割り込ませてガント
レットで払つよう」に弾き飛ばした。だがその隙を狙つたナイフが一
本、俺の肩に刺さる。

「つゅう君?...」

歯を食い縛つてナイフを抜いた。道に投げ捨て、建物の方を睨む。
「逃げるのはいただけませんねえ。貴方も衝動に従い、闘争を楽し
むひじやありませんか」

「シシ」と足音を立ててゲイツが建物から出てくる。その両手には刃渡り三十㌢程の短剣が握られていた。

「お前はいつたい……何なんだ？」

「おつと失礼。そついえば先程の質問にも答えていませんでしたね

ゲイツはそいつひと口噛みがかった動作で両手を広げた。

「まず、何故こんな事をするのかといつ理由。それは私たちが殺す
側、神であるマキナの言葉を借りるならマスクとしてこの世界に召還
されたからですよ」

「P……K……?」「たぶん……【プレイヤー キラー】って」と
だと思つよ……」

「」
もし「姉が静かに言つた。

「オンラインゲームとかで、他のプレイヤーを殺すプレイヤーのこ
と、そういうの……」

他のプレイヤーを殺す……か、そりゃこいつが……いや、こいつ
も……

「そうです。私はプレイヤーを殺すために召喚されたプレイヤー。
神の意思に従つて殺し、殺すたびに強くなり、また新たな標的を殺
す。そんな存在です」

「……じゃあ、お前は生き延びるために他の人を殺したのか？」

僅かな望みに賭けてそう聞いた。けどゲイツは笑つて首を振る。

「いいえ、確かに誰かを殺すよつには言わっていましたがこの試練
でのノルマは一人。馬場を殺した時点でそれは達成しています」

「じゃあ何故……？」

「もう一つの理由、それはただ楽しいからですよ

胃に重い物が落ちたような感覚だった。

「たの……しい？」

「そうですね」

ゲイツは一ヤリと口元をゆがめる。

「昔から好きなんですよ。命が散る瞬間を見るのが。生前が美しい者であればなおいい。高貴な命が壊れ、散りゆく様、美しい者をこの手で壊す背徳感、壊れ、動かなくなつた身体、そこに漂つ虚無感、それはもはや芸術だとは思いませんか?」

狂つてゐるのか……? いや、違つ。ここは正気だ。正気で言つてゐ……。

「お前は……普通じゃない……」

「ええ、もちろん理解していますよ。私は異常者だ。ですがそれがどうかしましたか? 私は“普通”の中に埋没して死んで生きるよりも、異常者として生きて死ぬことを望みます」

「こつは、殺す。殺さなきゃいけない。生かしておこうやいけない!」

「そして私が何者かとこつ質問、申し訳あつませんがこれは私にもわからないのですよ。

この世界に召還され、マキナに様々な情報や知識を脳に刷り込まれる課程で記憶が混乱してしまいましたね、元の世界でのこともほとんど思い出せないんです。

ゲイツとこつ前もマキナに召還されたが前で、本当の召還する細かい出せませる」

ゲイツは肩をくぐめて小歩く首を振つた。

「ですが、おぼろげな記憶の中の一つ、私の愛称らしきもの記憶が有りましてね、今はその愛称とゲイツといつ新しい名前を組み合わせたものを使つています。

ですから私が何者かと聞かれればその名で答えましょ」

ゲイツは居がかつた動作で「いやいやしぐれをした。

「我が名はゲイツ・」・リッパー。神の意志により、貴方々の命を切り刻む者です」

背筋をゾクゾクと寒気が伝つた。顔を上げてこちらを見るゲイツ。漂つてくる明確な殺氣。

俺は師匠の元で何年間も武道の鍛錬を積んできた。そのおかげか、戦う相手と向き合つた時にだいたいの相手の力量や自分が勝てる相手かが感じ取れるようになつた。

……とんでもない相手がきたもんだ。けど……ちょうどいいのか
も知れない。もこ姉の脅威になるこいつを潰すか、潰されるかして、
別れよう。

俺は一緒にいないう方がいい。俺が一緒にいたらきつともこ姉を傷付ける。だからここで別れよう。

「もこ姉……走れ」

「え?」

呆けた顔をするもこ姉の背中を突き飛ばす。

「いいから走れ! 死にたいか!」

もこ姉の顔に怯えが走る。

「だ、だつて……まだゾンビが……」

「ああくそ！ わからぬか！？ も」姉じや足手まといなんだ！
早く行つてくれ！ 今すぐ！…」

も」姉の表情が固まつた。

目を伏せて、小さく一言「ちくと俺に背を向けて走り出す。

『「じめんなさい』それがも」姉の呴いた言葉だつた。どうこう意味で言つたのかな……。

思わずほくそ笑んでしまつた。たぶんも」姉のことだから俺の言葉通りに受け取つてんだろうなあ……昔からそういう所は妙に素直だつたから。

「それで彼女を護つたつもりですか？」

ゲイツはため息混じりに言つた。俺の行動に失望した、そんな感じだ。

「だとすれば貴方の彼女を護りたいといつ想いは酷い自己満足だ。
貴方の庇護無しに、彼女がこの先生を残れると思いますか？」

「自分が勝つ前提で話すなよ」

「すでに貴方にも結果は見えているはずですよ」

ゲイツは悠然と構える。そうだ、俺といつがやり合つたら……
ほぼ確実に俺が負ける。それもも」姉を逃がした理由の一つだ。

「本当に彼女を護りたいなら、貴方は自分もどうにか生き残ることを考えねばならなかつた。自己犠牲、聞こえはいいですがそれは彼

女を一人、この世界に放り出すという残酷な行為であり愚かな自己満足です。美しくない」

好き勝手いつてくれる。……けどそりだな。そりだよ。血口満足、そんなの理解してる。

「……絶対無いだろうけど、もじ姉が俺の後を追って死んでくれたら、たぶん俺は嬉しいなんて感じると思う」

「……ほう?」

「俺なんかが何もかもからもこ姉を護れるなんて思っていない。より確実にもこ姉を逃がせる手があるっていうならそれが俺の最善手だ。……俺はただ、目の前でもこ姉が死ぬのは、傷付くのは、悲しむのは……死ぬより辛い。だから命に代えても護る……！」

小指から順に指を折り、固く拳を握った。

「だからお前はここで、死んでも止める!……」

ゲイツの表情が変わっていた。侮蔑から、とても嬉しそうな、楽しそうな表情へ。

「歪んだ愛ですねえ。……いや、逆ですね。綺麗事を並べる人間より貴方の方がよほど真っ直ぐだ。面白い! 実に好感が持てますよ。……ならば」

ゲイツがもう姉の背中に向けて投げナイフを構える。一気に踏み込んでその手を掴んだ。

「簡単にやらせるわけないだろ！」

「健気ですねえ。そして実に美しく、愚かです」

ゲイツの口元が歪む。組み合つてただけで気持ち悪い。腹に蹴りを入れて吹き飛ばした。

向こうの武器はナイフや短剣だ。それなら師匠との訓練で何度もやったことがある。とにかく間合いを保つて……この試練が終わるまでの時間を稼げれば、突然、胸に鋭い痛みが走った。

「え……？」

視線を落とす。長い三股の刃が俺の胸に突き刺さっていた。

視線を上げる。ゲイツの手に握られていたのは長さ30cmはある長槍だった。

なん……こんなの……さつきまで……

「ここは元の世界とは違うのですよ？ 私がどういった能力を持つているか考えなかつた貴方が迂闊でしたね」

能……力……？

胸に刺さつた刃を抜いて数歩下がつた。喉を血が上がってきて口から溢れる。
ま……ずい……。

ゲイツが口元を歪めて笑うと長槍が一瞬で消えた。代わりにまたナイフがゲイツの手の中に現れる。

「冥土の土産……といつわけではありませんが、この能力について教えてあげましょうか」

ゲイツがそう言つとナイフは消え、その手には代わりに大鉈が握られていた。

「どうです？ 面白いでしょう？ ……私の能力の一つは【狂喜の宴】この世界のありとあらゆる刃物を作り出す能力です」

武器を作り出す能力？ ああくそ、キチガイに凶器持たせんな。

ゲイツの振り下ろした鉈を避けた。

刃物を作り出せるとは言つても使う人間はあいつ一人だ。隙を突ければどうともなる！

ゲイツが鉈を戻す前に体勢を低くして踏み込んだ。

一撃ぐらいならかまわない。どうせ俺の今の身体は簡単には死れない。けど向こうはどうだ？ 相討ちならこっちに分がある！

「おやおや、誰が手にしか出せないと言いましたかね？」

全身を貫かれる痛み。

ゲイツの肘から、膝から、腰から、全身から飛び出した刃が俺を貫いた。

六四三（5）

side 浅倉 もこ

走る。

日が沈んで薄闇に包まれた廃墟の中をひたすら走る。胸が苦しい。息ができない。けど走った。

一人死んだ。あの人に……殺された。逃げないと、逃げなきや。けどりゅう君は……、わかんない、わかんないよ……。なんで逃げないのよ……なんで戦うのよ……あたしを護つてよ……。

……邪魔……だから……あたしのこと邪魔なのかな？ 足引っ張つてきたから……。

その時、何かが足に引っ掛けた。バランスを崩して地面上に顔を打ち付けた。痛い。口の中に血の味が広がる。

「元……く……だあ……」

「ひつ?—」

瓦礫に半分埋まった状態のゾンビがあたしの足を掘んでいた。ゾンビはニタアと笑うとあたしの足を両手で掘んで瓦礫の中から這い出てくる。

「や……やあ……」

振りまわさうとする力はない。カララン、と 手が落ちていた剣に触れた。

「 つー」

気が付いたらあたしは血塗れになっていた。目の前には何度も頭を叩き潰したゾンビ。ぼんやりと、あたしはそれを見ていた。手に残った頭を叩き潰す感覚。……吐き気がする。

『おー、敵初討伐だねー。童貞卒業おめでとー。……ん？ 女の子で童貞卒業って変かな？』

目の前に白いマキナが現れた。あたしはそれを見上げる。

『うわ、ぶつせいくな顔。死んだ魚みたいな目してると、どうかまたそんな状態？ ほんとメンタル弱いね』

マキナは大きな鏡を取り出した。そこに映ったあたしは本当にぶつさいく。目に光が無くて、髪ボサボサで、泣きすぎて顔はむくんで身体中 血塗れで。

『あんまがせいぐんなのは見たくなーよ。せめて汚いのは勘弁ね』

マキナは軽く指を振る。すると鏡に映ったあたしの身体はきれいになつた。血の跡は消えて、破れた服もボサボサの髪も、むくんだけ顔も元に戻る。けど光の無い目だけは変わらない。

『でさ、でさ、どーお？ 初の敵討伐の気分はさへ。』

マキナはそつとてあたしの顔を覗き込んだ。

『もしもーし？ パークるのは別にいいけど無視はしないでよー』

あたしの前で手を振る。しばらくすると小さくため息をついてパンと指を鳴らした。

なんでここにはんな……。いつだ……ここさえ、いなければ……！ あたしはこんな田舎……！

「うあああああ……」

『おつー！』

剣を握りしめてマキナに斬りつけた。ぞくっと肉を斬る感触が手に伝わる。

『ああああああ？！』

マキナの胸元から血飛沫が上がつた。空中に浮いていた身体が落ちる。

力無く大の字に伸ばされた手足。血がゅっくりと道に広がっていく。

「や……やつってない」

ひょいと反動をつけてマキナは立ち上がった。パンパンと自分の服を扒うと、あたしが斬った傷も血の跡も消え失せる。

『やれやれ、こつでもしないとまともに話もできなさそうだったからね～。あ、おめでと～。私にダメージえたプレーヤー、もこちやんが初めてだよ』

「なん、なのよ……。次は何しにきたのよ……いいよ……もう好きにしてよ……」

手から剣が滑り落ちた。もうやだ……。たとえ何をやっても、こいつには絶対通用しない。頑張れば頑張るほど辛くなる。なりもつ何もしたくない！

けどマキナはあたしの反応に不満そうに顔をしかめた。

『別に今は何もしないよ。だってここであなたに何かしたら、あなたのために死ぬりゅう君が可哀想じゃない。……いや、可哀想なのは別にいいんだけどお気に入りキャラが犬死にってのは嫌なのよね』

え？

『携帯のマップ画面、見てみて』

あたしは言われるがままに携帯を取り出した。マップ画面。表示されるゲイツとりゅう君、一人のマークー。

りゅう君のマークーが赤く点滅してゐる。心臓がドクンと縮み上がつた。

『もうわかつてるとと思つけど、赤の点滅はもつ死にかけてるつてことなの。ちなみにりゅう君は』のまま放つて置いたら……えへと、32分と17秒後に出血多量で死んじゃうから』

ゾクゾクと上がつてくる寒さ。マップに表示された点滅する赤いマークーから目が離せなかつた。

「うそ……だつて……そ、そんな……」

『ん？　なに？　りゅう君は死なないとでも思つてた？　んなわけ無いじゃない。そもそも、ゲイツのレベル33だし、あいつのスクリ接近戦ではかなり上位のランクA相当だし、りゅう君が勝てる見込みあんまり無いのよね。

りゅう君もそれがなんとなくわかつてたみたいだよ？　そうじやんかつたらこんな危ないところをもじちゃん一人で行かしたりしないよ。今まで馬鹿みたいにもじちゃん護ろうとしてたの忘れたの？』

死……ぬ……？　りゅう君が？　そんな……だめ……。だめ……！　絶対だめっ！！　あいつは……あいつは……。

あれ？　あいつは……なに？　なんでこんな動搖して……なんで、あいつは、変態で……お節介で……幼なじみで……。

あたしの……幼なじみで……弟分で……親友だった。大切な、大

切な親友だった。

「お願い……します……」

『ん?』

あたしは土下座していた。頭を地面にすり付けて、心からお願いする。

「お願ひ……します！　あいつを……りゅう君を助けて！　何でも何でもするから！　何でもしていいから！」

そうだ。あいつは幼なじみのりゅう君だ。ずっとまた会いたいと思つてた大切な親友だ。あんなことが有つて素直に喜べなかつたけど、本当はすごく嬉しかつた！　だから……だからこんなお別れなんて絶対嫌だ！

マキナはニヤッと笑つた。楽しそうにふわふわ浮かびながらあたしを見る。

『りゅう君が死ぬつてなつたらずいぶん態度変わつたね～　ふふ

何でもか。なら自分で助けなよ。何でもするんでしょ？』

「そ、それができないからあんたに頼んで……」「だからそういう考えが嫌いなの」

バチンとマキナはテープピンした。田の前に星が散つて仰向けに倒れる。

『できない？　やらないだけじゃない。できないなんて誰が決めた

の？ あなたでしょ？』

「だ、だつてあたしにはあいつを助けられるような力なんて……。」

『考えた？』

え？

『もこちゃんはりゅう君と出会い前、必死に自分の能力の使い方を考えたはずだよ。

正直言うならね、もこちゃんの状況への適応力と頭の回転の早さは全プレイヤー中トップクラスだった。

あの時は私も“この子はすごい”って期待してたんだよ？ ……けど、りゅう君や恋ちやんと出会ってからあなたは考えなくなつた』

マキナはふわふわ浮いて仰向けに倒れたあたしの真上に来た。

『楽だもんね～、誰かに頼るのって。楽して急げて、結果がこれ。か、どうする？ 諦める？ それとも頑張る？』

何も言ひ返せなかつた。そだ……こここの声ついで……聞違つてない。

あたしは考えるのを止めていた。自分で何とかしなきやつて思つてた時は必死に考えてたくせに……。りゅう君と再開してから……、あいつは護つてくれるから……あたしは甘えて……。

「……あと、何分？」

あたしがそう聞くとマキナはニッコリ笑つた。

「28分。回復魔法が間に合つるのは25分つてどこかな？」

あたしは身体を起した。 考えないと。

なんでマキナがこんなことを言いに来たかとか、疑問は尽きないけど、それは全部 後回し。

考へないと。今頑張らなきゃ絶対に後悔する。あいつは……あたしの幼なじみで弟分みたいなやつなんだ。

他のどの友達よりも身近で、大切で、大好きだったりゅう吾。

……あたしは、また昔みたいになりたいんだ。昔みたいに仲良くなつて、けんかして、昔みたいにあいつを大好きになりたい。

「んなとこねで…… こんなところで死なせるなんて絶対にやだ！」

あたしはどうすればいい？ ジリヤアたら戦える？ ジリヤアたらりゅう吾を助けられる？

……ダメだ。考へがまとまらない。違う、こんな考え方じゃダメだ。あたしの武器になるのは魔法や変な能力なんだから。

たとえば…… そ、ゲーム。ゲームでならあたしはどうする？ 目的は友達を助けること、敵は格上、プレイヤーはあたし。こんなシチュエーション腐る程クリアしてきた。だからきっとできるはず。正攻法でやるのがダメなのはわかりきってる。なら……。

ある！ あつた！ あたしの戦い方！ あたしにしかできない戦
い方！

上手くいくかはわからないけど、絶対に意表は突ける！ もうこ
れしか思い付かない！

あたしはすぐに立ち上がり元来た道を走っていた。

マキナが言った、りゅう君が手遅れになるまであと8分。あいつが何を考えてるかわからないけど今はマキナの言葉を信用することにした。

ぎりぎりまで仕込みに時間を使って、りゅう君のところへ走る。魔力は……ほぼ全回復してる。回数で言えば回復用の【ヒール】一回、これはりゅう君の治療に絶対使うとして、それに加えて遠隔操作の【サイキクス】一回分か攻撃の【ファイア】三回分つてとこらか。

頭の中で必死に考えた魔法の使い方をシミュレーションする。大丈夫……絶対大丈夫！ 自分に言い聞かせながら走った。

見えた。そして絶句した。

地面に倒れたりゅう君、身体から溢れ出した血でりゅう君の身体が浸っているような状態だ。

そしてそれを見下ろすゲイツ。手の中で血の付いたナイフを弄びながら愉悦に満ちた表情で死にかけているりゅう君を見ている。

酸っぱい唾を飲み込み、足を止める。ゲイツがあたしに気付いて顔を上げた。

「おやおや、これはこれは

ゲイツはにやりと笑つて丁寧にお辞儀する。ぞくぞくと背中の筋肉が強張るのを感じた。

「貴女のことば諦めていたのですが、まさかそちらから来ていただけるとは思いませんでしたよ」

ゲイツの手の中でナイフが光る。

「う……」

一步下がってしまった。覚悟を決めて来たはずなのに足がガタガタ震え出す。

怯えるな！ そう、あんなやつ何でもない。

いつもゲームでは格上のやつでもワクワクしながら行つてるでしょ！ ああそう！ これはゲーム！ いっそそう思え！

……そつやつてゲームをプレイしてゐる自分を想像したら本当に落ち着いてきたあたし、どうかしてると感ひ。

深呼吸。ゲイツの位置とりゅう君の位置を確認する。手を後ろに回した。

「装備、変更」

小さく咳くと手にボウガンが現れた。マップに表示された武器屋の跡地で見つけたやつだ。ボウガンなのにマガジン式で、何発か連射ができるようになつてゐる変わったやつ。某狩りゲームみたいだしつかりとグリップを握りしめる。ゲイツを睨んで細く息を吐い

た。 行く！

「これでも食らいなさいー！」

素早くボウガンを構えて引き金を引いた。矢は真っ直ぐに飛んでゲイツの頬を掠める。

「……面白いですねえ。本当に私とやり合ひましたか？」

ゲイツはニヤリと笑つた。ゆらりと身体を揺らしたかと思つてあたり掛けて突進してくる。

「くつ……！」

あたしは矢をでたらめに連射した。けどその矢は全て外れるか、避けられた。

「そんな腕では私は仕留められませんよー！」

ゲイツがさらに速度を上げた。遠距離武器を使う相手には接近戦に持ち込む。ゲームと同じだ。

向こうもそれがわかつてゐみたいだ。狂つた笑みを浮かべ、手に持つた血塗れのナイフを振りかぶる。

……そう、やつぱりだ。遠距離武器相手には接近戦。それは現実でも同じだった。“ちゃんと接近戦を仕掛けてくれた”。ボウガンはあくまでも仕込み！ あたしに突進させて、本命をぶつけるための！

ナイフが届く距離まであと五歩、四、三、かかった！！

ボウガンをしまって両手を前にかざした。頭の中のアイテム欄に一気にチェックを入れる。

「アイテム！…まとめて取り出す…！」

あたしの視界が鋼色の壁に包まれる。ここに来るまでに拾い集めた剣 31本、それをまとめてあたしの目の前に取り出した。

「【サイキクス！】」

さりに田の前の剣の切つ先を全てゲイツに向けた。

「なつ ?！」

驚愕の声。ゲイツが止まりきれずに剣に突っ込んだ。上がる血飛沫、剣の壁を突き破つて来るのを反射的にかわす。

ゲイツの身体が地面を滑つた。

少し遅れ、激突の衝撃で弾き飛ばされた剣が盛大に音を立てて舗装された道路にぶつかる。

「や……やつてくれましたね……」

震える声でゲイツは言った。ふらふらと立ち上がり、ひかりを振り向く。

「うわ……」

思わず声を漏らしてしまった。ゲイツの右目に大きな傷が走り、潰れていた。身体中傷だらけで、血がボタボタ滴っている。

「ふ……ふふ、良い、良いですよ。貴女は美しい……恐怖に打ち勝ち、私にこれ程の傷を負わせたことは驚嘆に値します……」

ゲイツは嬉しそうに顔を歪めた。手に持っていたナイフがいつの間にか鋸に変わっている。

「是非とも……是非とも切り裂きたい！」

頭の中で装備にチェックを入れた。

「装備変更！ フルアーマー！」

次の瞬間あたしの身体はぶかぶかの全身鎧に包まれていた。鋼の肩当てがゲイツの鋸を弾く。

「お願い！ 動いて！」

ゲイツの足元に散らばった剣の内一本、まだサイキクスの効果の切れていないかつたやつを操る。それでゲイツの足に思い切り斬りつけた。

「ぐあああああつー！」

崩れ落ちるゲイツ。あたしはすぐに鎧を解除してりゅう君の元へ走る。

「りゅう君ー」

「も……！」姉……？

まだ生きてる！ 滑り込むよつにりゅう君の身体に覆い被さった。お腹に空いた穴に意識がクラクラしたけどそこに手を当ててありつたけの魔力を込める。

「お願い！【ヒール】」

手から光が溢れた。傷の周りがシュウシュウ音を立てると見る間に傷がふさがっていく。りゅう君の目も少し光が戻った。

「りゅう君！ 大丈夫？ 立てる？」

「お……つ……。つ！ 後ろ！」

りゅう君の言葉に後ろを振り返る。ゲイツが投げナイフを構えていた。

「く！ もー姉下がれ！」

「りゅう君邪魔！」

装備を変更してボウガンを取り出す。

あたしの前に回ろうとしたりゅう君を突き飛ばしてゲイツが投げたナイフを空中で射ち落とした。

りゅう君とゲイツが驚いたように目を見開いて弾かれたナイフを田で追う。

その間にゲイツに照準を合わせ、連射する。

「むひつー？」

ほとんどが短剣で弾かれたけど一発がゲイツの肩に突き刺さった。ゲイツはそれを無理やり引き抜き、さらに凄絶な笑みを浮かべる。

「ふふ、なるほど、最初に矢を外したのは私の接近を誘うためのブラフでしたか……。ナイフを射ち落とすとは……見事な腕前です。まさかそこまでボウガンの扱いに長けていたとは」

あたしは内心で舌を出す。クロスボウの扱いなんて知るわけないでしょバーカ！ あたし普通の高校生だよ！？ けどゲームで仕組みを知ってるとか必要ある？ FPS（一人称ガンシューティング）でキルレート20越えるあたしを舐めんじやないわよ！ 心の中でやけくそで叫んだ。

ゲイツはくつくつと笑いながらまた立ち上がる。足を斬ったはずなのにまったく堪えた様子がない。なにこいつ？ こいつもゾンビじゃないでしきうね……。

「……今日は敗けを認めまじょうか。さすがにこの出血量、これ以上はこちらも無事では済まなそうです」

「……え？」

「では、『機嫌よう』

ゲイツはそう言つとあたしたちに背を向ける。

「これ射つといった方がいいかしら？ 捨て台詞の後だけどそっちの方が安心よね？ ゲイツの後頭部に照準を合わせる。」

その時、りゅう君があたしの前に立った。

「止めとけ…… もじ姉。行かせた方がいい……」

りゅう君がゲイツから視線を反らさず言った。ゲイツはそのまま足を引きずりながら歩いていき、やがて見えなくなった。

「…………」

「………… 終わった?」

ゲイツが見えなくなつたとたんにいきなり足が身体を支えられなくなつた。カクンと足が折れてしまふ。

「も、もじ姉?! 大丈夫か?! ビーかやられたのか?!」

「い、いや、別に……ん、あれ?」

立とうとしたけど全然立てない。え? 腰抜けた?

りゅう君が膝を付いてあたしの状態を確認するとキツとあたしを睨む。

「なんあんな無茶したんだよ! もう少しで死んでたんだぞ!」

「無茶? もう少しで死ぬところだつた?」

何を言つてんのこいつ? 思い切り自分のことじやん。あたしが必死に使える武器を探してゐる間どれだけ心配したと……。

さつきまで心配してた分がそのまま怒りに変わつてく。拳を握つ

た。

「ばかっ！」

「ぶつ？」

ぶん殴った。

「思い切つこいつの呪詞よばかっ！ あんたあと少し遅かつたら死んでたんだよ！？ どんだけ心配したと思つてんのよばかああつ！」

「うふー？ やめ……！ グーはやめグーはー。」

両手首をがっちり掴まれた。腕を広げられた状態で顔を見られる。

「わかった！ わかったからもう止めてー。」

……こいつは全然わかつてない。涙がぽろぽろ溢れてきた。

「うおー！ ちゅー！ 泣くなよー。」

おひおひじ出しすくはづ。もつ知らなー。慌てるだけ慌てればいいんだ。ちょっと反省しや。

声を上げてわんわん泣いてやった。おひおひしたままわたしをなだめようとなんか言つてる。

……本当は、謝つたりお礼したりしないといけないんだけど、それは後回し。今はたつぱり慌てさせてやる。後悔させてやる！ もつこんな無茶しないよつこ……ね。

ああ、やつにえれば世もいとんないと有つたつ。

あたしがりゅうつ君に泣かれて、りゅうつ君はすうとおのむりしてて。

女の子に泣かれるのが苦手なのは変わつてないね。

涙を拭ぐ。大きく息を吸つて、吐いてりゅう君を見上げた。
窓から見える大きな月をバックにりゅう君は頬をポリッと搔く。
あたしたちは元の宿屋の部屋に戻つて来ていた。月明かりが部屋
を青白く染めている。あたしはベッドに腰掛け、りゅう君は窓枠に
もたれ掛かつてあたしを見ていた。

「あ～、その、落ち着いたか？」

「ん」

りゅう君の言葉にあたしは短く返事する。再び沈黙。いつぱい話
したいことが有るのに言葉が見付からない。

……いや、言わなきやいけないことは一つはっきりしてゐ。うん、
これから言おう。言わなきや始まらない。

「つゆう君……今までありがとうございました。それと、『めんなさい』

つゆう君は驚いたように顔を上げた。

「りゅう君、ここまでじくじく頑張つてあたしのこと護つてくれたよね？ フィロちゃんを助けてくれて、半魚人から庇つてくれて、落ち込んでるあたしを気遣つてくれて。本当に、本当にありがとう」

「うへ感謝してる」

「お、おひ」

りゅう君の顔が赤くなつた氣がした。あはつ、照れてる照れてる。あたしはさりに続ける。

「それから、ごめんなさい。あたしはずつとりゅう君に頼りっぱなしだった。自分で頑張らないで、りゅう君に依存して、嫉妬して、ハツ挡たりして、『ごめんなさい。りゅう君だつていきなりこんな世界に連れて来られたのに……本当にごめんなさい』

「べ、別に俺は気にしてないからいい……俺が好きでやつたことだしな」

よしー、言つた！ 胸のつつかえが取れた氣分。思わずホッと息をつく。

りゅう君はあたしに背を向けるとポケットの中を探つた。けど田的の物は見付からなかつたらしく、りゅう君がこいつこいつ時に欲しがるのは……これかな？

「アイテム取り出す……と、りゅう君？」

「ん、ああ、サンキュー」

アイテムボックスに入れといた飴を投げ渡した。りゅう君はそれを受け取つて口に放り込むとようやく人心地付いたみたいに表情を弛める。

「ねえ、りゅう君？」

「ん？」

「りゅう君、何か隠してるよね？」

りゅう君の身体が強張るのを感じた。視線が泳ぎ始める。……たぶん、ここで聞き逃したらもうちゅうさんと聞く機会は無くなる。なんだかそんな気がする。あたしはベッドを降りてそつとりゅう君の手を取つた。

「もし」姉？

「あたしに話せない」と？

「それは……」

「あたしだって、おやんと謝つたんだよ？ 女の子に言わせてりゅう君は黙つてるつもり？」

りゅう君は小さくため息をつくとベッドの方に歩いて行って、深く腰掛けた。あたしもその隣に腰掛ける。

「……そつだな。話せないとな」

やう言つとガントレットを外して、おもむろに学ランを脱ぎ始め

た。

学ランを脱いで現れたのは 鱗？
よく日焼けした筋肉質の身体にちりばめたよつに鱗が有つた。指
先で触れてみる……本物だ。

「黒竜の竜人。別名は【殺戮竜】今の俺の身体の種族名だ」

「ちゅう君はおもむろに言つた。竜人？ 殺戮竜？」

「種族としてはこの世界で最凶最悪。生まれついた時から破壊衝動
の塊みたいな生物。見る物全て破壊し、殺し尽くす。大昔に、本来
敵対してる人間と魔族が手を組んで滅ぼした種族……だとさ」

「破壊……衝動？ それって……もしかしてあたしがゾンビに襲わ
れた時の……。」

「勘のいいもこ姉なら察しは付いただろ？ 僕もその破壊衝動つ
てのを持つてる。現に一度、本当にもこ姉を殺しそうになつた。……
だからゲイツと戦つた時、もこ姉から離れようとした」

「そうか……だから、だからあの時ちゅう君はあたしを……」

「け、けど！ 別に今まで平氣だつたじゃない！」

「それは……」『スキルの“過守護”が働いてたからだよ』

「この声？！ そう思つた瞬間にきなり後ろからマキナに抱きつか
れた……つむぢょ？！ 胸触るな！？ 揉むなつねるな引っ張るな
？！？！」

『ふんふん、普乳つと。良かつたねりゅう君、これなりこりこり挟んだりとかできそつだよ～』

「な、何を言つてんのよあんたは？！」

『だつてだつて、こりこりのつて男の夢なんじょ？ できるかできないかでプレイも全然変わるし』

『こつ何を言つてんの？！ ……チラリとりゅう君を見てみる。全く無反応。変な氣を起こされることはいいけどなんか複雑だ……。

りゅう君はマキナを睨んだまま微動だにしない。

「何しに来た？」

『もしむちやんに“過守護”の説明をね。りゅう君話せないじょ？』

マキナがそつまつといつまは黙つた。

過守護？ たしかりゅう君のスキル……効果は【守護対象を護るのに特化する】だつけ..

マキナはふわふわ空を飛んであたしたちの正面に回るとパチンと指を鳴らした。マキナの周りに黄色っぽい球形の空間ができた。なにこれ？ バリアみたいなもん？

『過守護って言つのはランク：A + + + の防御系スキル最高峰の一つ。平たく言つちやうと護りたい人の最高至高のボディーガードになれるスキルかな？ ちなみに今私の周りに有るのは視認できるようとした過守護領域ね』

「……ボディーガード？ 過守護領域？」

『そ、行動や思考速度の加速とか痛みの緩和、判断力向上とか効果はいろいろ有るけど、目玉はこの過守護領域。“守護対象に迫るありとあらゆる脅威を無効化する結界を開拓する”って能力。使用者の心の強さ次第だけど、脅威であればそれが剣だろうが毒ガスだろうがウイルスだろうが隕石だろうが、果ては敵意や殺意まで無効化しちゃうチートスキル。それが過守護だよ。

ちなみに私も普段は似たようなのを常時展開して周りから敵意を向けられにくくしてるの。ボーナスあげに行く度に攻撃されちゃかなわないしね。実際もこちゃんも私に敵意向けにくいでしょう？』

そういえば。

最初にこの白いマキナに会った時も今も、あんなことが有った直後なのにはいつも憎めない。子供のイタズラみたいな感じで心が済ましてしまっている。これが過守護領域の効果ってこと？

……殺戮竜の破壊衝動と、あらゆる脅威を無効化する過守護……
それってつまり……

「りゅう君の破壊衝動を過守護が打ち消してること？」

そう言つとマキナは驚いた顔をした後、普通の子供みたいに表情を輝かせた。

『正解正解！ その通り！ さすがゲーム脳は理解が早い！
そこにシビれる！ 憧れる！』

「なんでここでジョ ヨネタ？！」

『なんとなく！　いや～、そのツッコミ嬉しいな～ってマキナはマキナは感動に涙ぐんでみたい』

「……あんた、オタ？』

『YESS-』

そう言つてマキナは親指を立ててスッゴい顔でサムズアップ。

まさかオタな神さまなんて……　って馬鹿あたし！　なんでもちょっと親近感感じてるのよー？　こいつに何をされたか忘れたの！？　こ、これも過守護の効果……？　なんて恐ろしい……。

『うあ～、なんかもじちゃんのこと好きになってきたかも。うんうん、やっぱり主人公の隣にはヒロインがいないとね。ちなみにちなみにちよちよんは戦うヒロインと護られるヒロインなりどっちが好き？』

「え？　あ～、戦うヒロイン……かな？」

『だよねだよね、やっぱりヒロインだって頑張らないとね。戦場で育まれる愛とかもうク～ツてなるよね？』

「ん……まあそれは同感ね。あたし的には特に」

「……話進めてくれないか？」

りゅう君が呆れ顔で言つた。あ……しまった。マキナはケラケラと笑う。

『「じめんじめん。つと、もうちゃんの言つた通り、りゅう君の破壊衝動は過守護のスキルが封じてるの。いやー、最初はさすがの私も驚いたよ。

ラスボス的なキャラとして殺戮竜の身体に、特に潜在能力高かつた人の魂放り込んだら固有スキルで自分を封じちゃったもん。

とはいえ黒竜の竜人としての心の根幹を占める破壊衝動と力を封じちゃったリスクはけつこうあつたんだけどね。根っこが変われば枝も変わる。もこちゃんも氣付いてない？　りゅう君の変なところ』

……変なところって言われたら変なところだらけだ。いきなり胸わしづかみにされたり、全然怪我を気にしなかつたりやたら冷静だつたり。

『破壊衝動と力を封じた影響でりゅう君の心、感情、記憶、欲望なんかも影響がでてんのよ。特に性欲関係は過守護の元々の性質もあつてほぼ消えてるわ』

りゅう君の方を見る。…………なるほど、思い当たる節は多々あるわね……。

『ま、結果完成したのが殺戮竜の破壊衝動と力を封じ込めちゃつて、封じ込めるのに過守護の全能力を使つたうえに心まで変に歪んじやつた、特に何の能力も特徴もない普通の人間のりゅう君ね』

「……けど」

りゅう君が静かに言つた。マキナとは打つて変わつて真剣な表情だ。

「頭に血が昇った時、破壊衝動を抑えきれなくなつたんだ……。もう少しでもこ姉を殺しそうに……だから俺はもこ姉から離れようとした……」

『それ、やめた方がいいよ』

「……なに?」

『今、じゅう君の最優先守護対象はもこ姉さんでしょ? そのもこちゃんが近くにいるからこそ過守護が最大限効果を發揮して破壊衝動を封じられてるの。リアルな話、離ればなれになつたら一週間も持たずに破壊衝動が勝つちゃうよ』

唚然とするじゅう君。けど、ぶっちゃけあたしさそれほど思えなかつた。むしろおかげで楽に決心できる。道が一つなら迷うこともない。

じゅう君の手を取つて、反論できないぐらいにこり笑いかけてやる。

「それじゃ改めて、よろしくねじゅう君

「は? ちょ? もこ姉つ?...」

勝手にどつか行かせてたまるもんか。あたしゃつぱりメンタル弱いんだよ? 友達もいないしゲームも無いこの世界、その中で再開できたとっても大切な人。絶対離してやるもんか。

『おお~っ! ナイスプレイもこ姉さん!』

『マキナは子供みたいに嬉しそうに言った。』
「この子敵意を持ってないのはやつぱりこいつのスキルの影響なのかな？」

『けど、ここがりゅう君のこと好きってこいつのは云々言ってくる。
どういふ好きかはわからないけど……少なくともこここつまつゅう君
が不利になる嘘は言わない。と思つ。たぶん。

ん？

突然、マキナの頭上の空間が割れた。そこからぬうつと、子供の
身体ぐらいの刃が付いた大斧が現れた。

「え？　ちょ？　え？　なに？」

『ん？　むこちゅあんびつ……ひでぶつ？！』

大斧がマキナの後頭部に振り下ろされた。頭に斧が刺さったまま
うつ伏せにばつたりと倒れるマキナ。白い髪が血で赤く染まってい
き、手足がピクピク震えてる。　え？　いや、ちょ！？　な、な
んかマジで死にかけてる？

するとさつきの空間の割れ目から青い髪と青いドレスを着た、別
のマキナが出てきた。

あたしたちの方を見てペニンとお辞儀すると白いマキナの方に視線
を落とす。

『白いマキナ、個人への干渉とルール違反多すぎ、みんなで裁判して、
お仕置をさす』

青いマキナはやつらつと白いマキナの足をむんざり掴み、自分が
出した空間の割れ田の中に放り投げた。

『龍斗さんともいるん、お騒がせしました』

青いマキナはもう一度ペーっとあたしたちに頭をトボボると
消えてしまった。

あとに残されたあたしとりゅう君。……………
ん。あはは……とつあえず休もつか。うん。

おまけ マキナ裁判

黒マキナ『静肅にて、静肅にて、それじゃこれから白マキナひやんへのお仕置き魔女裁判始まるよつと』

白マキナ『意義あり！　お仕置き魔女裁判つて無罪にする無しですか黒ひやん！？』

黒マキナ『うん。それじゃ証人の赤マキナさん証言を』

赤マキナ『やううとうとつて言つたね黒マキナ……。えーと、白マキナは神崎竜斗と浅倉もこに過剰な干渉をし、勝手に時間操作した上に私の担当する試練に勝手に大量にゾンビとか配置しました。……とこりかあたしのお気に入りだつたPJCがゾンビで殺されたんだけどじいじてくれるんの？』

白マキナ『カッとなつてやつた。反省はしていろが後悔はしていいな』

い

赤マキナ『……黒マキナ裁判官へ、こいつ極刑にしてください』

黒マキナ『了解』

白マキナ『あ？！　うわうわめんなさい！　ひよつとふだけただけ！　み、縁マキナ助けて～！』

縁マキナ『……私のお氣に入りだつた女の子、あなたが放つたゾン

『……人ぐらに輪されて狂い死にしたの……』

白マキナ『本つ狂ひめとなさこー。』

青マキナ『反省、してる？ 悪かったって、認めひへ。』

白マキナ『み、認めたく無いものだな。若き故の過ちとこのは…』

…』

黒マキナ『とりあえず有罪でいいよね？』

一同『意義無し』

白マキナ『わ～！？ だ、だから冗談だつてー？ 場の空氣を明るくしづらとしただけだつてー。』

黒マキナ『どんな罰を下されよつか？』

赤マキナ『火山の火口に放り込むのは？』

青マキナ『重しつけて、海溝に沈める』

緑マキナ『魔界の触手植物使つて監禁凌辱調教一週間のあと、身体中に冬獣草の菌糸を寄生させてキノコにするのがことと細つわ…』

…』

白マキナ『みんなひどつ？！ といふか緑マキナが悪い！？』

黒マキナ『ん～、それじゃ火口 深海 魔界植物の順番でやるってこといいかな？』

一同『意義無し』

白マキナ『誰か意義畳えてよーっ とこつか全部やるの?』

黒マキナ『あ、やついえば意義有る』

白マキナ『黒ひちさん……』

黒マキナ『私がまだお仕置き決めてなかつた。足の爪先から一分間に100回ずつ切断していくのはどうかしら?』

白マキナ『お前ら人間じゃねえ!』

赤マキナ『それで、それじゃさしあげ仕置きじみつか』

青マキナ『縁……そつち、押されで』

緑マキナ『わかつたわ』

白マキナ『ま、待つた! ちょっと待つた! 少なくとも緑マキナのきやつたら管理人つていう最高神のお仕置きが……』

青マキナ『ならノクターンでやる。大丈夫』

白マキナ『だ、大丈夫じゃない。大問題だ!』

緑マキナ『お気に入りの仇をとるのです……』

白マキナ『う……うへ、まさかエル ヤダイカウンターが来るとは……』

…』

黄マキナ『じんぢは～、まだ裁判やつてるかな～？』

白マキナ『あ！ 黄マキナ！ 助けて…』

紫マキナ『うふふふ、私のお気に入り、ゾンビに食い殺されちゃつたんだ～、だからちょっとお仕置きをね～』

白マキナ『オワタ＼（^○^）／』

おまけ マキナ裁判（後書き）

実はこれでこの小説の一章終わりだつたりするんだぜ……。

はい、とこう訳で次回からは「一章になります。少し中途半端な気もするけど」一章です。

一章はけつこうダークな感じでしたけど「一章からは少し明るくなるかな？」とあえずもいかやんのヘタレモードは終わります。

で、じつからが本題ですが一章入る前に一週間ほど更新をお休みさせてもらいます m(——) m

この前風邪をひいた影響で書き貯めてた分が無くなつちやつた上に、今も少し体力が低下してて夜更かしして書くのが厳しくなつちゃいまして f(^ ^ ;

とりあえずもうすぐお盆休みに突入するので、一気に書き貯めて念入りに推敲したいと思つます。とこう訳で「理解」と「協力お願ひします m(——) m

それでは皆様、一週間後にまたノシ

四四三 小休止な一日（前書き）

待たせたな！！

というわけで一週間ぶりの更新です。
お盆休みのおかげでゆっくり休めましたし体調も万全です！
書きための方もそこそこ……では行きます！

前回までのあらすじ：2回目の試練から帰つてきました。
もじりやんへタレ卒業へ（^○^）／

六日目のあるあとは、あたしりゅう君はほとんど一日中寝て過ごした。

りゅう君は試練で受けたダメージがキツかったから。あたしの方は久しぶりに走り回って筋肉痛でしばらく寝込んでたんだけど……たぶんだけどゲーム脳の効果で宿屋でしばらく寝ると体力も魔力も全回復するみたいなのよね。だからりゅう君を回復しては寝て、回復しては寝て、を繰り返して一日過ぎたってわけ。

ちなみに恋ちゃんも試練やつて、PKとも戦つたらしいけどひんぴんしてた。おまけにオオイグっていう移動用の動物と、これから旅で必要になるものも買い揃えてくれていた。あのちっちはい体のどこにあんな体力有るんだる……。

ただ、あたし達に必要な物を買って無かつたから、りゅう君を留守番させてあらためてあたし、フイロちゃん、恋ちゃんの三人で町に繰り出すことになつた。

「……どうも周りの視線が気になるわね……」

あたし達は町の商業地区を三人で歩いていた。

この辺りはかなり賑やかだ。雑貨屋やら食べ物系のお店、さらには露店や路上販売なんかがあちこちでやってて、その分人もやら多い。その中ですれ違う人（特に男）がかなりの確率であたし達の方を振り返ってる。

なんかあたし達かなり目立つてるみたい。……まあ当然よね。

チラリと後ろを振り返る。

フィロちゃんは狼人族ってことで余計なトラブルを招かないよう、フードと上着で犬耳やしつぽを隠している。けどフードから覗く顔はやっぱりかわいい。人混みに緊張してる姿はもづき抱きしめたくなつてくる。

そしてそれとは対照的に下駄をカラソ、口ロンと鳴らしながら堂々と歩く恋ちゃん。他の人とは違う東洋系の顔立ちにさらさらの長い髪、おまけに着物で下駄となると目立つなつて方が無理だ。

「ん？ どうしたのじゃ浅倉？ わしの顔に何か付いてあるか？」

「あ、いや、一人ともかわいいからやつぱり目立つなー、なんて」

そう言つと恋ちゃんは「かわいー……複雑な気分じゃのう」とため息つきながら田を細めてあたしを見る。

「確かにわしらも田立つておるが、一番田立つておるのはおぬしじやぞ？」

「へ？」

「人の視線や気を読むのには慣れておるから間違いない」

いやいや、なんであたしよ？ 明らかにフィロちゃんに恋ぢやんの方が目立つ要素満点でしょ？

「もひさん、女の私から見てもかわいいですからね。ひそひそ周りで話されますよ？」

フィロちゃんの耳がフードの中でピクピク動いた。

う、噂？ え？ えと……あ、そつか……今はあたしもかわいくなつてるんだっけ？ そう言われればさつきから視線が……きやつ？！

よそ見してたら誰かにぶつかってしまった。

まづい、謝らない……と？

「大丈夫ですか？ お嬢さん」

田の前にいたのは金髪巻き毛の超イケメンだった。カチンと身体が硬直した。

「申し訳ない。あなたのあまりの美しさについ見とれてしまいまし
た。……よろしければお詫びをさせていただけませんか？ 近くに
いい喫茶店が有るんですよ」

え……？ あの？ え……？ ちょ、これナンパされてる？ え
？ いや、ちょ、待つ……

思考が停止。なんか顔が熱い。耳まで真っ赤だよ。しかし男慣

れしてないんだよ。オタク舐めんな。高校入ってから数えるぐらいしか男子と喋ったこと無いんだよ。

助けてフイロちゃんー！ 恋ちゃんー！

「パクでSOS。恋ちゃんとフイロちゃんが顔を見合わせる。フイロちゃんが慌てたように手と首を振ると、恋ちゃんがやれやれといった感じでまたため息をついた。テテテと小走りに走ってきてピョンとあたしの肩に抱き付く。

「おね～ちゃん 早く行かなくていいの？ 彼氏待たせちゃう？」

かなりビックリした。恋ちゃんは天使みたいな笑顔であたしにしがみついてる。や、やっぱ……可愛すぎ……は、鼻血出やつ……。

「彼氏持ち……か」

さつきのイケメンはいきなり興味を無くした顔になつた。そのまま恋ちゃんに手を引かれていったん人混みを脱出して路地裏へ。ホツと息をつくと後頭部を恋ちゃんに小突かれた。

「まつたく、あれぐらー一人でさばけるよ！」ならんか

「「」めぐ。ありがとね？ あんな演技恥ずかしくなかつた？」

「」の程度の「」とを恥ずかしいと思つほど未熟でもないわい。むしろ恥ずかしがつて弟子の友人を護れん方が恥ずかしい

地面に着地して「ふんっ」と胸を張る恋ちゃん。なんつか男前よねこの子。

「…………そりゃまだ何を買ひに行か聞いてなかつたのう。こつ
たい何を買つんじや？ わざわざ神崎を留守番をせへ

「下着とナップキンとかね」

…………。

ん？ なにこの間。

「…………すまん、なんと言つた？」

「だから下着類と生理用のナップキン。ちやんと買つとかないと困る
でしょ？」

「うちの世界にも元の世界みたいな生理用品や下着類は有るみた
い。マキナも女の子だしそこは気を効かせたのかな？」

ん？ なんか恋ちゃんの表情が凍りついてる？

「私なんか奴隸商の皆を脱出するときのゴタゴタで下着 着けて来
れなくて……突然吹いてくる突風がすぐ怖かつたです……」

フイロちゃんが乾いた笑い声を上げた。恋ちゃんが盛大に吹き出
した。

「な？！ つ、つづまつおぬしは今、はいて……、あ、いや、す
まぬ、何でもない」

「どうしたんだろ？ なんかいきなり様子が変わったけど……？ 憂うすきてむせて咳き込みだした恋ちゃんの背中を擦りながら顔を見る。なんか赤い。んー、まあいいか。

「あたしももうすぐあれの日だったからナップキン買えそ�で安心したよ……。ト半身血まみれとかになつたら本当に泣くしかなこし」

「あ、それじゃ生理痛のお薬も貰いに行きましたよ。よく効くお薬知っていますよ？」

「ほんと？ よかつた～。あたしがいつ重に方だから薬無いとけつぱりのやね。……あれ？ 恋ちゃん？」

恋ちゃんは顔を真っ赤にしたまま口をパクパクさせていた。
……せせーん、わかつた。さてはこいつ話が恥ずかしいのね。やつぱりこいら辺は子供だなあ。ちょっと指ぬ……じゃないで、お姉さんとしてこういろ教えてあげないとね。うん。
恋ちゃんの耳元に口を寄せた。

「恋ちゃんって生理まだ？」

「ブツ～！」

「その反応はまだかな。んー、けど旅してる間に来るかもしけないし、一応恋ちゃんの分も買つときましょうか。ナップキンの使い方とか知ってる？」

「ふ、しそし知つているわけ無からづがそんなものー」

言つた後で恋ちゃんはハツと口をつぐんだ。墓穴を掘つたつて感

じの顔だ。なんかいつやって恋ちゃんにじるの楽しいかも。あ、いやいや、あくまでも恋ちゃんのために教えてあげよつとつてるだけだからね？

「せっか、それじゃ今度教えてあげるね?」

「い、いらんわー、わしは……」

「やうだ。恋ちゃんの下着も買つとかなことね。ブラも……一応買つときまじょうか。着物の上からだと大きさわからなしお店の人にお測つてもらいましょうね?」

「だ、だからいらんと……」「ダメだよ。ちやんと付けとかないと形が崩れるつて言つてしままい激しく動くと見えりやうよ」

「わっかくですからレンさんの洋服も買いましょうか? 着物だけじゃなにかと不便ですしね」

「フイロちゃんナイスアイデア。せっかくだからりんとかわいいの選んであげよ」「

逃げ出でたとした恋ちゃんを後ろから捕まる。ふふ、いくら強こつて言つても子供だし、力はあたしの方が上ね。

「は、はなさぬか!」

「だめー、これから旅になつたしあとんと準備しないこと。そ、行こ」

そのまま恋ちゃんを抱つこしながら歩いていく。最初は……下着

売ってるお釣りがちょうどよしあうか。

「わ、わしが何をしたああああつーーー。」

恋ひさんの叫びが辺りに響き渡った。

Side 神崎 竜斗

速い。広大な平原の風景がどんどん後ろに流れしていく。昨日の昼に町を出て丸一日、俺達はオオイグの背に乗つてフィロの故郷を目指して移動していた。オオイグってどんな生き物かと思うが……なんのことは無い、超巨大オオイグアナもどきだ。

俺達四人が余裕で乗れるぐらいの大きさ、背中は平べったくて乗りやすく、しかもあまり揺れない上に速い。おまけに大人しくて頭もいいとまさに乗り物になるために産まれたようないや、たぶんそのために産まれたんだろう動物だ。

俺はオオイグの背中に取り付けた座椅子の上でそんなことを考えていた。フィロは頭に近い部分で手綱を握っている。元々オオイグに乗るのが好きだったらしくて、気分が良いのかしつぽがパタパタ揺れっぱなしだ。さつきまでは鼻歌まで歌っていたんだけど俺がそれを言つたら恥ずかしがつて黙つてしまつた。

上手かつたのに……悪いことしたか？

もこ姉の方はなんか意識が朦朧としてる。どうも爬虫類が駄目だつたらしくて、オオイグとの初対面では卒倒しかけていた。そういえば子供の頃聞いた覚えがあるな、たしか寝てる時にヤモリが背中に入つて来て、そのまま寝返りをうつてグチャツつてなつたのがトラウマつて。爬虫類……竜人の俺は大丈夫……だよな？

で、師匠は……。

「の、神崎、わしは……」こんなキャラじやつたか……？」

なんか俺の隣で体育座りでいじけてる。昨日、もじ姉たちと一緒に買い物に行つて帰つてきてからずっとこんな感じだ。（ちなみに帰つてきた時は白と黒を基調にした「スローファッション」だった）

「あの手の話を聞いただけでやたら恥ずかしくなるは、ひらひらして服を着せられて……その……、ほんの少しかわいらしげと思つわ……、のう？ わしつてこんなキャラじやつたか？」

「いや、知らないつすけど少なくとも自分のキャラで悩む人ではなかつたと思います」

そう答えると師匠は深くため息をついた。暗い顔でオオイグの背中に『の』の字を書き続ける姿はまるで普通の女の子みたいだ。

少なくとも元の世界にいた時の、毎日俺をじごいていた姿とは重ならない。

「もしかしたら……、体に合わせて心が変化していくのかのう……」

そう呟いて師匠はぐつたりとつんだれた。

体に合わせて心が変化する……？ 確かにそれは有るのかも知れない。俺の方も竜人の体になつて破壊衝動とかとんでもないもの持つようになつたし、肉……とりわけ生に近いレア肉が以前より好きになつた。

人間の男女だけでもホルモンバランスとかでかなり違いが有るらしいし、元の世界と違う体になるとやっぱりいろいろ有りそうだ。

……だとしたら、もし人間以外の体にされたプレイヤーがいたら、そいつはどうなるんだろうか？ ん？

突然、オオイグの速度が落ち始めた。まるで体の筋肉が硬直するように動きが固くなつていく。みるみる内にそれは酷くなり、やがて止まつてしまつた。

「フィロ、どうした？」

オオイグを操つていたフィロに声をかける。フィロも何が起きたのかわかつていないのでわたわたと慌てていた。

「わかりません。いきなり……おかしいですね」

フィロはペシペシとオオイグに鞭を打つ。しかしオオイグは微動だにしない。

その時、ふと周りの空気が変わることを感じだ。何か空気が重く、冷たく感じる。ゾワリと鳥肌が立つた。

「あは 四人も来た」

後ろでもこ姉の妙に明るい声がした。振り返るとそこには嬉々とした表情のもこ姉。さつきまでの憂鬱な顔はどこえやら、大好物を前にした子供みたいな表情をしている。

「もじ姉？」

「ふんふんふん　ひっさしふりの」「飯」「飯」

も「姉は鼻歌混じりにいじけてる師匠に近づくとその肩に手を置いた。

「……浅倉？」

「いただきます」

もう姉が師匠に襲い掛かつた。

「んな？！　浅倉何を　むぐつ？！　～～つ？！？！」

あ～……なんだつたかなこれ……。

以前マキナに聞いた話だと、過守護が破壊衝動を抑えた関係で幾つかの欲求や知識が巻き添えみたいな感じで抑えられてるらしい。……けどこれは少し覚えてる。たしか……ディープキスつてやつだ。

「むぐつ！？　ん、ん、んん～～！～～？」

うわあ、呑入ってる。あれ絶対苦しいだろ。師匠必死にもがいてるし。

けども「姉はがつちり師匠を捕まえたまま、師匠の唇を塞いでいた。繋がった唇からピチャピチャと水っぽい音が聞こえる。

しばらぐすると師匠の抵抗がやんだ。動かなくなつた師匠の唇を貪るとも「姉は手を離す。師匠はその場にへタリこんでしまつた。

「あ～、おこしかった～。つ・せ・せ……」

視線がフィロの方に向かう。あっけにとらわれていたフィロは「ふあっ？！」とすっとんきょううな声を上げた。

「うひふふ～　おいしそ～　」

今度はフィロに襲い掛かる。ん～、あ～、たしかキスってのは愛情表現の一つみたいなもんだつたよな？ 要はスキンシップだよな？ ジャあほつといでいいか、仲が良い」とは悪いことじやないし。

「うひ～！？ もひひひ……ん、んんひ」

さて、それはもうとなんでオオイグが止まつたかだよな。
む～い、ちゃんと動いてくれよ～？ 歩きとかごめんだぞ～？

「だ、ダメですよもひひ～！ わ、私たち女の子回転で…
は、んあ……」

「よこではないかよこではないか～　けひひひ反応してるくせに

」

後ろでも姉とフィロが取つ組み合つてる。仲良になあホントに。
俺ももこ姉とあれぐら～仲良くなれたらいいんだが……いや、そす
がにあれば引くか。

「だ……ダメ～」

「つふふ、いただきま～す」

つと、だからなんでオオイグが動かなくなつたかだ。

腹が減つてるとか……いや、フイロがちゃんと食わしてたよな。

……そういうや止まる時、なんか足が痙攣して金縛りになつたみたいに止まつた。もしかしたらモンスターの攻撃かも……。

「師匠はどう思います?」

やう言つてわざからへたつこんだままの師匠の方を見る。ナビ
無反応。

「師匠?」

肩を叩く。するとなんの抵抗もなく師匠の体がパタンと倒れた。
目に光が無い。

「 は?」

フイロの方を見る。もじり姉の腕の中でへたりこんでいた。師匠と
同じように目に光が無くなつている。

もじり姉は口をモグモグさせながら俺の方を見た。

「ムグムグ、あひさて、あとはお兄さんだけだね」

お兄さん?

昔から、周りからは大抵 僕の方が年上に見られてたけど実際はも
じり姉のが年上だ。もじり姉の方も年下に見られるのを気にしてたらし
く、俺にもじり姉って呼ぶよつに強制してきたぐらいだ。
そのもじり姉が俺を「お兄さん」なんて呼ぶわけがない。

「お前……誰だ?」

「おひ。気付かれた?」

もし姉の姿をした誰かは面倒くさうに頭をかいだ。

「ん~とね~、お兄さんたちもプレイヤーだよね? 私 幽靈になつたプレイヤーなの」

「……はあ?」

「いやだから幽靈よ幽靈。今はこの子の体に憑依してゐるわけ

「いや、わけつて言われてもわけわからないからな?」

「あ~、説明めんどくさいし、見せるわ」

そう言つともこ姉の体から何かが……いや、何かじやなくて……人魂だ。青白い火の玉がもこ姉の背中辺りから出てきた。あ~、え~と、俺、幽靈とか信じてなかつたんだがまさかこんな形でこ対面するとは思わなかつたぞ?

「と、言つわけで私 今は幽靈なわけで、魂がこ飯みたいなもんでも食べないと死んじゃうわけで、ああもう死んでるのか……とにかくお兄さんの魂食べさせてよ~」

人魂はふわふわ揺れながらもこ姉の体に戻つていく。

「魂食べないと消えちゃうわけよ。だからお願ひお兄さんの魂食べさせて? 一口だけ、いや舐めるだけでいいからお願ひ! 同じプレイヤーのよしみで!」

もこの姉の体にとついた幽霊……一応プレイヤーか。パチンと顔の前で手を合わせてペコペコ頭を下げている。

「……師匠とフィロの魂も食つたのか?」

「うん。 そだよ」

「二人はどうなる?」

「魂一口食べただけだから、少ししたら回復するし後遺症もないよ。十人ぐらい食べただけどみんな大丈夫だったから」

小さくため息一つ。まあ……後遺症もなんもないなら少しくらいはいいか。同じプレイヤーのよしみ……いや、似た境遇のよしみだ。今までとまったく違う体に放り込まれて、まったく違う体のルールに縛られてる。その気持ちはとてもよくわかる。

「わかった。いいぞ」

「本当に! ? うつわあありがと~ じゃあひとつと畠んで、口移しじゃないと魂食べれないの」

「ふと……! ? うか?」

言われた通りに少し屈む。顔が近い。……あれ? なんだ? なんか胸が……ドキドキする。

「やうそ、そんじゃいくよ。変な氣起こしちゃダメだよ?」

「変な気つてなんだよ?」

「またまた～、わかつてゐるくせに～、それじゃいただきま～す」

その夜

鐵拳が飛んでくる。ちょ？！ なんで俺こんなぶちギレられてるんだ！？ 痛つ！？ 痛い！ や、やめ！

「よ、よつによつてあたしの、…………しかもティー…………うあああああん!! 変態変態変態つ!!」

「い、いい加減にしてくれ！」

もこ姉の両手首を掴んで動きを止めた。自然と顔が近くなる。今度はもこ姉の顔が一気に真っ赤になつた。

「ア、アアアアアイテム取り出す！ おつきな石！」

次の瞬間、もこ姉が俺の頭上に取り出した大きな石が脳天に直撃した。視界に舞い散る星。目の前が真っ暗になつた。

side フィロ

いろいろととんでもない田に会いました……。まさかもこさんが亡靈にとり憑かれてあんなことになるなんて……。

いえ、それはまだいいんです。みんな無事だったし過ぎたことです。……ファーストキスっていうのは少しショックではありますけど、女の子同士でしたしあんな状況でしたからリュウトさんもノーカウントにしてくれるでしょう。

問題なのは亡靈にとりつかれたもこさんで、リュウトさんが自分から魂を食べさせたようだということです。

魂を食べられた時の記憶は朧気だけど、リュウトさんがもこさんに憑いた亡靈と話してて、自分から吸魂……もこさんのキスを受け入れたように見えました。

一步間違えば死んでたかもしれないのになんてそんな……。

もこさんが奴隸商に捕まっていた時、リュウトさんは危険を省みず助けに来たんですよね。その後も水妖から身を挺してもこさんを護つたり、それでもずっともこさんのこと気遣つてたり、ただの幼なじみのためにそこまでできるでしょうか……？

まさかリュウトさん、もこさんのことだが……。

や、やうこえぱもじさんも、私とコウトさんが話してるとよくチラチラこちを見ときますよね。今思い返してみると好きな人が他の人と話すのを気にするよつて見えなくもなかつた気が……。

三日前は突然いなくなつたと思つたら一晩同じ部屋で過ごしてたみたいで……おまけに一人共やけに疲れ果ててしまつたし汗臭かつたし……、ま、まさか……まさか……！　あわわわわー？

「どうしたのハイロちゃん？　なんか悩み事？」

「ひやーい？ー」

あ……あいつ、変な声出でやこしましたよ。もじさんが私の顔を覗き込んでました。

「悩み事なら何でも相談してね？　話聞くから」

「は……はー」

相談……ですか。……一人で悩んでるよつ……ちやんと聞いた方がいいかもしだせんね……。

……でもこれでもこさんと喧嘩したりしたくないし……いえ、隠しごとするのはもつと悪いですよね。お父さんも友達には隠しごとはいけないつて言つてました。深呼吸。もじさんの目を見た。

「もじちゃんはリコウトさんのこと好きなんですか？」

……少しストレート過ぎましたか。もじれと目が点になつてゐる……

…。

「え？ ちよ、な、なんでそんな話になつてんの？ 」この間も言つたでしょ？ あいつとあたしはただの幼なじみだつて

「ただの幼なじみ……ですか」

もこさんならやつぱりそう答えますよね。これがもこさんが教えてくれたツンデレつてやつでしょうか？ ……真相を確かめるにはもつと踏み込まないといけませんか……。仕方ありません。恥ずかしいんですけど……。

「少し耳貸してくれません？」

「え？ 」「うーん？」

他の人が聞いてないかを確認。無言詠唱で音漏れ遮断の陣も展開。もこさんに近付いてそつと耳打ちした。

「実は私……もうすぐ発情期なんですね……」

「…………は？」

「私たち狼人族は年に数回発情期が有つて……その間は……その……、Hなことをす”くしたくなるんです」

もこさんの顔が赤くなつていぐ。聞こえてくる心臓の音がす”く早くなつた。私のほつぺたも熱いです……。

「ふ、普段なら魔法薬で抑えるんですけど、今はそれが無いから……

……あ、いえ……それでも我慢できるとは思いますけど、万が一、万が一ですよ？ その、もしかしたら我慢できなくなつて……その時はリュウトさんと……」「そんなの絶対ダメえつ……」

……予想以上の反応ですね。もじさんはあわてて口元を抑える。けれどこれで確信が持てました。

「やつぱつ……もじさんは好きなんですね……」

「は？！ ちょ？！ ち、ちが……！ あたしが好きなのは……」

「隠さなくていいですよ。……私もリュウトさんが好きです。愛しています」

ガーンと効果音が鳴りそうな程ショックな顔したもじさん。やつぱりショックですよね、友達がライバルなんて……でも、これだけは譲りません！

「もちろん何が有るつとどういつ結果にならつと私はもじさんの友達でいたいと思つてます。……でもこの恋は譲る気はありません！ ですから、これからは友達でありライバルです！」

「いや！？ だからあたしは……！」

「それでは、正々堂々よろしくお願ひしますー！」

もじさんに背を向けて歩き出す。な、なんかついカッとしているいの言つちやつた氣もしますけど……大丈夫ですよね？

とにかく発情期が近いのは確かですし、どうしましょ？……。わ、

さすがに本当にしづやいのはちょっと……その、やつぱつちやんとお付き合いしてからといつか……、最初は痛いっていう怖いですし……。

「けども」やんつてライバルがいる以上、うかつがしてられませんし……。

あれ？ そういうえば竜人にも発情期つてあるはずですよね？ 亜人や獣人はみんな発情期が有るって聞いたことがあります。で、発情期があるとすれば赤い月が昇る田の前後、私と同じ時期のはずですよね？」

……どうしよう、ドキドキしてきました……。

「とにかく頑張りましょ」「おおフイロ、神崎を知らんか？」

レンちゃんがやって来た。

肩には白い手拭いをかけ、キヨロキヨロと周りを見回していく。

「かんざわ……ああ、ココカトセさんのことですね。知りませんよ」

「せうか……どう行ったんじゃあこいつ、一緒に水浴びでもしようつと思つたのじゃが……」

「……一緒にですか？」

「つむ、髪も解かしたいのじゃがこの髪を解かすのが一人じゃとかなか大変でのつ。綺麗でなかなか気に入つておるから切りたくはないしの」

レンちゃんは自分の髪を「」機嫌で撫でる。本当にさりげなくて綺麗……。レンちゃんって少し男っぽい気がしますけど、この辺はやつぱり女の子ですね。……って、い、一緒に、も、まあ、ンセさまだ子供ですしね。あせは……。

「なら私と一緒に水浴びしましょ、つか」

「え、遠慮するー。神崎と行くー。」

あれ？ なんで私だとこんな必死に？ 普通逆じやないですか？

「さび恥ずかしくあつません？ もうもうおまかこい気がしますがさ…」

…

「……別に恥ずかしくなどない」

……なんかお兄さんになついた妹みたいですね。

「つづつづづ」

「な、なんじや？」

「あ、すこません。なんだかやつぱりレンちゃんも子供なんだな～って」

レンちゃんが少しムッとした顔をした。ちゅつとまづかつたですかね？ これぐらいの女の子って子供扱いられるの嫌がりますし。

「し、失礼な！ 誰が子供じや誰が！」

ああ、案の定ですね。けどなんかかわいいです。

「「めんなさい、けべ子供でいれる期間つてす」「く貴重なんですよ、ですかり……」

「じゃ、じゃから子供扱いするでない！ わしの方がおぬしらなど
よりよつぽど大人じや！」

「はーはー、「めんなさい」「めんなさい」。レンさんは大人ですね～」

なんかもこさんがレンさんを弄るのが楽しいって言つてた気持ち
がわかりました。むきになつてくるところがすゞくかわいいです。

「……少し耳貸せ」

「はー？」

言われた通り少し屈む。レンさんは私の頭の上の耳に顔を近付けると何かを話し始めた。

「…………の…………じゃから…………」

……え？

「…………に…………勃…………して…………」

え？ ちよ？ え？

「…………馬ば…………で…………じゃから…………×…………」

ちょ？！　え！？　いや！？　あのー？　え、ええ？！　な、なんでその歳でそこまで知つて……といつかなんで男性心理までそこまで詳しいんですか？！

顔を真っ赤にしながら「 Bieber」と言わんばかりに胸を張るレンさん。逃げるみたいに私から離れて行つて……少し離れたところで頭を抱えて何か悩み始めました……。

いや、でも本当に私以上にいろいろ知つてましたよ？！……まさか、リュウトさんと水浴びに行つてるのは……！

……強力なライバルが増えましたか……。

これは……本当にうかうかしてられませんね……。

side 浅倉 もこ

青白い月が照らす中、あたしとりゅう君は一人で焚き火にあたつていた。

風が少し肌寒い。上着をギュッと寄せて、手を擦り合わせる。手がかじかんじやうのはまずい、ボウガンで狙撃するにはけつこう致命的だ。

そんなことを考えてたらりゅう君がピクリと体を震わせた。

「もこ姉、モンスターが来てる。鳥糞で数は一匹」

りゅう君は夜空を指差す。また来たのね……。たき火に近付けて手を暖める。

「ん、了解つと……装備変更」

あたしの手の中にボウガンが現れた。それをりゅう君が指差す方向に向けた。一瞬、月明かりを反射して大っきな怪鳥の影が見えた。距離は70mぐらい。狙いを合わせるあたしの視界の中に十字の照準マークが表示される。重力とかの影響を考え、照準を怪鳥の少し上に合わせ、引き金を引いた。ビュンと空気を裂いて矢が飛ぶ音。ちょっと遅れて怪鳥が地面に落ちるのが見えた。

幽靈騒動から四日経つた。

あのあとはずいぶん平和に……いや、魔物の襲撃とか何回も有ったし普通に考えたら全然平和じゃないんだけど、この世界に来てからの日々の中では一番心穏やかな日々だった。

まあ、あれよ。自分で言つとあれだけだたし、少しあは成長できただと思つ。

特に自分でも「」と思つたのが飛び道具の腕前。元々戦争ゲームなんかも好きで、廃人プレイとかもしてたんだけど、その腕前がこちらの世界ではそのまま適用されてるらしい。……具体的に言うと半径100m以内なら確定でヘッジショットできるぐらこの腕前。

おかげで魔物との戦闘にも参加できるようになつたしレベルも順調に上がつて14まできた。

……レベル上がつてるんだけど白マキナがボーナス渡しに来ないのよね。一回目の試練の後に頭叩き割られたせいかもしれない？

それと、あたしのゲーム脳もなかなか役に立つてると思つ。ああ、ゲーム脳つて言つてもスキルじゃなくて考え方ね。

例えば夜眠る時の役割分担。魔物の襲撃に備えて一人ずつ見張りと休む側に分かることになつたんだけど、そのチーム分けはあたしが決めた。

まず、鼻と耳で広範囲の索敵ができる竜人のりゅう君と狼人のフイロちゃん。この二人は別チームにしつづべき、ゲームでも索敵が強いキャラが一人いると何かと便利だし。（フイロちゃんが悲しそうな顔してたけど）

さらに松明の魔法で辺りを明るくできるフイロちゃんとあたし（あたしはフイロちゃんに教わった）も別チーム。フイロちゃんと一

緒のチームになれないのは残念だけど背に腹は変えられない。曇り空の夜とか、索敵できても真っ暗なまじや意味薄いし、視界を保つのはゲームでもとつても大切だ。そして何が起きても問答無用で対処できる恋ちゃんは一番モンスターの襲撃が多いっていう丑三つ時には必ず起きててもうう」とした。

ちなみに今はあたしとりゅう君が見張る番で、恋ちゃんとフイロちゃんはテントで寝てる。

うんうん、我ながらいい布陣だ。

やつぱり役に立つての実感が有ると充実感が違うわね。後は……

「一万円と一千円出したら愛してる~」

「……なんの歌だよモコ姉……」

「別に~」

ん、この歌にも反応しないか。

りゅう君と仲良くなるための計画として、あたしが小声で歌うアソソニ反応するかのテストを実行中。とりあえず再会した直後に見たりゅう君の携帯に有った待受画面から、りゅう君が初代ガンムを好きなのは確かだ。

けど残念ながらあたしは昔のガンムにはあまり詳しくない。というかあたしは平成ガンム派だ。……ガンムファンは大きく分けて二つに分かれるとと思う。初代ガンムを中心とした旧世代派と、平成に入ってから作られたガンムを中心とした新世代派。

なぜこんな派閥が産まれたかとこうと。ああ、まあいいや。要するにあまり仲がよろしくないんだ。

もひるん両方好きと、とかあたしみたいに向ひて向ひの良さが有るつて割り切つてる人は良いんだけどりゅう君がそつとは限らない。

もし、りゅう君が新世代アンチだつた場合、下手にガンムの話を振ると仲良くなるどころか喧嘩の原因になりかねない。

だからあたしは別の方面つまりガンム以外の別のロボットアニメからアプローチをかけることにした。ガンムが好きなら他のも好きかも知れないしね。

まあ要するに小さな声であたしが知つてゐる歌つてみて反応示したら当たりね。りゅう君は耳やたらいいみたいだから小声でもちゃんと聞こえるみたいだし。

「ふ～んふ～ん、ふんこ～が～し～」

……反応無し、と。じつそり携帯のメモ帳に記入。

「給料三ヶ月分、結婚指輪」

。

……これも違う、と。ん、どの歌なら反応しそうかな。ちょっとロボット系以外にジャンル変えてみますか。

「ナインボールは 今日も～元氣に～、ミサイルばり時を飛ぶよ
テ、テ、テ、テ、テ、デストロイ～」

……ヤバい。こ～り向でもマニアック過ぎた。は、恥ずかし

い……。も、もつむよこまともなので……。

「半径へ 85 mはへ 超電磁砲射程距離へ」

(その歌 知つて る……)

「へ?」

突然女子の声が聞こえた。びっくりしてりゅう君の方を見る。けどりゅう君は別に何事も無いように飴を舐めながら周りを見ていた。え? 龍人のりゅう君の方があたしより断然耳いいはずなのに……。

(お姉、ちゃん、マキナちゃんの、お友、達、?)

途切れ途切れに聞こえてくる声。その声はひびく苦しそうで、息も絶え絶えという感じだった。

(お……願い……助けて……殺さ……れる……)

「え? ! ちょっと! 殺されるって何よー? !」

「もう! 姉! ?」

突然叫んだあたしに驚いたのかりゅう君が声を上げた。すると聞こえてきた声の声色が少し変わった。

(黒竜の、竜人? 良かつたまだ、生きてる人、いた
んだ、お願い、助けて、じつち……)

「つ？！ もじ姉今の声は…？」

今のはりゅう君にも聞こえたみたいだ。

周りを見回す。けど人影らしいものは無い。

「あなた誰！？ どこのいるの…？」

見えない誰かに向かつて叫ぶ。するとテントの中からフイロちゃんが出てきた。

「……………」

田を擦りながらあたしたちの方に近付いてくる。…………りゅう君以上に耳がいいフイロちゃんにも聞こえてない？

「わからないの、突然声がして……」「…………え！？」

突然あたしたちの田の前で空間が裂けた。まるで空間を無理やり押し広げたような穴。その穴の向こうは真っ暗で、何も見えなくなつていて。

(おね……がい、助け……て、ぼく……、死にたく……ない……)

この声はフイロちゃんにも聞こえたらしい。驚いた顔であたしを見る。

……この穴に入れつてこと？ でも見るからに座っしゃ……。

「もし」姉とフイロは待つてくれ、俺が行つてくれる

「ちよ！？ りゅう君何をあつたり決めてんのよ！？ 何が有るか

わからないでしょー?」「俺は……」

りゅう君はあたしを見てニカツと笑つ。

「助けてくれって言われたからには助ける。もし罠か何かでも……、
その時は俺が死ぬだけだ」「…………

その言葉を聞いて、あたしは鳥肌が立つた。過守護の効果で
心が影響を受けてるのは知つてたけど、こんなにも簡単に、普通に
“死ぬ”なんて言えるりゅう君に戦慄した。……再開した時からそ
うだ。りゅう君は自分自身の優先順位が低すぎる。死ぬことを気に
してないんだ。冗談抜きで誰かのためならあつさつ命を捨てちやう
ぐらい】。

「行つてくる

「あー、待つて!」

りゅう君は迷ひ【ともなく六の中に飛び込んで行く。
一人で
行かせるのは……まずい!】

「ちよつとー、待つて!」「コ……ココウアヒタゴー!」

あたしとハイロウちゃんは後を追つて六の中に飛び込んでいった。

十一田畠（2）（前書き）

前回の話……本当は替え歌を仕込もうと思つて頑張つて作つてたのに……（お察しください）

ナインボールの歌詞と曲両方わかつた人いたら友達になりたい

勢いで飛び込んでみたけど何にも見えない。……いや、遠くに小さな光が見える。トンネルみたいな構造になつてゐるみたい。そして光に向かつて走つていくりゅう君の後ろ姿も見えた。

「もしもーん！ だ、大丈夫ですか！？」

フイロちゃんがあたしの手を掴んだ。フイロちゃんは呪文を詠唱して光の玉を打ち上げる。

……けどフイロちゃんが見えるようになつた以外は見えるものは変わらない。ところよりは周りが完全に真っ黒で光を出そうが出すまいがあまり関係無いみたい。

「何……？」「……」

真っ暗な何も無い空間に浮かんでるような、それでいて地面はしつかりと感じられる不思議な感覚。フイロちゃんは目を鋭くして周りを見回した。

「空間連結魔法みたいですが……本物なんて初めて見ました……」

「……そんな珍しい魔法なの？」

「珍しいなんでものじやありませんよ。時空間へ干渉する魔法はあ

らゆる魔法使いの最終目標なんて言われて、使える人だつて世界中探しても100人いなって言われてるんですよ?」

時空間への干渉ねえ……なんかマキナは普通にやつてた気がするけど……。あれ? そういうえばあたしを呼んだ声、あたしに『マキナちゃんの友達?』なんて聞いてきてたつけ……。恋ちゃん起こして連れて来なかつたの失敗かも……。

後ろを振り返つてみてもあたし達が入つてきた入口は見えない。う~、ちゃんと戻れんのかなこれ……。

そうしてとりあえず歩いてる内にあたし達はトンネルの終点に着いた。通り抜けた先は小さな泉だつた。周りはうつそうとじげる樹海。木々が空を覆い隠してとても暗い。

けど、その中で泉の近くだけはキラキラと明るくなつていて。泉が自分から光つてるのかな? えつと、りゅう君は……いた。

泉の近くにりゅう君がしゃがみこんでいる後ろ姿が見えた。あたしとフイロちゃんは駆け寄つて……つて、うわっ?!

りゅう君の前に一人の女の子が倒れていた。身体中に刀で切られたようなひどい傷が有つて、息をするのも苦しそうだ。

「もー!姉!ー? ついて来たのかー?」 「いいからどうでー!」

早く回復してあげないと! りゅう君を押しのけてその子の体に手を当てる。

「【ヒールー】

淡い光が女の子を包んで傷を治していく。その間にあたしはその

子を観察した。歳は……恋ちゃんと同じくらいかな？

足元まで届くほど長くて、透き通るような淡い水色の髪で、右目は前髪で隠れてる。肌はびっくりするぐらい白くて、お人形みたいな顔立ちも合わせてなんか人間離れしてる。その小さな体に付いたたくさんの刀傷が痛々しい。

体はローブみたいな薄い布で覆われてて、濡れてびしょびしょだ。濡れた布のせいで体のラインがはつきり見えてエロ……じほん。

……着ている布から出た細い手や足に、飾りみたいなヒラヒラした魚のヒレっぽいのと、小さな蒼い鱗が付いていた。この鱗……なんかりゅう君の竜鱗と似てる。

りゅう君の方を見る。女の子の体に付いた鱗を見つめて、じっと何か考へてる。

りゅう君の反対側で見ていたフイロちゃんも心配そうにその子を見ていた。

「この子も竜人……みたいですね。伝説の竜人と一人も会うなんて……となるとこの傷はハンターに付けられたものでしうか……？」

「ハンター？」

「竜人や悪魔を狩るっていう組織の総称ですよ。……竜人と同じで半分伝説みたいなものなんですけどね。けど竜人にここまで傷を負わせられる人なんてそういうとは思えませんし」

ハンター……ね。ゲームとかでのモンスター側の気持ちってこんななのかな……。

もう一度女の子に視線を戻す。体の見える傷はある程度回復して

めた。けど顔色は相変わらず悪いし息も苦しかった。

……あ、田開けた。

女の子の薄く開けたまぶたの中で、青色の瞳が動いてりゅう君の方を見た。

弱々しいながらも表情が明るくなる。震える手がりゅう君の学ランを掴んだ。

「お？」

「仲……間……、まだ……いた……」

女の子は掠れる声でそう言つて、にっこり笑つた。なぜだかわからぬいけど……なんだか見ていると切なくなつてくるような笑顔だった。

「仲間……、いた。ぼく……、一人ぼっち、じゃない…………」

「……えっと、あなたの名前は？ よかつたら教えてくれない？」

女の子はひつくり頷く。何か言おうと口を開くとゲホゲホと咳き込んでしまつた。つてうわわ？！ 口から血が？！ と、吐血つて内臓破裂とかでヤバいつて聞いたことがあるよ？！

「「」「じめんー 嘒らないでいいからー」

女の子はもう一度頷くと静かに田を開じた。それでもその小さな手はりゅう君の学ランをギュッと掴んだまま離さない。

……ヒールが切れた。レベルは上がったけど相変わらずあたしはヒールを一連発はできない。やっぱりフィロちゃんが言つてたみたいに魔力の量は変わらないみたいだ。えーと、確か前計つた時だと魔力満タンからヒール一回使つてもう一回使えるまでは5分強ぐらいいよね……。回復したらすぐに使つてあげよう。

「うあえず」の子を運んで……「何か来ます。リュウトさん……、もいさん」

「うー！」

周りの樹海を警戒していたフィロちゃんが静かに言つた。
敵!? あたしはすぐにボウガンを取り出して構える。りゅう君も鋭い目で周りを見回した。クンクンと鼻を鳴らす。

「……別に変な臭いはしないぞ?」

「臭いがしないから問題なんです。こんな樹海の中なのに……何か所か臭いが来ない場所があるんですね。たぶん……消臭剤を撒きながら移動してるんじゃない?」

「消臭剤? となると何かってのはモンスターじゃなくて人間? 周りに注意を払いながら携帯のマップを開く。……反応は無し。PCがいれば表示されるはずだから周りにいるってのはPCじゃないし、この女の子もNPCってことね。……NPCとかモンスターも表示してくれればいいのに……。」

『警告スル!』

「ふえつ?ー!」

突然茂みの中から聞こえてきた声の方向にあわててボウガンを向けた。

茂みから出でたのは……マネキン？

あたしの膝ぐらいの身長の白いマネキンが茂みの中から出でた。小さいのに八頭身の体、色の付けられてない顔、それが力チャカチャ音を立てながら歩いてくる様はちょっと……いや、かなり不気味だ。

『警告スル！』

マネキンが機械的な甲高い声を上げた。
力チャカチャと手が動き、さつきの女の子を指差す。女の子は怯えた様子でりゅう君にしがみついた。

『リリー＝ウエルメイド。ソノ娘ハ邪惡ナル竜人ノ血ヲ引ク者トシテ、我々【光ノ教団】ノ駆除対象トナツテイル。速ヤカニコノ場ヲ立チ去ルベシ。警告一従ワナイ場合、命ノ保証ハシナイ』

リリー＝ウエルメイド……それがこの子の名前か……。にしても光の教団？ なにその名前からして厨二っぽくて怪しいのは……たしか、この世界では純粹な人間以外は差別や迫害の対象になるつてりゅう君が言つてた……。そしてりゅう君の種族、黒竜の竜人は人間と魔族に滅ぼされたつて……。嫌な予感しかしないわね。

りゅう君も感づいたみたいで身構える。フィロちゃんは少し戸惑つた様子でマネキンを見ていた。

『クリ返ス。コノ場ヲ立チ去レ、サモナクバ……』「その前にこち
らの質問に一、二、三、答えてくれ」

りゅう君が一步前に出て言った。マネキンは『イイダロウ』と頷く。

「まず、この子……リリーをどうする気だ？」

『決マツ テイル。我ラガ神ト人間ニ仇ナス存在トシテ驅除スル』

悪寒がした。人間に駆除なんて……害虫みたいな言い方するなんて……。りゅう君の拳を握る手に力がこもった。

「……もつひとつ、この子は何か悪いことをしたのか？」

『竜人トイウ存在ソノモノガ罪。許サレザル大罪。罪人ハ裁カレテシカルベキ。我ラハ神ノ代行者ナノダカラ。我ラノ行イコソガ神ノ意思！ 我ラコソガ……』「ちが……つ……！」

リリーが初めて声を荒くした。ゲホゲホと血を吐いたけど、それでもマネキンをキッと睨み付ける。

「神さま……、マキナちゃん、こんなこと……、しない！ ぼくの友達……。変な、こと……言わないで……！」

『貴……様ハ……！』

マネキンの方の声も荒くなつた。

『貴様！ 貴様ゴトキガ神ノ名ヲ呼ブカ！ シカモ……友達ダト！？ 大概ニセヨー！』

「嘘、違う！ ぼくと……マキナちゃんは……！」『ナラバ何故！
神ハ才前ヲ助ケニ來ナイ！？』

リリーは言葉に詰まつた。ここだとばかりに、マネキンはさらにまくし立てる。

『ドウシタ？ 貴様ガ神ノ友人トイウナラ、何故神ハ貴様ヲ助ケニ來ナイ？』

「それ、は……」

『神トハ全知全能！ コノ場デ起テイルコトヲ知ラヌワケガナイ。
モシ神ガ、才前ニ味方スルトイウナラ！ 私ハ甘ンジテ裁キヲ受ケ
ヨウ！ ダガ……神ハ來ナイ！ 来ルハズガナイ！ 何故ナラ！
貴様ラハ惡デアリ、我々コソガ神ノ代行者ダカラダ！』

リリーは黙つてしまつた。下を向いたまま、悔しそうに体を震わせてゐる。

『ソシテ！ 神ノ代行者デアル我々コソガ正義！ 我ラノスル行イ
ハ神ノ意思！ 故ニ全テガ許サレル！』

なんのこいつ……？ 言つてること……無茶苦茶だ。

『貴様ノ母親モ最期ハ救ワレタダロウ。慰ミモノシテトイエ、
神ノ代行者タル我々ニソノ身ヲ捧ゲラレタノダカラ！』

……ヒールのことが無ければ、火で炙つてやるのに……。

『ダガ案ズルナ！ 貴様モ我々ニソノ身ヲ捧ゲサセテヤロウ！ ソ

レニ貴様ラ竜人ノ鱗ヤ爪ハ魔法使イー高値テ売レル。喜べ！ 貴様
ハ我ガ光ノ教団テ、……』

「マネキンは全てを言い終えることができなかつた。

「」こんな子供を不幸にするのがお前の言ひ正義か……！？

「」つゆう君がマネキンの頭を叩き潰していた。手に付いた破片を落とじて少し申し訳なさそうにあたしを見る。

「」……悪いもじ姉、つい……

「いいわよ。あたしも我慢の限界だつたし」

「」実際、ファイア唱えかけてたし。たく……元の世界のどつかの新興宗教真つ青な言い分だつたわね。

「」……ま、ずい……です……

「え？ フィロちゃんが真つ青になつていた。あれ？ なに？ もしかして……地雷踏んだ？」

「も、もこわん！ リュウトさん！ は、早く逃げましょー！ どうどん増えています！」

「」もしかしてなんかめちゃくちゃヤバい状況になつてたりする？ ワタワタとリリーを連れて逃げる準備をするフィロちゃんに従つて、リリーをりゆう君に背負わせる。 その時、周りの樹海の中から何かの気配がした。

神一逆ラウ者達一裁キヨー.』『『『『『

……白いのが多すぎて森が縁に見えない。えつと、なにこれ。白が♀で縁が♂だ！ とても言わせたいわけ？

樹海の木々の隙間からマネキンがひたすら湧いてくる。行進とかそんな生易しいもんじゃない。わかりやすく言つなら……樹海って言つ小さな箱にぎゅうぎゅう詰めこられたマネキンが小さな隙間から溢れだしてくるような捻り出されて来るような……んな感じ。

迫つてくる高さ一〇㍍越えのマネキンの壁を見上げれば、数えきれないぐらこの数のマネキンの皆さんがジロリとあたしにメンチ切つてきて……「なにボーッとしてんだも」姉……逃げるぞ……」

『気付いたらりゅう痴の肩に担がれていた。右肩にリリー、左肩にあたしつて構図になってる……じゃなくて……何よあのマネキン軍団？！ 20体とか30体ぐらいに囲まれるとかならまだ想像できるけどあれ何体よ？！ 光の教団（なんて名乗つてんだからもつと光っぽいことしなさい）……あれもろ悪魔とか闇系じやん……！

りゅう君に担がれたまま後ろを見る。数m後ろで、マネキンの津波が木々を薙ぎ倒しながら迫ってきて……

「いやああああ……？ りゅう君……もつと……もつと早く……あんなのに呑まれて死にたくない……！」

「「」は一人担いでるんだ！ 無茶言つなー というかそんなこと言つなら自分で走つてくれよも」姉ー」

「無理！ あたしゲーム脳の効果で10秒走つたらスタミナ切れで息切れするもん！」

「それもこ姉に体力無いだけだろ！」

少し前をいくフィロちゃんに邪魔なツタなんかの障害物を魔法で吹き飛ばしてもらひながらりゅう君は走る。けどこれ……いつか絶対、追い付かれるわよね……。…………そつだ！

「リリーー！ あなた……えーと、空間連結魔法？ 使えるんだよね！？」それ使えばここから逃げれるんじゃない！？」

「…………めん、なさい…………。この森、ぼくの神域…………外からのお客さんは好きに入れれる…………けど、中から外に出るの…………むづかしい…………」

「フ、フィロちゃんなんかいい案無いー？！」

「や、やってみますー！」

フィロちゃんは四つん這いになると一気に加速してあたし達と距離を開けた。進行方向に有つた木の枝に飛び乗り、詠唱を始める。

『阻むは大地の豪腕。高くそびえ天すら隠す。集まり、隆起し、凝縮し、迫り来る愚者に絶望を見せよ！』【HンシHント クリフ】

！』

あたし達のすぐ後ろで地面が盛り上がり、それが瞬く間に空高くそびえる土の壁になつた。壁の向こう側で何かが潰れる音が聞こえた。たぶんマネキンが激突したんだろう。

「さう君が立ち止まつて後ろを振り返つた。息を弾ませながら土の壁を見上げる。

「おお……。フィロチーにな……」

「詠唱短縮でできるかどりかわからなかつたけど、うまく言つてみたです」

「フィロチーんまりうに誓められて嬉しそうに手を振つてる。

確かにこれは……凄いわね。土の壁は物凄く固くて分厚そうで、これならマネキンも……『…………あれ？

壁の向こうから何か聞こえた気がした。壁に耳を当ててみると。

『…………深淵…………真に……阻むは……闇を駆け…………全ては我ら…………』

……これ、魔法の詠唱？ 何のまほ “ボゴンツー” ……ボゴンツー？

音がした頭上を見上げる。壁から頭が突き出したマネキンと田が合つた。

ボゴンツボゴンツボゴンツボゴンツボゴンツボゴンツボ

「ゴンッ

やつぱり闇系だ。次々に壁から顔を出すマネキン。

また全速力で逃げ出した。後ろの方で壁が崩される音がした。

『『『『『『神ノ敵ニ我ラガ裁キヲ！』』』』』』』』』

何重かもわからない雄叫びが空気を震わせる。鼓膜が破けそうだ。

「…………黒竜の…………お兄ちゃん。どうして…………黒竜の力、…………使わないの…………？」

リリーが小さな声で言った。

「黒竜、なら…………あの人物…………。全部…………消滅させられるはず…………な
のに…………」

「悪いけどそういうの期待すんな！ 訳ありで黒竜の力ってのは全く使えないんだ！！」

「じゃあ…………なんで…………来ててくれたの…………？」

リリーはりゅう君をじっと見つめる。

「マキナちゃんの、友達で……、黒竜の竜人なら大丈夫って……思つたから……。力が無いなら……断つてくれれば……。ううん、ごめん……ぼくの、せいで……」

「ゴンッ！ りゅう君はリリーの頭を殴った。リリーが痛そうにうめきながら涙目でりゅう君を見る。

「痛い……」「痛くなきや殴る意味が無いだろー。」

りゅう君は吐き捨てるよつて言ひてリリーを睨む。

「自分が危ない時に助けを呼ぶことの何が悪い！生きたいって思うのは当然だ！無事に事が済んだとき、礼をできればそれでいいんだよ、特に子供は！」

謝るぐらいなら何とかする方法を考えてくれ！どんな方法でもいいから！

リリーは頷いて目を伏せた。……何とかする方法、正直あたしにはまったく思い付かない。

数も多すぎ、魔法まで使ってきて障害物も無視……あとはもうリーしか……。

「…………ぼくと……竜の契り…………してくれる？」

リリーがためらいがちに呟いた。チラリとりゅう君を見て、また目を伏せる。りゅう君は首を傾げた。

「…………竜の契り？」

「や、やつぱり……だめ……だよね？そんな……いきなり……」

「それで何とかできるのか？」

「…………え？！う、うん、竜の……契りをした竜人同士なら……力のいくらか、あげたり貸したりできるから……」

「よし！ わかった！ それで頼むー！」

りゅう君が言った瞬間、リリーはビクンと体を硬直させた。顔が赤くなつて、何かわたわたと慌て始める。

「ほ……ほんとに……？ ほくど……、いいの……？」

「あ？ いいから呼べしてくれー もうあんまり走れなーぞー。」

「う、うん……。じゃあ……フィロ……お姉ちゃん？」

「は、はい？」

突然自分の名前が出てフィロちゃんはびっくりして振り返る。

「少し……時間稼いで……欲しい。わたりの魔法、もう一度できる
……？」

「な、なんとかー。」

フィロちゃんが答えるとニコニコ満足したように頷いて、あたしを見る。

「………… もーお姉ちゃんが？」

「………… もーお姉ちゃんが？」

「じやあもーお姉ちゃん…………儀式、やるから…………必要な宣言、お願
いして……こい？」

「なんか知らないけどわかつたわ！」

「……もう少し行つたら泉がある……それで……」

リリーの言ひ通り少し行くと泉があつた。リリーはつまづいて壁に下ろしてと合図する。フィロナちゃんは踵を返してそいつの土の壁をもう一度作り出した。

その間にリリーは泉の水に手を当て、何かの呪文を詠唱する。すると水の中から水晶の玉が出てきた。

「…………お姉ちゃん……儀式……するから……これ、合図したら読んで……」

リリーは緊張氣味にその水晶をあたしに渡すと、りゅう君の手を引いて泉の中に入つていいく。ああ！ 早く早く！ 後ろではフィロちゃんの作った壁にマネキンがぶつかる音が聞こえた。

リリーとりゅう君が腰まで泉に浸かったところでリリーからの合図が来た。同時に水晶に文字が浮かんでくる。あたしは何も考えずそれを読み上げた。

『蒼竜の娘、リリー＝ウヘルメイド。黒竜の男、神埼 竜斗。汝らは誰に強制された訳でもなく、自らの意思で竜の契りを交わすことを決断したということに違ひないか？』

「「違う、ありません」」

りゅう君とリリーが同時に答える。するとキンシと高こ音を立て、

『りゅう君とリリーの周りの水に魔法陣が浮かび上がった。とりあえずこれでいいみたいね、次は……。』

『神崎 竜斗。汝は穏やかなる時も病める時も嬉しき時も悲しき時も、リリー＝ウェルメイドと共に在り、これと歩き続けることを黄昏の龍に誓つか?』

「ああ、誓います」

『りゅう君が答えるとりゅう君とリリーの周りにある魔法陣が少し複雑なものになった。よし、次は……』

『リリー＝ウェルメイド。汝は穏やかなる時も病める時も嬉しき時も悲しき時も、神崎 竜斗と共に在り、これを支え続けることを黄昏の龍に誓つか?』

「…………はい。…………誓います…………」

『さらに魔法陣が複雑化する。あとは……』

『ここに龍の契りは成立した。一人の新たなる旅立ちに黄昏の龍の加護があらんことを! ……つと』

『これで終わり! 魔法陣が光出して一人にそれが集まっていく。けどなんかさつきの儀式の言葉どつかで聞いたような……。』

「も、もひやああああんつ! ! ?

後ろでフィロちゃんの悲鳴がした。振り返った瞬間 フィロちゃんが作った土の壁が崩壊した。

「あやああああああ？！」

悲鳴。逃げる間もなく、フィロちゃんの体がマネキンの津波に呑まれていった。

「フィロちゃん……！」

やだ？！ うそ？！ マネキンの白一色、呑み込まれたフィロちゃんの姿がどこにも見えない。そんな……。

その時、後ろでキンッと甲高い音が鳴った。振り返ると……泉の水が無くなっていた。視線を上げると空に泉の水が全部、球体になつて浮いていた。その中心でリリーはゆっくりと手を広げる。まるで人魚みたいに、下半身が魚みたいになつてきて、長い尾びれが水中でなびいていた。

（お姉ちゃん……どいて……！ あいつ……水で流し潰す……！）

「待って……！」

あたしは叫んだ。水で流し潰す？！ [冗談じゃない！ そんなことしたらフィロちゃんは……。

（……あの狼人のお姉ちゃん、もう……あきらめるしか……。このままじや、お姉ちゃんやリュウトも……）

「……リリー……！ 20秒でいい！ もこ姉を護れ……！」

りゅう君が突然叫ぶと走り出した。え？！ ちよ？！

あたしの脇を走り抜けてマネキンに向かっていく。

「あんた！ ちょっと… 待ちなきこと…」

反射的に追いかけようとしたらゼリー状の水の壁があたしを阻んだ。

(ココウト……お姉ちゃん護れって……)

リリーの申し訳なれやうな声。ああもう… あいつはまた… いつたい今回はどうする気よ！

りゅう君にマネキンの津波が迫る。りゅう君は体を思い切り縮めると反動をつけて空高く飛び上がり、マネキンの第一波を避けた。けどすぐに空中にいるりゅう君にマネキンが群がっていく。

「フィロ… 開けたら叫べ… 絶対助けてやるから…」

りゅう君が叫ぶ。一瞬の間が流れる。りゅう君がほんの少しだけ笑った。手を向かって来るマネキンに向けて突き出す。

瞬間、りゅう君の手元の空気が歪んだ。

りゅう君の手から黄色い光が広がる。その光に触れた瞬間、マネキンは糸を切られた人形みたいに動きを止めた。

以前マキナに見せてもらつたやつとイメージが重なつた。今のは… りゅう君の過守護領域？！ なんで… いや、今のりゅう君は… もしかして…。

りゅう君はそのままマネキンの中に飛び込み、潜つていいく。数秒

の間。フイロちゃんを抱えたりゅう君が顔を出した。

「リリー！ ここから全部押し流せ！ 僕は大丈夫だから！」

「……え……けど……」

戸惑つコリー。けどあたしの予想通りならこにはりゅう君が正解だ。

「リリー！ あたしからもお願ひ！ 今はあのスキルが働いてるけど時間経つたらどうなるかわからない！」

「え……？ えっと……」

「「とにかく早くー！」

あたしといゆう君の声が重なった。

「……わかった……信じるよ？ ぼく、一人のこと……」

リリーは自分を囲む大量の水に手を向けた。すると水の塊が細長く伸び、一頭の水の竜へ変わる。

「お母さんの……仇……！」

リリーの叫ぶ声を引き金に水の竜が新幹線みたいな勢いでマネキンの群れに向かつた。ぶつかりあつた瞬間、爆発したような爆音と水しぶきが上がる。

水の竜はあるで滝のような激流になつて森の彼方にマネキンを押

し流していく。……りゅう君大丈夫？ これ……。

やがて水の竜が消えると、そこには深々と抉られた地面が残つていた。マネキンどころか周りの木まで根こそぎになつていて跡形も残つていない。

……いや。削られた地面。その中でぽつんと一ヶ所だけ地面がまつたく削られていらない場所があった。りゅう君はそこにフィロちゃんを抱えたまま立つている。フィロちゃんは何が起こったか理解できていないみたいで呆然としていた。

「リュウトー！ 大丈夫！？」

リリーは地面に降りると一目散にりゅう君に駆け寄つて言った。
それに応えるりゅう君は……元気そうだ……。

マキナ曰く、りゅう君のスキル過守護は相当強力な防御スキルらしい。けど、普段はりゅう君自身の力と破壊衝動を抑えるのに全部が使われて使えない。

それに対してもリリーが言つた竜の契りつていうのは竜人同士で力の受け渡しができるようになる儀式らしい。つまり……竜の契りを使つてりゅう君の竜人の力がリリーへ行つて、そしてそれでりゅう君の力が弱まつて、過守護を使う余裕ができた……と、そんな感じだと思う。

『そそ、そんな感じ。さっすがもじちゃん、説明不要で大助かりだよ』

「わっ？！」

いつの間にか隣にマキナが浮いていた。あたしと目を合わせてに

「うひと笑うと『コツチハリヤーん…』とココーに両手を振る。

……リッカやん?

リリーもマキナに気付くとパッと表情を明るくして駆け寄ってきました。そういうえばリリーが友達って言つてたっけ……。本当だつたんだ……。

マキナはリリーを胸に受け止めると頭を撫でながらあたしを見る。

『ひよっとお話しよつか? こりこり話わなきやいけないこどもあるしね』

もう言つてマキナはパチンと指を鳴らした。

「いやあんたら？！ なんでそんな普通に注文できんのよ？！ と
いうカリリーの注文ちょっと待て…！」

マキナが指を鳴らした瞬間周りの風景が切り替わって……どうやら料理店らしいところに移動した。落ち着いた高級洋食店って感じの雰囲気で、あたし達は白いテーブルクロスのかけられたテーブルを囲つていて、なんかやたらピシッとした正装の人が注文を取つていく。

「お客様、ご注文はまだお決まりではありませんか?」

「え、あ……、す、すこせん……。じゃ、じゃねかつかくだからチヨーパフン……」

「かしじまつました。しばひくお待ちください」

なんかもう相変わらず……一気にペース持つて行かれたわ……。
ちなみにフィロちゃんはここにはいない。NPCは連れて来れない
って言ってたけど……リリーは？

『とりあえず何から話そつかな……あ、まずはリツちゃん助けてくれてありがとね？普段は私がリツちゃんの住んでた泉の周りに結界張つてたんだけどちょっと事情があつて結界張れなくなっちゃつて……。ああ、それとリツちゃんとりゆう君、竜の契りおめでとー』

「おつがと……、マキナサム」

リリーは照れくさそうにお礼を言つとチラリとりゅう君の方を見た。りゅう君と目が合うとあわてて視線を反らしてコップの水を飲

む。……ん？……とりあえず竜の契りっておめでたいことなのかな？まあそれは後でいいや。せっかくマキナから話そつて言ってきたんだから情報集めないと。

「結界張れなくなつた事情つて？」

あたしが聞くとマキナはうへえつと氣持ち悪そうに舌を出す。マキナがこんな顔するのは初めてだ。

『第2の試練の時ちよ～っとやつ過ぎたみたいでさ～、お仕置きって言つて他のマキナに力封印された上に、火山の火口に大気圏外から吊き落とされるわ海溝に1000tの重りつけて沈められるわ…』

……なんで生きてんの？

『あと、触手に監禁凌辱調教一週間とかされそつになつたり…、あ、けどこれは適当なプレイヤー身代わりにして回避したから勘違ひしないでね？みんなのアイドル マキナちゃんはしっかり貞操を守りました』

……身代わりこられたプレイヤーは？

『ま～、そんなわけで結界張つてる余裕まったく無くて……その間に例の厨二軍団……もとい光の教団がリツちゃんたちの住み処特定しちゃつたわけ。』(めんねリツちゃん?)

「仕方……ない。もともと、自分の身は自分で護るのが……本當。……マキナちゃん、ぼくたちを今まで護つてくれた、責めるなんて、できない」

『う～、そんなリッちゃんもあたし大好きだよ～！』

マキナはヒコンとテレポートするとつりーに後ろから抱きついた。すりすりとリリーに頬擦りする姿は本当に仲良さそうだ……。このことも聞きたいけど……今は他のことについて情報集めるのが先ね。マキナの気まぐれは重々承知してる。話す氣でいるうちに聞いとかないと。

「光の教団ってのは？　どういづ組織？」

『ん～、厨ー……もとい元々この世界にいた異能者で構成されたカルト集団だよ。うつとうしい連中でさ～、私たち“マキナ”の名前を語つて、殺人　強盗　強姦　誘拐なんでもござれなやつらだよ。しかもリーダー格のやつがかなり強力な人心掌握系のスキル持ちで、教団メンバーは自分たちが何やってもそれに疑問を持たないようになってる。ぶっちゃけこの世界で一番危険な組織かな？』

予想以上にヤバいのと関わっちゃったみたいね……。りゅう君が竜人っていうのもバレてそうだし……。

「なんとかならないの？」

『無理ね。私たちのルールで、むやみやたらにこの世界のことに干渉するのは禁止されてるもん。神さまはあくまでも見守る存在ってね』

「……一回田の試練の時はあたしに直接攻撃してきたくせに……」

『だからお仕置をされたやつたのよ～。私もお仕置きはもうやだよ

? 今度は緑マキナに女の子の貞操奪われちゃうみー』

ため息一つ。もしかしたらマキナを味方に……と思つたけど無理
そうね。じゃあ……

「りゅう君はどんな状態? 過守護が使えるようになつてゐみたい
だけど」「う

『さつきももうちやんが推測した通りだよ。リツちゃんに竜人の力
を分けたことで過守護を使う余裕ができた。……とはいせこせい
一割程度だけね』

なるほど……つまりリーがいればりゅう君は過守護を使えるつ
てことか……。ならもう一つ。

「ちなみにりゅう君の心の状態は? 今まで過守護の影響で心が
歪んでたんでしょう?」

『そだね。この状態を維持してればだんだんましになつてくれると思
うよ』

そつか……よかったです。ならできればリリーには一緒に来て欲
しいところね。戦力的にも頼もしく、りゅう君の方もいつまでも
自分の命を簡単に投げ出しちゃうような状態だとさすがに心配だ。
そつなると……『つふふふふ

マキナがあたしのことを見て笑っていた。

「なに?」

『やつぱりもこちゃんはすごいな～って思ってね。その思考力と適応力、完全に高校生離れしてるわね』

マキナはクスクス笑うと自分の髪を指に巻き付け始めた。

『12日田でこれだけこの世界に適応してるものこちゃんぐらいだよ。今でも「元の世界に返して～」って嘆いてるのもけっここういるし。それに私から情報を聞き出す時の無駄の無駄、軽く鳥肌物だったよ?』

「……ゲームみたいに考えてるだけよ

『ゲーム?』

「そ、あたしはものを考える時、ゲーム基準で考えてる。今は最低限どんな情報が欲しい。どんな選択をすればいい。そういうの全部……ね。ある意味現実逃避だけど、けっここう理屈になんた考え方できてるでしょ?』

マキナは髪を指に巻き付ける動きを止めていた。興味津々といった感じであたしを見つめる。

『現実逃避……ね。けど、その考え方じゃ絶対割り切れない問題、そのうち来るよ』

「その時はその時。先のことなんてあんぐらいしかわからないんだし、今はのことだけで手一杯よ』

マキナはもう一度くすりと笑つて軽く指を振った。すると最初にあたし達が頼んだ料理が運ばれてきた。

『やつぱり面白いね』　ま、せつかくだからもう少し話しましょ。幸い時間はたっぷり有るからね』

話……か。あたしはマキナを注意深く見ながら運ばれてきたチヨコパフェを受け取った。

何かしら情報は集まりそうね……。

あ……チヨコパフェ美味しい……。

+ 一 田 三（おおひさ）（前書き）

やべえ…スランプ突入きた（ - - - ）
文章が書けないです……

ただでさえ遅筆なのにせりに遅くなるかもです。——

十一田畠（おまけ）

side 神崎 竜斗

……このステーキ、肉はいいんだがソースがいまひとつだな。少し甘味が強すぎて肉の旨味を殺してる。そうだな……赤ワインをもう少し追加して煮込む時間も30分増やす。隠し味に醤油を四滴ぐらいい垂らせば美味くなるか……。

マキナともこ姉が話してる間、俺は料理の方に集中していた。マキナともこ姉の話の中心は俺の心の状態がどうつていうのだ。正直……あまり聞きたくない。

だつてなあ……心が変になつてるつて言われてもこつちは自覚無いからなあ……あんまいい気しないんだよ。というかなんで胸触つたり、もこ姉やフイロの着替え見たら怒られたのかいまだにわからん。着替えとか一緒にやつた方が早いだろうに。現に師匠は俺の前でも普通に着替えてるぞ？ それに……この間はもこ姉の胸 枕にして寝たら本気でぶちギレられたり。いいだろ別に、もこ姉の胸ふにふにして枕にすると気持ちいいんだから。

……まあ、マキナが言つにはリリーがいれば心の状態も戻つていくらしいし、戻ればわかるんだろ。

……それなら俺がもこ姉を護りたい理由もわかるんだろうか？

「うちの世界に来て、俺はすぐに“もこ姉を護らないと”って思

つた。

けど、その理由が思い出せない。やっぱり自分の行動の理由は……気になる。ん？

リリーが椅子を抱えてトロトロ俺に近付いて来た。

俺の隣に椅子を置くと、「えへへ」と照れ臭そうに笑う。

「い、一緒にたべよ……？…………」

「おひ。いいぞ」

俺が言つとリリーは嬉しそうに、自分の椅子を俺の椅子にくつつけて、腕と腕が触れ合つ距離で座る。　おお……。リリーの肌、ひんやりしてて気持ちいい……。走り走つて火照つた体にはちよつといい……。

もつちよつと触つてたいけど……腕だと飯食つの邪魔になるよな。なら膝とか……。

わつ思つてリリーの膝に手を置いた。ぴくつとリリーの体が震える。……あ、やべ。膝つて触つたらいけない場所だったか？

……けどリリーは何も言わない。ちょっと顔を赤くしながらチラリと俺を見て……ん？　なんかちよつと嬉しそうだぞ？

リリーはおずおずと手を伸ばして、膝の上にあつた俺の手に自分の手を重ねた。そつと指を絡めてくる。やっぱり冷たくて気持ちいい。

手や足には身体中の血管が集中してるから、体を冷ましたい時はそこを冷やすのがいいんだ。ホッと息をついて力を抜いた。

けどなんかリリーの方はやたら力入ってるな。リリーを見る
と顔が真っ赤だ。それでチラチラ俺の方を見てくる。なんだ?

「そ、そういうえば……えっと……ぼく、勢いでリュウトのこと、“
リュウト”って呼んでるけど……竜の契り……したし、“あなた”
って呼んだほうがいい?」

「んあ? なんで竜の契りしたからって……とりあえず“あなた”
は変だらですかに」

「そ、そつか……じゃありュウトって呼ぶね……? ね、ねえリュ
ウト……? ロイキングのムーハル……食べる? お肉よりこっち
の方が美味しいよ?」

「お? やうか、じゃあ少し貰おうか」

「へ、うん……。じゃあ……あ、あーん」

リリーはフォークに刺した料理を俺の方に向けてきた。自分で食
べようとしたが……右手がリリーにがつちり掴まれて動かせない。
仕方なくそのままリリーの差し出したやつを食べた。

……お、なかなか……

「おこし……?」

「おひ、なかなかいけるな」

なるほど、ijiのショフは魚料理の方が得意なのか。たしかこの

料理……「イギングのムーハルって書いてたな。」口の中で言つわつにはズズキとかに近い味だ。この前の町で食べたマトマの実とかとも合つそつた気がする。

そんなことを考えながら、またリリーが出してきたやつを食べる。コイキングか……。さつこうでかそつた魚だけど釣れるのかな？ リリーは普段水の中で生活してたらしごと後で聞いてみるか。

ふとリリーを見ると、リリーは俺の方を見てまた照れ臭そつて「えへへ」と笑つた。

なんか可愛らじこ。フィロとは違ひ、妹みたいな感じだ。手をほどこして透き通るような水色の髪に指を通した。じつちも少し濡れてるやつな感触で、ひんやりしていふ。

「ひゃんっ？..」

「お？」

なんかリリーがビクンと体を震わせた。ん？ なんだ？ そのままもう一度髪に指を通してまた切なげな声を出して体を震わせる。

「だ……だめだよう……。こんな……で……ほく、髪……敏感だか……」

髪が敏感？ ……。さつこいや、水の中で生きている生き物の中には体に敏感なセンサーを備えてるやつがいるよな。ナマズのヒゲとか。もしかしたら……。

試してリリーの髪を一束手に取つて指の腹で撫でてみる。

「ひあひ……？！　あひ……くうん……だ、ダメえ……」

「うと。すまん」

どうやらリリーは髪の毛にも神経が通つてゐるらしい。悪いことしだかたかな？ 手を離す……が、なんかリリーが潤んだ瞳で俺を見上げてきた。おいおい、大丈夫か？ なんか息が荒いぞ？

「やめ……ちやうの……？」

「は？　いやおい、わつき「ダメ」って言つてたるお前。いやなんだよその何かを期待するやうな田は？　何を期待してんだよお前は？」

「ココナトのアコニ……いじわる……」

なんだらうか？　凄まじい地雷を踏んだ気がする……。

まあいいや。とりあえず「」のロイキングの調理方を考えよう。とりあえず町で食べた「ジユマル」って生き物の血のソースと合わせるのはどうだううか？

side 引き続き 神崎 龍斗

うわあああああああっ！－！

テントの中、頭を抱えて心の中で絶叫した。

うわあああああああっ！－！　あーくそつ！－！　いつそ殺してくれええええ！－！

あまりにもいたたまれなくてテントの中でのたうち回った。なんかもう……今すぐどこかに消えてしまいたい。

俺たちはマキナの手によつて元の場所に戻つて來ていた。
師匠にはかなり心配かけたみたいだったが事情を話したら納得してくれて、一緒についてきたリリーも歓迎してくれた。

で、疲れただろうし自分が見張りをやるから休めて言われて俺とも二姉、そしてフイロとリリーの一組に分かれてテントで休むことになつたんだが。

……いろいろ思い出してきたんだ。うん、マキナが言つてたように心の状態が戻ってきたらしい。で、それはつまり今まで自分がどうだけとんでもない」としてきたかを理解できるようになつてきたつてことで……。

うわあああああああっ！！ 僕 なにもこ姉の胸わしづかみにしてんだよ！ なにフイロの裸普通に見たりお姫様抱っこしてんだよ！ なにもこ姉の胸を枕にしたり、着替えようとして普通にもこ姉達の前で全裸になつたり一緒に水浴びしようとしたり……！！ うあ……そいや前の幽霊騒動の時はもこ姉とティープキ……うわあああああっ？！ なにやつてんだよ俺？！ なにやらかしてんだよ俺？！ ああもう誰かいっそ殺してくれえええっ！！

「つゅう君ひるむか？」

……のたうち回つてたら隣で寝ていたもこ姉が不機嫌そうに体を起こした。少し胸元がはだけてる。

「あ……悪いもこ姉……」

「……ん。つゅう君も早く寝なよ……？」

もこ姉はかわいらしくあぐびをするとまた横になる。少しすると気持ちよさそうに寝息を立て始めた。

もこ姉は俺に対してもし無防備過ぎると悟つ。いや、俺がみんな状態だったから警戒心が薄れてるのか？

けどわかつてんのかもこ姉？　俺、男だぞ？

……ついもこ姉のはだけた胸元に視線が行つてしまつ。……悪い
かよ？　俺、健全な16歳だぞ？

ああくそ、もこ姉もう少し警戒してくれよ。もし俺が襲い掛かつ
たりしたらどうする気だよ？

とはいえもこ姉、アイテムボックスに大量に剣持つてるからな。
もし俺が襲い掛かつても身体中串刺しにされるのがオチか。

いや、けど俺つて今は最高峰の防御スキルつていう“過守護”が
使えるんだよな？　それならもこ姉の剣も防げるかも……それに昔
よりかなり力も強くなつてるから、一度抑え込めたら　ゴツンッ
！！　思い切り地面に頭を打ち付けた。

おい俺、抑え込めたらどうする気だ？　落ち着けよ？　COOL
になれよ？　額から血をだらだら流しながら乾いた笑い声を上げる。
ヤバイ。変だぞ俺。むしろ余計変になつたんじゃない俺？　少
し外の空気吸つて来るか……。

なんかもういろいろ悶々として眠れる気がしない。音立てないよ
うに立ち上がりテントを出た。

「……おお

見上げると満天の星空。満天つてこいつのを言つんだな。そこ
そこ見慣れてたはずの星空に思わず感動してしまつた。

もうこっちに来て半月近く経つのに何もかもが新鮮に感じる。今
の身体も……耳を澄ませば周りの草むらの中で小さな虫が這う音ま
で聞こえるし、鼻に集中すればテントで休んでるフィロトリリーの

匂いが……「ホン――とにかくこの感覚が違う。

よくよく考えたら俺、とんでもない運命歩いてるよなあ……。異世界にいるなんて、高校のダチに言つても絶対信じないぞ。

「神崎、そんなところに突っ立つておらんでもいいのに来んか?」

ほんやつ星空を見上げていたら焚き火にあたつていた師匠にそう言われた。どうせしばらく起きてるつもりだったんだ、言われた通り、師匠の隣に腰を下ろす。

すると師匠はじっと俺を見上げてきた。……なんというか、……普通のかわいらしさに女子の子に見られてるみたいで、じく変な気分だ。

「……ふむ。浅倉達から聞いておったが多少は元に戻つてきもあるよ!」

「わかるんですか?」

「なに、お前が小学生の頃からの付き合いで、からの方が。それだけにこちらで再開した時には驚いたわい。元のお前が見る影もなかつたからなの?」

見る影も無いってのは思いつ切りのけの台詞だと思つただけどなあ……。

「で、浅倉の」とは思つ出したか?」

「……はー?」

「ふむ、その様子ではまだか」

師匠は残念そうにため息をつく。なんでも「姉が出てくんだ? 思い出すって……俺とも」「姉は幼なじみで、姉弟みたいな仲で……それ以外に何か有るか?」

いつたいどういう……「リュウトー」ガバッと後ろから抱き付かれた。

ひんやりした冷たくて柔らかい感触。首に回された細い腕をそつとほどく。

「リリー、焚き火の前で暴れると危ないぞ?」

「あ……」めんなさい……」

振り向かずには立つと少ししゃんとしたリリーの返事が返ってきた。

「え……ど、リコウト……隣、座つていい?」

「お、お、お、お」

俺が答えるとリリーはいそいそと俺の隣に腰を下ろす。少し照れたような表情で俺を見上げると俺越しに師匠の方を見た。

「うむ、じさんばんはじやな。確かリリーと会ったの? 眠れんのか?」

師匠が言つとリリーはあわてて俺の影に隠れてしまった。師匠の

表情が曇る。

「……何か怖がらず」とでもしたかの？

「『めん……えつと……そつちは、ぼくのこと……怖くないの？
ぼく、竜人だよ……？』

師匠が首を振るとリリーは手を伏せてギュッと俺の服を掴んだ。

「ぼくは……人間と話すのがだちょっと……」

「…………む？」

「ぼくのお母さん……人間にひどいことをされて、殺されたから……

俺と師匠は顔を見合せた。これは……重いな。リリーの頭にそつと手を置いた。

「俺は怖くないのか？」

「リコウトは……竜人だし……、契りも交わしたから。フィロお姉ちゃんは、獣人だし優しいし……。もこのお姉ちゃんは……ちょっと怖いけどマキナちゃんと仲良かつたから……。けど……」

リリーはチラリと師匠を見た。師匠はじっとリリーを見つめる。リリーはその視線から逃げるようにまた俺の影に隠れた。

「ふむ……」

師匠はゆっくり立ち上ると、俺の影に隠れたりリーを追いかけ

るよつて回り込んで。それに呑ませてリリーも俺に隠れながら逃げていいく。

「やれやれ……これでは鬼うひーじゅな

ため息一つ。瞬間、師匠が消えた。

「は?」「わあああ?!

リアルに目にも止まらない速さで回り込んで、師匠はリリーに抱き付いていた。いや……本気出すなよ師匠……。リリー半分パニッシュになつてゐるだ?

「ええこひり! 暴れるでない!」

師匠はぐことっこに顔を寄せる。その距離数cm、鼻先が触れ合つ距離だ。

「あ……つあ……な、なに? ほ、ほく食べてもおいしく……」「人と話す時は相手の目を見て、じゅうぶん?」

そう言つと師匠はリリーと視線を呑ませた。 はは、やうこいや俺も初めて師匠と会つた時これやられたな。

師匠はリリーとしばりくの間じつと呑つめ合ひ。そしてふつと表情を和らげた。

「じゅじゅ? わしは怖いか? おぬしにまわしがどう見えた?」

「…………

リリーはおそれるおそるといった感じで師匠の顔に手を伸ばした。リリーの手が師匠の柔らかいほっぺたに触れ、さらさらした髪に指を通す。

「ほくと同じ……、女の子……」

一瞬師匠は複雑な表情をしたがすぐに優しく笑いかける。

「わうじや。同じじやよ。人間だの竜人だの知らんが、わしも神埼もフイロも浅倉もおぬしと何も変わらん」

「…………けど」

「一を見て全を見たと思つては損をするぞ? おぬしが見たような人間が全てではない」

「…………」

リリーはまた視線をそらせてしまった。師匠は小さくため息をつくとニカッと笑う。

「よし! 今日からわしがお前のお母さんになつてやる!」

「「へ?」」

「やあと待て師匠? なんでそうなる? リリーの方も田が点になつてゐる。といふか“お母さん”ってついに諦めたか?」

「おぬしの見たような悪い人間もたしかにある。それを警戒するの

も悪いことではないじゃね。……じゃがお前はまだ子供じゃ。子供の内から人を疑い、世界を疑わなければならんのは間違いないなく不幸じゃ。

じやからわしがお前の母さんになつてやね。わしが怖いものからお前を護つてやる

「……あ……でも……ぼく……」

「それに、形はどうあれお前がわしらと来る以上、嫌でも人と関わらねばならん。……安心せよ、これでもわしは人を見る目には自信がある。それに子供を幸せにしてやるのは大人の義務じゃ。遠慮するのは許さんぞ?」

俺は思わず苦笑してしまつた。師匠はまったく……相変わらず直球だ。けど たぶんそれが一番なんだね。

「つ……つユウト……?」

不安そうなリリーの目。それに向かつて俺は静かに頷いた。リリーはキヨロキヨロと視線をさまわせて、師匠の目を見る。

「じゃ……じゃあ……お願ひ……恋ちゃん……」

「呼び方が違う」

師匠はピシッ と額を小突いた。リリーは額を押さえながら少し頬を赤べする。

「あ……よりしへ……お母さん……」

「……自分で言わせとこりなんじやが少々複雑な気分じやのひ」

師匠は照れくさそうに笑うと俺の方を見た。その顔が急に真剣な
……元の世界で大切なことを言つ時の顔になつたから、思わず姿勢
を正した。

「わしがこいの子を護ると誓つたのは、言つてしまえばこいの子の境遇
への同情心と子供を護るという義務感からじや。じゃが言葉は曲げ
ぬ。約束は決して違えぬと誓つていい」

師匠の目が鋭くなる。心を見透かされるような、そんな気分だ。

「お前の理由はなんじや？　なぜ浅倉を護る？　なぜ護りたいと願
つた？　そしてお前は何を誓つ？　……早く思い出せよ……」

静かな、それでいてやけに耳に響く師匠の声。

「……でないと、お前はもう浅倉を護れんぞ」

竜斗達がいる場所の数百㍍上空に、その少女は立っていた。

白い法衣に身を包んだ、長い金髪の少女。その髪からは尖った耳
が飛び出している。

少女は指先を唇に当てると静かに呟いた。

「教皇様……。黒竜と蒼竜……発見いたしました……。一緒に、人間の女二人に獣人の女が一人……。了解。準備を整えます……」

少女は一度、自分の遙か下にいる人影に視線を向けると白い翼を広げ、どこかへと飛んでいった。

side 赤川 恋一

夜明け前の空に静かに輝く月に虫の鳴く音。それに水のせせらぎ……風情があるのう。これで水浴びでなく温泉であれば完璧なんじやがの。

カラーン ロロンと歩く度に下駄と川辺の石がぶつかり小気味いい音が鳴る。

夜の月もいいが、わしは夜明け前の少し朧気な月の方が好きじや。儚げな光、徐々に明るくなる空に朝の空氣。夜には無いなんとも言えん雰囲気がある。

適当に川辺を歩き回る。目的は水浴びじや、昨日は神埼達が急にいなくなってしまい探し回ったせいでできんかつたからう。やはり汗をかいたままは気持ち悪いし、鼻が良いのが一人もあるから流石に気にする。

良さそうな場所で太刀を水に差して深さを確かめる。うむ、ここの深さもちょうど良いし流れも緩やかじや。さて……いやその前に……。

少し離れた場所に張られた、テントの方を確認する。うむ、ここなら神埼達からは見えんの。

なぜ“神埼達”なんじゃ？ なに神埼の名前を真っ先に上げとるのじゃ わしは！？

けつして神埼に見られたら恥ずかしいとかそういうことではない。絶対ない。断じてない。

た少し心臓がキュッとして顔が熱くなつて嫌なだけじゃ。

本当に見えんな？

帯を解いた。ショルルと衣擦れの音がして、着物が足元に落ちる。着物にシワができるように慎重に畳んで川に入り、水に足を浸す。冷たさが足から上がつてくる。体がブルツと震えた。

一息つくと手拭いを水に浸してそれで体を拭く。

きめ細かい肌が水を弾く。この肌は我ながらなかなかのもんじゃと思ひ。顔もなかなかじやと思つし将来が楽しみじや。……あとは胸がもう少し有ればいいのじゃが。

両手で寄せてみる。……谷間もできん。手にあばら骨の感触が伝わってくる。

いやいや別にまだまだこれからじやしの？ それに大きくならんでもそちらの方が着物には合つしの？ 別に気にしなはつ？！

自分の胸に手を当てたまましばし呆然としてしまつた。違う！ 断じて違う！ これは……

いや……、違わんの……。

ため息をついて水面に映る自分の顔を見つめた。凜とした、そし

て年相応のかわいらしさを併せ持つた少女の顔。

「……これが現実じゃ。自分を『まかすのはもう止めるところ』。
どのみちここんな体である以上いつかは嫌でも認めねばならん。」

「……わしの中身……心といづべきか？ それがこの体に相応しい
ものに変わってきておる。つまり見た目通りの幼い少女のものへと
変わつていつておる。」

数日前から神崎と一緒に水浴びするのが途端に恥ずかしくなった。
……あっかけもだいたいわかつておる。」

あの日、水浴びしてた時に川辺で濡れた石で足を滑らせ、神崎に
抱き止められた時じや。その……なんじや……抱き止められた時…
…その……“男の匂い”みたいなものを感じてしまつて……そこ
から急に神崎に肌をさらしていくことが恥ずかしくなつて……。
それに神崎に付いとる……アレを見るのが……その……うあ～っ……」

頭の中に浮かんだイメージをぶんぶん首を振つて振り払つ。

……おまけに、最近はどうも浅倉やフイロ達が目の前で着替え始
めても気にならなくなつてきおつた。……いやさすがに一緒に寝た
り水浴びしたりは抵抗が有るがの。浅倉は妙にベタベタ触つてくる
しのう。さらには座ると自然と女の子座りになるは浅倉に買わされ
た下着を着けるのも抵抗がくなつてきたはでもつ……。

わしさのままの世界で成長し、変わつていくのじゃろうか？
大きくなつて、恋愛をして、結婚し、子を産み、育て、死んでい
くのじやうつか……？

「……ふふ、滑稽じやな。前の体の時はもうこの世に怖れるものな

「何も無い」と思つておつたのと、今は自分の小さな変化にさえ「なんにも不安になつておる。

自嘲氣味に笑い、空を見上げる。月はすこしひ見頃じや。「れを肴に酒でも呑めればのう。

「変わること」は不安じやが、不幸とは思わん。元々、あと何年生きられるかもわからんかつた身じや。それがこうして若く、健健康な体を得て新たな人生を歩める。形はどうあれこの事に関してだけはマキナに感謝しどるぐらうじや。向ふつ、「師匠?」

「やあやつ?..」

「やあなり後ろから神崎に声をかけられて思わず「きやつ?..」などと悲鳴をあげてしまつた。おまけに手は反射的に大切な部分を隠しておつた。

「……恥ずかしい。恥ずかしい、が。」いやつにだけはそれを悟られたくない。無理に堂々と神崎と相対した。どんどん顔が熱くなるのを感じる。

「何じやつ?」

「ああ、もつすぐ朝食ができるんで呼びに来たんですけど……大丈夫ですか? 頬、真つ赤ですよ?」

「な、なんでもない!」

神崎に背を向ける。……「いやつは……よくも平然と……わしがこれだけ恥ずかしこの!」……まあ、いやつからすればわしの肌など

見ても何ともないんじゃ らうの? 胸も無いし……なんじゃ らうか?
? なんかイライラしてきおつた。

まつたく、昔はもつと可愛げが有つたといつのに、中学一年の頃に年齢を偽つてアルバイトを始めた頃から妙に落ち着きおつて。

それでもその頃は『料理を巧くなつていつかも』姉に食べさせてやりたい』とアルバイト先の料理長の技術を見よう見まねで覚えようとするなどまだ可愛げが有つた。

……まあ、それで一年経たずに料理長の技術を完璧に盗みきった上に独自の改良まで加えて料理長を泣かせるまでに至つたのはさすがにどうかと思うが。

高校に入つてからは……まつたく。女子にけつこうモテておつたくせに興味も示さず。馬鹿みたいに一途で、馬鹿みたいに真剣で……そして強かつた。

今は見る影も無いが、神埼ほど心が強く、揺るがん人間をわしは見たことがない。その強さの行く末を見たいと思つた。この子が幸せを掴むのを見届けたいと願つた。

あの頃は望んでもおそらくは叶わぬ願いじゃつたが……ふふ、人生とは本当にわからんものじゃ。

見ると神埼は不審そうな顔をしておつた。
まつたく、腑抜けた顔をしあつて。

川から上がり着物を手にとる。……せめて下着を着ける時ぐらい目をそらさんか……。太刀の鞘で神埼の頭を叩いた。

「つて？！ 何するんすか？！」

「つむじ。でりかしーを持たんかでりかしーを。そんなどでは
戀溢をぬかれるや？」

「は、はあ？！」

やれやれ、先は長唄のう。

……願わくはその先に、この子の幸せが有ることを……。

十四日（一）（前書き）

注意

どうも筆が進まないので気分転換に少しあつけで書きました。
かなりの乱文かと思いますが十四日目だけはちょっと遊ばせてもら
います m(—)m

ストーリーとの関連は薄いので別に飛ばしても大丈夫です。

『よーやく、召喚に成功したわ』

もぐもぐと煙が立ち込める。床に描いた複雑な紋様の魔法陣の真ん中に、私の田端での物はあった。

つかれたら。いくら私が神様だからって異世界のものを召喚するのって大変なんだよね。けどけどこれで……。

召喚した物を手に取つて状態を確かめる。なるほどね。使い込まれてるのが一目でわかるわ。とにかくこれで準備オッケーっと。

『さあ、狩りの時間よー。』

side マキナ（田）

『とうわけでここにまちまへーーー！』

「ひああつ？！」

空間移動魔法で丸太の椅子に座っていたもじちゃんの背後にワード

「アーティスト」。二さんさん。

『よいではないかよいではないか』

せいかぐだから手に催淫効果を付加つと。もじりやんをよがらせ

とりあえずフィロちゃんが眠つて頭からたき火に突つ込みそうだ
つたからたき火の火を消滅させといだ。

私達マギカが出現したらZPOには寝ちゃうって設定があるのよね。めんどくさい。変えちゃだめかな。けどリックちゃんのを変える時でもかなり文句言われたからな。とりあえずフィロちゃん周りの空間を現座標に固定つと、これで倒れないでしょ。

「また来たのか……」

「マキナカジハシルニシテ」

りゅう君は軽く呆れ気味に、リツちゃんは嬉しそうに私を見る。確認しないで来ちゃつたけどお皿いじ飯の後にみんなで話し合つてゐ所だったみたい。

とりあえずトイレ中とかじやなくてよかつたよかつた。まあそれはそれで面白うただけだ。

「何しに来おつた」

恋ちゃんだけは思いつきり警戒モードだ。

やつこえば志らやんとはあんまり話したことなかつたか。最初の試練の時、黒マキナが“斬られた”って言つてたから避けてたからな。

『ちよつと遊びに来ただけだよ～。ほり、だから刀から手を離して。私はリックちゃんのお友達だよ～。娘の友達にひびことしないでよおぬわ～ん』

「おぬしがおぬわとなぞと呼ぶなー。なひ……まあ浅倉を離せ」

『…………ぬ』

『やうやうやんの』と忘れてた。とこいつか催淫効果の出力間違えた気がする。

「あ…………ん…………ん…………は…………は…………わ…………ん…………」

あひや～、なんかすっかり出来上がりつつある。手を離すとひととと潤んだ田で私を見てきた。

「なんだ……なんだやうやいのよ…………あ…………」

あ、やつぱり出力間違えてた。

「お願い……お願いだから……最後までしてえ…………」

あひや～……。んー。サイキクスつと。

「あ…………？」

もひちゃんの体を浮かべる。そして標的をつゆう君に向ける。

『 もひちゃんをつゆう君の胸にシゴーーーー!』

「 のわあつ?...」

超Hキサイティンチーーー! もひちゃんを受け止めたつゆう君は椅子から丸太の椅子から落ちた。
そしてちょうどどうりゅう君の体にもひちゃんが馬乗りになる体勢になつた。うんまあ狙つてたけど。

「 も、もひ姉?」

「 つゆう君……お願い……つゆう君。つゆう君の……………をあたしの
こ…………もう、我慢できないの…………」「 ちゅ? !
待てもこ姉! 」「 だめ…………! やめて! 」

服を脱ぐとしたもひちゃんをつゆう君とコラちゃんが全力で止めにはいる。いやー、カオスなことになつてゐねー。…………もうそろそろかな?

「 ……………あれ?…………きやあああああ?...」

もひちゃんが悲鳴を上げた。過守護に当たられて催淫効果が切れたみたい。うん、まあ狙つてたけど。

顔真っ赤で泣きそつとなつてゐるもひちゃん達を見ながらお茶を一杯。……あ、茶柱。

「 イレーンのーーー マキナアアアアアアーーー! 」

『はいはい。スキル“第四波動”発動つと』

もじりちゃんが飛ばしてきたファイアの熱エネルギーを吸収つと。
後でお茶を暖め直すのにも使いましょ。

「あ……あんたはいつたい何しに来たのよおおおおおつ……」「んな
……」
「わあああああん……」

「あいやー、マジ泣きしちゃつたよもじりちゃん。元の世界では押し
入れ占領するレベルでHロゲ集めてたくせにこうの苦手だね～。
ま、そんなことよつ……」

『まあまあもじりちゃん、そんなことよつといい物持つて来たの。ほら
ほり』

「ぐすり……そんなことよつて……」

言にかけてもじりちゃんの動きが止まった。目をぱちぱちさせながら私の手にあるものを見てくる。

『…………PSP? しかもこの使い込み具合に改造のあと…………それに
何よつ後ろのブロンズさんステッカー…………これまたか…………』

『や、もじりちゃんのPSP。メモステもUMDも全部そのまま。ん
でさ、私とロックちゃんとちょくちょくMH_{モンキー・ハンタ}やってるんだけど一緒に
やらない? クリアできないクエスト有つて困つてゐのよ。もじり
ちゃんにうつつのつまそつだし』

「…………これやつてここの?」

「もちもぢ。といひか嫌つて言つたひれりきの淫乱状態にして最初の奴隸端からやり直しあれりやうよ～」

? あれ？ なんかモロちゃん震えてる？ といつか泣いて
あれ？ そんな奴隸皆怖かつ 「封印がとけられた——っ！—」

いきなりガバアツと号泣しながら万歳するもじちやん。え？ ち
よ？ なに？

「うふふふふ……あはははははー。ついで……ついでこの時の時が来たわー。」

だからなにこれ？！ もしかやんこんなキャラだった？！
でも乗り移ってるの？！ ま、まあいいや……。

『あ……ハ、うんそりね。それじゃリツちゃんのアヒルも……はい。
それじゃみんなでレッツゴー……』「あんたそりは“一狩り行こう
ぜ！”でしょうが！ わかつてないわねー。やり直しー。」

『ひ……一狩り行こうぜ……』

「声が小さい！」

『ひ、一狩り行こうぜ……！』

『一狩り行こうぜっ！』

「よのしい！　そしてひつさしふりのモンハン
は……どんな装備で相手をミンチにしようかな？」

最初は最初

……やだ、なにこれ怖い……。

「あつはははは…！ セコツー ガンガンランサー ヤリヤリ」

「うわあ……うわあ……、私とリックちゃんが一人がかりで勝てなかつたグランモス、フルボッタにしてるよ……。PSPを握りしめてテンションがひたすら上がりまくってるもじりちゃん。……キャラ崩壊してるし。

「バックステップオ！」

「というかさつきからもじりちゃん相手の攻撃すり抜けてるけどなんで？」

「ああそつか、回避した瞬間0.1秒ぐらい無敵時間が発生するからそれで避けてるのか……なにそれ怖い。まずもじりちゃんつてそんな反射神経なかつたはずなのに。」

「マキナ！ そっちへイト溜まつてる… 時計回りに回避して！」

『えつ？！ う、うん！？』

「いやちゅつともじりちゃんへイトつて？！ なんでそんなのわかんの？！ え、えつと一応スキル“数値判定”発動。……本当に、私の方がもじりちゃんよりへイトが3高い。こわっ。」

「よしー マキナー ジのあと威嚇に移るぜすだから頭殴つて！
それで気絶するからー！」

いやねー？！ なんかさりげなく未来予知してない？！
つてマジで威嚇しだした？！ しかも気絶した？！

「あとリリーー ジんがり肉のタイミングは音楽が鳴り終わってか
らひさ、たん、たん、よ！」

「…………うん、たん、たん（上手に焼けましたー）」

もーじちゃんはすっごく楽しそうに指示を出しながらグランモスの
しつぽを斬り落とす。うわー……なんかもう相手が可哀想になつ
てきたよ……。

「…………ねえマキナ？」

『なーにー？』

一人でグランモスを突いたり殴つたり爆破したりしながら会話す
る。リックちゃんのPSPからはまた「上手に焼けましたー」という
声が聞こえた。

「これ、元々あたしのなんだしあたしが持つてていいよね？」

『ダメー。技術レベル違い過ぎる物は表に出したりやつとまぢこのよ
う』

私がそう言つともじちゃんの笑顔が固まつた。それでもグランモ
スをボーナスを止めないのはさすがだと思つ。

「どうして……なんで……なんであたしが持つてちゃいけないのよ！？ やつと……やつとまた会えたのに……！」

いやそんな生き別れの恋人に会つたような勢いで言われても……。

「お願い！ あたしはやつとまた『』の下と会えたのー。 もう離さない！ 離したくない！」

えへ～？ なんかりゅう君と再会した時より熱入ってるよねこれ。
しかも相変わらずの超回避連発してるし
そんなこと言つてもなー。仕方ない、もじりちゃんにも納得できる
やり方で黙らせよつと。

『じゃあ、私とゲーム対決しない？』

「……ゲーム対決？」

『そつ、このAC^{アナザー・コア}で勝負しましょ。私が勝つたらPSP没収。もじりちゃんが勝つたら好きにしていいよ』

ちょっと大人げないかな？ このゲームのジャンルはハイスピーダメアクション。簡単にまとめると人型起動兵器を操つて、超音速での冗談みたいな速度で戦うゲームだ。

鬼みたいな操作難易度と複雑さ、奥深さで知られていて、思つた通りに動かすのにすら何日もかかるつていうようなゲームだ。

もじりちゃんがこのゲームやつたこと無いならその時点で勝ち確定だし、私はもう250時間以上やつてる熟練プレイヤー。おまけに自分の体にチートをかけて動体視力や反射神経を徹底的に強化して

る。負けるわけがない。

ま、他のマキナに怒られるのも面倒だし、もうかやんこは現実の
厳しさとこっちのものを味わつてもらいましょー。

『じゅあぬ～？ やる～？』

「 もりひき」

むこうちゃんはこいつ笑う。

「で、レギュレーションはいくつ？ 戦闘のルールは？ なんなら
ハンデ付けてもいいわよ？」

ふ～ん、経験者みたいね。でもそれなら潰しがいがあるわ。ただ
の人間が動体視力と反射神経を徹底的に強化した私に勝てるわけが
ないもん。マッハで蜂の巣にしてやんよ～

『ハンデなんていらないよ。それじゃさっそく始めよつか、ステー
ジは……水上ステージね』

「…………ハンデはいらない…………か。殉するがいいわ…………』の答えに…
…

ん？

…………まあいいや、そんじゃアイテム取り出す、プラズマテレビ一
台にPS3、んでもってコンセントをこの間召喚したペカチュウ入
りのボールに差して……戦闘開始つと。

ステージは水没した街。水面からビルの先っぽが顔を出したようなステージだ。私は愛機を水上でホバーさせながら各種武装を確認する。私の機体は高速起動型に組んで合って、チートをかけた動体視力も合わせてものすごい起動力を持っている。

さて、もこちゃんはどんな機体を使ってるのかな？

……つてなにあのもこちゃんの機体？

遠くに見えたのを見て、思わず吹き出してしまった。もこちゃんが使っているのは両手にパイルバンカーを装備した機体だった。

パイルバンカーってのは物凄く威力は高いんだけど射程が短すぎて対人戦ではほぼ使い物にならない所謂ロマン武器だ。まあお互い音速で飛び回りながら相手を殴るようなもんだからね。

しかも私の機体は超高速起動が自慢だし、まず敗けることはガスッ！『YOU LOSE』ない。……え？

顔面にパイルバンカーで穴を空けられて、水の底に沈んでいく私の機体。え？

もこちゃんは目を細め、細く息を吐ぐ。え？

「貴様には水底が似合いだ……」

『いやちよつ？！　え？　今何が……い、今の無し！　もう一回…』

もこちゃんはフツと口元を弛める。さ、再戦開始。

い、今のは油断しだけだもん！　つ、次は……つてあれ？！
ちょ？！　わ、私の機体の旋回速度がもこちゃんについていけない
？！　ああつ！？　画面から消え「あなた、いい的よ」ガスッ！『

YOU LOSE』

え……え……？ 今何が……まばたきした瞬間画面から消えて……
も、もう一回！

ちょ？！ なんか動き読まれ「抉らせてもううでえー」ガス
ツ！『YOU LOSE』

なんか私が移動しようとした瞬間、移動先に回り込まれてやられた。あれ？ もにちゃんに「コーラタイプスキルなんて持たせてないはずなのに……。も、もう一回！

「そんなんじや！」の先生きのこれない」ガスツ！『YOU LOSE』

…………ライフル乱射したのに全回避で正面突破された。

「死に腐れ」ガスツ！『YOU LOSE』

…………ならいっかもパイルバンカーッてやつたら案の定瞬殺された……。

「あいむ あ しんかー とぅーとぅーとぅーとぅー」ガスツ！『YOU LOSE』

…………一回も画面に捉えられないまま負けた。

『YOU LOSE』

『YOU LOSE』

『YOU LOSE』

悔しい……。悔しい悔しい悔しい！ なんで……どうして！ 私は自分にチートまでかけて……つ……ぐすつ……

「お、おこマキナ？ タカがゲームで泣くなよ……」

「うぬせこー 泣いてない！」

心配そうにじゅう君が声をかけてきた。「うせこ……なんで人間なんかに神様の私が心配されんのよお……。ああもう腹立つうぐすつ、ひつく……。

「まだまだー もう一回よー！」

「…………ん？」

「何よ！？ 文句有るならもじゅうのアラバぶつ壊すわよーー？」

もういちやんはあわててアラバを胸中に隠した。

「い、いや、なんか声の雰囲気が変わったから…………」

「訳わかんなここと言つてないで早くやるわよー 絶対勝つてやるんだからー！」

「まあいいけど。けど真剣に挑んでくる以上、敗けるつもりは無いわよ？ 3382時間のプレイ時間にかけてね

どつじょつ。勝てる気しなくなってきた……。

side 浅倉 もこ

朝、テントの中で田を覚ます。

ザーヴィーと、かなりの勢いで雨がテントに当たる音が聞こえる。体を起こしてテントに雨粒が当たるのを見上げながら小さくため息をついた。

「はあ……最悪」

元の世界ではそこまで気にしなかつたけど、この世界で旅する分には雨って最悪だ。

冷たいし、地面はぬかるむし、オオイグに乗つてゐる間なんかもろに雨が直撃するからスピード出せないし。

一応フィロちゃんことあたしで雨避けの魔法を使つてゐるけど、あたしは魔力あんまり無いからフィロちゃんに負担かけちゃう。

もう一回ため息。フィロちゃんつてすぐ無理しちゃうからあまつ負担かけたくないんだ。

りゅう君の過守護つて雨は防げるのかな？ 防げるなら雨避け魔法の範囲狭くできるから多少魔力の節約になるとと思つナビ。

うんと体を伸ばす……いたた。

なんか体もだるい。筋肉痛みたいな感じ。さすがにそろそろ体力

付けないことまずいかしらねえ……。ふあ……ねむ……。

大きくあぐびをして「キキ」と首を鳴らす。……ん、とつあえず着替えよ。

「アイテム、取り出す」

あれ？

着替えが出てこない。おかしいな？ いつもなら言い切ると同時に出てくるのに。

「アイテム、取り出す！」

もう一度やつてみる。すると今度は普通に着替えの服が出てきた。

……何なんだろ？

一応、他の物を取り出したりしまったつしてみた。……普通にできるわね。疲れてるからかしら？

ちょっと気にはなるけど……とりあえず着替えよつ。 と、その時ひょことテントの入り口からフイロちゃんが顔を覗かせた。

「あ、起きましたかもこれん」

「うそ、どしたの？」

「ああ、リリーちゃんが近くで雨宿りできそうな小屋が見つけてきたので、そちらに移動しようつてことになりましたので。もこさんも準備が終わつた雨避け魔法の方お願いしますね？」

「りょーかい」

小屋か。助かった、前回雨が降った時は一日中雨避け魔法張つてなきやいけなかつたから大変だつたのよ。

途中でモンスターとの戦闘挟んだりしたせいで魔力切れて、結局ずぶ濡れになつちやつたし。

フィロちゃんは必要なことを伝えると戻つていつた。あたしはさつと着替えて脱いだ服をアイテムボックスにしま……あれ?

脱いだ服がすぐに消えなかつた。首を傾げていると数秒ほど間を置いて消える。……あたし体調でも悪いのかしら?

「浅倉! まだ着替え終わらんのか~?」

外で恋ちゃんの声が聞こえた。とと、早く行つた方がいいか。

一応、深呼吸したり体を動かしたりして変なところがないかを確認。大丈夫……ね。荷物をまとめてテントから出た。

テントを畳んで移動を始める。雨はさらに勢いをましてバケツをひっくり返したような雨……たぶんグリラ豪雨つてやつだ。遠くが霞んで見えなくなつてる。

とりあえず少し歩いたところに有つたつていう小屋の方向へみんなで向かう。フィロちゃんがオオイグの手綱を引きながら雨避けの魔法を張つて、あたしがさらにそこに雨避け魔法を重ねて補助をや

る。

雨はきれいにあたし達を避けるようヒカーブして降り注ぐ。……
やつぱりフィロちゃんは凄いなあ。こんな大雨、あたしの雨避け魔
法じゃ絶対防ぎきれないもん。

前回はフィロちゃんは「これ」を戦闘込みで半口ぶつ通しでやつてた。
あたしなんてこの範囲まで展開したら30分ぐらいが限界だ。

ちなみにりゅう君の方はどうやら過守護の力で雨も無効化できる
みたい。だから雨避け魔法の範囲から追い出した。魔力とスペース
がもつたいない。

リリーの方は自分から雨の中に飛び出していった。なんかイメー
ジ崩れるレベルで「機嫌かつハイテンションで、雨の中くるくる回
りながら踊ってる。

元々水辺で暮らしてたらしごと濡れるのが好きなのかしら?~

「みんなー! 早くおいでよーー 置いてつちやうよーー! っ..」

少し先を行くリリーが元気に手を振っている。いやだからあんたや
んなキャラだつた?

「リリー、あんまり遠くに行くなよーー!」

「はーー」

そして恋ちゃんとの会話はまるで姉妹みたいだ。なんか和……あ
れ?

雨粒が頬に触れた。さらに続いてポツポツと雨粒が落ちてくる。
上を見上げるとフィロちゃんの雨避け魔法が雨を防ぎきれてないみ

たいで、いぐらか雨粒が落ちてくる。と、見る間にその量は多くなつていった。

「あ……あれ？ す、すいません！ 今張り直しますね」

フイロちゃんは慌てた様子でもう一度雨避けの魔法を唱える。…
…けど雨粒の量は少しの間ましになつただけで、すぐにまた増えて
いく。

「フイロちゃん大丈夫？ 調子でも悪いの？」

「い、いえ。そんな」と……わきやあ？…

パチンと音を立てていきなりフイロちゃんの張っていた雨避け魔
法が解けた。もうに雨が降り注ぐ。

「ちよ？！ フイロちゃん？！」

「あ、あれ？ そんな……もう魔力が……」「ごめんなさい！ 皆
さん走ってください！」

結局、あたしたちはばづぶ濡れになりながら走ることになった。

黒衣を纏つたその姿は闇そのものを纏つたようで、その姿は肩に背負つた大鎌と合わせてさながら生者を狩るという死神のようだ。

「あーめ あーめ ふーれ ふーれ……なんだつけ？」

その雰囲気に合わない明るい声で歌う。黒衣のフードから覗く顔は少年のものであった。金色の幼く、どこか危険な光を宿した瞳、その瞳は一つの小屋を映す。

ひた、ひた、とその小屋に近付く。少年はあいに手を当て、その小屋を見上げた。

「木造……植物だね。さて、どうなるかな？」

楽しそうに笑い、少年は小屋の壁に手を触れた。

「うああ……」

小屋の中には飛び込んだあたしはそんな声を漏らした。体中びっしゃりしぬる、下着まで濡れちゃってる……。

「「あんなやつ……」

ちゃんとファロちゃんがつなだれた。一緒にじつまと耳もくを回ぐ。

「あ、ここそこそこが気にならないで。こつもこつぱい助けでもうつしるんだし……」

「ナビ……」

伏せ田がちにファロちゃんはあたしを見た。……ああもうやつぱいかわいい。いつも表情もなかなか……。ああ……、頭なでなでして慰めてあげたい……。

「い、今ならいいよね？ 変じやないよね？ わたの手の手を伸ばす。けど間につゅう君が入ってきた。

「体調でも崩してゐるんじゃないかな？ あまり無理あるなよ？」

つゅう君はファロちゃんのおでこに手を這ひこむ。ファロちゃんは

「ひやつ？」って悲鳴を上げた。しつぽが跳ね上がる。

「……熱は無いけど顔が赤いな。腹減つてないか？ 栄養がないと体温も上がらないからな」

「あ！ い、いえ！ 大丈夫です！ お、お気遣いありがとうございます！」

「やうか？ けど辛くなつたらすぐ言えよ？ それに今回のこととは気にするな。濡れたことには誰も怒つてないし、むしろお前がしじげてたらみんな心配するんだ。いいな？」

「は、はいー」

フィロちゃんの顔が一気に明るくなつた。しつぽもパタパタ元気に揺れてる。……りゅう君ずるい。涼しい顔してそんな台詞吐かないでよ……。あんたはエロゲの主人公かつての。

フィロちゃんもそういうこと言つてもひつのに弱そうだし……ああなんかもうりゅう君を見上げる目が恋する乙女に……。くそ、一発ひつぱたいてやりたい……。

……あたしもりゅう君のことは好きだ（もちろん幼なじみとして）。けどやっぱりゅう君ってフィロちゃんと絡んでるのを見るとちょっとイライラしてくるわけで……。

「ほーほーい女の子勢は着替えるからあんたは外でリリーとでも遊んでなさい」

「と？ なんだよもー姉？」

「ここから出た出た

しつと追い払つよつてひき出しつを追い出した。フィロちゃんは少し不満そうにあたしを見てくる。だつてさ、あこつ普通にフィロちゃんとフリグ乱立するんだもん。これ以上ほつとこたうどつなるか。

「の、のつ浅倉……」

恋ちゃんがおずおずと声をかけてきた。ん？ 何かな？ 恋ちゃんがこんな風に話すのは珍しい。

「その…………わしも濡れたから…………その…………」の前買つてもひつた……服とし、しし下着をじやな……」「

ほほほほ

これまで濡れよつが汚れよつがひたすらあたしが買つてきた洋服と下着を着るのは断固拒否してたの。うふふふふ、なんか最近どんどん女の子っぽくなつてゐる。

その様子を見せるのが最近ちよつと楽しみなのよね。いつかフィロちゃんも巻き込んでいろんな服着せてみたい。

よしよし、どんな服がいいかな？ あまり派手なのは嫌がるだらうから地味めなので……。

「アイテム、取り出せ

…………あれ？ また出ない。本当にビビリやつたんだらあたしじ…

「アイテム取り出す。アイテム取り出す。アイテム取り出す。アイテム取り出す。」

出てきたのは目的のやつとまったく違う服……着物なんだけど裾が短くて袖なんかにもフリルが付いた白い和コスだった。前の町でなぜか有った というかたぶん白マキナの好みで作ったんだろうコスプレ専門店で買ったやつだ。いや、やたらめつたら安かつたのよ。

あくまでも安かったからいいっぱい買ったわけで、別にフィロちゃん達にコスプレさせようとか考えてた訳じゃない。うん。まあ念のために一人の体に合わせたやつばっか買ったけど。

和コスの服を広げる。ベースは着物だけどふりふりの付いた長い袖に明るい花模様。至るところに当然のようにフリルが付いてる。そして一番ハードル高いのは下半身の方だ。なんか……花が開くような形状のスカートでやっぱりフリル完備。しかもこの長さだと……ちょっと動いたら見えちゃいそうね。さすがにこれは酷いか。

「『めんね？ なんか違つの出ちやつた。すぐに別のに』」「……これでよい」

……え？

「……これで……よいと言つておる……」

恋ちゃんは軽く手を潤ませながら和コスを掴むんだ。ふるふると手が震えている。え？ いやマジで？ なんていきなり？ なんかの罰ゲーム？

「え、やつたの恋ちゃん？ 普段なりにこの服絶対着なこの」

「……練習……つめつかと……」

「練習へ。」

「わの……普通の女子せいりこの華やかな服が好きなんじゃね？
じゃから……少しほ慣れようかと……」

「やこや聞違ってるわよわの認識？… こやそりや確かにかわいい
ことは思ひださび少なくともこれを着る頃はあたしにはないよ？！
…………恋ちゃんの和式姿…………。

「へんれん？ わの認識はひよつと……」 「フイロちゃんストップ
…………」

「フイロちゃんの口をふたこだ。だつて見たい。是非とも見たい！
恋ちゃんの和式姿……」 のチャンスを逃したらたぶんもつチ
ヤンス無いもん……

「うそりせりやつつの女の子はフコルとか付いたかわいい服が似合
よねー ジャあ恋ちゃんもれつやくやつみよつー 頑張つてー！」

「う……うむ」

恋ちゃんは帯を緩めた。はだけた着物の間から覗く白い肌。なん
と云ふか……女のあたしでもむしゃぶり付きたくなるような滑らか
な肌……あ？！ いや？！ 別にあたしはそこまで変態な詫じやな
いよ？！ ただ……恋ちゃんにはなんか思わずそんなことを思わせ
る色氣があるんだ。

もちろんまだ子供だから、前の町ではさすがに言い寄られたりはしなかつたけど、ロリコンの氣が有る人や同年代の子なら問答無用で一目惚れさせそうなぐらいの魅力が有る。大きくなつたら魔性の女とかになるかも……。

「の、のう浅倉……そ、そんなに見んでもうえんか？」
着替えずら
い……」

「あ。ごめんね？」
「じゃあ向こう向いてるから」

恋ちゃんに背中を向ける。……ん？ 振り向いた瞬間、視界の端に人影が映った気がした……けど気のせいいか。

後ろでは恋ちゃんが着替える衣擦れの音が聞こえる。着物が床に落ちる音、下着を下ろして……や、ヤバい、なんかドキドキする……。

ちょっと時間が経つて着替え終わつたらしい。衣擦れの音が止んだ。恋ちゃんが深呼吸する音が聞こえた。

「...」

言われて振り返つて……言葉を失つた。白い和ゴスの衣装に身を包んだ恋ちゃん。顔を真つ赤にして、短いスカートを恥ずかしそうに抑えながら、子犬みたいな潤んだ目であたしを見上げてくる。

なんだろ? その……何て言うか、初めて“萌え”っていうのを知った時の気持ちを思い出したというか……。えっと……うん。

「ま、股下がすーすーするの?....。ビ、ビンが.....変かの.....?」

不安そうにあたしを見上げてくる恋ちゃん。ヤバい、萌え死ぬ。とにかく写メを一枚。カシャッ。画像を保護フォルダへ保存。あ、念のためSDカードにも「コピー」と。よしもう一枚。

「な？！」「ら？！」[写真撮るでない？！]

「やだ！これで撮るなんなんて生殺しだよ？！ フィロちゃん！ 恋ちゃん押さえてて！」

「え、ええ？！」

「 つ？！ ちよ、ちょっと待て！ 今外で何か物音が……！」

「そんなこと言つて」まかそつとしてもむ……あれ？」

がくん、と。急に重力が強くなつた気がした。

……なんか昇りのエレベーターに乗つてる時みたいな感じ。いつたいなに……「やつと終わり？ よかつたー、さつきはいきなり着替え始めたから出ていくタイミングに困つてたんだ」

天井から明るい、男の子の声が降つてきた。何が起きたか確認する間もなく、ふわりとあたし達の前に真っ黒な服を着た男の子が上から降つてきた。その手に握られてたのは……真っ黒な大鎌。

「お姉ちゃん達は竜人じゃないけど……ま、いいか」

「こりと晴れやかに笑い、踊るように大鎌が薙ぎ払われた。

side 神崎 竜斗

「ココウトー！ いくよー！」

大雨の中、雨の音に負けないように大きな声でリリーは呟ぶと、俺に向けて水の球を投げた。受け止めるときヨンとしたゼラチンみたいな感触。手の上でフルフル震えている。

これはリリーが遊びのために水を魔法で固めたやつだ。

リリーは元気になつたことのきっかけは師匠の「母親になつてやだと思ってたけど、こういう面も合つたんだな。……いや、母親が死んだつてのが有つたからな……」。

「これだけ元気になつたことのきっかけは師匠の「母親になつてやる」発言からだらう。

あのあと師匠とリリーでしばらく話してたんだが、師匠は本当に子供ができたみたいだなんて何だかんだで喜んでたし、リリーの方もそりやつて“子供”として扱つてもらえることが嬉しかつたらしくすんなり仲良くなれた。

それに加えてこの雨だ。元々水辺で暮らしていたリリーにとって、肌が乾燥するっていうのはかなりのストレスらしい。だからこうやって雨に濡れるっていうのはリリーにとってとても気持ちのいいことだそうだ。それでこんなにテンションが上がつているんだらう。

水の球を投げる。リリーはそれを取つて投げ返す。つと、こいつ意外に肩いいな。キャッチもうまいしもう少し強めにいくか。水の球を握り直してさつきより強めに投げた。

「わっ……！ ジャあ、ぼくもいくよー！」

さらに強い球が返ってきた。

意外にやるなこいつ……こいつもさうに強く投げる。けどリリーは片手であつさりそれを取つた。そして返ってきた球はさつきよりさらに強い球だった。

これは……男として引けない。さらに強くぶん投げる。

竜人になつて腕力上がつたのもあって、たぶん150kgぐらいは出でてると思う。

けどリリーはそれをすんなり受け止めた。なんか……軽く悔しい。

「とにかく、リコウト？ ちょっと、気になつたんだけど……」

「どうした？」

俺のと同じぐらこの勢いの球が返つてくる。受け止めた手がじんじんする。

「ココウト、過守護つていう能力で雨を防いでるんだよね？」

「ん？ ああ、そうみたいだな」

大きく振りかぶつて全力投球。水の球が降り注ぐ雨粒を吹つ飛ばしてリリーに向けて飛んでいく。けどリリーはやはりあつさりとそ

れを受け止めた。

「じゃあ、なんでこの水の球は防がれないの？」

豪速球が返ってくる。ヤバい。マジで痛い。グローブが欲しい。

「そりゃあ危険じゃないからだろ」

ちょっと微妙な気もするがたぶんそうだ。過守護の効果は自分やもこ姉にとつての脅威を無効化する能力。ただ、何でもかんでも防ぐって訳でもなくて、師匠のツツ「ミミとかは普通に通る。どうやら過守護の脅威って言つのは体に何らかの悪影響が出るレベルかららしい。

ただし相手に敵意とか害意が有った場合は別みたいで、旅の間に出了むすくちゃ弱っついモンスターの攻撃なんかはちゃんと防いでた。

球を投げ返す。まあ今考えたのはだいたいもこ姉が分析したことなんだけどな。もこ姉は本当にこういつの得意だ。

「じゃあ、なんで雨は防いじやうの？　こんなに気持ちいいの？」

「そりゃあ、雨なんて浴びてたら風邪とか引くからだり」

「竜人、風邪なんて引かないよ？」

リリーは首を傾げながら球を返してくれる。

……そりいや水浴びする時とか、師匠はかなり寒そうにしてたけど俺は特に何も感じなかつたな。いやけどあれは自分からやつてるから…………ん？　あれ？　なんか引っ掛かるな。

球を投げ返す。

ああくそ、もこ姉ならもつとすんなり考えられるんだろ？」「あ～、水浴びの水は防がないのに雨は防いで別に体に影響は無くて……」「ぶつ？！

リリーが投げた水の球が顔面に直撃した。いつてえ……。

「つコ、つコウト……だ、大丈夫……！？」

「お……おう……」

リリーが心配そうに駆け寄って来る。これは……かなり恥ずかしい……。

けど、過守護で今を防げなかつた？ まあ確かに痛かつたけど、脅威かつて言わると微妙だしリリーにも悪意は無い。……となると、ただ雨に濡れるのが脅威つてのは無理があるか？

そうなると……誰かが俺に害意を持つて雨を降らしたとか……この雨自体がなんかヤバいとかか？ ……そういう口もなんか様子が変だつたような……。

一応後でもこ姉に相談してみるか。

そう思つてもこ姉達のいる小屋の方を見た瞬間、地面が軋むような音が響いた。なんだ？ なんか下から……つてうお？！
いきなり地面が何かに押し上げられた。とつやに飛び下がつて距離を取つて……なんだよこれ？！

「や……木い？！」

小屋の下から大木がものすごい勢いで生えてきている。それは小屋を巻き込んでるか上空に押し上げてしまった。いや？！ 訳わからんねえぞ？！ 木とは言つてもちよつとしたビル並の太さと高さ

があつて……」、「この世界ってこんなあつといつ間に育つ木があるのか……？」

「リュウト……」

リリーが俺の腕を掴んだ。なんか……怯てる？　さっきまでの元気の良さが無くなっている。

「氣を、つけて……なにか、来る」

「来る？」

ふわりと羽根が落ちてきた。真っ白な、綺麗な羽根。見上げるとそこにそいつはいた。

「天……使……？」

雨の中、そいつは宙に立っていた。よく本で見る白い天使の翼。風もないのに法衣と長い金髪がはためいている。

「教皇様の名の元に、貴殿方に裁きを下しに参りました」

抑揚の無い声でそいつは言った。氷みたいな白銀の瞳が俺達を捉えた。　ヤバい。目が合った瞬間、それだけで背筋が寒くなつた。なんかわかんないがこいつは……絶対ヤバい！！

天使は何も無い空間から「」と矢を取り出すと、それを俺達に向けた。

「私は“光の教団”№・4 メリウス。悪しき存在よ、死を享受

しない。そして悔い改めなさい」

「確かに死にたくないぐらいやばいことはしたけど本当に死ぬつも
りはねえぞ！」

メリウスと名乗った天使の射った矢を拳で弾く。俺の拳に触れる
直前に矢は勢いを失って簡単に弾くことができた。

これが過守護の効果か……これなら！

「リリー！ 僕の後ろからあいつを狙え！ 矢は俺が弾く！」

「う、うん……」

リリーを後ろに回し飛んでくる矢を弾き飛ばす。メリウスは少し
不満そうな表情で矢を連射し続ける。けどこの程度なら楽勝だ。師
匠との修行と比べれば問題ない。

最初に感じた嫌な感じは気のせいだったか？

「リリー！」

「うん……！ いくよ……！」

リリーが聞きなれない言語で何かを叫ぶと周りの雨が集まり、四
頭の水の龍へ変わった。

それが一斉にメリウスに向かい、一気に炸裂した。空気が震える
程の衝撃。辺りを水煙が包んだ。

「やつたか！？」

「……だめ

突風が吹いた。それが一気に水煙を晴らし、メリウスが姿を現す。
無傷の姿で。

「……この雨……なるほど、道理で矢に魔力が込められなかつたわけです」

メリウスは雨に手をかざし、ため息をついた。

「致し方ありません。帰りの魔力を残しておきたかったのですが、早めに終わらせましょう」

メリウスは空に手をかざした。その手の先にはギラギラとした光が集まっていく。ゾクリと鳥肌が立つた。

まずい……！

これだ……俺が最初に感じた感覚は……！

「禁忌【極光の鎌】」

メリウスがそう呟いた瞬間、辺りが光に包まれた。

十五日目（4）

side 浅倉 もこ

「も！」さん危ない！？」

「わっ、きやああああ？！」

「叫んどらんでとつとと逃げんか！」

「よそ見してないでこいつち見てよ～」

四人の声が入り交じる。地面に伏せたあたしの頭の上すれすれを突然現れた黒いショタつ子の大鎌が掠めていく。すぐに恋ちゃんが間に回り込んで大鎌を弾き返した。

な、なんのよいきなり？！ なんでいきなりあんなショタに襲われてんの？！ あたしなんかした？！

狭い小屋の中で大鎌と刀がぶつかって火花が散る。お願ひだからこんな狭い小屋の中でチャンバラは……きやつ？！ 目の前の床に大鎌が刺さって床板が砕け散った。と、とにかくここにいちや駄目だ。

「フイ、フイ口ちゃん生きてる？！ 大丈夫！？」

「は、はい！」

「ど、どこかく逃げよつー、レーヤバす、あるー。」

ほふく前進で小屋の出口に向かう。武器がぶつかり合つ火花があたしの方まで飛んでくる。

とこりかりゅう君達は何をやつてんのよー、じんだけ派手にやつてるんだから助けに来なそこよー。

何とか扉までたどり着いて扉を開けた。

「…………はっ。」

扉を開けるとそこには地面が無かつた。木……そう木ね。うん、なんか小屋がやたらめつたら大きな木の上に移動してる。というか大雨が降つて視界が悪いのもあるだらうけど地面、見えないんですけど。

あ……あはは……い、今までゾンビやら幽霊やら見てきたもん。今さらこの程度で驚かないわよ~、え……えっと……と、とりあえずどうしちよ……。どこか降りれる場所は……。

「も、もしやん? どうかしたんですか?」

フイロちゃんがあたしの隣まで這つてきて扉の外を見下ろす。その時だった。

「いまだ」

黒ずくめのショタの声が響いた瞬間、いきなり小屋が横倒しにな

つた。え？！ ちよ……やつ？！？！ 重力に引かれて体が落ちる。

「なん……？…」 「も！」 ん？…」

あたしが、フイロウちゃんが、恋うちゃんが扉から空中に投げ出された。や、やだうや……こんな高さから落ちたら……。痛つ？！

何かがあたしの腕に絡み付いた。腕が引っ張られてガクンと空中で宙吊りになる。肩が抜けそつながらに痛い。

「フイロウちゃん……！ 恋うちゃん……！」

一人はそのまま落ちていって見えなくなってしまった。……見上げるとあたしの腕にはロープが絡み付いていた。まるで生きてるみたいに自分からあたしの腕に巻き付いてくる。そしてそれを投げたのは……セツキの子だ。

横倒しなった小屋の出入口からあたしを引っ張り上げていく。助けた？ ……いや、いきなり襲つてくるような相手だもん。何か企んでると思つた方がいい。

なら引き上げた瞬間……よね。大きく深呼吸。引き上げた瞬間に持つてた剣全部アイテムボックスから出して串刺しにしてやる。相手が子供だらうが酷いことわれるぐらにならあたしはやるよ。うん……今なら……できる。

「や～て、暴れないでよお姉ちゃん」

小屋の中に引っ張り上げられた。 今だ！

「アイテム！ 取り出す…

え？

剣が出ない。そんな！？ こんな時に！

「お姉ちゃん、能力使おうとしてもたぶんもう無理だよ。あんだけ雨、浴びたもん」

首筋に大鎌を当てられた。黒い刃の冷たい感触に息を飲んだ。こ、これもし横に振られたら……背筋がぞつとした。

……怖がっちゃ駄目だ。パニクつちゃ駄目だ。考えないと。

パニクつたらくなことにならないのは嫌ってほど経験してる。ほら、ゲームならこんなピンチでもわくわくしてやつてたじやない。きっと……きっと攻略法がある。

こいつはさつき『雨を浴びたから能力が使えない』って言つた。そしてあたしやフイロちゃんの異変……たぶんこの雨には能力や魔法を使えなくなる効果があるんじゃないかしら。

そういうとあの雨を降らしたのはこの子？ なんにせよそんなことができるなら相当強いんだと思う。天候を変えれるような人って大抵強キャラだし。

「ふーん、けつこう落ち着いてるねお姉ちゃん。いつもこの慣れてるの？」

「…………まあそんなところかしらね

そうよ。今までだつて黒いマキナに殺されたりゾンビに襲われたりしてきたんだもん。それに比べたらこれぐらいどつひとつない。

少なくともあたしを助けたんだから殺す気は無いだらつじ人間だし子供だし。ちょっとかわいいし。

「ま、いいんだけどさ。とりあえずお姉ちゃんの名前教えてくれない? フルネームで。あ、嘘言つたら首はねるから」

「ううと怖い」と呟わないのでよ……。

「浅倉…… もー」

「お? その名前やつぱりプレイヤーだね? 変な能力持つてるみたいだつたからもしかしたらとと思つたけど」

「? ? ! プレイヤーのこと知つてゐることせよ! こつもプレイヤー? ! けどそれならなんでこんなこと……

「あ、ちなみに僕はイシュトゥヒューラだ。……たぶんね」

「たぶん?」

「へーん、元の世界の記憶がだいぶ曖昧でさー。PKってだいたいじつりしいんだけど」

血の気が引いた。そんな……PK……プレイヤーキラー……。一回目の試練のゲイツと同じ……。いやけど、PKのルールは試練の度に“誰かを殺す”だったはず。ゲイツはそれに関係なく殺して

たみたいだけどあんなぶつ飛んだ快楽殺人者がそいつてこぬもんか。
だからきっと……大丈夫。

無理やりな思考で自分を落ち着かせる。

「んー。まあいいや。わいわいとやる」と涼ませながらもハ

イシコトはにじり笑った。

「服、脱いでくれない？ 全部」

え？

言葉の意味を理解するのに少しかかった。

脱ぐ？ え？ ええつ？！ そ、そういう田的？！ え？！ そ、
そんな？！ あ、あ、あたしそんな……。い、いやそりやガチムチ
とかキモ男にやられるよりは全然マシだけどそんな！？

心臓の音が一気に早くなつた。

な……なんで「こんなことに……」いや、そりや……かわいい
ショタっ子とHなことするとか妄想したこと無い訳じゃないけどさ
……だ、だつて、その…… も、もすがに……。

痛つ？！

大鎌の刃があたしの首筋を引っ掻いた。え？！ そ、そつち

系のプレイ？！　いや、いやそりゃあたしがちがうと云うだけ
そんないきなりは……。

イシユトは大鎌に付いたあたしの血を指で拭うと、それを口に含
んだ。

「スキル【即興劇】発動」

ふつと、部屋の中の空気が変わった。

side 神崎 竜斗

地面に大きく空いたクレーター。その底で俺は膝をついていた。光の塊を叩き付けられた地面はショウショウと煙を上げている。

「ぐ……痛つ」

ヤバイ……な、今のは……身体中、バラバラになりそうだ……過守護無しだつたら本当にバラバラだつたかもな……。けど、骨までは……いつてない。

顔を上げて、メリウスを睨んだ。

「なるほど、報告通り強力な防御能力を持つているようですね。あの攻撃に耐えますか」

メリウスは気を失つたりリーを抱えて空中に立っていた。冷たい目で俺を見下ろし、薄い笑みを浮かべている。

「竜人つてのはだいぶしぶといみたいだからな。……それより、その子下ろしたらどうだ？ 戦いづくりだろ？」

「ご心配には及びません。もはやあなたなど私の相手にはなりませんからね。それに今さつき命令が入りました。……本来なら貴殿方に裁きを下し、この世から消えてもらうはずでしたが、この子は連

れ帰ることになりました。命は取りませんので」「安心なさい」

「……どうしてんだ？」

教皇……そいつがマキナが言つてた光の教団のトップか。たしかマキナは、強力な人心掌握の能力を持つていてそれで周りの人間を操つてるって……

「貴殿方は光榮に思うべきです。本来ならここで死に行く運命であつたのに、教皇様はこの子を教団に連れて帰るように仰い、貴方は捨て置くように仰られました。教皇様に気にかけてもらえるなど名誉の極みですよ?」

「……だからなんで殺そうとしていたリリーを連れて行くつて聞いてんだよ。教皇っていうのの目的はなんだ?」

「教皇様は今回、私の眼を通してこの戦いの様子を『』覧になつたのですが、このリリーという竜人がよく見ると可愛らしく気に入つたのでペットにしたい……と

は?

ちょっと待てよ、なんだその理由。リリーをペットなんて……いや、それは置いといても仮にも教皇なんて呼ばれてるやつが『ペットにするから連れて帰れ』しかも竜人の俺を放つておいて?

無茶苦茶にも程がある。

「お前、その命令なんとも思わないのか?」

「何がですか?」

「ペットとか、俺を放つておけとかだよ！ 特に……俺は違うけど、黒竜の竜人つて危険な種族なんだろ？ それをそんな理由で野放しにしていいのか？」

メリウスは不思議そうに首を傾げる。その仕草に俺は嫌なものを感じた。

「そんな理由もなにも、教皇様の命令に従うのは当然でしょう。何がおかしいというのですか？」

教皇つてやつの人心掌握能力……思つたよりヤバいものなのがもしれない。

「さて、それではそろそろおいとましましょうか。あまり教皇様を待たせるわけにもいきませんので」

メリウスは翼を広げた。まずい！ 飛ばれたりしたら追いかけるのはほとんど絶望的だ。

拳を握り、一気に踏み込んだ。

メリウスが何かを呟くと見えない壁のようなものに拳を止められた。拳との間でバリバリと火花が散る。

ふと、メリウスは視線を上に上げた。表情が苦々しく歪む。

「……彼女ら、受け止めなければ怪我ではすみませんよ？」

「あん？」

その瞬間には何を言つてゐるのかわからなかつた。だがずっと上

の方からフィロの悲鳴が聞こえてハッとして空を見上げた。

「なつ？！」

師匠とフィロの二人が落ちてくる。

嘘だろ？！　これは……ヤバい！！

踵を返してすぐにそちらに走った。まずい！　師匠の方は落ちながら体を捻って着地の体勢を取っている。

だがフィロはそれができない。まっ逆さまに地面に向かって落ちていく。

頭が潰れたフィロの姿が脳裏をよぎって鳥肌が立った。間に合え！　思い切り地面を蹴る。

が、ぬかるんだ地面に足を取られてしまった。思わず息を呑んだ。フィロに地面が迫る。

「神崎！…」

空中で師匠がフィロの足を掴んだ。そして思い切りフィロを俺に向けてぶん投げた。

フィロの体を受け止める。師匠は体勢を崩した状態で地面に落ちた。　何かが碎ける音がした。

「…………師匠？」

…………いつもならすぐに返りてくる返事がない。

「お見事です。どうにか助かりましたね。……まあ、やはり一人は無事ではすまなかつたようですが

背後からの声。振り返るとメリウスがリリーを抱き抱えたまま、空中に浮かんでいた。

「それでは私はここで。」きげんよう、黒竜の竜人よ

「ま、待て！」

止める間もなく、メリウスは空高く飛んでいつてしまつた。

十五日目（6）（前書き）

ノクターンにてセルフパロディ作品『神をまとひゲーム脳とエロゲ主人公の物語』を初めてみた。

ちょ　ww アクセス数本家涙目　ww

「師匠！ 師匠！」

返事が無い。抱き起こして見ても田を開じたまま開けりとしない。
おい……嘘だろ……？

胸に耳を当てる。……トクントクンと心臓を打つ音が聞こえて少
しだけ胸を撫で下ろした。

左腕と左足が風船みたいに酷く腫れ上がっている。これは折れて
る……いや、砕けてるか？ とにかく素人目でもわかるぐらい酷い。

「レン…… セん……」

ふらふらとフィロが近付いて来る。師匠を見てハッと口元を抑え
た。目から涙が溢れ出す。

「私の…… セいで……」

「そういうのは後だ！ もし姉はー？」

「そ、それが……まだ上に……い、いきなり大きな鎌を持った男の
子が襲ってきて！ それで……」

何なんだよこの展開は？！ 大きな鎌を持った男の子？！
そもそも光の教団つてのの仲間か？！ 小屋を押し上げた木を見上

げる、上の方は雨で霞がかつていて見えない。匂いも……駄目か。
ん?

木の方から何かが落ちてくる。…………悲鳴？

「あああああー!? 誰でもいいから受け止めてえええーー!」

もー姉？！

落ちてきたのはもこ姉だった。ま、待てよおい！？　すぐこもこ姉の落下点に回り込む。いけるか？

受け止めた瞬間、過守護の能力がもこ姉の衝撃を和らげるのを感じた。がつちりと抱え込んでしりもちを付いた。

「あ……あつ……ありがと、うつむかへん……」死ぬかと思った

■ ■ ■

「もこ姉？！ 大丈夫か？」大きな鎌を持つたやつに襲われたって

「え？ あ、ああ、うん。大丈夫だよ。隙を突いて飛び降りてきたの？」

「姉は立ち上がると服に付いた泥を払う。メリウスの攻撃で聞いたクレーター や折れた矢を見回し、そして師匠に目を止めてハツと息を飲んだ。

「れ、恋ちゃん？！大丈夫？！」

わたわたくし師匠に駆け寄つて行つた。「ヒール！……ああもう

！魔力切れてる！ アイテム取り出す！ 包帯！ フィロちやんそつち縛つて！ そうやって師匠の手当をすむもじ姉とフィロから視線を外し、メリウスが飛び去った空を見上げる。

……くそ……くそおつ…！

思い切り地面を殴り付けた。

姿はもう見えない。匂いも完全に消えて追いかけることもできない。くそおつ！ わきまで楽しそうに笑つてたのに… 何でだよくそおつ…！

「つゅう君？」

もじ姉は師匠を手当しながらじかじを向いた。その間も師匠を手当する手は止めない。ゲーム脳の効果で“手当”もほとんど無意識でできるらしい。

「何があつたか話してくれない？ ……リリーは死に？」

「ああ……」

俺が一通り説明するのもじ姉は呆然としたように口を開けていた。

「……え？ 光の教団？ あの、マネキン軍団が言つてた？」

「ああ。リリーを拐つたメリウスつてやつの口振りからするとぐに殺されたりはしないだろうけど、追いかけるのは… もつ…」

「 大丈夫」

「」姉は確信を持ったように言った。俺が言葉を返す前に町で買った地図を取り出すと、その一点を鉛筆でグリグリと塗り潰す。

「も」姉？」

「光の教団つてのわね。世界のあちこちに転送用の魔法陣を隠して、それを使った転送魔法で移動するの。この近くならさつき鉛筆で印付けた場所ね。で、転送魔法つてのはかなりの魔力を使って準備しないと発動できない上に時空間が弛む時間帯……つまり日付が変わる前後30分しか使えないの。だからその時までに追い付いて襲撃を掛ければ間に合つてわけ。向こうつも魔力減ってるだろうしあまり……」「ちよ、ちよつと待つてくれも」姉？！」

俺が話を止めるとも姉は不満そうに顔を上げた。

「何よ？ 時間無いんだから質問は後ににしてよ

「いや！ なんでそんな魔法陣やらなんやらの」と知ってるんだよ
？ 僕 初耳だぞ？」

俺がそう言つとも姉はきょとんと首を傾げた。

「……あれ？ なんであたしこなこと知つてんの？」

「いや、だから俺に聞くなよ」

「フィロちゃん？」

「いえ、私も今のは初耳ですけど……」

「もう姉はもう一度首を傾げる。

「まあ、知ってるならそれはそれでいいじゃない。そんなことよりりゅう君手伝つて、恋ちゃんが休めるようにテント準備して……リリー助けに行くわよー！」

「そりだ。今はリリーを助ける方が優先だ。もう姉のことも今はいい。

……なんだ？ この違和感……？ 「りゅうくん！ ボーッとしてないでテントそっちの地面に固定して！ 力有るのあんたしかいないんだから！」

「お、おひ」

あわてもう姉の手伝いに走る。

テントの組み立てをもう姉を手伝つて地面に固定する。

「つゅう音……やつち地面に打ち付けて……」

もこ姉が泣いていた。

正直少し意外だった。一回田の試練の辺りから俺や師匠以上に怪我とかに対しても動じなくなつたのに。

「……泣くなよも」姉

「だつて恋ちゃんが……恋ちゃんが……」

雨に濡れながら涙声のままテントを組み立てるも「姉。……普段なら【ゲーム脳】の効果つてので誰よりも早くテントを組み立てていたのにひどく手付きがたどたどしい。俺の半分も進んでない。

「ねえりゅう君……恋ちゃん大丈夫だよね……」

ぐしごしと涙を拭うも「姉。……なんだろつか。まるで最初の頃のも」「姉に戻つていつてるみたいな……。

十五日（火）（前書き）

昨日の晩に投稿するつもりがいつの間にか爆睡してたorz
疲れてるなあ……

俺ともこ姉はオオイグで平原を駆け抜けて、転送魔法陣つていうのがあるつていう森に入った。かなり深い森で、生い茂る木が空を覆い隠す程だ。地面もびっしりと苔に覆われている。たぶんめつたに人が来ないんだろう。

「ここからは体の大きいオオイグには乗つていけそつにない。降りるしかなさそうだ。」

オオイグから飛び降りて匂いと耳で周りの安全を確認する。……大丈夫。それにほんの微かにリリーの匂いを感じた。もこ姉の言ったこと、間違つてなかつたみたいだ。

「もこ姉、ほら降りれるか？」

「ん。よつと」

もこ姉に手を貸して降ろしてやる。

フィロと師匠は置いてきた。師匠は動かしたらまずそうな状態だつたし、手当てや気を失つてる師匠の護衛にはそれなりに強くて索敵もできるフィロが適任だつたからだ。……まあもこ姉がそう決めたんだけどな。

もこ姉はキヨロキヨロと周りを見回して、地図を広げる。

「転送魔法陣はここから東に300㍍つてところね。言つた通り、

日付が変わる前後30分までは向こうもどこかに隠れて魔力の回復に集中してると思うから、こっちも隠れてるわよ。あたしも魔力回復しどきたいし先に見つかったらほぼ終わりだからね。作戦でも考えてましょ

「相手の場所は探さなくて大丈夫なのか？」

「魔法陣の場所は知ってるし、使おうと思つて即使えるほど転送魔法は易しくないよ。こっちは匂いである程度索敵もできるしね。それよりは下手に動いて見つかるの方が怖いわ」

「……おう

適当な岩影に腰をおろす。地面の苔がまるでクッショングみたいだ。力を抜いて、ふと息を吐いた。

……なんなんだろ？　この気持ちは。

リリーを助けなきゃいけないのに……、気が進まない？　リリーのことは好きだ。それは間違いない。助けてやりたいと思ってる。

……なのに、気乗りしない。これは……戦うのを嫌がってるのか俺？

自分の腕を掴むとズキリと痛んだ。メリウスの攻撃でまだ身体中が痛い。

……正直あまり動きたくないしメリウスと戦いたくない……。

「アイテム取り出す。水筒。……りゅう君も飲む？」

「ああ、サンキュー」

もこ姉はストンと隣に腰を下ろすと、取り出した水筒から水を一口飲んでそれを俺に渡す。……………これさつきもこ姉が口付けたよな？　いいのかこれ？

「りゅう君さ、怖いんでしょう？」

「は？」

もこ姉は身を乗り出すようにして俺を見ていた。ちょ、ちょっと近くないか？　それになんでいきなり？

「りゅう君の過守護の能力、以前よりは心への影響減ってるってマキナも言つてたでしょ？　だからきっと、そういう怖いとかの感情が戻ってきたのよ。少し前までのりゅう君、自分が怪我するのも全然気にしないから見ててヒヤヒヤしたもん。けど今はちゃんと怪我するの怖がってるよね？　わざと傷の手当としてる時も痛そうな顔してたし」

確かに俺、ちょっと今まで怪我とか全然氣にしてなかつた。思い出して納得した。何も氣にしないで素手で刃物受け止めたりしてたし、もこ姉さえ護れたらそれでいいって思つてた。

けど今同じようにできるかって聞かれたら……自信が無い。……
師匠が言つてた『今のままじゃもうもこ姉を護れない』っていうの、こいついうことか？　だとしたら師匠エスペーかなんかかもな。いや、今気付いたもこ姉も相当だ。俺自身気付かなかつたのに。

「よくわかつたなもこ姉、今日は……なんか凄くないか？　転送魔法陣つてののことにも妙に詳しいし。本当にどこで知つたんだ？」

俺がそう言つと姉は渋い顔をして額に手を当てた。

「あたしも転送魔法陣のことは本当になんかわかんないんだけど、なぜか知ってるのよね。どこで聞いたのかしら？ りゅう君に気付いたのは……たぶんスキルのゲーム脳が弱つてるせいしから」

「ゲーム脳が弱つてる？」

「そ、黒い服着た男の子が襲つてきたって話したでしょ？ その子が降らした雨で能力を封じられたつてのも。だからりゅう君のことにも気付けたし雰囲気も違うんだと思う」

「……どういう意味だ？」

もこ姉は「うーん」と首をひねる。なんて説明するか考へてるみたいだ。

「ゲーム脳の効果はいろんな行動をゲームみたいにする事。食事とかよく食べさせてもらつてるから知つてるよね。でね、行動だけじゃなくて考え方もつてことみたい。……要するに」

もこ姉はおもむろにボウガンを取り出した。矢をつがえてそのまま準をすぐ近くの木に……いや、木に止まつている鳥に向けた。

ピュンと矢が空気を切り裂く音。矢は鳥に突き刺さり、そのまま地面に落ちた。矢が刺さった鳥は地面の上でピクピク震えている。

「あ……」

「あたしは今、あの鳥を射つても何も感じなかつた。せいぜい『当

たつた当たつたつ』つてぐらうね。つまりそつこつ」と

も「姉はボウガンをしまいながら言った。どことなく自嘲氣味に笑う。

「これまで……一回目の試練でゲイツを射つてからはそう、なんか吹つ切れちゃつたみたいでね。モンスターなんかは普通に殺してきたし、殺しても何にも感じない。……けどあたしさ、元の世界にいた頃はそういうの全然駄目で、部屋に現れたゴキブリ叩き潰すこともできなかつたんだから。

けどゲームだつたら特に気にせず殺せる。

たぶんだけど、あたしは今、知らない相手ならゲーム感覚で人も殺せる。そういう能力みたいなんだ、あたしのゲーム脳」

「な……？」

「あ！ ああもちろんりゅう君達は別だよ？！ あたしみんなのこと大好きだし、ゲームでも好きなキャラが死んだらマジ泣きしちゃうしあらぐ鬱になるし」

もこの姉はあわててそう言つといふと咳払いした。
真面目な表情で俺を見る。

「けどもし、あたしが何かしそうになつたらりゅう君が止めてね？ 約束だよ？ ……今だからそつ思つんだけどちよつとだけ怖いんだ、自分が何かやらないか」

もこの姉は俺が答えるより早く俺の手を取つて小指を絡めた。

「んじや、ウソついたら針千本呑りますと、よろしくね」

……もこ姉と再会した時、昔どきいぶん変わったと思った。

けど、このもこ姉は俺の覚えてるもこ姉とまったく同じだ。明るくて、ちょっと強引で……俺が好きだった……。

そうか、思い出した。俺がもこ姉を護りたいて思った理由。俺はもこ姉のことが好きだったんだ。小学生の時からずっとずっと。その気持ちについてはまだ思い出せない。今ももこ姉のことは好きだ、けどたぶん以前の好きって気持ちとは違うんだろう。

……師匠が言つてた『早く思い出せ』つてのはこれか。……本当にエスパーだな師匠。……思い出せ……か。

もこ姉に聞こえないぐらい小さくため息をついて水筒の水を飲んだ。

「…………あ、間接キス…………」「グブツ?!」

盛大にむせた。

side フィロ

傷の手当で、こんなところでしょうか？

レンさんの残して置いたテントの中、私はレンさんの腕を添え木に固定する。

痛み止めのお薬が効いたみたいですね。呼吸もだいぶ落ち着いてますしもう大丈夫かな？

レンさんの額に浮かんだ汗を拭う。……こんな小さな体で、あんな無茶して……。……無茶させたのは私ですね。

……もし私が、あの黒ずくめの男の子を倒しちゃっていたらこんなことにならなかつたんでしょうか……。

い、いけない！ と、とにかく今はレンさんの手当と護衛に全力をつくしましょう！

……リュウトさん達は無事でしょうか？

テントの天井を見上げながらため息。本当は一緒にきたかった、待ってるだけは辛いです。

……レンさんを動かせる状況でもありませんでしたし、レンさんの怪我の原因を作った私がこんなこと考えちゃ駄目ですね。

……手當に集中してたんで気付きませんでしたけど、雨上がりでますね。確かにこさんはあの雨が私の魔力を打ち消してたって……。

「……【ファイア】」

ポンと手のひらに火が灯った。多少は魔力も回復してるみたいですね。

それならテントの周りに結界でも張つて薬草でも探しまぁうか
？ たしかこの地域には腫れに良く効く薬草があるはず……。

プルルルル プルルルル

「きやつ？！」

な、なんですか？！ え、えと……レンさんの荷物の中で何か鳴つて……それに震えてる？

恐々とレンさんの荷物から“それ”を取り出してみる。

これつてもこさん達が使つてた“ケータイ”つていつ道具ですか？ 遠くの人と話せる魔法具らしいんですけど……

『もしも～し、おハロー。聞つこえるフイロツチ～？』

「あやつ？」

ケータイから声が？！ い、声便りの魔法意外でこんなことできるなんて……。しかも私の名前？

「あ、あの。どちら様でしようか？」

『あ、いたいた。私、黄色のマキナ。短い付き合いかもしれないけどよろしくね～』

「は、はあ

マキナ? もじれた達が度々口にしてた名前だつたと思こま
すけど.....

『とりあえず。フイロッカ、見事新規参戦キャラに選ばれたよ~。
おめでと~パフパフ~』

「は.....はい?」

『詳しこことは会場でね。..... ああ、それとちょっと耳をましてみ
て。このままじゃ一人あぶれちゃうからね。それじゃー』

プシッ

.....終わりでしょうか? なんか言いたいことだけ聞いていった
よつな.....。

耳をすませ?

.....え

ん? 今何か聞こえました?

た.....けて.....

人の声？ 魔力を耳に集中して聴覚を強化してみる。なんか上からあの、小屋を押し上げた樹の上から聞こえたような気がしましたが。

……助けてえ～～！ つゅうく～ん！ フィロちゃん！ 恋ちや～ん！

あ、あれ？ これって…………もひさんのお声？

side 神崎 竜斗

時刻は11時38分。俺ともこ姉は樹の影から魔法陣の様子を伺つていた。

森の中の開けた場所に描かれた星みたいな模様（もこ姉は“ろくぼづせい”とか言ってた）

暗闇の中で薄ぼんやりと光つていて、光の粉といつか……何かの粒子が立ち上っている。

「……来たぞ」

俺ともこ姉は木の影に体を隠した。

森の木々の間から、メリウスは音もなく空中を滑るように移動して魔法陣の中央まで行く。そのすぐ後ろをでっかい鳥がごみたいなのがついていく。中にいるのは……リリーだ。

11時51分。魔法陣の星とその周りのうねうねした文字が回転しだす。メリウスは地面に手を当てて何かの呪文を唱え始めた。

「りゅう君、準備いい？」

「なあ……、やつぱり俺が……」

「大丈夫だつて、そもそもりゅう君遠距離攻撃できないでしょ？この作戦は遠距離攻撃できる方がいいのよ」

もこ姉が考えた作戦。要約するともこ姉が囮になつてメリウスを誘きだして、その間に俺がリリーを助けるつていう作戦だ。

……もこ姉が言つてたゲーム脳の効果。言われてよくわかつた。もこ姉……、自分が死ぬこととか相手を殺すこととか考えてないのか？……ゲームじゃないんだぞ？

考えてみればおかしいと思うべきだつたんだ。普通の女の子がいきなりこんな世界に放り込まれた上にあんな思いをしたつていうのにあつさり順応して、モンスターを殺してレベルアップしたつてしまひで……。

一回目の試練の時、ゲイツを射つてからもこ姉は変わつた。俺はそれをいい変化だと思つていたけど……全然そんなことはなかつたんだ。あの時から……もこ姉の何かが変わつてしまつた。

「りゅうくーん？ なにボーッとしてんのよ？ 急がないと向こうが先に転送魔法発動させちゃうよ？」

「あ、ああ悪い」

「それじゃ配置について、あたしがあのメリウスつていつやつ射つたら作戦開始ね？」

「……ああ

後回しにしよう。実際問題として俺一人じゃありリーは助けられない。それにあるメリウスつてやつ、おそらくは関係無いやつを殺すのは避けている。

樹から落ちてくるフイロ達のことを教えてくれたし、もしあのタイミングで俺達を攻撃していれば追つ手の心配も無かつただろうにそれをしなかつた。

今はそこに賭けるしかない。

もこ姉と分かれて体勢を低くしたまま草場の影から影へ移動する。幸い向こうは魔法陣の方に集中しているようだ。こちらに気付く気配は無い。

後ろに回り込み、木の影に隠れながら様子を伺う。

ビュンッと空気を裂く鋭い音と同時に、もこ姉が隠れているだろう場所から放たれた矢がメリウスに向かつて行った。

それがメリウスの頭に命中する寸前でメリウスは軽く頭を動かしてかわす。矢が飛んできた方向を見た。

続けざまに矢が飛んでいく。メリウスは氣だるそうに手を前に出し、防御魔法を張る。 だがもこ姉の矢はその防御魔法を貫通した。

「 つ？！」

矢がメリウスの肩に突き刺さる。短い悲鳴が聞こえた。

もこ姉の使っている矢……あれにはもこ姉達の魔法やスキルを封じていたっていうあの雨が泥と一緒に塗りたくられている。もこ姉

いわく矢と魔封じの雨の“合戦”だそつだ。

続けざまに飛んでくる矢にたまりかねたよつにメリウスは空中に逃れる。けどもこ姉の矢は動きを先読みするよつに正確にメリウスに向かっていく。

メリウスは翼をひるがえして空高く上昇すると矢が飛んでくる方向へと向かつて行つた。

……………！」こまでは予定通りだ。

もし姉の射撃精度にあの矢ならさすがにメリウスも放つておくわけにはいかない。やうに、もこ姉がやつてているのは木々の間に隠れながらの100㍍程度離れた場所からの狙撃だ。簡単には捕まらないだろう。

その間に俺はリリーを助ける。音でメリウスが離れたのを確認。草影から飛び出してリリーが閉じ込められた檻に向かつた。

「リリー！ 大丈夫か！？」

返事は無い。リリーはぐつたりとしたまま檻の中で横たわっている。とにかく檻から出そう。

鉄格子を思い切り引っ張る……駄目だ！ くそ、めぢやくぢや堅いなこれ。

急がないと。どうやらば開けられる？ 早くしないとリリーも…
…もこ姉も…！

その瞬間、パキンと音を立てて鉄格子が壊れた。

え？ 見ると俺の手がぼんやりと光っていた。これ過守護か？
…これは要するに艦が脅威っていう……。こういう効果もあるのか？

「リリー！ しつかりしろ！」

リリーの体に触れる。その瞬間またパキンと音が鳴った。

「う……ん……」

リリーが薄く目を開けた。焦点の定まらない目で俺を見る。

「フユー……ト……？」

「助けに来たぞ！ 立てるか！？」

リリーは手をついて立ち上がるとする。けどバランスを崩してまた倒れた。

「いの……へんなぐすり……のまされ……ちから、はいらなー……

「わかった。背負つてやるからこへ来い」

リリーを引き寄せて背負う。よし、あとはリリーを安全な場所に移して……「作戦はともかく、力不足ですね。やれやれ、見逃してあげたのこじりつやつてこいつを嗅ぎ付けたのや！」

「マジかよ。ゆっくろ後ろを振り返る。そこにはもう姉の首を片手で掴み、持ち上げるメリウスがいた。早すぎる……。

も「姉は首を掴まれたまま、だらんと両手両足をぶら下げている。

「さて、さつそくですが取引です。その蒼竜の娘との子を交換しましょう。ああ、断れば不本意ながらこの子は殺しますので」

「…………くそつ」

予想通りそう来るか。どうする？ なんとかもこ姉を取り返してリリーも……。

「おかしな真似をすれば全員に攻撃を加えます。貴方自身は強力な防御能力を持つているようですが他は違うでしょう？ 護りきれますか？」

……釘を刺された。どうすれば……ん？

何か周りがいきなり明るくなつた。メリウスが空を見上げ、大きく目を見開いている。なんだ？

俺も思わず空を見上げた。……な？！

小さい太陽みたいなバカでかい火の玉が落ちてくる。

「ちょつ…………な？！ もこ姉！！」

逃げる間も与えず火の玉はもこ姉」とメリウスに直撃した。

いきなり落ちてきた巨大な火の玉が炸裂して辺りに炎が飛び散つた。

とつさにリリーを抱き寄せる。

一瞬で辺りに熱波が拡がった。近くにあつた木が燃え出して空が真っ赤に染まり、黒煙が辺りに立ち込める。そしてメリウスが立っていた場所は大きなクレーターに変わっていた。

俺はその光景を呆然と見ていた。意味がわからなかつた。突然隕石みたいな火の玉が落ちてきてそれがもこ姉を……。

「……もこ姉……」

辺り一面火の海だ。これじゃ……もつ……。

「もこ姉ええええ……」

「おーい、あたしがどうかした?」

……は? 振り返る。もこ姉が苦い顔をして俺の後ろに立つていた。

「リ、リュウトさん! リリーちゃん! 大丈夫ですか!? ごめんなさい! うまく加減ができなくて……」

師匠を背負つたフイロがペコペコと謝つてくる。…………なんで
もこ姉が？ 確実に掴まつてたよなもこ姉？ それに今のフイロが
？ あんなむちゅくちゅなの使えたのか……？

クレーターの中央に田を向ける。……あいつ、生きてる。

メリウスはボロボロに焦げた翼を動かして炎の中から飛び出して
空中で静止した。その手にはもこ姉が掴まれている。…………もう
一度確認する。

俺の隣にもこ姉がいる。見た田もしゃべり方も雰囲気も間違いな
い。そしてメリウスももこ姉を掴まえている。さっきまで話してた
けど昔の俺のことなんかも完璧に知ってるし間違いなく俺の知つて
るもこ姉だった。…………どうこうことだ？

メリウスもそれに気付いたようで俺の隣にいるもこ姉と自分の掴
まえていたもこ姉を見比べる。

「…………なんですか？ これは…………」

「つまり色々予定外は有つたけど、僕の作戦が大成功したみたいだ
ね」

メリウスが掴まえていたもこ姉がにやりと笑つた。瞬間、髪と身
長が縮み始める。 なんだ？！

「んじや、【即興劇】が終わる前に。装備変更つと

もこ姉だったやつの服装が黒衣へと変わり、その手に黒い大鎌が
現れた。メリウスの表情が凍り付く。

「貴方は……」「はい、僕の間合いつと」

ドスリと鈍い音が響いた。大鎌の柄尻がメリウスの鳩尾にめり込む。さらにくの字に折れ曲がったメリウスの後頭部に大鎌の柄を叩き付けた。

「がつ……」

メリウスが墜落する。もこ姉だつたやつ……黒衣を着た金色の瞳の子供はぐるりと空中で身体をひねって着地した。

何がどうなつてんだ!? 捕まつてたもこ姉が黒ずくめの子供になつて、もこ姉がもう一人いて……途中で入れ換わつてた? けどいつから? 僕が話してたもこ姉は昔の俺のこと知つてたぞ?

黒衣の子供がメリウスの首筋に大鎌の刃を当てながらこちらを向いた。フィロともこ姉が身構える。
味方じやないのか?

「氣をつけてくださいリュウトさん。あの男の子……イシュト君が私達を襲つて来た子です。そのせいで恋さんが……」

「あ、それは」めんね。そつちの着物の子大丈夫?」

イシュトと呼ばれた子供はべらと笑う。……こいつ、べらべらして見えるけど立ち姿に隙がまったくない。たぶん、相当強い。

「……誰だ? お前……。それになんでもこ姉に?」

「うーん、説明しなきゃダメ? 面倒くさいんだけど」

「……魔人……だよ？ あの子……」

俺の後ろに隠れていたリリーが小さく言つた。ふらふらしてて息を荒くしながら俺にしがみついてくる。俺はそれを支えた。

「魔人？」

「うん……。魔界にすんでる……ぼくたち竜人とおなじ、人にこわがられてる種族……だよ……」

リリーがそう言つたのを聞くとイシュトはため息をついて頭を搔いた。ゲシゲシとメリウスを蹴る。

「そ、んでこいつら光の教団の狩る対象。で、こいつらがちょっとかい出してきたから仕返し中。もついい～？」

「光の教団に仕返しするのに、なんであたしらを襲つてきたのよ？」

もこ姉が聞くとほんの少しイシュトの表情が弛んだ。

「光の教団に仕返ししようとは思つたんだけど連中の本拠地がどこかわからなくてさ。そんな時に黒いマキナちゃんから竜人一人が一緒に旅してるって聞いてね。きっと光の教団の幹部クラスが出てくると思つたんだ。だからもこお姉ちゃん達の中の誰かと入れ換わつてそいつ捕まえちゃおうと思って。一番弱そうな人に化ければ向こうも油断するだろうし。ま、僕と光の教団が来るタイミングが被るとは思わなかつたけど」

「さつきもこ姉に化けてたのは？」

「僕のスキルとしか言わないよ。りゅーくん？」

イシコトはぐづぐづとメリウスの頭を踏みつけながら言った。「丁寧にも」姉の声真似をしながら。

なんか……わざわざまでここにしつが化けたもの姉相手にしんみりしてたつてのがむかつぐ。

そもそもここにせいで師匠は……。

「どうあえず、あなたの目的は達成したのよね？　ならあたしたちにこれ以上何もしない？」

もし姉が言った。イシコトは「うん、別にもう何も無いよ」と答える。そしたらもし姉は心底安心したような嬉しそうな顔で笑つた。

「そつか。よかつた。それならどうあえず安心ね。それじゃ行こ、りゅう君、フィロちゃん、リリー

…………おい？

もし姉は踵を返して歩き出す。…………それ…………だけ…………？　師匠があんな怪我したんだぞ？　なのに……なんであんな嬉しそうな表情ができるの？

「もし姉、それでいいのか？」

「いいよ。リリーは無事に取り返せたんだし、あの子が光の教団相手に暴れてくれるならあたし達も助かるしね。あの子とまともに戦うことにならなくて本当に良かったわ。多少被害が出ちゃったけど

恋ちゃんも回復魔法でどうにかなるでしょ」

胃に冷たい物が落ちた気がした。『多少被害が出かけたけど恋ちゃんも回復魔法でどうにかなる』違つ……違つだろも姉。それじゃまるで……。

その時だった。

プルルルル プルルルル

幾つかの携帯が同時に鳴り始めた。その全部が同時に通話モードに切り替わる。

『『『』はーい、皆わんお待ちかね。第三の試練始めるよーー』』

『

つ？！ すぐに携帯をポケットから出して画面を見た。……

深夜0時。しまつた！ この可能性を考えなきゃいけなかつた！

……？ そして俺は異変に気付いた。

NPCが眠っていない？ マキナと仲がいいリリーはともかく、メリウスもフィロも起きてる？ いつもならNPCは眠るはずじゃ……。

『『『』それじゃみんなー！ 試練会場に飛ばすからねーー』』

考える間もなく辺りの風景が入れ換わった。

十 ???

『ねえ。本当に次の試練で“あれ”使うの？』

まだだ。私が次の試練であれを使うってから何回も何回も何回も聞いてくる。

『だから言つたじやん！ もう……次の試練の担当は私なんだから黙つてなさいよーー』

『け、けどさ。ちょっと難易度高過ぎない？ そんないとしたら誰もクリアできないよ？』

『……少しそれからちゅうと変だ。確かに前から私達の中でも少し変わるものだつたけど、最近は特に変だ。特定のプレイヤーにもちょくちょく会いに行つてるみたいだし。『だから次の試練の担当は私なんだつて！ ちゃんと何人かは生き残るようと考えてるんだからからもう……見るのは自由だから黙つてなさいよ！ あんたの担当はボーナスでしょ！ そつちも最近サボつてるし』

あいつはアーウィンと類を膨らませると『もうこい！』って言つてどこかに消えてしまった。

まったく……けどいいや。次は待ちに待つた私の番なんだからね

周りの風景がぐにゃぐにゃ歪んで、その歪みが徐々に戻っていく。

変わった風景も森だった。けど、それまでの森と違つて木々がまばらで月明かりがよく入る。

そこそこ明るくて動きやすそうね。それに地面も苔とか生えてなくてしつかりしてる。

今まで真っ暗な空間だつたり瓦礫が散乱した街だつたりで動きにくかつたけど、森っていうのは同じなのにわざわざ条件良くしてくれることなんて今度のマキナはこくらか良心的かな？

…………って、あれ？

「ココウト……リリ……ビリへ。」

「な、なんなんですか今の？！　いきなり景色が歪んで……それで……」

「リリーと……フィロちゅやんがいる。」

イシュートの方を見るとメリウスもいた。ビリコウヒト？　NPCは試練には参加しないはずじゃ……それに黙つてもない。

『よつばーーー三回目の試練会場へー。』

あたしたちの田の前の空間が裂けるとそこからマキナが現れた。暗い森の中でも田立つ明るい黄色の髪に髪と同じ色のドレス。なんとなくタンポポを思い出す。黄マキナってここかしら？　マキナはあたしたちを見回して指折り数え始める。

『つゅうくさん、恋ひちゃん、イシュート、もこつむ。それにフィロつ

ち、リックちゃん、メリちゃん……OK・OK

マキナはあしたちを順番に指差して数えていく。そして子供みたいに元気よく両手を広げた。

『「ひっはー！ やつとこの口が来たー」 試練担当する田舎っ子
つと楽しみにしてたんだよー ああそだそだ、フィロッチャ達のこ
とちゃんと説明しないとね』

今回のマキナはいつもにもましてテンション高いわね……。この状
況……フィロッチャん達理解できるの？

マキナは唇に指を当てる。『インスタントスキル【かくかくしか
じか】』と囁える。あたしの頭の中に一気にいろんな情報が流れ込
んできた。

「…………説明すら何でもあり？」

フィロッチャん達がここにいる理由。早い話がゲーム参加者の人数
合わせらじー。

元々2000人いたこのゲームの参加者。そのうちPCは180
0人ぐらいで、PKは200人ぐらいだつたらじー。

けど、PCと比べてPKの方が強すぎる上にPCはこの世界に馴
染めず狂つたり自殺したりする人が後を立たず、今はPCが600
人、PKが190人ぐらいになっちゃってるそうだ。

これはマキナ達にとつて予想外だつたらじーで、このまま行くと
PKに殺されてPCが全滅しそうな計算だし、何より人数が少なす
ぎて試練のたびに死ぬ人が少ないと華が無くてつまらないらしい。

……ひどい。

「ふざけるな……お前……俺たちをなんだと……それにフィロ達まで巻き込んで……！」

りゅう君がぶちギレてる。

けど正直今さらじゃない？ あたしはいいけどな。フィロちゃん達が仲間に加わるの心強いし。……フィロちゃん達茫然としてるけど。

さて、そうなるとできるだけ話が長引いて欲しい。あたしはもちろん、フィロちゃんもりゅう君を追いかけるために肉体強化魔法使ってあたしと恋ちゃんを運んで来たんだ。魔力も体力もかなり減ってるはずだ。ちょっとでも回復時間が欲しい。

フィロちゃんに背負われている恋ちゃんは……黙目ね。さすがに骨が砕けたのは一回や一回回復魔法使つても全然治らないし、そもそも意識が戻つてない。戦力としてはまったく期待できない。リリーも……なんかふらふらしてると、あまり戦力には数えない方がいいかも。

あたしはそりゃってサツと戦力分析をする。

問題なのはイシュトとメリウスの方。イシュトはヤクで、前回の試練でのゲイツの言葉を信じるなら必ず誰か一人殺さないとけない。

メリウスもどう動くかわからない分やっかいそうだし……理想としてはイシュトにはメリウスを殺してもらって味方について欲しいところだ。

やつぱり最高レベルの恋ちゃんが戦闘不能ってのは痛い。ゲームでも高レベルキャラがやられたら一気に死亡フラグだし。いざとこゝときにイシュトを抑えられる人がいない。

『さてさて、それじゃ第三の試練のルール発表するよ。ああ、それとイシュト君はメリちゃんから足だけであげて？ 踏まれたままつてのも可哀想だし。あ、それともそつちの趣味？』

マキナがけらけら笑いながらそつちとメリウスは勢いよくイシュトを払いのけた。イシュトもそのまま軽く飛び退く。イシュトの方は下手にマキナに逆らつてしまは無いみたいだ。……賢明ね。

マキナは手を高く上げ、指をパチンと鳴らした。すると地面に魔法陣が現れる。

『第三の試練は私の召喚したサイキョーのスキルを持ったキャラとのバトルだよ。それじゃ、召喚…』

バチバチと火花が散つて魔法陣からせり上がるよつに人影が出てくる。…………マキナ？

魔法陣から出てきたのもマキナだった。呼び出した黄色のマキナと同じく黄色の髪に黄色いドレス。

ただ、全体的にかなり色素が薄い上に目に光がない。あへ、俗にいうレイプ目つてやつ？ なんか人形みたいな感じがする。

『この子は“レプリカマキナ”そのまんま私のデッドコピーだよ』

黄色いマキナはくしゃくしゃともう一人のマキナ……レプリカの頭を撫でる。その間もレプリカはまったくの無反応だ本当に人形みたい。

『この子に関して説明すると……、まあ動く人形ぐらいに思つてくれていいわ。この試練終わつたら別にいらぬし、Hなこと目的に欲しいつていうならあげてもいいよ~。ど~お? つゅう君? イシュ君? それにもこじちゃん?』

「ちよ? ! なんであたしの名前が出るのよ~! 」

『いや、もしにちやんならいけそつと思つて。んで説明続行するとね。身体能力的にはぶつちゃけそこまで強くない。魔法なんかも使えない。代わりに一つだけチートスキルを持つてるの。ん~、どう説明するかな?』

「ぐだぐだ言つのはそこまでにしていただきましょつか」

メリウスが怒氣を込めた声で言つた。矢を』につがえてギリギリと音が鳴るぐらいうき絞る。

「マキナの名は我らが……教皇様が崇める主神の名。この世の何よりも偉大なるその名を、貴女のような俗物が名乗るなど断じて許す訳にはいきません! 」

マキナはメリウスを横目で見て、にたりと笑つた。

『私が本物の神様だつてのに。勝手に崇めといてそんなこと言われてもね~。それじゃ、偉大なる私の名の元、あなたに裁きを下しま

しょ

マキナが指を鳴らすとレプリカはおもむろに手を持ち上げる。そしてゆっくりした動作でメリウスを指差した。

『…………死んで…………』

メリウスの額にぽつりと黒い斑点が現れた。それが一気に拡がって……メリウスの頭が崩れた。

「…………え？」

メリウスの頭が黒くなつて崩れて……身体中に黒いのが拡がつていいく。あつという間に原形を無くして崩れしていく身体。メリウスの身体は全部、黒い土くれみたいなものに変わってしまった。

バクバクと心臓が鳴り始める。や……ばい……。

『レプリカの持つてるチートスキルは【死亡宣言】あらゆるものを見
問答無用で“殺す”スキルだよ』

マキナはこいつに笑つてさつ言つた。

宙に浮かんで、土くれに変わったメリウスを見下ろしながらマキナはこり笑っていた。まるで子供が虫をいたぶるような、ここまでマキナと同じ表情。

マキナが何か咳くと空に大きな時計と電光掲示板が現れた。電光掲示板には1の表示が灯っている。

『さてこの試練。クリア条件は1~2時間生き延びるかレプリカが三人殺すかのどちらか。全員で協力して生き延びるもよし、誰かを縛り上げてレプリカの前に放り投げるもよし。ルールは無用。生き残つたもの勝ちだよー』

そこまで言つてマキナはイシュトを見た。

『ああ、ケビン君はP.Kだから試練終了までに一人は殺さないといけないのか。大変だね。そんじゃ、あの時計の秒針が一周したらスタートね』

この試練……最悪だ。

問答無用で相手を殺すつていつあのレプリカの能力はやばすぎる。おまけに……一人は殺さないといつていうイシュト、あの子も相当ヤバい。最初に襲撃かけてきた時には恋ちゃんと互角にやり合つてたぐらいだ。

……この場合、落とし所を決めた方がいいかもしない。

たぶん……時間いっぽいまで全員生き延びるのは無理だ……。ならどうで落とすか……。

レプリカはあと二人殺す。そしてイシュトは一人殺さないといけない。……なら、なんとかレプリカがイシュトを殺すように持つていただき。

レプリカがイシュトを殺したとして、レプリカが殺すのはあと一人。その時は……。

あたしは周りのみんなを見回した。

……恋ちゃんだ。

最高レベルの恋ちゃんを失うのは確かに痛い。けど、今ここでは足手まといにしかならないし、それに腕と足の骨が碎けてるんだ。回復までにどれだけかかるかわからないし、回復魔法で治しきれるかもわからない。

ゲームとかでなら複雑骨折での戦線離脱なんかはもうイベント扱いだし。ゲームのイベント内で死んだ人間に蘇生魔法をかけれないのと同じで、あたしの魔法では治せないのかもしない。あくまでもかもしれないだけどなんかそんな感じがする。

それだと後々も足手まといになり続ける可能性がある。ならここで……

え？

どつと嫌な汗が吹き出した。息が苦しくなった。足が震える。

あたし今……何を考えてた……？

恋ちやんを……殺す……？ セつきのみみたいに……土くれに変えて……？

あたしが……考えた……？

吐き気がした。そんなあり得ちゃいけないことを本気で考えてた自分が信じられなかつた。

なんで……あたしうりじて……「も」姉つ……！」

りゅう君の声でハツと我に帰つた。 レプリカがあたしに指先を向けていた。時計……しまつた？！

「つあ……ー？」 「も」姉……！」

りゅう君はあたしの腕を引っ張つて自分の後ろに引き倒した。

『…………死んで…………』

レプリカが呟く。りゅう君が短い悲鳴を上げて後に倒れた。あたしはそれを受け止める りゅう君の胸元にひどい火傷みたいな痣が広がっていた。

「あ……ああ……」

頭の中がぐずりやぐずりやになりていく。どうしてやがてやだ……こんなのがいいの……。

レプリカが指先をあたしに向ける。けど動けない。
足に……力が入らない……。やだ……誰か……助けて……。

死んル【ウオール】ル！」

いきなりあたしの前に地面から壁が飛び出してきた。ほととぎ同
時にその壁が土くれに変わってぼろぼろ崩れだす。

「やれやれ……立つてください……」

フィロちゃんがあたしの前に滑り込んできた。聞き取れないぐらい早口で何かを唱えて地面を殴りつける。すると地面から何十枚もの壁がレプリカとあしたちの間に現れた。

「 もーさん！ リリーちゃん！ 本気で走ります！ ディーでもいいからしがみついてください！！」

「え？ う、うん！」

フィロちゃんは右肩に恋ちゃんを、左肩に自分より大きなりゅう君を担ぎながら叫んだ。普段の大人しさからは考えられないような迫力で、あたしは何も考えずにフィロちゃんの腰にしがみついた。リリーも前からフィロちゃんの首に腕を回す。後ろではフィロちゃんの作った壁がどんどん土くれに変わつて崩れていく。

「駆け抜けるは我！ 何者にも止める」と叶わず！ 刹那に来たりて刹那に去る【シン・ディー・ワイン】！！

「 フィロちゃんが聞き覚えの無い呪文を唱え終わると同時に体にものすごいGがかかった。周りの風景が瞬間で何筋もの線に変わり、後ろの風景が信じられない速さで遠ざかっていく。」

あたしは固く目を閉じて無我夢中でフィロちゃんにしがみついた。

少しの間走り続けて、フィロちゃんは急にブレーキをかけた。

「 うわー!?」

勢いでフィロちゃんの背中に顔が押し付けられる。

フィロちゃんは木の影に滑り込むと肩に担いでいた恋ちゃんとりゆう君を降りして倒れるように地面に突っ伏した。

「 フィロちゃん…………？」

フィロちゃんは肩で息をしながらあたしに弱々しく頷いた。……

大丈夫じゃなさやうだ。今の魔法、見覚えがないけど何だったんだろ……？

せえせえと苦しそうに息するフィロちゃんの背中を擦りながらつゆう君の様子を見る。

胸に大きな火傷の痕。……過守護の能力のおかげで死なずに済んだんだと思う。またこいつは……こんな無茶して……。またあたしは……こんな無茶させて……。

……魔力……足りるかな？

「 【ヒール】…………」

呟くように言うとあたしの手に光が灯った。少しだけりゅう君の火傷の範囲が狭くなる。

……大きな怪我には焼け石に水だ。

りゅう君の額に浮かんだ脂汗を拭いながら周りを見る。

りゅう君と恋ちゃんは言わずもがな。フィロちゃんはまだ呼吸を整えられなくて咳込んでる。リリーもふらふらして、りゅう君の手を握つたまま倒れそうだ。そしてあたしも今ヒール使って魔力が空っぽ。まともに戦えそうな人が一人もない。

どうしよう……どうしよう……。こんな状況じゃ……。

頭の中に最悪のパターンが浮かぶ。イシュトに一人、レプリカに一人殺される。……このままじゃ確実にそつな。

「Jの中から三人……。それを考えると勝手に涙が溢れてきた。やだ……そんなの……やだよ……。

……今、動けるの……あたしだけ……あたしだけなら……逃げられる……。

……そんなの駄目……！　みんなが死んじやうぐらいならあたしも一緒に死んじやつた方がいい！！

……考えない……。考えて……考えて……考えない……みんなが生き残る方法……。だから教えて……。“ゲーム”ならあたしはどうやってこの場面を乗り切る？

その時、頭の中で機械的な声が聞こえた。

『スキル【ゲーム脳】への依存度が一定値突破。熟練レベル上昇。スキル効果を強化します』

その声が終わると同時にスウツと氣分が落ち着いた。何今の？いや、どうでもいい。そう、考える。クリアできない“ゲーム”は無い。あたしは、あたしたちはどうする。どうやればこの状況を突破できる？

頭の中で様々な思考がぐるぐる回る。……一個だけある。全員生き残れる可能性。けどこれは……実現できるの？

その時だった。

「見つけた」

男の子の声。振り返った視線の先に、イシュトが立っていた。

全員生き残れる可能性。それはイシユトにレプリカを殺せることだ。

イシユトのルールは誰か一人殺すこと。ならレプリカを殺してもOKなはずだ。

問題なのはそれを実現する方法を考えてイシユトを説得することだった。イシユトにとつてはあたし達の誰かを殺してしまつ方が遙かに簡単なんだから。

……その方法をこれから考えようついで時に……！

イシユトは大鎌を構えてゆっくりと近づいてくる。

どうする……どうするどうする！ 思考が一気に加速する。けど、答えが出る前にイシユトはあたし達に近づいてくる。

「じゃあね。バイバイもこのお姉ちゃん」

大鎌が振り上げられる。

あたしが出した答えは……

「お願いっ！ あなたのスキル教えてえええっ……！」

土下座だった。地面に平伏しておでこを地面にすり付ける。……
駄目だ。こんな答えしか出せなかつた。

「……なんのつもりかな？」

「あんたの……「ひづん。あなたの持つてるスキルを教えてください！ それでのレプリカを絶対に倒せる方法を考えますからー。お願いします！」

「ふざけているの？」

降ってきた言葉は冷たかった。見上げるとイシュートは改めて大鎌を振り上げる。ダメッ！

固く皿をつむつた瞬間、甲高い金属音が聞こえた。恐る恐る皿を開けたら……恋ちゃんがイシュートの大鎌を刀で受け止めていた。

「恋……ちゃん……？」

「……無事じやの？ すまん……少々寝すぎた。……事情はマキナのインスタンントなんたらとやらいで把握してある

恋ちゃんは刀を振り払ってイシュートを弾き飛ばした。イシュートは片手でバク転して距離を取る。なんか表情が……楽しそうだ。

「うわあっ。すいこね君。そんな怪我でまだ動けるんだ」

本当にそうだった。あたしも恋ちゃんの怪我は見たけど……トライウマになりそなぐらい痛々しかった。薬草なんかは使ったけど全然治つきってないはずだ。……現に今もすごい脂汗が出てる。

一方のイシコトは楽しそうにステップを踏み始める。まるでおもちやを見つけた子供みたいな顔で大鎌を構えた。

「こんな状況だけじ嬉しいな　君と戦つの楽しかったもの」

「…………たのも」

ポツリと呟いて、崩れるように恋ちゃんは膝をついた。刀を地面に刺してさつきあたしがしたみたいにイシコトに土下座した。

「お願いじゃ……。わしでは……この子たちを護れん……。じゃからたのむ……。この子の……浅倉の話だけでも聞いてくれ……」

絞り出すよくな声で恋ちゃんは言つた。……けどイシコトは氣だるそうにステップを止めるとハアとため息をついた。

「……がっかりだな。君は楽しそうだと思つたの?。そんな都合のいいお願い通ると思つ?。僕は君たち殺しちゃう方が楽だもん」

わづ言つてイシコトはくすりと笑つ。

「ああ、けど誰が死ぬかだけは選んでいいよ?。僕が殺すのは一人でいいからね。誰にする?」

「…………」

恋ちゃんは何も言わない。土下座の体勢からくつくつと顔を上げて正座の形になる。

「…………調子に乗るなよ悪ガキが……」

一瞬で空気が変わった。恋ちゃんの周りに舞っていた木の葉が何かに斬られたように一斉に弾けた。な、なに？！

喉元に刃物を突き付けられたような感覚がした。背筋がゾクゾクして、何故か足から力が抜けて、思わずしりもちをついた。イシューからもさつきの余裕が消えた。たぶん無意識に一步下がる。

「ちよ……なにこれ……？」

恋ちゃんは立ち上がりと刀を手に取る。その瞬間に周りの木の葉っぱが一斉に散った。

「誰が死ぬか選べ……の、な、ないわひとお前なりひひごや……？」

「え……え？」

恋ちゃんが一步進む。イシューが一步下がる。

「わしがお前の両手両足切り落としてあのれぶりかとやらの前まで引きあいつてこいついやうひ……それで一人共死ねばこの試練は終わりじゃ……どうじゅ？ 簡単じゅうひ！」

「ちよ……ちよっとっ！ め、田が恐いよ？！」

「誰を殺すか選べ？ 全員生き残れるかもしれんといつのに何故話も聞かん……！ 何故命を数で考る！？ 悪いからといつならまだ許すがお前は違うじゅうひ……子供は殺したくなかったが……わしはわしの大切なものを護るためにならば……鬼と成り果てよみつとも構わん……」

イシュトの背中に木が当たつた。恋ちゃんはイシュトの喉元に刀を突き付ける。近くにいるだけで鳥肌が立つてくる……これが殺氣つてやつなのかな……。イシュトの表情に本格的に怯えが走った。

「わ、わかったよ！ もこお姉ちゃんの話聞くから！ だ、だから許して！」

「……嘘ではないな？」

「ほ、ホントだよ！ け……けどどう考へても駄目な作戦しかなかつたらどうするのー？ ほ、僕だつて死にたくないよー！」

「……その時はわしからは何も言わん。お前の好きにするがいい。……わしらに刃を向けるならさつき言つたことを実行するがの」

恋ちゃんはそう言つと刀を鞘に納めた。イシュトはホッと息をついてあたしの方を見る。

「……それで、どうするの？」

「……ちょっと待つて」

まず考へるのは……レプリカへの勝ち筋だ。レプリカの能力は要するに即死の能力。見たところ相手を指差して『死んで』って呴くだけで相手を殺せる。ただし過守護で多少は防げるし間に壁なんかが有つたら貫通はしてこない。

なら物陰に隠れておいて不意打撃……は厳しそうか。

マップを開いてレプリカがいる場所を見る。木の表示が次々と消

えていつてる。たぶん向こうも不意打ちに警戒して隠れる場所を消していくてるんだ。

遠距離からの狙撃ってのも有るけど、見つかったらほぼアウトなんだから直線上に並ぶリスクが怖い。さすがに相手が見えない距離から当てるのはあたしでも相当厳しいし、こちらの場所は確実にバレるからかなり危険だ。そもそもあの指差したら終わりっていう能力相手に遠距離戦って自体無謀かも。あのスキルは遠距離で使うのが一番活きる。ゲームで言うならスナイパーライフルに遠距離戦挑むようなものね。……となるとやっぱりイシュートのスキル次第になつてくるか……。

「あなたのスキル。どんなものか教えてくれない？」

イシュートは少し渋い顔をしたけど恋ちゃんを見てため息をついた。

「……僕の能力は【即興劇】物の役を操る能力だよ

「……役?」

「そ、役。マキナの造ったこの世界の全ての物は役を持つてるんだ。服は服の役を持つてるし剣は剣の役、木は木の役を持つてる。で、僕のスキルは要するに……」

イシュートは近くに落ちていた木の枝を拾い上げた。ぐるぐると指先で弄んでその先端を掴む。

「スキル【即興劇】発動」

イシュートが呟くと木の枝の形が変わった。握りやすい太さに適度な長さ。これは……。

「杖？」

「そ、僕の能力で“木の枝”に“杖”って役を与えたんだよ。ガラス玉も劇の中では宝石になれるように、僕の能力は触れてる物にそれに近い性質を持った別の物の役を演じさせること。これ以外にも鉄の棒を槍にしたり布を服にしたり……火消しの水を魔力消しの水に変えたり木造建築の小屋を大木に変えたりね」

「なるほどね、あの雨や小屋のことはこの能力の応用だつたんだ。なら次は……。」

「じゃああたしに変身したのは？　りゅう君達でも気付かなかつたみたいだし、あたしのスキルも使ってたらしいけど」

「あれはも『お姉ちゃんの血の……遺伝子』っていうの？　それを媒体にして僕自身にも『お姉ちゃんの役を演じさせたんだよ。遺伝子を性質の共通点にしてるからね。見た目も中身も能力もほとんど同じ存在になれる』

「…………その能力って他人のスキルまで自分に付けたりできるの？」

「ん、できるよ。一人分だけだけね」

勝ちの目が有るならここっぽい。……つまりイシュトにあたし達の中の誰かのスキルを「ペーさせられるってことだ。

ならりゅう君の過守護を「ペーさせたらいけるんじゃない？　イシュトは竜人の破壊衝動がどうのいつのつても無いから過守護も全開で使えるし相当強力なはず。

いや、駄目だ。

イシュトがあたしに従おつくなつてるのは恋ちゃんに気圧されたからだ。過守護なんてゴローさせたらこよによ恋ちゃんにも抑えられなくなる。

同じ理由で恋ちゃんのスキルをゴローわかるのも駄目。強くなりやがる。

なら残るは……あたしはみんなを見回した。みんなの視線があたしに集まってる。

……フィロちゃんは魔法系……？ リリーの場合は水操の能力。それであたしはゲーム脳……。

……つー！

「イシュトー、あなた他人のスキル“だけ”ゴローできるーー？」

あたしは思わずイシュトの肩を掴んでいた。イシュトが頷くと……つい笑いがこみ上げてきた。そうだ！ あれがあつたんだ！ イシュトが驚いたような、ちょっと怖がったような顔であたしを見つめる。

「うふふと、つこにおかしくなひやつた？」

「違ひ違ひ」

「ホンと咳払いして呼吸を整える。

「見つけたわよ。あいつを……レプリカを殺す方法」

side デウス・エクス・マキナ（黄）

『る～る～ どう来るかな～つと』

周りの木や障害物なんかを殺しながら歩くレプリカの何とか上を、浮かびながらついていく。レプリカは能力的には私の劣化品だけど知能はそんなに変わらない。死角になる物を消したり周りの小さな変化に気を付けたりと不意討ち対策もばっかり。私が思いつくことはしつかり埋めている。

逆に言えばもじこのレプリカを倒すことができるなら、それは私をあつと言わせるような手つてこと。そういう意味でもこちゃん達がどんな手を使って来るか、すつごく楽しみ！ もちろん私のスキルを使つたらもこちゃん達がどんな作戦立ててるか知ることもできるけどネタバレンかつかまらないからね。

あ～、早く来ないかな～

……他のマキナが言つてた通りだわ。私、今すつごく楽しい。ううん、ただ楽しいだけじゃない。死んでくんが見せる“絶望”も、仲間を護る“勇気”や“愛”もすくすく素敵。もっともっと、もっともっとともっと欲しい。見たい。

怒りも悲しみも苦しみも喜びも快樂も羞恥も怠惰も傲慢も色欲も全部全部見たい。全部全部私を満たしてくれる。

『だから全部私に見せてねみんな。見てくれる人はみんなみんな

大好きだよ

クスクス笑いながら辺りの魔力の流れを探つてみる。

……きたーー！

森の中から、空に大きな火の玉がいくつも打ち上げられる。それが放物線を描いて降ってきた。

流星群みたいに降ってくる火の玉。これはフイ「ちやんかな? たぶんもこちゃんの携帯のマップでレプリカのだいたいの場所を割り出してその一帯を攻撃つてことね。

レプリカは両手の人差し指を降つてくる火の玉に向けた。

死んで

レプリカが咳くと同時にレプリカに当たりそうだった火の玉がろうそくの火を消すみたいに消え去った。他の火の玉は地面に落ちて炸裂して辺りに炎が飛び散る。けどレプリカの周りはまつたくの無傷だ。

炎とかなら【死亡宣言】でも殺せないって思ったのかしら？ でもおおいにくさまへ、【死亡宣言】は問答無用で対象を殺す能力。それが魔力だろうが火だろうがその存在ごと殺してしまえば関係無いよ。

で、こんなので終わりかな？

周りを見回して気付いた。……レプリカ、炎に囲まれてる。

……そつか。レプリカのいる辺り一面への攻撃、これが狙いか。

私はくすりと笑う。これぐらこはやつてくれないと面白くない。

もじちゃんは一度レプリカの能力を見てる。レプリカが指差した相手しか殺せないことも察してる。ならレプリカが指を差さない量の火の玉を降らしてやれば当然レプリカは自分に当たるやつを優先して殺す。

けどそうすると殺さなかつた火の玉がレプリカの周りに落ちて、レプリカは炎に囲まれることになるって寸法だ。一段構えの戦術、うんうんさつすがもじちゃん

レプリカは自分を囲む炎の壁を見回す。炎の壁は意外と分厚くて、向こう側はかなり見えにくいみたいだ。フィロちゃんの魔力も相当なもんね。

次はどうするかな？ 炎の壁があるから向こう側に近付けてやすくなってるはず。なら接近戦を仕掛けて来るかな？

パチパチと炎が燃える音が鳴り続ける。

「アイテム！ まとめて取り出す！ そして【サイキクス】……」

炎の向こう側から男の子の声が聞こえた。直後に炎の壁をイシュ君が突き破つて突っ込んできた。

来た！ 本命！

イシュ君の周りに大量に剣や盾が現れる。それがサイキクスで浮かんでイシュ君の前で壁になり、それごと突っ込んでくる。

もこちゃんの能力をイシュ君に演じさせたか。さつきレプリカの能力を【ウォール】の壁一枚で防げたのを見ての作戦ね。【死亡宣言】は指差した相手を問答無用で殺せるけど、逆に言えば指差した

やつしが殺せない。だからこいつも盾を用意すれば殺しきれない。

さすが。一回見ただけで本当によくそれまで察しがつくて思うよ。

『……けど残念ね。考え方は正しいけどその方法は間違ってるよ』

レプリカは剣や盾に隠れて向かって来るイシュ君に入差し指を向けた。

『……死んで……』

パキンと甲高い音がした。【サイキクス】で浮かんでいた剣や盾が勢いを失つてガラガラと音を立てて地面に落ちた。

「あつ？！」

『残念でしたイシュ君。確かにいっぱい盾を用意すれば殺しきれないよ。けど、【サイキクス】の魔法自体を殺すってのは考えてなかつたみたいだね』

無防備になつたイシュ君。それにレプリカは指先を向ける。

『死んで……』

断末魔を上げる間もなくイシュ君の頭が黒く変わった。

レプリカに勝てそうな唯一のキャラが……。ちょっと残念でため息をつく。

全身が黒ずんだ色に変わり、イシュ君の身体は土くれになつて崩れ落ちた。

『そーてさて、イシュー君も死んじゃつたしもつ面白いのは見れないかしらねー？ レプリカ、さつと決めちやお』

レプリカの隣に着地してそう指示を出す。レプリカはほこりくり頷いて自分を囲つてゐる炎に指先を向ける。

『死んで……』

炎の壁を端から殺していく。フツフツと順番にかき消えていく炎の壁。……お？

炎を晴らした先に……もじちゃんが立っていた。

『…………レプリカ、殺つちやえ』

レプリカは頷いて指先をもじちゃんに向ける。

『…………死ん』「アイテムまとめて取り出すー。」

もじちゃんの前に剣やら盾やらがたくさん現れて壁になる。そのいくらかが土くれに変わった。

『死んで……死んで……死んで……』

レプリカが呟くたびにもじちゃんの作った壁が土くれに変わって

いく。もこちゃんは壁が崩れそうになるたびに何かを取り出して壁を補強する。

何でもこちゃん自ら出てきたかなー？ イシュ君殺されたことに责任感じた？

ぼろぼろ崩れてく壁。もこちゃんはひたすら物を出して壁を分厚くするだけだ。なんの策も無し？ だったら期待はず

グシャリと肉と骨がまとめて潰れる音がした。ビチャリと地面が真っ赤な血肉で彩られた。

『…………あ？』

隣を見るとレプリカが胴体から大槍の刃を生やしていた。レプリカの胴体をほとんど縦真つ二つに貫いた刃からボタボタと血が滴る。そして……。

『…………なんで？ レプリカの能力で間違いなく死んだはず……』

黒い大槍を握る“イシュ君”はレプリカの身体を貫いたままにんまり笑っていた。

「もこお姉ちゃんが持ってるスキル、知ってるよね？」

……そうだ忘れてた。【コンティニュー】もこちゃんが持つてた“一度だけ”死んでも復活することができるスキルだ。
そつか……そういうことか……。

イシュ君はもこちゃんのスキルをコピーしてゲーム脳と一緒にコンティニューもコピーしていたんだ。

『コンティニューの縛りは“一度だけ死んでも復活できる”も「ちやんはもう、一度死んだけどイシュ君はまだ一度も死んでない。スキルだけをコピーしたのならイシュ君は一度死ねる。そつか……こんな方法有つたんだ……。』

『ぐ……ふふ、あは、あはははは』

自然と笑いが込み上げてきた。

イシュ君が顔をしかめる。

「……なに？」

『あは、あははは！　すごいすごい！　本当に私をあつと言わしてくれた！　私の想像を超えてくれた！　うん楽しい！　私すっごく楽しいよ！　……けど80点…　満点はまだ上げられない！』

わくわくが止まらない！　この先の展開が！　この後のイシュ君の顔が！　結末が楽しみで仕方ない！　さあレプリカ！　見せてよこの先を！

『死…………n…………d…………』

レプリカが声にもならない声を出した。その瞬間、レプリカの身体を貫いていた大槍と血が土くれになつて崩れ落ちた。レプリカは両足でしつかりバランスをとつて、顔だけイシュ君に向ける。

「……え？」

さつきの私と同じ、あつけにとられた表情。いい。すじくいい！

すゞく楽しい！

『だから80点なのよー。言つたでしょ、レプリカの能力は対象を問答無用で殺すこと。イシュ君から受けた“ダメージ”も問答無用で殺しちゃいました』

「な……？」

『大斧でも使って脳天から叩き割つてれば良かつたのにねー さあレプリカ！』

レプリカはゆっくりとイシュ君に指先を向けた。呆然としてしまったイシュ君はほんの少し反応が遅れる。

「うあ……！」『死んで……』

能力が発動する瞬間、赤い影がレプリカとイシュ君の間に飛び込んできた。

「……っ！－！」

恋ちゃんだった。そして能力が発動した瞬間 折れた方の腕でレプリカの人差し指を掴んだ。

「ちよつ？－！」

『うそつ？－』

黒ずむ腕。恋ちゃんは一瞬もためらわずに自分の腕を切り落とした。飛び散る血。返す勢いでレプリカの身体に斬りつける。

『 ッ？！？！』

レプリカが悲鳴を上げる。切り落とした恋ちゃんの腕が地面に落ちる前に土くれに変わる。けど恋ちゃんはそれには目もくれず、イシュ君に向けてレプリカの血が付いた刀を放り投げていた。

「イシュトー！」

イシュ君も理解したらしい、刀を掻むと刀の刃に噛み付くようにしてレプリカの血を口に含んだ。

「スキル【即興劇】発動！」

イシュ君が【即興劇】の発動を宣言する。そして人差し指をレプリカに向けた。

「死ね……」

【死亡宣言】が発動する。一気に黒ずんでいくレプリカの身体。

『あ……』

……レプリカの身体が土くれに変わつて崩れていいく。最強の能力を持たせたのが仇になつちやつたか。

ボロボロ崩れ始めたレプリカは一瞬私に目を向ける。そして何か言おうとした瞬間、その体が完全に崩れ落ちた。

……お見事。けどあっちも無理っぽい。

田を向けると恋ちゃんも膝から崩れ落ちて、そのまま地面に倒れた。自分で切った腕からはどんどん血が溢れて恋ちゃんの周りに血溜まりを作つていく。

「懸けやん……」「レ、ヘ……れえ……」「ねぬれー」そんな顔が
してからねえ、ハイロがやん、コシわやんが懸けやんの周りに集
まつてゐる。

「恋ちゃんー。恋ちゃんー。返事してー。」「あ、あべー半端だよー。」

むじゅちゃんとフイロちゃんが必死に手当へしよひとする。リッシュ
やんと、意外にもイシュ君は茫然として恋ちゃんを見ていた。あ～
あ～、かわいそ～。けどそういうのはあんまり好きじやない。

『一つアドバイスしとくわ、恋ちゃんもう死ぬよ』

その場の空気が固まつた。

リツちゃんが虚ろな目を私に向ける。ふらふらと私に何歩か近づいてきた。

「うそ……だよね？」黄色のマキナちゃん……？　だって……だっ
て……」「

『だつてもなにも死んじやうもんは死んじやうもん。それを親切に教えてあげたのに嘘つき呼ばわりはむかつくへ』

リックちゃんは震えていた。恐怖？いや違うわね、目に光が戻つてゐる。これは……

リッちゃんがブチキレた。一瞬で空中に巨大な水の竜を何匹も作り出し、それを私に叩きつけてくる。まあ効かないけど。

『スキル【雨散霧消】っと』

私に向かって来ていた水の竜が全部水蒸気に変わつて消えた。
ついでに神様に楯突いたお仕置きもしどこか。ギリギリ死なない程度に。

『【山崩しの雷槍】』

手の中に雷の槍を作り出す。そしてそれを指で弾いてリッちゃんに飛ばした。

「つーー！」

リッちゃんはすぐに水の防御壁を張る。けど私の打った雷槍はそれをあつさり貫通した。

「ひつ？！」

雷槍がリッちゃんを貫く……その直前だった。

『ちよつとちよつと、そんなのぶつけたら死ぬでしょ普通』

私そつくりの声。次の瞬間白いマキナがリッちゃんの目の前に現れた。そして雷槍は……『ヒーパーン』で跳ね返された。

『なんの用よ白マキナ』

返ってきた雷槍を掴みながら私は言った。すると白マキナはにんまり笑つてもこちゃん達の方を振り返る。

『ボーナスターイム』

……へ？

白いマキナはぽろぽろ泣いていたフィロちゃんもこちゃんに向けて続ける。

『一定レベル突破おめでとう！ そんなわけでボーナスアイテム持つてきたよー』

「…………あんた…………」

もじちゃんがすっぽり形相で白マキナを睨んでる。それを気にする様子もなく白マキナは黒い小瓶を取り出すとこちゃんに放り投げた。

『今回のボーナスアイテムは魔法ブースト薬。一回しか効果はないけど飲んだ人の魔力を全回復して、さらに魔法のランクを5ランクほど上げられる薬です。あ、5ランクってのはどれくらいかと言うと~』

白マキナはクスリと笑う。

『回復魔法最低ランクのヒールでも、死ぬ寸前つて人を助けられるぐらいかな？』

「えっ？！」

『はい。ちゅうじは少し呆然と白マキナを見て、すぐに魔法ブースト薬を飲んだ。そしてヒールでの治療にかかる。

『…………ちゅつヒー。』

私はたまらず声をかけた。白マキナは『ん?』と小首を傾げる。
『あなたちょっと顛願し過ぎじゃない? こきなつ出してあんなの……』

『え? 魔法ブースト薬はそんなにチートなアイテムでもないでしょ? たまたまタイミングが良かつたかもしけないけど、ボーナスアイテムに関しては私に任せてくれるんだから』

『…………お氣に入りキャラだからってあまり顛願してるとまたお仕置き食らひづよ?』

『だから顛願なんてなんのことかわかんないって。……ほひほひりっちゃん泣かないで』

白マキナはリックちゃんをギュッと抱きしめると、こへこへこと頭を撫でる。

『…………せつかく楽しかったのに気分が悪いわ。用が済んだなら泊めてくれない?』

『はいはい。じゃね、リックちゃん』

白マキナはそう言いつとパンと指を鳴らして煙のよけにかく

消えた。

『……なにあいつ』

最近白マキナはちょっと変過ぎる。勝手にプレイヤーのところへ行つたり明らかに文明レベル違つゲーム機とか召喚したり。

……今田のこともみんなにチクッちゃお。

とりあえずもう試練も終わりか……。なんかさっぱりしない終わりかただけど……。指を鳴らしてみんなを元の場所に戻した。

十七四三（一）（漫書セ）

やや暗めな展開が続きますが勘弁してください……

R - 18版のところを平行して書いていたらなんか文が混ざって……

…（ヤメロ

一章もむづかしく終わっています。あるいはマキナが二期に……（

殴

side 浅倉 もこ

試練の日から丸一日が過ぎた。

薄暗いテントの中でフィロちゃんと一緒に恋ちゃんの包帯を変えている。

白マキナがくれた魔法ブースト薬のおかげで命は助かったみたい。けど……。

「レンさん……」

フィロちゃんは丸一日の間ほととぎすつと泣きながら恋ちゃんの看病をしている。自分を庇つて大怪我させたつてのが相当堪えてるみたいだ。

そんなフィロちゃんを見てるのも……左腕を無くした恋ちゃんを見るのも「ぐく辛い。

……けど私は自分を責めるつもりはない。私はベストを貰へましたし、あの展開は誰にとっても仕方なかったはず……。

「……フィロちゃん？　あと私がやつとくから休んだりずっと休んでないんだし……」

「イロちゃんは黙つて首を振る。……まあ看病できるだけましのかもしない。リリーの方は本当に取り乱しちやつて……どうも死んだお母さんのこと思い出してしきつたみたい。今はりゅう君が見てるけど……。

その時、テントの外で人の気配がした。

「…………僕だけど、入つていー?」

「…………いっけど」

入つてきたのはイシクトだ。あたしと田が合ひつとすぐに視線を反らして薬瓶を差し出してきた。

「…………この辺りの薬草に僕の即興劇使つて薬にしてみたんだけど……。たぶん効くと思つ」

「…………ありがと」

あたしはイシクトの差し出した薬を受け取つた。……本当に意外なことに恋ちゃんがこうなつてから一番必死に駆け回つてたのはこの子だつた。

あちこち走り回つて食べ物や薬草なんかを取つてきてはまた探しにいくのを繰り返してゐる。いつたいどういうつもりなんだろ?……。

といふえず何か悪いことする気配はないけど……恋ちゃんの上半身を起こしてイシクトの持つてきた薬を飲ませた。

「…………にがい」

つへー。

恋ちゃんが田、覚ました？！

「れ、恋ちゃん大丈夫？！ あたしの！」とわからー。え、えと、
ハイロウちゃんへー。つゆ、ひ瓶とコーヒー呑んできてー。」

「は、はーー。」

ハイロウちゃんはバタバタとテントから出でこった。恋ちゃんは田
をシヨボシヨボセながらトントの虫を巡回す。

「……全員、無事じやつた……か……？」

ひどく弱々しこ姫で恋ちゃんは泣いた。以前のせせせめした感じ
はもうない。

「うふ。大丈夫だったよ。」

「アハか……おお……、お前も無事か……？」

恋ちゃんは田が畠へ、イシユトレインクコと震えた。

恋ちゃんは虫が畠へなった着物の袖に田をやつ、少しくため
息をつく。

「……む、夢ではないか……」

「うーぬるなさー。」

ガバッとこわなつイシユトレが恋ちゃんに六十度座した。恋ちゃんは

それを見てシヨボシヨボと皿を繰める。

「……何を謝つむの?」

「だつて……ほ、僕がもつといひやんとしたらりんなな……。ほ、僕を庇つて、え、えと……。」

「……ばかめ」

「ジンと恋ひやんはイシコトの頭をじづいた。イシコトはちよつとだけ顔をあげる。

「……怒らないの?」

「怒るわけがない。……おしの礼を言わねばなりべりこじや。ありがとうの、……イシコト……。」

「れ、礼つて……ほ、僕のせい……腕が……」

「じやからお前はばかりじやと叫ぶる」

もう一度、少し強めに恋ひやんはイシコトを小突いた。

「……わしがお前のよつな子供に命をかたれせたんじや。ならばわしも……命懸けでお前を護るのは当然じやねい。それよりも、お前がおりんかつたらきつとわしひは生きていこう。おりんかつたじやろう。それに……礼を叫ぶ。……まあわしひを襲つてきたことに関しては三時間程説教してやつたといひが……反省しておるようじやしそんな邪氣の無い目で見られてはね……。」

やう言つて泣き出しうつなイシコトの頭を撫でる。そしてテントの入り口の方に田に向かた。

「……じゃからこの子を抱むのはやめてやれ。よいな……神埼。リリー……」

「はい」「うそ」

テントの外から声がした。じゅう船とリリー、フィロちゃんが入ってくる。

リリーはイシコトを見ると露骨に嫌な顔をしていた。

けじ恋ぢやんはそれには向も言わば、手をじっと見つめて閉じたり開いたりしていた。

「……の、浅倉」

「ん? なに?」

「次の町までどのくらいか、わかるか?」

「え? と……ちょっと待つてね。アイテム、取り出す」

地図を取り出して開く。えへ、あたしたちがいるのはこの辺りで次の町がここだから……。

「よかつた。けっこう近くわよ。そうね……オオイグを最高速で飛ばせば一日かかるないと思つ。よかつたわね恋ちゃん」

「ああ……、そうじやな。よかつた……」

恋ちゃんは弱々しく笑つて、あたしたち全員を見回した。

「次の町についたら……そこでお別れじゃ」

………… やつぱつ。

“次の町についたらお別れ” 恋ちゃんの言葉にあたし以外は言葉を失つていた。

「ど……じて……」

最初に口を開いたのはリリーだった。田から涙がぽろぽろ溢れ出す。

「や……まへ…… やだよ…… わかれ…… やだ…… わか…… わあん……」

「……子供にこんな泣かせ方をするなど、何年生きてもこれだけは未熟じやな。わしも」

恋ちゃんは片手でリリーの頭に手をまわすとぽんふつと田分の胸に抱き寄せた。リリーの頭を優しく撫でながら、恋ちゃんは顔を上げていてくれ。足手まといにはなりたくないから

る。

「……見ての通りの身体じや。おそらく、これ以上の旅にはたえられない。じゃから次の町で適当に留着ける場所を見つけたらそこに置いていてくれ。足手まといにはなりたくないから」

「や、そんな!? な、なら私が諦めます! 元々私が『故郷に帰りたい』なんて言い出したから始まった旅なんですから……」

「ばかもん」

恋ちゃんはフィロかちゃんのおでこを少し強めに小突いた。フィロちゃんは短く悲鳴を上げておでこを押される。

「……まで来てやめる? わしらのところまでの旅を徒労にするつもりか? そんなことはわしが許さん。……それ」「

恋ちゃんはリリーを離すと襟元を緩め、自分でずらして肩の部分を出した。腕を切ったところから、血管状に黒い線が肩まで伸びていた。

「……それは?」

りゅう君が目を鋭くした。

「……わしは隠し事は嫌いじゃし苦手での。……びつやらわしの身体はあるのれぱりかといいやつの能力に毒されておるらしい。……自分でわかる。身体によつくりと毒のよつなものが拡がっていくのがの。……おやべく、もう長くはないじやろうじこの身体も次第に衰えていくじゃね? ところでの試練を経験しとる神崎と浅倉ならわかるじゃね? あと試練は三回、足手まといを抱える余裕はあるまい」

……誰も何も言わなかつた。……うん、恋ちゃんの言つ通りだ。試練はあと三回も残つてる。それも回数を重ねる度に難易度が上がつてる。足手まといになつた恋ちゃんを抱えてる余裕なんて全くない。恋ちゃんが大怪我した時から考えてたことだ。

……ひみつと悲しいけど、仕方ないよね？ 仕方ないんだよね？」

「……それって次の試練で自分が死ぬの覚悟ついてことだよね」

沈黙を真っ先に破つたのはイシクトだつた。呆れたような、怒つてるような、そんな表情だ。前髪をかき上げてため息を吐く。

「……なんどそんなあつさり自分を殺せるのか。頭おかしくござらないの？」

「……好きな者、愛する者が死ぬのを見たくないからじやよ」

白嘲氣味に笑つて恋ちゃんは答える。

「長く生きていおるとのう。愛する者の死に田舎へひとびとが多くなる。……何度も経験しても胸が張り裂けそうになる」

「その言葉はすぐ共感できる。……お父さんとお母さんが死んだ時、あたしも一緒に死んじゃえばって何度も思つたかわからない。」

恋ちゃんは肩から力を抜いてつら顔の方を見た。

「ここにある神崎はわしの弟子での。わしにとつては息子も同然の可愛い子じや。愛しておる。もし……この子がわしを庇つて死ぬようなことになればわしさ堪えられん。じゃから、わしがわしのためにこの子達と別れる」

「……はあ。よくそんな堂々と人のこと愛してゐるなんて言ふるよね」

「別に隠すこともあるまご。誰かを好き、愛したこと思つことは醜い

「……ではないのじゃからの。隠して後悔するのも自分じゃ」

「……そつか」

イシコトはすかべと立ち上がった。そして恋ちゃんの前で膝をつくと視線を合わせてにっこり笑う。

「……なん むぐつ?..」

イシコトが恋ちゃんを抱きしめてキスした。いや、現在進行形。キスしてる。

「……。………… つ?..! …… つ?..!..?..!..

恋ちゃんの顔が真っ赤になつてじたばたし始める。あまりに突然のことのみんなぽかーんとしてしまつて誰も動けなかつた。あたし込みで。…………え? ええ?.. えええええ?..

「だ、だ……ダメえええ!..」

リリーがイシコトを羽交い締めにして無理やりひつペがした。恋ちゃんは顔真っ赤で、わなわな震えてる。けよつと涙目。

「な……な、な、何をしとるんじゃ貴様は!.. ひ、人が真剣な話をしとる時にこんな……」

「あれ? だつて人を好き、愛する気持ちは隠す必要無いんじょ

?..」

イシコトはリリーに羽交い締めにされたまま子供らしい満面の笑

みを浮かべる。

「僕、君のこと大好きだよ？ 初めて会って、戦った時から気になつてた。もじお姉ちゃんに化けて君のこと知つて可愛いと思つた。試練の時に君に脅されて凄いと思つた。そして僕を命懸けで助けてくれて大好きになつた。うん、僕は君のことが大好きだ！」

……まさかの告白タイム。普段めつたなことじや動じない恋ちゃんが口をパクパクさせてる。

「な……な……なん……い、いやその……じゃな……いや、え……あ……じゃ、じゃからと言つてな、いきなり接吻などは……」

「あ、そつか」めん。じつこつのは順序つていうのが大切なんだよね？ ジヤあ今度一緒にデートしよ で、手を繋いでまたキスしよ！」

「…………」

恋ちゃんは頭を抱えてしまつた。イシュトはクスクス笑つてそれを見てくる。さつきまでの重い空氣どこに行つた？ なんかもう全部台無しにされたような……。けど可憐にわねこの一人……。

「それに、僕には君を治せる道がある」

「…………なに？」

恋ちゃんの表情が変わつた。イシュトは一ツと笑つ。

「ねえ恋ちゃん。僕と一緒に来ない？ 僕ならさつと君を助けられる。さつと君を護り通せる」

「……おこ

これまで黙つていたりゅう君が口を開いた。少し強い力でイシュー
トの肩を掴む。

「治せるつて……具体的にはどうする仮だ？ そんな言葉だけじゃ
とうてい信じられないぞ？」

「教えない」

「おこ？」

「この状況で即答！？ 銳く睨み付けるつまつぱにてシヨウトモコツ
ヒツ笑い返す。

「だつて、言わなくとも止められるだらうけど、言つたらたぶん『
やめる』って邪魔されるもん。……まあ邪魔されても瞬殺するけど
さ、恋ちゃんの仲間はあまり手に出したくないしね」

「ちよ？！ それってほとんど脅迫じゃない？！ といふか言った
ら邪魔されるって何するつもり？！」

「…………行け」

恋ちゃんが静かに答えた。は？！ 今なんて？ なんで今の流れ
で？！ 思わず恋ちゃんを見る。

「……せ他に当ても無いんじや。治せる可能性があるところなら行かぬ理由もあるまい。」

「……こやそつや そうかもしれないけど……」

「……納得してくれぬか?」

恋ちゃんはあたしをじっと見る。何か訴えるような気が。

「……そうだね。治せる可能性が有るなら行くべきだよね」

「 もう姉?！」

恋ちゃんはたぶん、あたし達と別れる口実が欲しいんだ。
あはは言つてたけど、このままだとフイロちゃんやリリーは確實に恋ちゃんと一緒にいようとするはずだ。

けど、恋ちゃんの言つ通りそれだと今後の試練で恋ちゃんは足手まといになる。それを恋ちゃんは一番嫌がってる。

イシコトは性格はともかく、強こ。嘘を言つてるよつとも見えないし、恋ちゃんを本当に護つてくれるつてこつならかなり頼りになる。おまけにそれで恋ちゃんが治るつて言つなら万々歳だ。

……まあ、かなり座じこけだ。

イシコトは面倒臭そうにため息をつく。視線で人が殺せたらつて思つてそつな勢いで自分を睨むリリーを見てにへらと笑つた。

「ま、本人が来るつて言つてるんだから決定だね それじゃあ……うん。メリウスが使おうとしてた転送魔法陣を書き換えて使うから……今夜の11時半出発で！ それまでにお別れしといてね」

明るくセウ・ヒツヒツと、イシュートはリリーの手を握ると抜けายนの出口へ向かつ。ヒ、ヒタヒタの横を通り過ぎたヒンで足を止めた。

「恋ちゃんの大好きなりゅう君に一つ、いいこと教えてあげるよ」

「……なんだよ？」

イシュートはチラッとあたしの方を見た。

「僕がもこお姉ちゃんを演じている時に言つた言葉、たとえあの時あの場所にいたのが本人だったとしても同じことを言つたはずだよ」

「……なに？」

「りゅう君は何かに動搖したようだった。え？　なに？　なに言われたの？」

「使つたからわかるよ。あのスキル、相当やばい。なんとかしないとどうにもならなくなるかもよ」

それだけ言って、イシュートはドントから出でていった。

side 赤川 恋次

……情けない。

わしの胸に顔を埋めて泣いておるコーヒーを見ながら心底やう思つた。

別れは今日の日付が変わる前。わしはイシューと一緒にへりになつた。

リリーは神崎達と一緒にこいつになつた。ずっとわしが一緒にイシューについてこくと聞いておつたが、先程よつやく説得が終わつたといひぢや。

本当に情けない。べの口で『親になつてやる。護つてやる』などと言えたものか。

「ねえ……おかあさん……」

「ん? なんじゅ、リリー

「頭……なでなでして……」

「む。しかしあ前は髪を撫でられたのは嫌がつておひそかつたか?」

「ここから……」

言われた通りに頭を撫でてやる。少し濡れたような、冷たい感触じゃった。

コーヒーはキララヒ田をつむつむわしにしがみつく。

「……ねえ」

「ん？」

「ほんとうに……行つたがいの……？」

「…………つむ」

「ほくも行つたが……だめ……？」

「…………それも重つたじやねん」

……イシコトの口振りからして、おれりへイシコトと一緒に行くことは相当に危険なことなのじやねん。……今のわしにこの子を護る力は無い。

それに、わしが抜けた後の神崎達の中で一番強いのはおそらくこの子じや。神崎はある体たらぐ。浅倉も頭は回るが強いわけでは無い。

正直などいつもヨロツクの方方が一人より遙かに強い。

……マキナのゲームなどといつもくでもないものに巻き込んでおいて神崎達を護つて欲しいなど……卑怯にもほどがあるな。

自分で切つた腕と、力の入らぬ手を見る。

自由にならぬこの身が怨めしい。ため息が自然と零れた。……いや、贅沢じやなこんなことを思つるのは。……まだ愛する者を抱きし

める」とはである。

ならば、せめて今は、今だけでも……。

「師匠、入つていでですか？」

リリーが寝入つてしまつた頃。テントの外から神崎の声が聞こえた。

「……かまわん。じやが静かにな。リリーが寝ておる」

「はい。失礼します。……大丈夫ですか？」

入ってきた神崎は何やら神妙な面持ちじやつた。

「体の方は相変わらずじやな。……神崎。浅倉とフイロはどうしておる？」

「イシュトが転送魔法陣を書き換えるのを手伝つてます。フイロはちよつとも責任を取らうとして。……もし姉は……『面白がつだから』……と」

「訪ねて来たのはそのことか？」

「……はー。その……じつ思こまへ。もじ姉のこと……」

「お前まだじつ思つておるでじや？」

返つてくる言葉がわかつていて、あえてそつ問ひ。神崎はしづら
くの間押し黙つた。

「イシユトの言つた通り異常……だと思ひます」

神崎は慎重に言葉を選びながら続ける。

「俺の知つてる昔のもこ姉は……元気だけど自分がやつたことで誰
かが怪我したりしたら凄く氣にして、それをずっと引きずるような
性格でした。実際、この世界で再会したばかりの頃のもこ姉も、俺
を怪我させた時は少し精神的に不安定になつてしまつたし。それが今
は……」

「やはりイシユトの言つた通り【ゲーム脳】の影響が出ていると？」

「はい……」

それは常々思つていた。わしや神崎は元の世界にいた頃から精神
鍛練を積んでおつたからここまでこの世界にも適応できたのじやろ
う。じやが浅倉の変化は……劇的すぎる。

あまりにも何事に対しても冷静過ぎ、あまりにも……冷淡過ぎる。
先日の試練の時も何の躊躇も無く、一度イシユトを殺す作戦を提
案しておつた。例え復活することがわかつていても、それを
平然と提案できる人間などめつたといない。

それにイシユトも……当然ながら自分が死ぬ作戦を渋つていたが、
浅倉からゲーム脳のスキルを受け取つた途端、ためらい無く浅倉の
作戦を実行した。

まるで現実を現実と見ておらんような……現実を小説や何かの中

のことを見ているような……そんな感じじやつた。おそらく神崎もそれを感じたのじやろい。

「……………アサナ。エレベーター、どこで止めたんだ？」

『えつ？！なんでバレたの？！』

まるでまぶたをあけるように、ぐにゅりと空間が開いてそこから白いマキナが顔を出した。珍しく驚いたような表情をしており、神埼もポカンと口を開けていた。

「全然気付かなかつた……」

『いや気付けるはず無いんだけど?』
『気配元壁に消滅させてたはず
だし』

「氣配は消すものでは無く溶け込ませるものじゃよ。草だらうと虫だらうとそこには氣配がある。じゃがお前の周りだけ“氣配の無い何か”があるようにぽつかりと氣配の穴が空いておった。これまでもちょくちょくわしらを見ておったじやろう?」

マキナは『恋ちゃんリアル一コータイプかなんか?』などと呟いて苦笑いする。……こわーたいふ? まあい。

「で、教えてくれんか？」浅倉のゲーム脳とやらは実際、どうなんじゃ？」

『んとねえ。だいたい一人が想像した通りだよ』

マキナは開いた空間の縁に頬杖をついて、どこからか取り出した

煎餅をかじり始める。神崎はいつものことながら少し呆れ気味にマキナを見ていた。

「……元に戻せないのか?」

『いや?一応リュウ君が【ゲーム脳】をもじちゃんに対する脅威だと考へてるなら【過守護】で打ち消せるよ。けどそれはやめた方がいいかな』

そう言いながらマキナは熱い茶を一口すする。

『ぶつちやけて言つと元のもじちゃんの精神力じゃ、この先耐えられない。というか精神力が強かつたら【ゲーム脳】の影響ここまで受けないよ』

「どういひことだ?」

『そのまんま。精神力が強い人ならそれでゲーム脳の悪影響は抑え込めるの、逆に抑え込めてないってことはもじちゃんの精神力が弱いから。一回目の試練の時、ぼろぼろになつた精神をゲーム脳で無理矢理縫い合わせたようなもんだつたからねー。……ほつとくのが一番じゃない? 無理に何とかして自滅したら元も子も無いでしょ? 本人の精神力が上がれば自然と悪影響も無くなつてくから』

「……ふむ。言つてることは無責任きわまりないが一理有るか。

「……いつたんは様子を見るべき……かの?」

神崎も頷く。マキナは皿をさうに茶を飲み干すとふうっと一息つい

た。

『 もうここよね？ 私帰るよー』

「 ああ待て、 一つ聞かなければ」とある

『 なによー。私もあまつ話してゐのまぢいんだって。黙黙し過ぎやつて周りから睨まれてるんだから』

ふうっと頬を膨らませるマキナ。わしはそれに對して姿勢を正した。

「先日のこと、 礼を言ひ

『 せえへ..』

マキナはきよとじて皿をぱくべつらせた。答えを求めるように神崎を見て、 むづ一度わしを見る。

「 他のマキナから私のように批判をされ今までわしを助けてくれたこと、 感謝しておる。 ありがと」

マキナは皿をぱくべつせる。何を言わたかわからぬいかのようにじばくめかーんとしつゝ、 急に顔を赤くした。皿が右往左往し始める。

『 い、 いや別』え.....あ、 ほー。 あれは.....えと。 あくまで友達のリッシュやんのためにやつたことだし? いやといふか私はまたまタミング良くブースト薬あげただけで最悪じゃないし?』

「おお、リリーを友達と言つてくれるか。ありがと、これからも仲良くしてやつてくれ」

『だ、だから…… ハー…』

バタンと、開いていた空間が閉じた。白い髪の毛が挟まつて小さな悲鳴が聞こえた。思わずくつくつと声を殺して笑つてしまつた。

「……どうしたんだあいつ急に？」

「いや、なかなか可愛いらしことにひもあるではないか

……あんな顔ができるのじゃな、あやつも。

……もしマキナがマキナとして生まれておらんかつたら……、ただの普通の少女として生まれていたなら。あの子もリリー達と同じように笑えたのじゃろうか……？

十七—十一 田畠（おまか…とある少女の話）（前編）

書き忘れてたけど一つ前の話で一章の本編は終わり、ちよことおまけを挟んで二章に移ります。

書き初めて約半年……思えば遠くまで来たものだ

ちょいと仕事が忙しいんで更新遅いかもですけど、これからもよろしくお願いします！m(_ _)m

「う～らめ～しゃ～」

「ぎゃああああああつ？！」

とある街の暗い夜道。悲鳴を上げて逃げていく男の後ろ姿を見ながらその少女は「くひひつ」といたずらっ子のような笑みを浮かべた。

白っぽい半透明の体に白い着物。足は無く、エクトプラズム状になつていてふわふわと宙に浮いている。

彼女は幽霊だ。

ただ彼女の場合、死んで怨みを残したために幽霊になつたなどの理由は無く、この世界で目覚めた時から幽霊 この世界に呼び出され、“幽霊”という種族としてスタートしたプレイヤーの一人だ。

さて、彼女がなぜ人を驚かせていたかと言つと、本人の趣味……というのも少し有るが生きるために糧を得るためだ。種族としての幽霊は魂や人の感情で自身を構成しており、この世に存在し続けるためには食事するように他人の魂や感情を食べ続ける必要がある。

方法として、魂を食べる場合には基本的に他人に憑依し、その状態でさらに他人から口移しに魂を吸いとするという方法をとる。要するに誰かの体を一時的に乗つ取つてさらに他の誰かにキスして魂を食べるのだ。

ただこの方法、乗っ取られる方にはたまつたものでは無く、特に女性の場合は好きでもない相手にキスする苦痛、さらにはキスすることにより興奮した相手が襲い掛かってくることもあつたため、さすがに悪いと思つた彼女は最近はもっぱら感情の方を食べている。

感情の食べ方は簡単で、人が強い感情を発すればそれを食べることができる。

つまりは脅かしたり怖がらせたりすればいいのだ。

こちらは本人の趣味も兼ねられるのでなかなか楽しめるのだが、魂を直接食べるよりはかなり数をこなさなければならない。

「それに味が今一つ……」

回収した恐怖の感情をむぐむぐと頬張りながら少女は呟く。

「うーん、やっぱり感情だと美味しくないねー魂食べたいなー。あー、あの人とまた会いたい……」

少女は一人呟きながらふわふわと路地の中を漂っていく。
彼女の言う“あの人”とは過去唯一、自分から魂を食べさせてくれた人だ。

しかもその魂の味が絶品で、他のどの魂でもそれと比べると見劣りしてしまつ。

「たしか……りゅう君って呼ばれてたつけ？ 良かつたなー、あの人。すごく熱くて大きくて……。一口食べただけでこうやって人の形とれるぐらいいレベルアップしたし……」

ぶつぶつ咳きながら漂つていぐ。別に壁にぶつかってもすり抜けるので前を気にする必要もない。……情事の最中にいきなり部屋を幽靈に横断されたカップルにはたまたものでは無かつたが。

「そりいえばなんか女の子だらけのハーレムパーティーだったけど、あれ全部恋人だつたりするのかな？ もしかしてそういう能力？ だったら私も加えてくれないかな？」 そうすれば魂食べ放題！
くひひ とりあえず次会つたら背後靈にでもなつちやうかな？」

せうやつて悪巧みをしている間に地面に十字の碑が立ち並ぶ墓地についた。ここは彼女が最近根城にしている場所だ。静かで何故か少女にとつては妙に居心地が良く。墓場に幽靈が現れたからといってどういづじょうとする輩もいない。そして。

「リカちゃん。どーー？ 返事してー」

「……」

墓場の一角から消え入りそな程小さな声が聞こえた。少女がそちらに行くと やや黄色がかつた髪とドレスを着たマキナそつくりの少女“レプリカ”が朝別れた時とまつたく同じ体勢で座つていた。

少女はそんなレプリカを見て苦笑いする。

「ねえリカちゃん。確かに『こーでじつとして』って言つたけど少しは動いてもいいんだよ？」

少女がそう言つとレプリカは頷いて手をブンブン振り回す。

三回目の試練。あらゆるものを問答無用で殺せるレプリカと

の戦いは少女にとっては欠伸が出るほど簡単なものだった。

そもそもすでに死んでいる幽霊を殺せる訳もなく。少女はとりあえず時間切れまでレプリカに憑いて試練をクリアした。

その後、マキナが自由にしていいと言つてレプリカを置いていつたので、誰が引き取るかという話になつたのだが、「自分が引き取る」と言う男達の鼻息がやたら荒かつたことと、いつも憑依できる体があれば便利だらうからと少女が引き取つた。

が、便利どころではなかつた。

レプリカは言われたことは何も言わずに必ず従うのだが、それが度を過ぎるのだ。

動くなと言えば丸一日でも微動だにしない。寝ろと言えば起きろと言つ今まで絶対に起きない。おそらく息をするなと言えば死ぬまでしないだらう。

おまけに基本的に言わたことしかせず、トイレすらせずにそのまま漏らすようなレベルだ。（これらは“最低限自分のことは自分で”といつ命令で解決したが）

そして……こちらはレプリカのせいでは無いのだが……可愛すぎた。そう、それが一番の問題だった。

この世界の治安は地域にもよるが元の世界と比べるとさうぶる悪い。夜道を女性一人で歩けば誰に何をされようと文句は言えないレベルだ。

そしてレプリカは誰から見ても人間離れして可愛かつた。まるで作り物のような完璧な容姿は同性である少女から見てもつい見とれてしまうほどだ。

……もちろん変質者や人浚いの目も大いに引く。

こんな墓場に根城を構えたのもレプリカを人目につけないためと
いうのが大きい。

しかし少女はレプリカの世話を苦とは思わなかつた。

なんだかんだと言いながらレプリカは可愛かつたし、幽霊である自分を見ても平氣なレプリカには癒されていた。

こんな生活が続くのも悪くない。少女はそう思つていたのだが……
その生活は今日、木つ端微塵に碎かれることになる。

「それじゃ、私はお腹いっぱい」飯食べてきたし、次はリ力ちゃん
もご飯食べに行こうか？ ほら立つて

少女の言うご飯とは、少女にとつては感情や魂。レプリカにとつては料理店の残飯等だ。

「それじゃ行こうか

少女はレプリカに体を重ね、憑依する。光の無かつたレプリカの
目に光が灯り、自分の体を慣らすように準備体操をする。

「ぐうぐう！ 一日中動いてなかつたから関節ガチガチ～！
……お？」

レプリカに憑依した少女は体を捻つたところで動きを止めた。人が来たのだ。

さつ、と墓石の後ろに隠れて様子を伺う。

「…………あれ、男？ 女？」

やつて来たのは若い人間が一人。フードを被り、小さめの棺桶をずるずる引きずっている。頭にはフードを被っていて、そこから覗く顔は実に中性的な顔立ちだった。

「…………女の子？ いや…………魂の色からして男の子よね？ 棺桶持つてるし葬儀屋さんかな？ ……まあそれはどうでもいいや」

少女は物陰からその青年（？）の様子を見ながらジユルリと涎を垂らす。

「美味しそう…………」

少女は見ただけである程度人の魂の質を見極めることができるのだが、その青年の魂は以前食べた“りゅう君”に勝るとも劣らない質だったのだ。少女は涎をふきふき様子を伺う。

「これは…………行くしかない！」

魂を食べたいなら生身の人間に憑依して相手にキスすることが必要だ。魂の色を見た限り相手は男。“こんなに可愛いレプリカの顔でキスをせがめば口リコンだろうと無かる”といつかは折れるに違いない”。少女はそう読んだ。

「こんばんは」 いい夜ですね

「ああ、じんばんは」

少女が近付くと驚く様子もなく青年はにこりと笑い返す。声まで中性的だ。

「えへつと。……あなたを見て一目惚れしてしまいました。だから……キスさせてください！」

アストレー。しかし青年は眉一つ動かさず「ああ、いいよ」と答える。少女は「男つてチョロい」などと懸かにも心の中でガツツポーズをとつていた。

少女はスキップしそうな勢いで青年に近付いていき 「よつ」と頭にお札を貼られた。

するとレプリカの体は操り糸が切れた人形のように崩れ落ち、幽体の少女はレプリカの外に弾き出された。

「へ？ え？ ちょ？」

幽体のはずの少女の額にお札が貼られている。青年はにこにこ笑う。

「はじめまして。僕の名前は伊集院。ゲームの参加者の一人でスキルは【死靈使い（ネクロマンサー）】死靈やアンデットを自由に使役する能力だよ。ちょうど強そうな死靈を探していてね、君の噂を聞いて來たんだ」

「え？ いやちゅ？！ 死靈使い？！」

「うさ。じゃあ行こうか。今日から君は僕のものだ
青年はすたすた歩き出す。少女もその後についてふわふわ飛んで
いく。

「ちょつ？！ か、体が勝手に？！」

「抵抗しても無駄だよ。僕の能力でね、僕のお札を貼られた死靈は
僕には絶対に逆らえない」

「ちょつ？！ や……ひ、うらめしやあああああっ！？」

暗い空に、幽靈少女の悲鳴がこだました。

十七日～二十一日（おまけ・とある切り裂き魔のお話）

空には一つの赤い月が浮かんでいる。赤い月明かりは地上を赤黒く照らし、まるで森一面に血をぶちまけたような色に染める。

男はその風景が好きだった。

「ああ……美しい……」

月を見上げる背の高い細身の外人。短い金髪に赤いレンズの色眼鏡、古びたスーツを着こなす紳士然とした出で立ちのゲイツ・・・・・リッパーは万感の想いを込めて呟いた。

「唯一残念なのは、この美しい風景に添えるのがケダモノの血と言うことでしょうか？……まあ、アリストさん」

ゲイツは背中合わせに立っていた少女に呟いた。血がこびりつき、ほつれた赤髪に血で染め上げられたボロを華奢な体に巻いた、アリストと呼ばれた少女はゆっくりと視線を上げる。

耳には光が無く。身体中に付いた爪で引っ搔かれたような痕が痛々しい。その少女の生氣の無い耳に異形の怪物“オーケ”の姿が映る。

豚のような顔に普通の人間より一回り大きな体。その体には獸から剥ぎ取った毛皮で作った服らしきものを巻き付けている。

人間からはモンスターとして扱われる“亜人”の中でもオークは特に代表的かつ恐ろしい種族だ。残虐でズル賢く、しばしば集団で村などを襲い人間を食らう。

また、極めて性欲が強いことでも知られ、オークに捕らえられた女性は狂い死ぬことができるまで延々と彼らの慰み物にされることになるとと言われている。

アリスはゆっくりと視線を動かした。自分とゲイツを取り囲むオークの群れ。おそらく30頭は下らないだろう。

「…………クハツ」

少女の目に光が灯った。にいと口辺が引き上げられ、にたりと笑みを作る。

「クヒツ！ クハ、クハハハ！ オーク！ オーク！ オーク！
オーク！！ ヒハハハツ！！」

アリスは狂った笑い声を上げると目を剥き、正面にいたオーク目掛けて駆け出した。オークが斧を構えるのを見ても速度を緩めることはない。振り下ろされた斧の一撃を難なく避け、懷に飛び込んだ。

「スキル【フルコンボオ】！ 30コンボ！！」

アリスはオークの胸に拳を打ち込む 次の瞬間、アリスが拳を当てた場所に瞬間に30回の衝撃が走った。衝撃は釘を打つようにオークの胸に突き刺さっていき、胸に穴を穿つ。アリスの体が返り血で真っ赤に汚れた。

倒れたオーケの頭を叩き潰すとアリスはすぐさま次のオーケに向かつた。「5コンボ」そう呟くと同時に地面を蹴る。一瞬で加速し、オーケの顔面を拳で砕いた。返り血がまたアリスの身体を汚していく。

アリスはさらに他のオークに向かっていく。ゲイツはそのアリスに自身の腕から取り出した鎧を放つた。アリスはその鎧を掲むとオーラの集団の中に飛び込み、血の華で自らを汚していく。

素晴らしい

鉛を振るい、縦横無尽に暴れ狂うアリスを見ながら、うつとりしたような目でゲイツは呴いた。後ろから迫ってきたオーケーが自分の背中から生えた無数の槍に貫かれるのを見ようともしない。

「邪魔しないでいただきたいですねえ。……血染めの舞台で踊り狂う壊れた人形。これぞ芸術だ。私はこれを見たいがためにあなたたちの相手をしているのですから」

ゲイツの両手に大型のナイフが現れる。

「さあ、私も……狂氣と狂喜の宴を楽しみましょう」

数分後には周囲に動くオーケーの影は無くなっていた。アリスは肉塊となつたオーケーの死体を優しく抱き上げるとその血肉を自身に塗りたくつた。

「ねえゲイツ見て、私……また汚れたよ……」

血の滴る自分の腕を見ながら恍惚の表情でアリスは呟いた。

「それでね、彼は『大丈夫?』って言つて私をお風呂で綺麗にしてくれる。フフフ……でね、そしたら彼にまた汚させてあげるの。何度も何度も、身体の中まで真っ白に汚させてあげるの……フフ、ウフフフフ」

血にまみれながら妖艶に笑うアリスをゲイツは満足気に見つめる。アリスは首をカクンと傾けてゲイツを見た。

「ねえゲイツ……彼、喜んでくれるかなあ……?」

「ええ、きっと」

「そう? そうだよね? 喜んでくれるよね? 私ね、彼が喜んでくれるなら何でもするの。何でもさせてあげるの。いっぱいいっぱい汚させてあげるの。……けどね」

アリスは急に表情を曇らせた。大人にすがる子供のような目でゲ

イツを見つめる。

「もし……もしもね。彼が私に、私が彼に何をしても喜ばなくなつたら……私が生きる意味が無くなつたその時は……」

「ええもちろん。その時には私が貴女を殺してあげましょ。壊れた人形の最期を飾るにふさわしい死と、永久の安らぎを約束しますよ」

ゲイツの言葉によつやくアリスは子供らしく笑顔を浮かべた。

「ありがとう。だからゲイツのこと、彼の次ぐらいに好きだよ」

そう言つて立ち上がつたアリスの肩から、身体に巻いていた血濡れのボロ布が滑り落ちた。赤い月明かりの中、血と傷にまみれた身体がさらされる。

「……美しい」

ゲイツはほうと感嘆の吐息を洩らすとアリスに近付き、その身体に撫でるように触れた。

「……ねえゲイツ。ゲイツも私を汚したい？ ゲイツなら……少しぐらい、汚してくれていよい？」

「せつかくですが、私は美しいものは見て愛でる主義でしてねえ。貴女を欲望の捌け口にする」とは私の主義に反します

「やう？ 残念……だわ……」

アリスの目から再び生氣が失われていく。

ゲイツはアリスの足元に落ちたボロ布を拾い上げるとアリスの肩にかけ、一人でどこかに向けて歩き出した。

「ここは魔界。

赤い一つの月が照らす。悪と魔と狂氣の樂園である。

「……まだかの？？」

森の真ん中に建てられた小さな家の中で赤川 恋……いや、あって恋と呼んでおこう。恋はイシュトが淹れてくれた紅茶と茶菓子を味わいながら窓際の椅子から外を眺めていた。

外の風景は今までいた場所とはまったく違つ 空に赤い一つの月が浮かび、それに照らされた全てが血のような色に彩られる深紅の世界だ。イシュトによるとここは“魔界”という場所らしい。竜斗達と別れ、イシュトに背負われて転送魔法陣で移動した先がここだった。

恋は窓から室内へと視線を移す。フローリングの床に小洒落た家具。清潔なクロスが敷かれたテーブルには紅茶と茶菓子が置かれている。これらは全てイシュトが【即興劇】のスキルで造り上げた物らしい。（元々はぼろぼろで、人骨が転がっているような小屋だったそうだ）

「何とも便利な能力じゃな……」

恋は一人呟くと空になつた紅茶を入れようとポットを手に取る。

「…………む」

ポットを持つ手がふるふると震えた。重い。片腕を失つたこととレプリカの能力に侵されたことは想像以上に恋の体力を奪っていた。かつては無双を誇っていた彼女も、今では一人で普通の生活をすることがすら危うい。ため息をつくと諦めてポットを離す。

「…………むむっ」

恋は少々不安を感じた。こんな状態でモンスターに襲われでもしたらひとたまりも無い。おまけにイシュトが『魔界は本つ本当に危険なんだ。普通の子供が何の用意も無しに一人で出歩いたら10分以内に死ぬか潰われてるか犯されてるぐらい』などと言っていたものだから気が気ではない。

ちなみにそのイシュトは恋を治療する“素材”や薬に栄養のある食べ物。それに仲間を呼びに行く、と30分ほど前に出かけて行った。

「……はよう帰つてこん、ひやつっ!」

近くの木からカラスが飛び立つた音に驚き、変な声を上げて椅子から滑り落ちてしまった。しこたま打ち付けた尻を擦りながら、つい誰にも見られていないか周りを見回す。

「ううう……早く帰つてこんかあ……」

軽く泣きそうになりながら恋は椅子に座り直す。

本人はあまり自覚していなかつたがその様子は一人で留守番するのを不安がる幼い少女そのものだつた。

「ン」 「ン」 「ン」

玄関のドアをノックする音が聞こえた。恋の表情が明るくなり……
すぐに凍り付いた。

(ノックの回数が……違つ?—)

イシユトには『僕が帰ってきたら一回、一回、三回のリズムでノックするからそれ以外では絶対に開けないこと』と念を押されていたのだ。

「イシユトでは……無いのか……?」

刀に手を伸ばす。だが今となつては振り回すこともできず、いざといふときには威嚇ぐらいにしか使えない。

ドアをノックする音がドン ドンといつ乱暴な音に変わった。

「ひつ……」

ドアに体当たりしている。重い音が響くたびにドアがミシミシと悲鳴を上げる。

恋は咄嗟に部屋の角に置いてあつたベッドの下にもぐり込んだ。その後に玄関のドアが破られた。

すかすかと入つて来たのは……豚のような頭に大柄な人間の身体という異形の怪物二匹だった。恋は知るよしも無かつたが“オーケ”と呼ばれる亜人だ。

「なんじゅ……あやつり……」

ベッドの下から様子を伺っていた恋は気配を殺しながら一匹のオーパークを観察する。

大柄な体躯に並みの人間の倍の太さは有りそうな腕。醜悪な豚の頭。そして 獣欲と性欲にまみれた目。

恋はひたすら息を殺した。見つかれば何をされるかわからない……いや、何をされるか察しがつくからなお恐ろしい。

一匹のオーパークはテーブルに置かれていた茶菓子をわしづかみにするとそれを貪るように食べる。さらに台所まで行くとそこらにあった食材を手当たり次第に食い荒らし始める。

その様子はまるで飢えた豚。見ているだけで気分を害するような光景だった。

びくりとオーパークの一匹が何かに反応した。ふうふうと鼻を鳴らすとゆっくり振り返り……恋と目が合った。

「…………つ……！」

見つかったと判断した瞬間、恋はベッドの下から飛び出して出口へ向かつた。

だが弱つた恋の脚力では間に合わない。オーパークは見た目に似合わない素早さで恋の前に回ると巨大な拳を振るった。

恋の腹にオーパークの拳がめり込む。肺から一気に空気が押し出された。

「か……はつ、『ほ……』

崩れ落ち、まともに息もできない恋を一匹のオークは見下す。そして一匹は顔を見合せ下卑た笑みを浮かべた。

「あぐつ？ー」

オークは恋の髪を掴んで無理やり立たせた。そして乱暴に突き飛ばし、ベッドの上に押し倒した。ギシギシとベッドが軋む。

「やつ…… やめ……」

オークが何をしようとしているかすぐにわかった。一匹が恋の着物を力任せに引きちぎる。そしてもう一匹のオークが自分の、獣の皮で作られた腰巻きをめくり上げる 恋は自分の皿に映ったものに激しい恐怖心を感じた。

「い、いやじゃー 誰か……誰か！」

必死に叫ぶ。だがそれに応えるものはいない。

じたばたともがく恋に手を焼いたのかオークは恋の身体を持ち上げると、うつ伏せにして上半身だけをベッドの上に乗せた。頭をベッドに埋もれられ、もはやどうすることもできない。

今までに感じたことがない絶望感が恋の心を満たした。自然と涙がこぼれる。

「 クヒッ。ヒヒヒ」

不意に笑い声が聞こえた。声は少女の声、だがその笑い声は明らかに正気のものではない。

恋は押さえ付けられたままなんとか目だけ玄関の方に向ける。そこには一人の少女が立っていた。

ほつれた赤髪にボロを華奢な身体に巻き……全身血塗れで焦点の定まらない目で恋を見ている。

「アハツ、アハハハハ！ 懐かしいの。ねえあなたあなた、今どん
な気持ち？ やっぱり最初は怖い？ それとも楽しみ？ 私の時は
ねえ、巣に連れていかれて20匹ぐらいに汚されたの……クフフ。
ああ……あの時は凄かつたなあ……それでね、そこで彼と出会った
の。クフフ……ヒヒッ、ヒハハハ！」

異常なテンションで話しかけて来る少女に恋は口を白黒させる。
だがオークの片方が少女に目を付けたのに気付き、ハツと我に返つ
た。

「や、やめんか！ 貴様らの相手はわしがしてやるから！ おぬし
！ 早く逃げんか！」

護るべき相手がいることで恋はまともな精神状態を取り戻した。
全ての女子供は“赤川 恋ー”にとつては護るべき対象だ。たとえ
自分の身がどうなつても目の前の少女だけは助けようと声を張り上
げる。

だがオークは言葉が通じているのかいないのか、少女に狙いを定
め襲い掛かった。

「ああっ！」

恋は悲鳴に近い声を上げた。少女が床に押し倒されあつといつ間に着ていたボロを剥ぎ取られるのが視界の端に見えた。

そして自分も、着物を引きちぎられる。恋を押さえ付けていたオークが身体を密着させる。恋は恐怖と嫌悪感にギュッと目を閉じた。

「【フルコンボ】……100コンボ」

少女の方からぐぢゃぐぢゃと肉が擦り潰れるような音がした。胸から背中にかけてがほぼミンチ上になつたオークが裸の少女の脇に倒れる。

「なあにしてるわけえ！？」

少女はぐりんと目を剥き倒れたオークに視線を向けた。少女の右腕は関節が外れおかしな方向に曲がっている。少女はそれを鈍い音を立てて自分で戻した。オーカを睨み付け踏みつける。

「なに勘違いしてるかなあ！？ 私の中まで全部汚していいのは彼だけ！ 私が全部捧げるのは彼だけなの！… フヒツ… けど安心してえ…？ あなたにもちゃんと汚させてあげるからあ…

50コンボ」

ほんの僅かに息の有つたオーカの頭部を、少女はなんのためらいもなく踏み潰した。一瞬でオーカの顔面に数十回の衝撃が走り、衝撃が走る度に血や骨、ピンクがかつた脳髄が飛び散った。少女はそれを手でくい、恍惚とした表情でそれに頬擦りする。

恋も、それを押さえ付けていたオークも呆然とその光景を見ていた。少女は視線を恋とオークに向ける。

「あれえ？ どうしたの？ 大丈夫だよ？ 邪魔なんてしないから早くその子を汚して幸せにしてあげなよ？ それとも見られたらやりにくいの？ ジャあ散歩にでも行つてるね」

少女は平然とそう言つと本当に玄関へと向かつていぐ。
恋の思考が急速に回転した。

あの少女は明らかに普通ではない。目の前にいるオークより遙かに危険だろう。関われば死ぬかもしれない。

そのまま少女が部屋を出ていくのを見送ればおそれく命の危険はほぼ無い。オークの目的は恋の身体であつて命ではなく、恋もその事をなんとなく感じていた。

本来の“赤川 恋”なら少女を見送つただろう。命の重みを誰よりも知り、どんなことになつても命さえあればどうにでもなると考へている赤川 恋ならそうした。

だが女としての……“恋”は全力でこれを拒否した。目の前の怪物に犯されるぐらいなら舌を咬みきつて死んでやると本気で思つていた。

一つの気持ちがぶつかり合ひ混じり合ひ、そして「助けて…

…」

「……あれえ？」

恋の掠れるような声に少女はかくんと人形のようになんと首を傾げた。

「助けて……お願いじゃから……頼む……！」

「んんう？ どうしたのかな～、何でかな～、わっかんないな～？ なんでなんでそんなこと言つちやうの？ 汚してもらえばいいじゃない、身体中べたべたにぐちゃぐちゃに……ヒヒッあつそつか～。怖いんだね？ 大丈夫だよ～、最初は痛かつたけどお薬もらえれば気持ちよくて気持ちよくて死んじゃいそうになつちやうからさあフフツ、フフツ……ああ懐かしいなあ……」

「い……嫌じや……わしは……」「んな……こんなやつに……絶対嫌じゃ！」

恋のその言葉に少女は動きを止めた。

「」「こんなやつは嫌？」

少女は小さく咳くと恋の方に向き直る。じつと恋を見つめた。

「そつか……そつかそつかそつかあ！ あなたも彼が……イシュトが好きなのね！？ 彼以外には汚されたくないんだ！？ うんわかる！ すつ」「くわかるよその気持ち！」

急に目を爛々と輝かせ始めた少女は「5コンボ」と咳き床を蹴った。瞬間に床に五回の衝撃が走り少女は爆発的に加速する。

「【フルコンボ】 5コンボオ！」

その勢いのままオークに体当たりを食らわす。オークは吹き飛び壁に叩き付けられた。立て続けにその体に衝撃が走り壁にめり込んでいく。

少女は外れた肩を鈍い音をさせて戻しながら恋の方を見ると、くすりと妖艶に笑う。

「私はアリスよ。ねえあなたは？　お名前は？」

「……れ、恋じゃ」

恋にとつてはこのあとが問題だった。今、目の前にいる少女アリスは容易く自分を殺す力を持つている。そして明らかに気が触れている。何をきっかけに殺されるかがまったくわからない。

アリスは恋に手を伸ばす。恋は思わず目をつむった。

チユツ

「……っ？！」

唇に感じた柔らかい感触。恋が驚いて目を開けると目の前にアリスの顔があつた。

「彼を好きな人は私も好きよ。だつてだつて、同じ幸せを共有するもの同士だもんね。素敵だよね彼。強くて優しくてかわいくてかっこいいんだもん！」

「よくて明るくて勇氣があつて行動的で残酷で男の子で黒衣で大鎌で即興劇で私を綺麗にしてくれて汚してくれて……。ほら、一緒にシャワー浴びよっ?」

なぜか先程までとは打つて変わった、どこかウキウキした口調で喋るアリスに恋は舌をぱちくりさせる。

「え……あ、むう? な、なに?」

「彼に汚してもらひ前に身体を綺麗にしどきましょ。本当は彼に綺麗にしてほしいけど一人もいちゃ大変でしょう?だから私が綺麗にしてあげるの。ウフフフフ……私って気が利くでしょ? 彼、喜んでくれるかな……。さあ、フフ……ヒヒヒ」

アリスは恋を抱き寄せるとその首筋に舌を這わせた。

「身体中、すみずみまで……綺麗にしてあげるね」

「つふふふふ、綺麗な肌……これが彼に汚されるなんてゾクゾクする……」

「ばつ……ばかもん？！　ど、どこに触つて……ひやつ？！」

シャワーを浴びながら、恋の肌をアリスが指先で撫でる。アリスは恋を後ろから抱きしめるように身体を密着させ、舌や指を恋の滑らかな肌に這わせる。

「だつ、だからやめ……あつ？ー　あ……、ひあつ？ー」

浴場に響く自分のあられもない声に恋は赤面した。あまりの恥ずかしさに珍しくパニックになる恋をアリスはくすぐすと妖艶に笑つて後ろから恋をぎゅっと抱きしめる。

「ああ……！　んな気持ち初めて……。ほら暴れないで、私が綺麗にしてあげる。いいでしょ？　いいよね？　痛くないよつとするかられあ！」

「わ、わしは女同士でそういうことをする趣味は無いーーー！」

かなり致命的なことを口走った気がするが本人はまるで気付いていない。それにそれどころでもない。

「ふあつ？！　ま、までこいり？！　ビ、ビにき……やつ！　あくつ……！　あつ……！」

「ウフフ、そつかあ……！」がいいんだあ……ウフフ、ウフフフ
彼にも教えておくねえ……？」

今まで感じたことの無い感覚に恋は頭がぼんやりし始めていた。
頭をブンブン振つてどうにか理性を保つ。

「わ、わかった……わかったから、お願ひじゃから一度離してくれ……少しのぼせてきて……くらいくりする……」

「ああ！」めんね？　かわいい声で鳴くからつこつこ

アリスが力を弛めた瞬間、恋は全力で逃げ出した。脱衣場に
脱ぎ散らかしてあつた着物を掴み、脱兎の勢いで玄関まで走る。

「ウフフフ、懐かしいなあ。私もこの世界に来たばかりの時、オ
ークと追いかけっこしたつけなあ……フヒッ。立場が逆ねえ……次
は私が汚す番かなあ……ヒヒヒッ！」

後ろで聞こえたそんな声に本気で怯えながら恋は着物を羽織り玄
関にあつた自分の下駄をはいた。この下駄はただの下駄ではない。
かつて魔王討伐ボーナスとしてもらつた【天狗の下駄】というもの
だ。

効果は魔力を消費することで瞬発力を高めるというもの。体力を
失つた恋でもこれならかなりの速度を出せる。

恋は下駄に魔力を込めた。体が一気に軽くなる感覚。そして全力

で一步を踏み出し 「え?」

玄関先まで来ていたイシュトに、もろに突っ込んだ。激突し激しく地面を滑る。巻き上がる砂ぼこり、恋は慌てて身体を起こした。

「うう……。す、すまんイシユト！ 大丈夫か？」

イシュートは田をぱちくりさせて恋を見上げる。

「……えーと。大丈夫だけど君がそんな積極的つてのには驚いたよ」

「…………うん？」

恋はその言葉にハツとした。今の自分の状態を再確認。客観的に見るなら……。イシユトが帰つて来た時点で半裸 帰つて来たイシユトにタックルして押し倒す イシユトに半裸で馬乗り……という構図だ。カアツと恋の頬が赤くなる。

「イシム」「されば……」「うそだ。」
「うそだ。」

凄まじい勢いでアリスが恋」とイシコトに覆い被さつた。裸で。恋とイシコトを抱きしめながらすりすりとイシコトに頬擦りする。

「ああ待つてたよー！　待つてたんだよイシコトーーー！　私ね、イシコトと離ればなれになつてる時はいつもイシコトのこと考えてたんだよー！？　座つてる時も立つてる時も歩いてる時も寝てる時もご飯の時もトイレの時も汚されてる時もどんな時でもイシコトのこと考えてたんだよー！？　だってイシコトのことが好きだものー！　それだけで私ね、すごく幸せな気持ちになるの。イシコトに汚して欲し

いつてきゅんきゅんしてくるの。けどこのやつて本当に念えるともう幸せ過ぎて何がなんだかもうわからなくなっちゃうけど幸せだからもういいや！ ねえイシュトは離ればなれになつてる時私のこと考えててくれた？ ううん、考えててくれてなくとも別に全然いいんだよ？ 今はイシュトは私のこと知つてくれてるもんそれだけで幸せ。けどもしも私のこと少しでも考えててくれたならもう嬉しくて嬉しくて死んじゃいそくなぐらに嬉しくて！ 「ごめんねイシュト、私はこんなに幸せにしてもらつてのに私は私を汚させてあげることしかできなくて。どうやつたら汚させてあげる以上のことができるか考えてるんだけど私バカだから思い付かなくて。だから何かあつたら何でも言つて、イシュトがしたいなら私をバラバラにだつてしていいから。けどとにかく今は早く汚して欲しいな 早く早く早く」

あまりのビデオをしたがの恋も田を白黒させた。イシュトが「うんいいよ、けどちょっと待つてね」と平然と返したのも十分つっこまなければならない台詞なのだがアリスがあまりにもビデオ過ぎた。

「……ふう、私は少し散歩でもしてた方がいいですかねえ？」

恋達を見ながら、イシュトのやばに立つてこたスース姿の金髪の紳士然とした男は眩いた。

アリスはそちらにかくんと首を傾ける。

「『めんねゲイツ。恋はイシュト以外には汚されたくないんだって。それに今日は私と恋の一人だから時間がかかると思うの、どこかで時間潰して』」

「なん？！ な、な、な……」

声を上げたのは恋だった。自分の知らないところどころの間にか
とんでもないことになつてゐる。

「いえいえ、悦びに乱れる貴女も私には十分魅力的ですよ。……し
て、彼女が恋さんですか……」

ゲイツと呼ばれた男は恋を……いや、恋の切り落とし、空っぽにな
つた着物の袖の部分を見る。

「……素晴らしい」

「は？」

「ひとつと空っぽの袖を見つめるゲイツに危険なものを感じなが
ら、恋は助けを求めるようにイシクトを見た。

「あ、恋ちゃんほりほり、腕の治療に必要なもの持つてきたよ」

イシクトはそう言って何かが入ったバッグを持ち上げる。

「おおすま…………さやああああああつ……！」

イシクトがバッグから取り出したのは……子供の生腕だった。

「魔界の市場で買つてきたんだ。高かつたんだよー、人間の女の子
の肉つて人食い連中には」馳走らしいからぢ。とつあえずこれに【
即興劇】を使って君の新しい腕を作つていくね

腰を抜かしながら、田に涙を浮かべた恋はひくひくとひきつった

笑みを浮かべる。

「 もう嫌じゃ……神崎のところへ……帰りたい……」

アリス「イシユトは私のこと好き? 好きだよね? 好きなんだよね?嫌いじゃないよね? 嫌いじゃないんだよね?嫌いになるな.....! 嫌いにならないで.....! お願いだから嫌いにならないでください! 何でもするから! 何でもしていいから! もつともつとイシユトが好きになってくれるよう頑張るから! お弁当だけ作るし部屋も掃除するしもつと可愛くなるし夜だつてもつと勉強して頑張るから... お願ひ.....お願いだから嫌いにならないでえ.....」

イシユト「ん~? 別に嫌いじゃないよ。君とのこのひつひつ楽しごし」

アリス「.....え? ホントに? 私のことでそんな気持ちになつてくれてたの?つふ、つふふ.....えへへへへ。ああ、どうしよう! 嬉しい! すっごく嬉しい! じつじよつかなどうすればいいかなこの気持ち! 幸せ過ぎて幸せ過ぎて変になっちゃう! 私だけこんな幸せな気持ちになつちゃつのがみんなに申し訳なくなつちゃうぐらい! ねえイシユト? 私はお礼にどうすればいいかな? 何をすればいいかな? この幸せちょっとでもイシユトにあげたいんだけどイシユトはどうすれば幸せ? 何をすれば幸せ? ねえねえ教えて 『飯作る? お風呂入る? キスする? それとも.....ああもつ全部私が幸せになることばっかりじゃない! これ以上幸せになつたら本当に変になつちゃつよお.....けどイシユトに変にされるなら全然いいや ねえねえどうすればいい? 私は何を捧げればいい?』

イシユト「ん~。じゃあそんだけ言つなら君の全部ちゅうだい?」

アリス「私の全部が欲しい？……心外だなーショックだなー。私の身体も心も命もとっくにイシユトに全部全部捧げてたのに！あ！『めんね！？責めてるわけじゃないの！なんかもう嬉しくて心がふわふわしちゃつてつい調子に乗っちゃつたの。『めんね？許して？ね？お詫びをしないと……だから何でも言って？お詫びなんだから私のこと気にしなくていいんだよ？どんなに変なことでも私は全部受け入れるから。それも含めて全部全部好きになるから。ね？イシユトのいいところも嫌なところも……あ、ううん。私にとつては嫌なところなんて一つも無いんだけどね？とにかく私に全部見せて……それでもっともっと私にイシユトを愛させて。ね？だって私はイシユトの知ってる部分はもうめいいっぱい愛しちゃってるもの。イシユトは何が好き？何が嫌い？趣味は好物は苦手は特技は家族は性癖は？私が知らないイシユトを全部全部教えて？」

イシユト「別にこれ以上愛してくれなくていいよ。……それより君のこと話してよ。よく考えたら僕、君のことあんまり知らないし」

アリス「…………ぐす。…………ひっく。あ…………『めんなさい…………なんだかもう…………嬉しくて涙が出ちゃつて…………。ねえ夢じゃないよね？…………これって現実なんだよね？私、イシユトを愛せて、イシユトに愛されてるんだよね？だってイシユトが私のこと知りたいって。もっと私を愛したいって…………」

イシユト「…………なんでそつなるの？」

アリス「ああもつ夢みたい！ちよつとほつぺたつねつて…………あ！やつぱり駄目！これでもし本当に夢だったら私悲しくて死んじやうもの！夢でもいい……私幸せだよお…………ぐすつ、ひっく…………」

え、えへへ。『めんね？ けど泣いてる私もイシュトは好きでいてくれるんだよね？ だったらもう少し泣こうかな……？ ねえ……私ずっとじずっとイシュトのこと好きだから、イシュトも私のこと好きでいてね？ ね？ お願いだよ？ ズット愛し合つて、死ぬまで愛し合つて……うん。死んでも愛し合つてようね？ 死んでもずっとずっと一緒にいようね？ えと……えと……それで何からしようと……えへへ、ずっと夢見てきたことなのにござそいつになるとテンパっちゃつて。けど夢じゃないよね？ 夢じゃないといいな。えと、それで……子供は、子供は何人欲しい？』

イシュト「…………あ、うん。一人ぐらいでいいんじゃない？」

「二人！ 二人ね！？ うわあよかつたあ。私も一人がいいと思つてたの！ 男の子と女の子で、お互に似てくれたらいいなあ……けどちょっと怖いかも。イシュトが私のことほつといて子供のことばっかりになるんじゃないかって……。ううん、そんなこと言つちや駄目だね！ 子供は私とイシュトの愛の結晶なんだからー。けど私も愛してね？ 構つてね？ 絶対だよ？ 絶対絶対絶対だよ？……よし、じゃあ今から子作りしましょーーー。話してたら早く子供が欲しくなっちゃつた！ えつと……毎日十回ずつすればきっとすぐよね？ ジャあ今からしようすぐしそーーー。うふふ……イシュトの子供……楽しみだなあ……早く早く早く一秒でも早く子供が見たいのーーだから、ね？ お願い、ここにで今すぐ……」

恋「…………誰か何とかしてくれ……」

おまけのおまけ（後書き）

——で終つてすがね。

後は軽くスキルの紹介やつて二章に行きます。

……で、区切りつて「うのと師走で忙しいつて「うので次回の更新は一週間から十日後となります。ここまで話のストックほぼ使いきつちゃつてf^__^；

三章ではモード以外の各キャラにスポットを当てた話。そして最終章である四章に向けて大きく事態が変わります。おまけで出したキャラも絡んできますのでお楽しみに。

それでは、年末辺りにまたあいましょ～ノシ

マキナのリリースのおひめ（前書き）

皆さんお久しぶりですセロですノシ

10日ぶりなんでもまとめてから上げました。こいつして見るとい
るこりあつたなあ（シ//シ//）

さて、リアルの方が正月休みに入り、今日からぐーたら生活満喫で
す

新しいゲームも買ったし大量のおやつにいじ馳走も準備万端。たぶん
仕事初めまで家に引きこもります（笑）

さて、それではよいお年をノシ

追記　ACV発売まで一ヶ月切ったよ(*^-^*)
体験版も配信されるらしくこれから一度みんなやってみようじょ

(閲覧注意です。作品のイメージをぶつ壊す危険があります)

モ」「……これなつなんなのよあんたせ……。しかもあたしモドリ
んなといじり皆び出しだ……」

マキナ「いや、ちょっとおでこのせりこみたいなの挟みたい
な～つて話が上から来てた、むいかちゃんにはお相手役になつてもら
おつかと」

「はあ？」ついにつかなんでにきなり……」

マキナ「セロさんの気分と都合と流れです」

「…セロって誰よ？」 と、うなづかれて、おれは思わず、

■ ■ ■

マキナ「まあまあ。……今度 ate/Zer のDVD見せてあ

げるか？」

「……え？ あれアニメ化したの？」

マキナ「もこちゃんが異世界にいる間にね。今回戦闘シーンとかものすごいよ。魔術工房（笑）とか吹いたし（笑）」

「……あ。気合を入れてやるわよ！」

マキナ「さて、買収が終わつたところで、そんじゃもこちゃん。頼んだいたの出して～」

「ルールとかね」

ルール：ノルマは一ヶ月間の生存

一ヶ月の間に計六回、各マキナからの試練がある。タイミングやルールは担当したマキナが決めている。死んだらもちろん失格。

一定レベル毎に白マキナからアイテムや能力等のボーナスが貰える。こちらの内容は白マキナが決める。ただ、白マキナがやんちゃし過ぎたせいで他のマキナからお仕置きされる間はボーナス配布無し。

一般的のプレイヤー以外にPK^{プレイヤーキラー}も参戦している。彼らに与えられた目的はプレイヤーを殺すことで、試練の度に誰かを殺さなければいけない。

プレイヤーの知らないような知識を与えていている上に戦闘力も高いが、知識を刷り込まれた影響で元の世界の記憶はかなり曖昧に

なつている。

NPCはマキナのゲームに関することは知らず、知らないこともできない。ただしマキナの方から巻き込んだ場合は別。

「……こんな感じかしら？」

マキナ「OK・OK・お疲れ様。そんじゃここからは私が。ここまでをせりと振り返つてみましょー」

・むけちゃん奴隸スタート

「……いきなり酷すぎでしょ。田の前であんなことあつたし……」

マキナ「たしかエルフ耳の子があつさんに売られていったのね。……ちなみにあのエルフ耳の子はあの後薬漬けにされて幸せな毎日を送つているようです」

「……絶対幸せじゃないでしょそれ」

マキナ「本人は幸せそう? 精神崩壊してるけど」

「……あなた今、女性読者に全力で引かれてるわよ?」

マキナ「いやいやこんな小説に女性読者なんて……あれ? なんかメールが……『女性読者がいるの確認してくるから重しろ』? …

「めんなしあ……（十人座）」

「この話題は早くも終了ですね……」

・次に第一の試練

担当者は黒マキナ

ルールは“ここは死んでよい”と黙つやつを指差して、一番多く指された人が死亡。

「もじちゃんが死亡」コンティニーの能力で復活 フィロちゃんとキャッチヤウフフ もじちゃん百合で覚醒やつほー（^○^）ー

「もじ「マキナ……あんた真面目じゃつてる?」

・で、りゅう君恋ちやん登場

マキナ「もじちゃん胸わしづかみww

「だーかーらー！ そつこつ話題は止めなさい。」

マキナ「これぐらいいじやんよー。で、りゅう君がフィロちゃん助けてフラグ成立！ りゅうフィロ大勝利！ もじフィロ大敗北！」

「もじ「うわやい！…」

マキナ「ちなみにこの時、恋ちゃんが暴れまわったせいで皆の兵隊が壊滅。後で奴隸の大脱走が起きたそうよ」

「もじ「へー、じゃあみんな出られたのかな？」

マキナ「半分ぐらいはね」

「…………」の世界さらりとハード過ぎない?」

マキナ「で、その後。おいちやんがりゅう君に座我させて絶賛鬱モ
ー。そして……」

第一の試練 担当者は赤マキナ

ルルルは壊された街で時間まで生き残ること
私こと白マキナのかわいいイタズラでバイオハ
ード化
おまけにPKも一緒

もこちゃんが集団レ プの危機 ゲイツさんがみんなの幻想をぶ
ち壊す ゲイツさん無双 もこちゃんへタレ脱却

？」「ちょっとあなたみんなの幻想をぶち壊すついでひとつ意味よも」「

マキナ「言わせる気?」

「なにがそんなひどい。」

・町を出て幽霊少女と遭遇。

マキナ「もしいかやんがりゅう君と『マイープキ』

・リリーを助けに来んやいひ。マネキン軍団とバトル。

「あれでりゅう君が過守護の能力まともに使えるようになつたのよね」

マキナ「ちなみに作者のセロさんはチラツとリリーをあのマネキンたちに輪かへ……いだ？！　いだだだほつへはひつはらひはいへー！」

「リリーもお母さんと死別したりで大変だつたみたいね……。
(マキナのほつぺたつねり中)」

マキナ「ちなみに」の時、さうげなくりゅう君が犯罪者になりました。けど手は出してないしロッコンの鑑だね

第十一章

・マキナがゲーム持つて遊びに来る。マキナフルボッコタイム。

マキナ「……も」ちゃんは本当に化け物でした……（ブルブル）
「まあまあ、マキナもなかなかだったよ？」

マキナ「本当に、どうやつたらあんな動きできるの？」なんか動きが読まれてた気がするんだけど

「んー。なんかこう……集中してると感覚が広がつていいってね。相手の放つてる感情を感じ取つたり少し未来の敵の動きが見えるのも」

۹۴

マキナ「…………」「一ノタータイプみたいにな」と云ふんですね。ナゼ…………」

・イシュ君襲撃。同時にメリウス襲撃。

も」「あの時は本当にもつ……能力使えないしいきなり服脱げとか
言われるしあいてけぼりにされるし……」

マキナ「能力戻るまでもこちやん裸だったのね（笑）」

も」「寒かったわ……」

マキナ「ちなみにりゅう君とイシュ君が化けたもこちやんは一人寄
り添つて夜まで暖めあつてましたww」

も」「え」

そして騒動の最中第三の試練。担当者は黄マキナ。

ルールは指差した相手を即死させるチートスキルを持ったマキナ
のレプリカと戦う。

レプリカが死ぬ、12時間逃げ延びる、レプリカが三人殺すのい
ずれかで試練終了。

怒りのメリウス（笑）全員ぐたぐたへとへと 恋ちゃんがイシ
ュ君を脅迫 「いけ！ イシュ君！」 イシュ君死亡 もこ＆イシ
ュ「計画通り（ニヤツ）」

マキナ「ちなみに他の試練で使ったレプリカ達はプレイヤー達に…
…」も」「いわせねーよ（ボカツ）

マキナ「痛いよー。もこちやんが苛めるよー」

も」「……というかあんた、止められるとわかつてて言つてゐるでし
ょ」

マキナ「…………え？」

「…………え？ まさか自覚無しのダミ？」

マキナ「ちゅつ？！ ち、違うわよ…？ 私神さまよ…！ そんな
わけないじゃない！？」

「…………はい。わかつたから次行こうねー」

マキナ「ちゅ？！ 放置プレイすなー！」

・恋ちゃんが離脱。

マキナ「戦力ダウンしちゃったねー。第四の試練大丈夫かな？」

「…………やつぱり第四あるんだ……。」

マキナ「もちろん。けど次の担当の青マキナはわりかし優しいから
むちゅくちゅなの無こと思ひみ？ ……縁は怖いけど」

「…………不吉なこと叫わないでよ……」

マキナ「…………、本田はいじめで元で止めてしまつたか。おつかれ
わがー！」

モリ「おつかれー。それじゃもうすぐ例のやつ見せてよ」

マキナ「オッケー。今回のはす」によー。バーサーカーとアーチャーの戦闘シーンとかマジでカッコいいからー。前作が嘘みたい（笑）

「

モリ「バーサーカーか……おじちゃんの最期を覚えると……ね」

マキナ「やういやバーサーカーつていつも幼女のために戦つてない？」

モリ「うひゃい。黙つてなさいあんた」

マキナ「重たい展開は私好きじゃないのよー。逆にキャスター【ノンビ】は楽しそうで何よりですwww」

モリ「えー。あたしあの鬼畜組はひょっと嫌いなんだけど……」

マキナ「けどけど、あっちの龍君の神さまに対する考え方って完璧だと思うんだよね。それに青髭の旦那もけっこつ悲しい過去が有るんだよ？ そもそも教会がジャンヌを……ってメール？ 尺が無いからもう止めやつて？」

モリ「え？ まだそんなに喋つて無いわよ？」

マキナ「無いのは尺じやなくてこの展開を纏める技術なんじゃ（強制終了しました）」

続く（たがふん）

スキル一覧

【ゲーム脳】

所有者：浅倉 もこ

ランク：C

主人公、浅倉 もこのスキル。

自身が能動的に行つた行動をゲーム仕様に変える。（例、アイテムを無限に持てる。食事を食べようとしただけで食べたことになる。複雑な詠唱や呪文の理解が無くても魔法の習得、使用が可能）

魔法に関してはかなり有益なスキルで、仮に魔王クラスがこのスキルを持ってば上級魔法を疑似詠唱破棄で連発可能。

その場合はランクA相当だが、もこの魔力が低すぎて活かしきれていない。

また、思考がゲーム感覚（つまり現実でナイフを突き付けられれば普通パニックになるがゲームなら冷静にどうするか考えられる）という風になる。

もこが危機的状況でも冷静に思考できるのはこのため。

【過守護】

所有者：神崎 竜斗

ランク：A++ E B

自分及び自分が最も大切に思つものへの脅威を無効化する結界を張る。

対象の幅は広く効果も絶大。使用者の精神力次第ではウイルスから隕石まで無効化することができる防御系スキル最高峰。

なのだが現在はもこ達にとつて最大の脅威である竜斗自身の力と破壊衝動を抑えるために効果が激減している。

【狂喜の宴】

所有者：ゲイツ・J・リッパー（PK）

ランク：B

全身から過去に自分が手にしたことがある刃物を自在に取り出すことができる。

ゲイツはもっぱら大型のナイフで戦う。ナイフの扱いは非常に巧みで投げナイフの腕前は神業的。また、懷に入られた場合は身体中から針ネズミのように刃物を出して身を護ることも可能。

刃物であれば制限無く取り出せるが魔剣等を取り出そうとしても普通の剣になってしまい。あくまでも“刃物”しか取り出せない。

【幽体】

所有者：幽靈少女

ランク：？

スキルというよりは種族としての特性。壁抜けや呪い、憑依等、幽靈にできそうなことは一通りできる。

【即興劇】

所有者：イシュト（PK）

ランク：A+

この世界のあらゆる役を操るスキル。イシュト曰くこの世界の全ては石なら石、草なら草という役を持っており、イシュトはこれらに他の役を演じさせることができる。（例、ガラス玉を宝石に。草を薬草に。剣を魔剣に等）

他人の遺伝子を媒体にすることで自身の役を書き換えることも可能。それによつてもこに成り済ましたり、スキルを「コピー」するなどした。

全スキル屈指の万能スキルであり、戦闘面以外でも寂れた小屋を小綺麗な家に変えたり、他人の腕を別の人間に付け替えたりするとすら可能。

【死亡宣言】

所有者：レプリカマキナ

ランク：EX

第三の試練で黄色のマキナが『私が考えたさいきょーのスキル』として産み出したチートスキル。

指を差して死亡を宣言すれば問答無用で相手を即死させる。ちなみに竜斗がこれを受けても生き残れたのは、このスキルの脅威が竜斗の力や破壊衝動より遥かに大きく、過守護がこちらに対し全開になつたから。それでも一撃で戦闘不能になつた。

物理的だけでなく、魔法やダメージなどの形を持たないものすら殺すことが可能。

【死靈使い】

所有者：伊集院

ランク：？

死靈を操るスキル。詳細は不明。

街で出会った幽靈少女を操って連れていった。

【フルコンボ】

所有者：アリス

ランク：A

先にコンボ数を宣言してから攻撃することで、その攻撃を宣言した回数分出したことにするスキル（先に10コンボと宣言してから殴れば一瞬で同じ場所を10回殴つことになる。分かりやすく言うならトリコの釘パンチみたいな状態）

一点にダメージが集中するので想像以上の深手を与えることができる。コンボ数を宣言してから走り出せば地面をコンボ数分蹴ったことになり急加速が可能。

ただし衝撃も回数分しつかり自分に返るので身体への負担が大きい。盾等を殴つてしまふと悲惨なことになる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2195u/>

神さまとゲーム脳と過守護な殺戮竜の物語

2011年12月29日20時49分発行